ot20120201

平成20～22年度

文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択

学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト

― 中 間 報 告 書 ―



山梨県立大学

Yamanashi Prefectural University

「報告書の発刊にあたって」



山梨県立大学 教育ＧＰ推進本部長（学長）

伊藤　洋

日本文化の基底に存在する二つの「特性」、すなわちウチとソトを鋭敏に識別する「タテ型社会構造」と、主として学内に牢固として存在する実技より座学を重視する「教養主義」は、コトを大々的に起こすにあたっては「桎梏」となることがしばしばある。

極限まで高まってきた社会の高齢化、それと表裏を成している国民医療費の増加とその抑制政策、脳疾患系に代わって悪性新生物を第一死亡原因とする「終末」の変化とQOLなどライフプロモーションの高度化要求、これら差し迫った多数の要素への一つの最大公約数的なソリューションとして「在宅医療」が着目されている。そして、そこでは診療所の医師や看護師のみならず、家族は言うに及ばず、保健・福祉に係る行政組織の一般行政職員と保健師や社会福祉士など専門職員等々、文字通り組織・職種横断的な「連携」が必須である。この横断を阻むものとして上記「タテ型社会」という構造が「桎梏」となるのである。

他方、大学など教育組織にも問題がある。プラグマティズムの伝統の浅いわが国の大学では、知識の存否がまず問われるのであって、それが現実の場で応用展開できるまでに体得されているか否かはあまり重要視されてこなかった。それでも、医学や看護をはじめ理科系の目的学部においては実習や演習科目が多く設定されているのでその限りではないが、その他の学部など、特に文科系の学部などにおいてはこういう傾向は否定しがたい。つまり、活動のフィールドを現場に求めたときに、この「教養主義」が大学内では「桎梏」になる。

これら二つの問題点を解決しながら「看護と福祉」の高度専門家として、かつ異種の専門家間を結び合わせながら「協働」して地域医療に従事できる人材の養成、これが山梨県立大学教育GPの目指す「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」のミッションである。

本書は、このような「桎梏」の中にあって手探りではじめた研究成果の最初の報告である。

「案ずるは生むが安し」。筆者は初年度としては着実な歩みを始めることができたと独り合点している。それは、参加した学生達の熱意、それを誘導した担当教員の懸命な努力、加えてプロジェクトの現地本部である甲府市役所及び三つの甲府市地域包括支援センター「おおくに」・「きょうりつ」・「甲府西」の専門職スタッフのみなさんの献身的なご指導を頂けたからである。

地域と地域医療の荒廃が叫ばれるようになって久しい。その解決策の一つとしての在宅医療は、そのサービスの受け手が多く終末医療と密接不可分の高齢者であり、それゆえに人生を総括する現場でもあるという極めて「人間的」な側面を持っている。二年目に入った本プロジェクトが、保健福祉と医療看護の専門職間をただ単に社会的に結び合わせるだけでなく、地域に誇りと信頼と安心を復活させ、もう一度人間的な結び目を回復していく「さきがけ」となれればと考えている。

ご支援を賜った文部科学省はじめ県内関係組織のみなさんに謝意を表する。

「連携教育が、今こそ必要だ」



看護学部長・教育ＧＰ推進本部担当主査

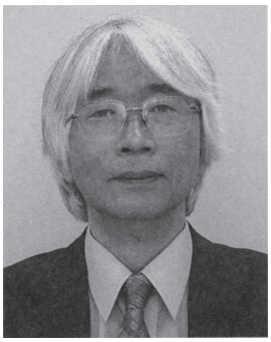
佐藤悦子

本学の看護学部と人間福祉学部は、看護と福祉の専門職を育成する目的で設置された学部ですが、２つの学部が同じ大学内にあることを利点とし、学生の段階から学ぶ「専門職連携」教育プログラムの開発に、教育 GP(Good Practice)を介して着手できたことは非常に意義深いことだと思っております。看護学部と人間福祉学部、それぞれの専門性を縦糸にすると、互いの専門性をつなぐ連携の技術は横糸になります。生活する人を支援する専門職は、この縦糸と横糸をしっかりと持った専門性を要求されますので、教育の場において、このような専門性を持ったより質の高い専門職の育成は不可欠であると思います。

また、本取り組みの大きな特徴は、この連携教育を大学内にとどめず、直接地域に出掛け、生活の場で展開できることにあり、これは全国的にもあまり類をみない画期的な取り組みであります。このように、学生と教員、大学と地域が協働して取り組むことが可能となったのは、甲府市をはじめ地域包括支援センターの皆様や甲府市民の皆様の大きなご理解とご協力があったからだと思います。心より感謝申し上げます。

平成 20 年度の取り組みは、前年度に試行した同様の試みを通して得た「連携教育が、今こそ必要だ」という信念をエネルギーに変え、道筋のないものを創りだしていくことの難しさとおもしろさを実感しながら、展開してまいりました。このたび、今年度の取り組みを丁寧に分析し、報告書として発刊いたします。今後は、今までの成果と課題をもとに、さらに、質の高い「連携教育のあり方」を探求し、学生たちがおもしろいと感じ、かつ、専門職の連携技術を高めるための教育プログラムを、形のあるものとして創りあげてまいりたいと思います。

「人と向き合うこと、そして人と人とのつながりを学ぶ場に」



人間福祉学部長

藤谷　秀

人間福祉学部と看護学部の協働による「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」は、様々なことを学ぶ貴重な機会です。その中で重要だと思う二つの点を指摘しておきたいと思います。

一つは、人と向き合うことを学ぶことです。福祉や看護という専門職に従事する者は、相手が「利用者」や「患者」である前に、一人の人だということを忘れてはなりません。ただ、ややもすれば専門職の視点からのみ相手をとらえてしまいがちです。しかしそれは、一人の人の一面にすぎないのです。その一面性を自覚し、相手が一人の人だということを再認識するうえで、異なる専門職が互いの視点を交差させながら連携することは、重要な意義をもつと思います。また、相談機関や病院という特殊な空間ではなく（このような空間におかれる人はどうしても「利用者」や「患者」とみなされます)、地域での生活の場面に出向くことも、一人の人と向き合うことを教えてくれる機会になるでしょう。

もう一つは、人間らしい健康で文化的な生活の実現は、一人だけの力で獲得されるものではなく、様々な人々のつながりの中ではじめて達成されることを学ぶことです。地域包括支援センターの保健師・ケアマネージャー・ワーカー、行政機関の職員、関係機関に関わる人々、そして当事者の近隣に住む人々など、多くの人々がつながり合うことによって、地域の保健福祉が実りあるものとなることを、実地で学んでほしいと思います。

そして、学生たちの感想や発表をみると、こうしたことが着実に学ばれていると思います。学生たちの力を頼もしく思うとともに、この取り組みの意義をあらためて実感しました。とはいえ、まだまだ限られた時間と範囲での学びです。この貴重な学びを、それで終わらせるのではなく、今後の学習や実践に活かしてほしいと思います。

最後に、甲府市地域包括支援センターの方々、甲府市の担当職員の方々、そして何よりもあたたかく学生を迎えてくださった住民の方々に、心から感謝いたします。ありがとうございました。

「３学部の利点を活かして」



国際政策学部長

小 沢 典 夫

このたび文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP)」に、本学のプロジェクトが採択され、その取り組みに関心を寄せて参りました。看護学部と人間福祉学部の学生を対象とした専門職連携教育プログラムの開発ですが、国際政策学部としても、いろいろな形でこれに参画できるのではないかと考えております。すでに教育 GP の学内体制のひとつである「教育開発プロジェクト実行委員会」のメンバーには、本学部からも委員がでており、まちづくりの専門的な立場から意見を述べております。

また、本学部の教育理念は、「地域社会の問題を考えることのできる人材」、「地域の活力を創ることに貢献できる人材」、「平和で豊かな国際社会の形成に貢献できる活動力ある人材」の育成であり、そういった観点からも、いずれは本学部学生も何らかの形で参加できれば、互いの専門性の枠も広がっていくのではないかと考えております。教員も、地域づくりの専門家が集まっていますので、それらのパワーを、ぜひ本プロジェクトにも活用して頂きたいと願っております。様々な観点から人の生活を見つめ、地域を捉え、そのアプローチの方法を多角的に捉えることができる学生を育成することはすばらしいことです。

本プロジェクトが、活動の広がりと深さを増し、明確な教育成果を上げていくためには、３学部の利点を大いに活かすことが必要です。本学部もそこに貢献できることを期待します。

ー目　　次ー

Ⅰ　教育理念と教育ＧＰ採択までの経緯 1

１．教 育 理 念 1

２．教育ＧＰ採択までのあゆみ 1

１）取り組むための契機 1

２）平成 19 年度の取り組み 1

３）平成 20 年度の取り組み 2

（１）採択までの経過 2

（２）専門職連携演習に向けての体制づくり 2

Ⅱ　平成 20 年度のプログラム実施－専門職連携演習－ 4

１．演 習 要 項 4

１）演 習 目 的 4

２）演 習 目 標 4

３）タイムスケジュール（ 平成 21 年１月～4 月 ） 5

４）各演習施設の担当教員及び演習方法 5

５）演 習 記 録 5

６）その他の事項 6

７）戸別訪問調査訪問を実施するにあたっての共通文書について 6

２．甲府市地域包括支援センター別演習内容 7

◆甲府市地域包括支援センター：おおくに 7

１）専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年１月６日(火)9:00～12:10 7

２）フィールド演習: １月 31 日(土) 9:00～17:00 11

３）演習に関する打ち合わせ 13

４）合同発表会に向けての事前演習 ：4 月 7 日（火）14:50～18:00 13

５）合同発表会 :4 月 18 日（土）準　備 9:00～14:00 / 発表会 14:15～16:30 16

（１）戸別訪問調査結果 16

（２）プレゼンテーション資料 35

６）学 生 評 価 40

（１）リフレクションペーパー 40

① オリエンテーション時（１月６日） 40

② 演 習 日（1 月 31 日） 41

（２）学 生 評 価 表 44

７）教員評価―演習内容（企画・実施）の妥当性及び教育効果― 45

（１）「学際統合型専門職連携演習」評価表の集計結果より 45

（２）演習前と発表会後のリフレクションペーパーより 45

（３）演習の成果・課題について 46

◆甲府市地域包括支援センター：きょうりつ 47

１）専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年１月６日（火）9:00～12:10 47

２）　フィールド演習: 平成 21 年１月 31 日(土) 9:00～17:00 51

３） 演習に関する打ち合わせ 51
４） 合同発表会に向けての事前準備演習 ： 平成 21 年 4 月 7 日（火）14:50～18:00 51
５）合同発表会 :4 月 18 日（土）準　備 9:00～14:00 / 発表会 14:15～16:30 53
（１）戸別訪問調査結果 53
（２）地区踏査と地域MAP作成 60
（３）プレゼンテーション資料 62
６） 学 生 評 価 67
（１）リフレクションペーパー 67
① オリエンテーション時（1 月 6 日） 67
② 演 習 日（1 月 31 日） 69
（２）学　生　評　価　表 73
７）教員評価―演習内容（企画・実施）の妥当性及び教育効果― 74
（１）演習回数及び方法の妥当性について 74
（２）学生の達成度・満足度 － リフレクションペーパーと評価表から － 75
（３）教育効果―成果と課題― 81

◆甲府市地域包括支援センター：甲府西 83
１）専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日（火）9:00～12:10 83
２）フィールド演習: 平成 21 年 2 月 7 日(土) 9:00～17:00 86
３）演習に関する打ち合わせ 90
４）合同発表会に向けての事前準備演習 ： 平成 21 年 4 月 7 日（火）14:50～18:00 91
５）合同発表会 :4 月 18 日（土）準　備 9:00～14:00 / 発表会 14:15～16:30 94
（１）戸別訪問調査結果 95
（２）プレゼンテーション資料 107
（３）「人とのつながりMAP」、「周辺地域MINIMAP」から見える特色 112
（４）グループワークのまとめ 114
６） 学 生 評 価 120
（１）リフレクションペーパー 120
① オリエンテーション時（1 月 6 日） 120
② 演 習 日（2 月 7 日） 121
（２）学　生　評　価　表 124
７） 教員評価―演習内容（企画・実施）の妥当性及び教育効果― 125
（１）演習のプロセスについて 125
（２）学生の自己評価の結果に沿った分析 125
（３）演習の成果と課題 127

Ⅲ　甲府市地域包括支援センター研修会 129

１．甲府市と大学との連携による地域包括支援センター職員等研修会実施要項 129

２．研修実施に至るまでの打ち合わせ 130

３．研修講師の紹介 130

４．研修実施状況 131

５．参加者の研修に対する意見 136

6．研修会の成果と課題 137

Ⅳ　広報活動及び他大学との交流 138

1．平成 19 年度の広報活動 138

2．平成 20 年度の広報活動 138

1）学内・外への周知と協力体制への呼びかけ 138

2）国内・外大学関係者への周知と交流 139

Ⅴ　英国調査研修 140

1．調査研修の概要 140

2．CAIPE事務局へのインタビュー調査 142

3．King's College LONDONにおけるInter-professional Education（IPE）の概要 144

4．Oxford Brooks University におけるInter-professional Education（IPE）の概要 152

5．調査研修の成果と課題 160

Ⅵ　成果と課題 163

1．専門職連携に関する教育の充実 163

2．教育プログラムの開発 163

3．フィールドとなる地域包括支援センターの活性化 164

4．教育プログラム開発に関する体制づくり 164

Ⅶ　巻 末 資 料 165

1．演習に使用した資料 165

2．広報活動に使用した資料 171

3．メンバー表 175

Ⅰ　教育理念と教育ＧＰ採択までの経緯

１．教 育 理 念

◆グローカルな知の拠点となる大学

山梨県立大学は地域に開かれた大学であり、グローカルな知(Global＋Local、地球的と地域的、総合的と個別的な視点を兼ね備えた知)を創造・継承・活用することを通じて、豊かで生き生きとした社会の発展に寄与することを目指します。

◆未来の実践的担い手を育てる大学

大学には、社会の実践的な担い手を育成することが求められています。本学が社会の第一線で活躍する有為な人材を教員スタッフに揃えたのも、大学と社会との有機的連関を重視したからにほかなりません。しかし、大学が目指す実践的人材の養成とは、すぐに役立つことを必ずしも意味しません。必要なことは、長期の広い視野で眺めたときに真価を発揮する実践的人材の養成です。

◆地域に開かれた地域と向き合う大学

地域の問題を解決するためには、大学と地域とが問題を共有し、協働して解決にあたることが必要です。また、大学の知的資源を地域に広く開放し、地域社会の発展に役立てたいと考えます。

そのために、「地域研究交流センター」を設け、地域のニーズと大学の知的資源をコーディネートしながら、地域文化の創造、地域の貴重な文化遺産の発掘、保存、伝承に努めるとともに、生涯学習機能の充実のためにリカレント教育や社会人入学、科目履修生制度を実施します。

豊かな人間性と、
未来を拓く実践力を育てます。

２．教育ＧＰ採択までのあゆみ

本取り組みが採択に至るまで、また、採択されてから活動展開に至るまで、学内外の体制づくりを行いながら進めてきた経過を以下に示す。

１）取り組むための契機

平成 18 年 10 月に地域研究交流センターの GP 開発部門において、平成 19 年度の GP 申請にあたり本学が統合した利点を生かしたプログラムを創れないかといった提案を頂いた。検討する教員が集まり「看護学部」「人間福祉学部」との統合の実を挙げるカリキュラム展開として、それぞれの学部が育成する専門職が機能する地域包括支援センターに着目し、そこをフィールドに何かできないだろうかと意見交換を重ねた。

現場で抱えている現状を整理していきながら、実践の場で課題となっている「チーム連携のあり方」を、①互いの専門性を理解し合えること　②チームアプローチに関する基本的な考え方やそのスキルを学ばせることで可能となり、それにより、より質の高い専門職の育成に貢献できるのではないかと考えた。申請にあたり、フィールドとなる地域包括支援センターの候補を挙げ、そこに出向いてその趣旨と必要性について説明し、GP 採択有無に関わらず実行していくことで了解が得られた。

２）平成 19 年度の取り組み

本取り組みは１）を契機として始まり、平成 19 年 4 月申請書を作成し提出を行った。しかし、今年度は採択に至らず、その理由は、「実施に関する具体性」であった。採択には至らなかったが、平成 19 年度は、地域研究交流センターの予算を頂き、その一部を実施した。カリキュラム上の調整ができないため、専門職連携教育演習は 12 月と 1 月の土曜日 2 日間に分けて、両学部の教員の協力の

もと実施した。

また、フィールドには「甲府市地域包括支援センターおおくに」の協力と理解が得られ、約 50 例の高齢者への訪問インタビューを行った。その協働のプロセスを通して学生の振り返りを分析し、この方法で本取り組みの教育効果を得られることを確信できた。

3）平成 20 年度の取り組み

（1）採択までの経過

① 申　請

平成 20 年度申請にあたり、平成 19 年度の実施経過からその教育成果や実施する上での課題を明確にし、それを申請書のなかに明記していった。また、教育 GP「質の高い大学教育推進プログラム」は平成 20 年度に文部科学省が新たに設けた枠組みであり、今までの現代 GP と特色 GP を統合させたプログラムである。教育 GP の意図するところから、①本プログラムの特色　②PDCA のサイクルの明確化　③評価指標の明確化　④実施体制　といった視点を中心に検討した。さらに、本プログラムのフィールドとなる甲府市に実施計画書を持って説明と依頼を行い、そこで地域包括支援センター 1 カ所ではなくもっと広げたらどうかといった意見も頂き、申請書のなかに入れ込んだ。

② 審　査 －ヒアリング－

8 月 25 日、書類による一次審査が通り文部科学省のヒアリングがあった。ヒアリングでは、20 分間のプレゼンテーションを行い、その後審査員 6 名・事務担当者 4 名による質疑があった。9 つの質問があり、その内容は「全学的な取り組みの具体性」「教員及び学外者が行った評価の学生自身へのフィードバックの方法」「学生の背景と本取り組みとの関連性」「フィールドの確保とその有用性」「予算計上にあるマイクロバスの執行について」などであった。

③ 結　果 －選定理由－

9 月下旬に採択の内定を頂いた。以下に、文部科学省からの選定理由を挙げる。「学生参画、協働という視点から学際統合型の専門職連携教育の開発に取り組んだプログラムとして高く評価できる。特に、学生が地域住民の生活の場に入り、住民とともにケアシステムをつくる地域支援体制を整備・構築することについては、座学ではできない学生の新たな学びを促し、社会貢献という観点からみて、この取り組みの目的を達成することについて大きな意義を有するものである。また、大学がこの取り組みの意義を高く位置づけ、学長のリーダーシップの下で教育の質向上に向けた実施体制を積極的に整備しており、今後の展開について行政との連携や教育効果の測定方法を含めて具体的な計画を立てていることなど、意欲的な取り組みとして高く評価できる。」

（文部科学省選定理由一部抜粋）

（2）専門職連携演習に向けての体制づくり

① 実施体制

地域研究交流センター長、看護学部長、人間福祉学部長に助言を頂きながら、まず、学内の体制づくりを行った。本取り組みは学長の指揮の下、全学的な取り組み体制を取ることが重要であり、学内教員の周知のため地域研究交流センター主催の学内教員対象水曜フォーラムにて、体制の報告をした。

また、学外の組織も含めて以下のように組織化を図り役割を明文化した。全体的な実施体制の組織図を次頁に示した。

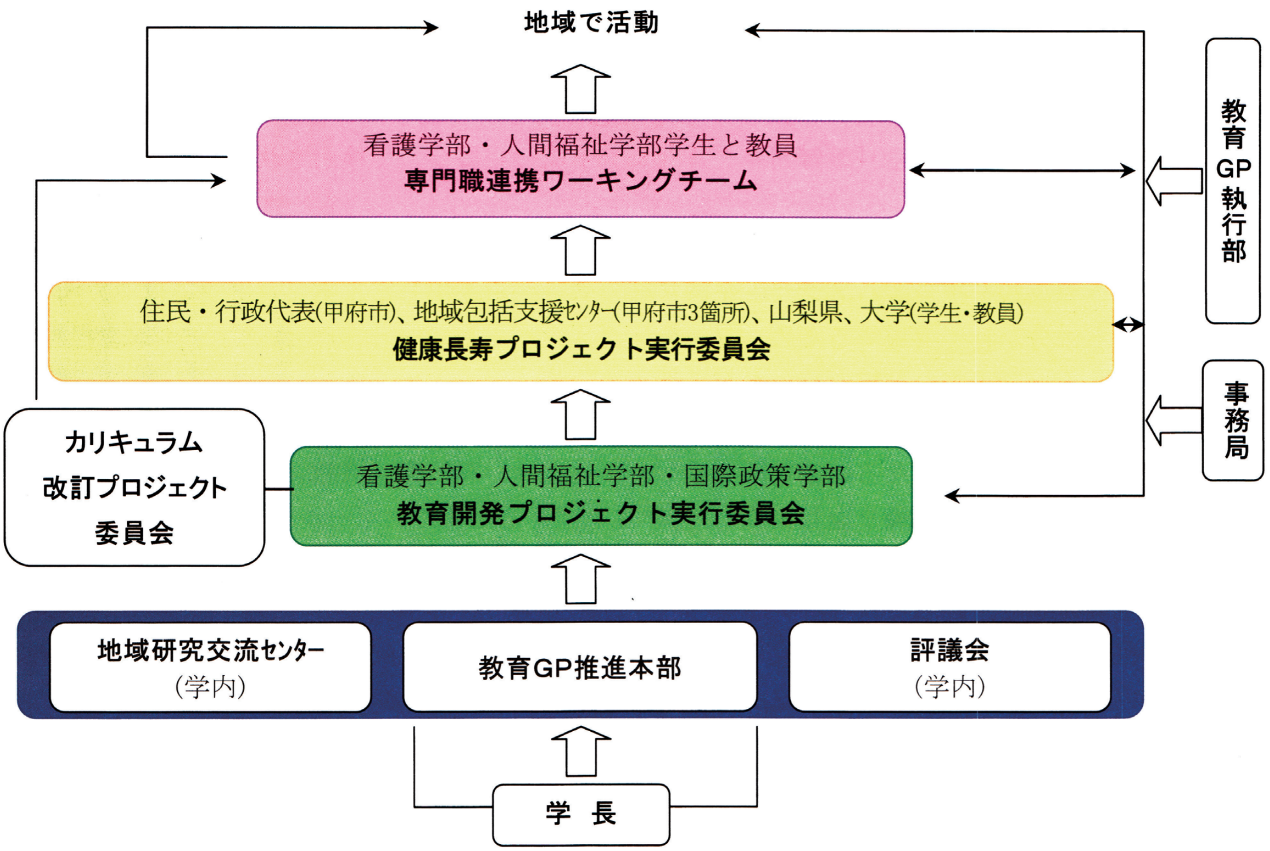


図　取り組みに向けた実施体制

【組織としての役割の明文化と構成員】

教育 GP 推進本部

教育 GP の推進にあたっての総括。学長を推進本部長に据え、３学部長・地域研究交流センター長・事務局がメンバーとなった。

教育 GP 執行部

教育 GP 推進にあたっての全体的な企画・調整を行い、実施プロセスにおける情報収集・課題の明確化にあたるとともに、教育 GP 全体を評価し成果物を報告書としてまとめていく。平成 20 年度教育 GP 申請にあたったメンバーを、本プログラムを推進していく執行部として位置づけた。

教育開発プロジェクト実行委員会

「専門職連携教育プログラム」に関する教育方法・評価方法を審議し、「専門職連携教育プログラム」の開発を行う。検討メンバーには、看護学部・人間福祉学部・国際政策学部の教員を構成メンバーとした。

健康長寿プロジェクト実行委員会

活動目的・目標を設定し、活動計画の立案・評価・成果・課題を明確にしつつ、住民参加型ケアシステムに繋がるネットワークの拡大に向けて検討を行う。

本プログラムの特徴は、学生の教育プログラムをフィールドとなる甲府市地域包括支援センターを核として実践するところにある。学生がフィールドに出て行う活動を、地域の視点からも評価しそれを次の実施に活かしていくといった PDCA の循環型サイクルを取る。したがって、この実行委員会でそれらの計画と評価を担当する。メンバー構成に甲府市地域包括支援センター・甲府市の関連部署の担当課、また経過のなかで山梨県福祉保健部（医務課・長寿社会課）にもこれに加わって頂くこととなった。今後住民代表にも参画をして頂く計画である。

専門職連携ワーキングチーム

地域包括支援センターをフィールドにした学生の専門職連携演習の実施に関する調整・実施に向けての助言・指導を行い、演習が効果的に行えるよう働きかける。また、「健康長寿プロジェクト実行委員会」や「教育開発プロジェクト実行委員会」で検討された内容を、実践するための取り組みを行う。

本プログラムは、看護学部と人間福祉学部の学生を対象とした教育プログラムである。本プログラムの実践を担当するメンバーを両学部の教員から選出した。本プログラムは3カ所のフィールドに分かれて実施するため、ワーキングメンバーも 3 つに分かれフィールドを担当し、フィールドとの綿密な調整を行いながら進めている。

② 地域との調整

甲府市やフィールドとなる地域包括支援センターとは、専門職連携教育のための演習実施にあたり綿密な打ち合わせを繰り返し実施した。学生を迎えるためのフィールドづくりが必要であり、フィールドづくりを組織的に行っていくために、甲府市と連携を図り、地域包括支援センター職員との合同研修を企画した。

研修は、地域包括支援センター職員との話し合いのなかで、「地域全体の課題が明確に捉えられていないのではないかといった不安がある」「包括職員の専門性を活かしたチーム作りの必要性を感じている」などの意見が出され、そこに向けての研修会を行うことになった。職員の日頃捉えている情報を地域全体の情報として構造化していく分析方法として、KJ 法を活用してまちづくりを指導している講師を招き、質的統合法（KJ 法）を用いることを提案し、了解が得られた。研修課題を話し合うプロセスにおいて、日頃感じている課題を相互に確認し合い、発表し合うことで互いの理解と地域の課題の明確化、構造化が図れるようになってきている。今後も研修会を重ね、戦略的な活動方法を検討していく予定である。

Ⅱ　平成20年度のプログラム実施－専門職連携演習－

1．演 習 要 項

1）演 習 目 的

(1) 看護学部と人間福祉学部の学生が、協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体感する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる。

(2) 看護・福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできる。

2）演 習 目 標

(1) 看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。

(2) 地域アセスメント(地域特性と社会資源)が行える。

(3) 実態調査や数的データ分析、個別面接などを通して、生活及び健康ニーズの把握ができる。

(4) 地域住民への報告会に参加することができる。

3）タイムスケジュール（ 平成21年1月～4月 ）

	日　時　・　場　所	内　　容
オリエンテーション	平成21年1月6日(火) Ⅰ・Ⅱ限 (池田キャンパス 第7講義室)	9:00～9:30　全体オリエンテーション ① 教育GPの概要 ② 演習目的・目標・方法 ③ 4月までのタイムスケジュール ①～③の担当 ： 佐藤先生(20分) ④ 演習を担当する教員及びセンターの職員紹介 ⑤ 本日の演習の進め方、学生名簿の配布、演習日に使用するブルゾンや名札について ④・⑤の担当 ： 神山先生(10分) 9:30～12:10　各センターに分かれ、演習内容について話し合う。
演習実施日	2月の上旬までに実施 (各地域包括支援センター)	※ 演習日及び報告会は、センターによって異なる。
地域住民への報告会	4月の上旬までに終了	
合同発表会 (新4年生・新3年生)	4月18日(土)午後 (池田キャンパス 講堂)	・ 新4年生が本年度の演習内容や成果を発表する。新3年生は、地域特性を知るとともに、互いに知り合う場とする。
ワークショップ	6月の予定 (飯田キャンパス 講堂)	・ 講師は、本取り組みに関して先駆的な活動を実施している機関から招聘する。 ・ 住民、甲府市及び各センターの職員にも参加を呼びかける。 ・ 県立大学は、全学部の学生が参加する。

4）各演習施設の担当教員及び演習方法

地域包括支援センター名	担当教員		方　法
	看護学部	人間福祉学部	
おおくに	佐　藤　・　須　田	横　山　・　鷹　野 (非常勤講師)	※別添資料参照
きょうりつ	吉　澤　・　望　月(宗)	神　山　・　大　澤	
甲府西	河　野　・　清　水	小　野　・　伊　藤	

教育GP室 ： 三　井　・　堀　内

5）演習記録

（1）リフレクションペーパー(様式については巻末資料参照)

【記載項目】

- 他学部の学生との協働の取組を通して、互いの特徴に関して気づいたこと、考えたこと
- 今後、協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと
- 今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか
- その他、考えたこと、疑問に感じたこと　など

【提出方法】

・e-mailにて提出

（2）演習の成果をまとめたもの ：各地域包括支援センターごとの記録物

・合同発表会、地域住民への報告会に使用する資料など

（3）演習評価表(巻末資料参照)

６）その他の事項

（１）この演習は、看護学部は「看護学原理Ⅱ」、「地域保健活動論Ⅱ」、「在宅看護活動論」、人間福祉学部は「ソーシャルワーク技術演習Ⅲ・Ⅳ」の時間の一部に充当する。

（２）演習場所のセンターや訪問先、地域活動においては、礼節を保ち、相手の反応を見ながら臨機応変に対応すること。

（３）演習を通して知り得たセンター及び個人に関する情報で、口外してはならないもの、個人のプライバシーに関する情報の取り扱いには十分に配慮すること(情報の保護)。

（４）服装はスーツとし、靴は履きやすいもの、ピアスなどのアクセサリーは身に付けないこと。

（５）演習中は、ネームプレートを付けること。

（６）演習における地域活動では、教育 GP から貸し出しされるブルゾンを必ず着用すること。

（７）緊急連絡網は各センターごとに作成し、それぞれのセンターごとにリーダー2 名(看護学部 1 名・人間福祉学部 1 名)、サブリーダー2 名(看護学部 1 名・人間福祉学部 1 名) を選出し、連絡網に記載し、担当教員に提出する。

７）戸別訪問調査訪問を実施するにあたっての共通文書について

- 地域の皆様への協力依頼文書
- 同意書
- 戸別訪問調査のご案内

(巻末資料参照)

２．甲府市地域包括支援センター別演習内容

◆甲府市地域包括支援センター：おおくに

学　　生	看護学部 34 名 / 人間福祉学部 20 名　計 54 名
担当教員	看護学部 2 名 / 人間福祉学部 2 名　　計 4 名
センター職員	4～5 名

１）専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日(火)9:00～12:10

【演習要項】

＜演習目的＞

1. 看護学部と人間福祉学部の学生が、協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体感する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる。
2. 看護・福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできる。

＜演習目標＞

1. 看護学部及び人間福祉学部の学生の相互の理解ができる。
2. 地域アセスメント（地域特性と社会資源）が行える。
3. 実態調査や数的データ分析、個別面接などを通して、生活及び健康ニーズの把握ができる。
4. 地域住民への報告会に参加することができる。

＜実施概要＞

１．実施内容

１）おおくに圏域内（大国・大里・国母）の地域の概況を知る。

(1)オリエンテーションを通し、地区の概況を知る。

(2)調査時の地区踏査を通し、オリエンテーション内容と合わせ高齢者の生活や健康ニーズについて意見交換する。

２）高齢者の生活及び健康ニーズについてまとめる。

(1)看護学部・人間福祉学部の学生がチームを組んで、おおくに地域の高齢者の自宅を訪問し、調査票をもとに生活実態の聞き取りを行う。

(2)各自聞き取った内容を調査票に記入し、ひとつの調査票を完成させる。

(3)各チームで聞き取った内容や地区概況を、集計・分析し、おおくに地区の生活及び健康ニーズをまとめる。

３）協働して取り組んだプロセスを通して、互いの専門性や特徴を話し合い、協働することの意味を考える。

(1)聞き取った内容を互いに出し合うプロセスを通し、互いの専門性や特徴について気づいたことを出し合う。

(2)リフレクションペーパーに記入し、協働することの意味や在り方について考える。

２．学生のチーム構成

看護学部及び人間福祉学部の学生が 2～3 人で 1 チームを作る。

３．聞き取り調査対象者

１）大国、大里、国母に在住する高齢者で、学生の訪問の了解が取れた方　40 名
　対象者への了解は、センター職員が行なう。

２）１チーム２件の高齢者宅を訪問し、聞き取りを行う。

４．聞き取り調査実施日

日　時：平成 21 年 1 月 31 日（土）あるいは 2 月 7 日（土）のどちらか

訪問日時は、原則として対象者の上記どちらかの都合のよい日時で行う。
時間の約束は、学生のチームで行う。訪問時間は、１時間を目安とする。

５．聞き取り調査の内容及び方法

１）調査用紙（別紙）をもとに聞き取りを行う。
＊ 質問項目をどのように投げかけて聞き取ったらよいか、質問の仕方をチームでよく打ち合わせをしておくこと

２）調査票に各自で聞き取った内容を記載する。
＊ 事前にメモを取ることの了解を対象者に得ておくこと

３）大学に戻り、互いに聞き取った内容を出し合い、ひとつの調査票にまとめて提出をする。
＊ 観察の仕方、聞き取った内容、そこから考えたことなど、互いによく出し合って調査票を完成させること

４）ひとつの調査票にまとめたものを、データとしてパソコンに入力する。

５）集計したものを報告書としてまとめる。
＊ どのようにまとめて報告書にするかは、後日教員が学生に連絡をする。

【合同演習の日程】

◇ 事 前 準 備

１．オリエンテーション

１）日　時：平成 21 年１月６日（火）9:00～12:10
9:00～ 9:30　全体オリエンテーション
9:30～12:10　おおくにのオリエンテーション

時　間	内　容	備　考
9:30～ 9:45	メンバー紹介　担当教員の紹介	担当：須田
9:45～10:30	演習内容のオリエンテーション	担当：佐藤
10:30～10:40	休　憩	
10:40～11:00	おおくに職員紹介 横内所長　社会福祉士：渡邊さん　保健師：伊藤さん	
11:00～11:30	おおくに地域の概況	おおくに所長：横内
11:30～12:10	調査方法について チームごとの話し合い（役割分担・連絡網） リフレクションペーパー記入	担当：横山

２．実施日までの準備

１）センターの設置目的・機能・構成メンバーなどをまとめる。

２）調査対象者への直接的な確認（実施日１週間前に電話にて行う）

３）調査対象者の自宅の確認（地図にて行う）

＊ 調査対象者及び調査日は、後日掲示にて行う。

＊ 電話にて確認後、予定変更があった場合は速やかに教員に申し出ること。
窓口：人間福祉学部　横山　　看護学部　須田

３．演習当日の進め方

9:00　池田キャンパスに集合（101 講義室）
9:00～ 9:20　確認事項　その後スクールバスにて現地へ移動
10:00～15:00　聞き取り調査・地区踏査　帰校
聞き取り調査が終了したら、随時話し合いを行い、調査票を完成させる。
データの入力を行う。
15:30～16:30　報告会及び全体のまとめ

16:30～17:00　お礼のはがきの記入

リフレクションペーパーの配布

4．その他

1）注意事項などは、共通の演習に関する要項に準じる。

2）チームのリーダーを決め、担当教員に報告をする。

リーダーは、電話での確認が取れたらその状況を教員に報告をすること。

3）実施日やその他の詳細については、掲示するので注意すること。

4）地域への結果報告には、代表者が行く。日程は未定（4月になる予定)。

地域にある会・部・団・クラブの活動内容について：演習資料

名称	活動内容	大里地区	大国地区	国母地区
1　自治会連合会	自治会の自治会長が集う会。	16自治会	20自治会	15自治会
2　体育協会	市民の体力向上を図るとともに、スポーツ精神を育成することを目的としている。	○	○ 三世代ふれあいの集いでのスポーツ指導など	○
3　民生児童委員協議会	厚労省から委託を受け、地域包括支援センターや社協とのネットワークを持ち、地域住民からの相談を受けたり、担当地区の方々の安否を確認したりするなど地域の見守り活動をしている。	○	○	○
4　青少年育成推進委員会	青少年の育成、青年達が自主的に取り組む活動を組織する。	○	○	○
5　文化協会	サークル活動。甲府市民であれば、地区をまたいで加入することができる。	○	○	○
6　消防後援会	消防団の後援会。	○	○	○
7　消防分団	各地区の消防団。	○	○ 大里地区と国母地区とに半分ずつ所属	○
8　甲府南署交通安全協会	警察署主体で地域住民への交通安全を啓発する。	○	○	○
9　自治会連合会女性部	女性の立場から、健康で安心して暮らせるように支援する活動を行っている。共同で「母子愛育会」を開催している。	○	○	○
10　愛育会		○		
11　食生活改善推進員会	管理栄養士指導のもと、地域住民の健康をサポート。委員は、決まった講座を受講した人しか務めることができない。	○	○ 地域の催しでの調理、調理方法の普及	○
12　防災部会	住民の自主的な防災活動により、災害被害の防止および軽減を目指す。	○		
13　明るい選挙推進委員会	明るい選挙の推進を普及・啓発している。	○		○
14　社会福祉協議会	地域福祉権利擁護事業、福祉ネットワーク推進事業（福祉関係団体とのふれあいネットワーク化の推進）、高齢者慶祝事業、福祉施設慰問交流事業、社会福祉研修会等の主催共催事業及び派遣研修、福祉防災マップ作成事業など。	○ おおさと社協通信の発行	○	○
15　保健計画推進協議会	地区内の組織、階層の協力のもとに住民と行政の一体化による保健計画を推進することを目的とする。	○ 「大里健康まつり」の主催（年1回）→大里地区の各団体が共催し、地域の健康に関する展示や催し物をする。	○	○
16　21世紀まちづくり協議会	地域の催し物の企画、運営。スポーツ大会実施。	○ 大里新聞の発行	○	○
17　甲府地区保護司会南会	保護司が年に5、6回集まりケースの情報交換をする。	○		○
18　女性市民会議OG会	女性市政参画により市民と行政が協働したまちづくりを推進する。	○		
19　子どもクラブ		○	○	○
20　地域安全推進委員会		○		
21　地域福祉活動推進員会	社会福祉協議会の役員であり、基本的には各自治会に1から2名の割合でいる。地域の見守りや安否確認などの役割を担っている。	○	○	○
22　母子相談員	母子家庭に訪問をし、不登校など様々な事情を抱える母子を支援する。			○
23　連合国母地区協議会	自治会連合会の傘下の団体であり、自治会活動に協力を得ている。			○
24　老人クラブ連合会	65才以上の方で、ご本人の希望により会員になる。単位自治会ごとに公民館などに集まり、学習会や寄り合いなどの活動を行なっている。		○ 10箇所（活発なところは、1回/月の集まりがある。花壇づくりなど、社会貢献の活動をしている）	○
25　高齢者学級	定期的に講師を招き、学習会を行なっている		○ 悠遊館にて毎月学習会を行なっている。	○
26　ふれあいクラブ	地区内の公民館、福祉センターなどで定期的に開催。保健師による健康チェック、簡単なストレッチや体操、身体や頭を使うゲーム、歌などを行なう。		○ 女性部愛育会主催。三箇所の公民館で開催。	
その他		気功、朗読の会		

地域包括支援センターおおくに：地区担当職員作成

地域で生活する高齢者への聞き取り調査　　チームＮｏ.

学部	学籍番号	学生氏名
調査日時 年　月　日（　時　分～　時　分）		

番号	質問内容	回答（空白欄　メモ）	
1	バスや電車を使って一人で買い物ができますか	はい	いいえ
2	日用品の買い物ができますか	はい	いいえ
3	自分で食事の準備ができますか	はい	いいえ
4	請求書の支払いができますか	はい	いいえ
5	銀行預金、郵便貯金の出し入れができますか	はい	いいえ
6	年金などの書類が書けますか	はい	いいえ
7	新聞などを読んでいますか	はい	いいえ
8	本や雑誌を読んでいますか	はい	いいえ
9	健康についての記事や番組に関心がありますか	はい	いいえ
10	友達の家を訪ねることがありますか	はい	いいえ
11	家族や友達の相談にのることがありますか	はい	いいえ
12	病人を見舞うことができますか	はい	いいえ
13	若い人に自分から話しかけることがありますか	はい	いいえ
14	身体にいいと思うことを日々実行していますか	はい	いいえ
15	身体の調子で気になっていることはありますか	はい	いいえ
16	楽しみにしていることはありますか	ある	ない
17	人との交流はしていますか	はい	いいえ
18	暮らしやすい環境ですか	はい	いいえ
19	困ったときに頼りになる人はいますか	いる	いない
20	身の回りで大きな心配事はありますか	ない	ある
21	老人会に入っていますか	はい	
		いいえ	（不参加の理由）
22	自治会に入っていますか	はい	
		いいえ	（不参加の理由）
23	地域の催しには参加しますか	はい	（参加する催しについて）
		いいえ	（不参加の理由）
24	現在、外出の機会はありますか	はい	（外出場所と頻度）
		いいえ	（出られない理由）
25	どういうところに出かけたいと思いますか		
26	「地域にあったらいいなあ」と思う集まりや催し、サービスについてお聞かせ下さい	（集まりや催し） （サービス内容）	
27	人が訪ねて来てくれることについて、どう思われますか	うれしい	（訪問してほしい人）
		うれしくない	（その理由）
28	現在、どういう人が訪ねてこられますか		

29	地域包括支援センターへの要望をお聞かせ下さい	
30	※ 質問No.30以降は、インタビュー担当者のオリジナル質問項目です。	

演習に向けてのリーダーへの配布資料　2009.1.19

～「甲府市地域包括支援センターおおくに」における演習に向けて～

聞き取り調査実施日　全チーム（40ケース）：平成21年1月31日(土)

■　1/6 に配布された「甲府市地域包括支援センターおおくに」における演習要項を熟読の上、チームで演習に向けての準備を行うこと→不明な点については、担当教員に確認を。

■　聞き取り調査対象者のお宅には、学生のチーム毎に 1/22（木）or1/23（金）に連絡させて頂き、訪問時間の約束をする。時間調整の際、「未確認」の方から優先的に調整を行う。「どちらでも」の方は、最後に調整を行う。AM、PM の方は、時間の約束をする。

AM 訪問の方は 10:00 頃、PM 訪問の方は 13:30 頃を目安に、時間の約束をする。15:00 には、全員がスクールバスで大学に戻れる様なスケジュールを組むこと。AM、PM の訪問時間が決定したら、ただちに、各チームのリーダーは、担当教員（人間福祉学部：横山、看護学部：須田）に訪問時間の報告を行うこと。また、調整がつかないなどの問題が生じた場合も、ただちに、担当教員に連絡すること。

なお、1/30（金）の訪問前日には、聞き取り調査対象者のお宅に、訪問時間の確認のお電話を入れること。

> 1/22（木）or1/23（金）にお電話させて頂く際には、必ず以下の内容からお話をはじめて下さい。
> 「地域包括支援センターおおくにからご紹介頂きました、山梨県立大学の学生の○○です。先日、お葉書の方も出させて頂きましたが、私達がお話をおうかがいすることについて、ご了解頂きまして、ありがとうございます。１月 31 日に予定通り訪問させて頂きたいと思いますが、大丈夫でしょうか。お時間の方は・・・」

■　聞き取り調査は、全チーム、1/31 の AM と PM に１ケースずつ、計２ケース訪問させて頂く。9:00 に池田キャンパス（101 講義室）集合。時間厳守のこと。オリエンテーション後、スクールバスで現地へ移動。訪問先へは、徒歩（徒歩：徒歩 20 分圏内）またはスクールバス（自転車/遠い）にて移動する。服装などの留意点については、オリエンテーション時に配布した平成 20 年度教育 GP「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」演習要項参照。

■　各チーム、チームメンバーが相互に協力し合いながら、演習を進めること。

２）フィールド演習：１月31日(土) 9:00～17:00

【演習の流れと内容】

9:00	池田キャンパス 101 講義室に集合、出欠確認 （チームメンバーが揃ったところでリーダーが報告）	
9:00- 9:25	オリエンテーション	①演習全体の留意点、依頼文、同意書 ②調査票、地区踏査記録用紙 ③バス巡回経路
9:30	バス出発（１号車：堀内・２号車：須田）	
10:00-11:20	訪問調査・地区踏査	

11:30　決められたバス停車場所に集合（乗り遅れた場合は教員携帯に連絡）
12:00　センターにて昼食
12:50　バス２号車：出発
13:00　バス１号車：出発
13:30-14:50　訪問調査・地区踏査
15:00　決められたバス停車場所に集合（乗り遅れた場合は教員携帯に連絡）
15:30　池田キャンパス到着、101 講義室に集合
15:30-16:00　チーム毎に訪問調査のまとめ、調査用紙の整理
16:00-16:30　「協働の取り組みを通して気づいたこと」についての話し合い
２～３チーム合同で以下のグループに分かれてグループワークを行い、国母・大国・大里各地区の代表１グループが、発表する。
●国母１グループ：１チーム・16 チーム（５人）
●国母２グループ：４チーム・17 チーム（５人）
●国母３グループ：７チーム・10 チーム（６人）
●国母４グループ：18 チーム・19 チーム・20 チーム（６人）
◇大国１グループ：３チーム・６チーム（６人）
◇大国２グループ：９チーム・12 チーム（６人）
◇大国３グループ：14 チーム・15 チーム（５人）
★大里１グループ：２チーム・５チーム（６人）
★大里２グループ：８チーム・11 チーム（６人）
★大里３グループ：13 チーム（３人）
16:30-17:00　各地区代表のグループの発表
その他、連絡事項

16:30～
「地域包括支援センターおおくに」の所長さんと保健師さんが、助言者として来て下さいます。

グループ（Ｎｏ．　　）

地区踏査　記録用紙＜A4 版縦＞

【踏査地区】 □大国　　□大里　　□国母
【踏査日時】 年　　月　　日　（ AM ・ PM ）
【対象者の居住環境】 １．対象者の住宅を中心として、踏査できた範囲内での居住環境を概況図として描写する ２．対象者の「外出」をキーワードにした時の、居住環境の特徴を具体的に記述する

3）演習に関する打ち合わせ

日　時	場　所	内　容	出席者（人）		
			大　学	センター	甲府市職員
20.11.11	センター	今までの経過と今後の方向性	3	3	
11.19	大　学	演習準備（調査票について）	2		
12.19	センター	今までの経過の確認と演習に向けて(調査票の検討)	3	3	1
12.20	mail 会議	演習準備 （地域にある会の活動について）	3		
12.22	mail 会議	演習準備 （地域への調査依頼文について）	3		
12.26	mail 会議	演習準備 （調査票について）	3		
12.26	mail 会議	演習準備 （調査票について）	3	3	
12.29	mail 会議	演習準備 （地域にある会の活動・地域への調査依頼文について）	3	3	
21. 1. 5	mail 会議	演習準備 （調査対象者について）	3	3	1
1. 5	大　学	1.6.演習オリエンテーションに向けての最終確認	2		
1.13	センター	演習に向けての諸事項の確認	3	3	
1.15	大　学	演習準備 （調査案内状・調査対象者リスト・バス運行について）	3		
1.16	mail 会議	演習準備 （調査対象者リストについて）	3	3	
1.19	mail 会議	演習準備 （調査対象者リストについて）	3	3	
1.26	mail 会議	演習準備（調査日時の確認・調査対象者の変更と最終調整）	3	3	
1.27	大　学	演習に向けての最終確認	3		
1.27	センター	演習準備 （バス運行経路と停留所の確認）	2	1	
3.12	大　学	4.7.合同発表会に向けての事前準備演習について	2		
3.18	大　学	4.7.合同発表会に向けての事前準備演習について	2		
3.27	mail 会議	4.7.合同発表会に向けての事前準備演習準備(当日の流れの確認と配布資料内容の検討)	3		
3.27	mail 会議	4.7.合同発表会に向けての事前準備演習の最終確認(当日の流れの確認と配布資料内容の確認)	3		

4）合同発表会に向けての事前演習 ： 4月7日（火）14:50～18:00

■場　所：池田キャンパス　第6講義室

■目　的：4/18 の専門職連携演習合同発表会の内容がわかり、それに向けての準備を行う

■目　標：1．「地域で暮らす高齢者が閉じこもらずにいきいきと生活できる」を key words として、調査データから高齢者の生活実態（健康・生活ニーズ）を読み、そこから課題を見つけ、どんなことが必要であるかアセスメントすることができる

2．発表会に向けての今後の予定を確認できる

専門職連携演習合同発表会について

１．日　時：２００９年４月１８日（土）
２．場　所：池田キャンパス講堂
３．発表時間：２０分（内容１⇒１３分程度　　内容２⇒７分程度）
４．発表形式：パワーポイントを用いての発表
５．発表内容
　１）「地域で暮らす高齢者が閉じこもらずにいきいきと生活できる」を key words として、調査データから高齢者の生活実態（健康・生活ニーズ）を読み、そこから見いだされた課題から、どんなことが必要であるか発表
　２）実際に自分達が協働して得られたことを整理する中で、「専門職の連携はどうあるべきか」ということについて発表

■本日のタイムスケジュール

時間	内　　容	必要物品
Ⅳ限	オリエンテーション １．専門職連携演習合同発表会について ２．本日のタイムスケジュールについて ３．グループ分け （国母４、大国・大里各３グループの計 10 グループ） ＜発表内容１＞についてグループワークをすすめる。 １．各グループ別に、特に、資料のレーダーチャートに着目して、各地区の特徴をグループ毎に整理する⇒整理用紙① （次頁資料参照）	**学生が持参** ・演習資料 ・リフレクションペーパー **大学側が用意** ・調査データのまとめ（紙面・データ） ・整理用紙①～④ ・パソコン　３台 ・延長コード　３本 ・USB　２本
Ⅴ限	２．各グループの代表１名を選出し、国母地区（４グループ）、大国地区（３グループ）、大里地区（３グループ）で地区ごとに集まり、グループで整理した内容を基に、地区ごとの特徴をまとめる⇒整理用紙② ３．３地区の代表を１名ずつ選出し、おおくにの特徴についてまとめる⇒整理用紙③ ＜発表内容１＞についての「グループワーク２」以降、代表以外のグループメンバーで、＜発表内容２＞の「専門職の連携はどうあるべきか」ということについて話し合う⇒整理用紙④ 今後の予定の確認	

■グループ編成

国母１グループ　１・16 チーム（5 人）	大国１グループ　3・6 チーム（6 人）
国母２グループ　4・17 チーム（5 人）	大国２グループ　9・12 チーム（6 人）
国母３グループ　7・10 チーム（6 人）	大国３グループ　14・15 チーム（5 人）
国母４グループ　18・19・20 チーム（6 人）	大里１グループ　2・5 チーム（6 人）
	大里２グループ　8・11 チーム（6 人）
	大里３グループ　13 チーム（3 人）

■グループワーク用整理用紙＜A3 版横＞

整理用紙①

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
～4.18 合同発表会　事前打ち合わせ～

1．調査結果（データから読み取れる事実）
2．考察（調査結果から考えられること）
3．課題
　1）地区の課題
　2）課題解決のために

地区＿＿＿＿＿＿＿＿　グループメンバー氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

整理用紙②

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
～4.18 合同発表会　事前打ち合わせ～

1．調査結果（地区のまとめ）
2．考察（地区の特徴など）
3．課題
　1）地区の課題
　2）課題解決のために

地区＿＿＿＿＿＿＿＿　代表者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

整理用紙③

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
～4.18 合同発表会　事前打ち合わせ～

1．調査結果（各地区の調査結果のまとめ）
2．考察（各地区の個別性やおおくに地域全域の特徴など）
3．課題
　1）地域の課題
　2）課題解決のために

地区＿＿＿＿＿＿＿＿　代表者氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

整理用紙④

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
～4.18 合同発表会　事前打ち合わせ～

1．看護学部生からみた福祉学部生の特性
2．福祉学部生からみた看護学部生の特性
3．専門職連携に向けての課題
　＜在学中＞
　＜卒業後＞
4．その他

グループメンバー氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

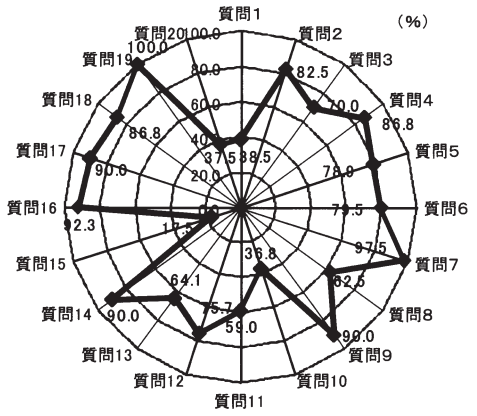
■訪問調査対象者基本属性（全体と地区別）

		全体(n=40) 人(%)		国母地区(n=18) 人(%)		大国地区(n=12) 人(%)		大里地区(n=10) 人(%)	
年齢	60歳代	3(7.5)		1(5.6)		0(0)		2(20)	
	70歳代	16(40)	平均年齢	7(38.9)	平均年齢	7(58.3)	平均年齢	2(20)	平均年齢
	80歳代	19(47.5)	79.0歳	9(50)	79.7歳	4(33.3)	78.8歳	6(60)	78.1歳
	90歳代	2(5)		1(5.6)		1(8.3)		0(0)	
性別	男性	16(40)		8(44.4)		4(33.3)		4(40)	
	女性	24(60)		10(55.6)		8(66.7)		6(60)	
介護度	一般	8(20)		5(27.8)		3(25)		0(0)	
	特定高齢者	1(2.5)		0(0)		0(0)		1(10)	
	要支援1	18(45)		9(50)		4(33.3)		5(50)	
	要支援2	13(32.5)		4(22.2)		5(41.7)		4(40)	

5）合同発表会 :4月18日（土）準　備 9:00～14:00 / 発表会 14:15～16:30

（1）戸別訪問調査結果

n=40
数字は人数

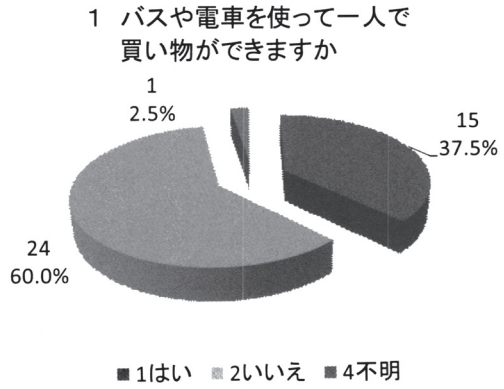


※ レーダーチャートについては欠損値を含まず

設問番号	%
質問1	38.5
質問2	82.5
質問3	70.0
質問4	86.8
質問5	78.9
質問6	79.5
質問7	97.5
質問8	62.5
質問9	90.0
質問10	36.8
質問11	59.0
質問12	75.7
質問13	64.1
質問14	90.0
質問15	17.5
質問16	92.3
質問17	90.0
質問18	86.8
質問19	100.0
質問20	37.5

凡　例	
質問1	バスや電車を使って一人で買い物ができる
質問2	日用品の買い物ができる
質問3	自分で食事の準備ができる
質問4	請求書の支払いができる
質問5	銀行預金、郵便貯金の出し入れができる
質問6	年金などの書類が書ける
質問7	新聞などを読んでいる
質問8	本や雑誌を読んでいる
質問9	健康についての記事や番組に関心がある
質問10	友達の家を訪ねることがある
質問11	家族や友達の相談にのることがある
質問12	病人を見舞うことができる
質問13	若い人に自分から話しかけることがある
質問14	身体にいいと思うことを日々実行している
質問15	身体の調子で気になっていることはない
質問16	楽しみにしていることがある
質問17	人との交流をしている
質問18	暮らしやすい環境である
質問19	困ったときに頼りになる人がいる
質問20	身の回りで大きな心配事はない

質問１　バスや電車を使って一人で買い物ができますか



＊「はい」と回答

・自分で車を運転して買い物に行く（７）
・自分で見て買いたい
・段差が気になる
・徒歩（３）（押車を使用、散歩がてら健康のため）
・自転車（２）（健康のため）
・近所のコンビニを利用
・バス（２）（あまり使わないが、駅周辺に行く時）

＊「いいえ」と回答

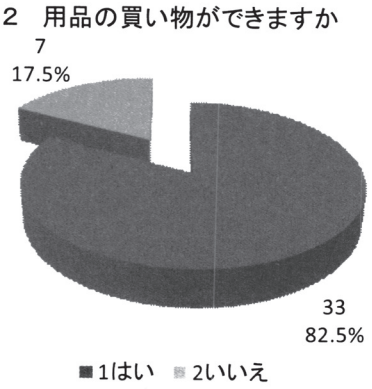
・自家用車を運転して行く（３）
・娘の車で連れて行ってもらう（２）
（一週間分をまとめ買い、足が痛い）
・去年までは軽トラックで、今年は医者に止められている
・買物好き（スーパー）
・徒歩
・タクシー
・自転車
・以前は自転車、今はできない
・重いものが持てない
・買物は通販生協（足が不自由）（３）
・バス、電車は乗れない乗降が苦手
ステップが高すぎる（３）
・バス酔いをする
・地理が不案内

・ヘルパーに依頼（足が痛い）
・妻

＊「不明」
・買物はできるが、交通機関は不明

・一人では行かない（足が痛い、近くにスーパーがない）

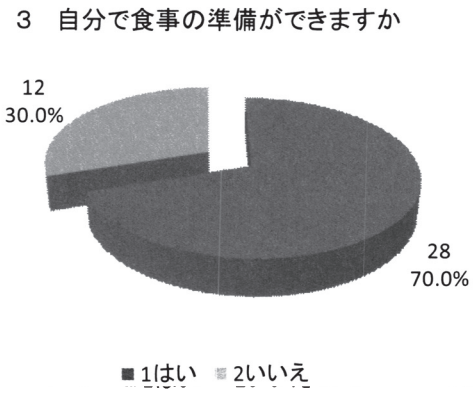
質問２　日用品の買い物ができますか



＊「はい」と回答
・自家用車で
・妻と一緒（２）
・妻
・夫の運転で
・夫や息子の車
・嫁と（週１回）
・息子たちと
・娘（多い時）
・ヘルパーと
・自分で（９）（乳母車を押して、体調が悪い時以外、関節痛あり、近所のスーパー、ほとんどは通販、重いものはヘルパーに依頼、重いものは娘と一緒）
・自転車（近く）
・徒歩（近所、重いものはヘルパー、弟に依頼）
・生協を利用（２）（不便さを感じることもある）
・日用品は嫁
・週に３～４回

＊「いいえ」と回答
・魚の車上販売業者（知人）に依頼
・軽いもの（バナナ）は自分で、筋力が落ちている（息子：談）
・生協（２）（足が不自由）

質問３　自分で食事の準備ができますか



＊「はい」と回答
・卒業以来ずっと自分で、おいしいといわれる
・３食（全部）自分で（２）
・自分で（３）（たまにヘルパーに依頼、材料があれば・漬物、関節リウマチあり、特別食なので）
・普段は妻（最低限は自分で）
・固いものは夫に切ってもらう（関節リウマチあり）
・煮たり焼いたりは自分
・嫁中心（煮物、漬物は自分で）
・息子、嫁が面倒をみてくれる
・親戚、近所の人が作りに来てくれる（自分では出来る）
・気が向いた時（施設は３食付き）
・ヘルパー（月４回・主に掃除）
・栄養学を学んでいた
・料理は好き（４）（テレビで見たレシピをメモし作る、みそ汁など、難しいものは作らない）
・料理は得意（近所に配ると褒められる）
・味噌汁は毎日
・毎日違うものを食べるように努力
健康に気を使い工夫している（３）（油ものを控える・煮物・味噌汁）

・レトルト食品を活用、レンジで温められるものを活用
・土日のみ自炊（冷凍食品）

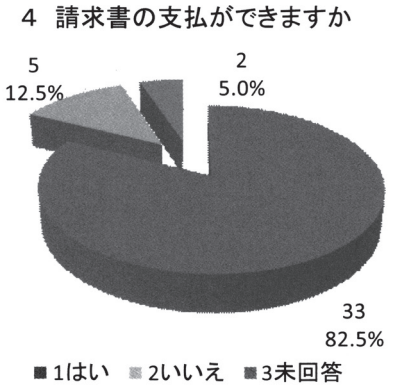
＊「いいえ」と回答

・妻（６）
・意欲はある（施設の方針で出来ない）
・普段は息子（いない時は自分）
・ご飯をよそったり、お茶を入れたり
・簡単なことは自分で、（みそ汁・魚を焼くなど）面倒なことはしない
・昼は給食
・一人なので、食事時間やメニューを自由にできる
・購入するまたは外食（「火を使ってはいけない」と言われている）
・配食サービス（２）（朝食はパン）
・自分で食べられるが、飲み込みが多少不安

質問４　請求書の支払ができますか

＊「はい」と回答

・引き落とし（５）
・振り込みはしていない
・着払いができる
・字は読める
・勘定はできる
・買物ついでにする
・家計簿も付けている
・息子に依頼することもある
・できる（４）（若い時からの継続）
・今は出来ている（分からないことは聞く、出来なくなったら親戚に依頼しようと思う）



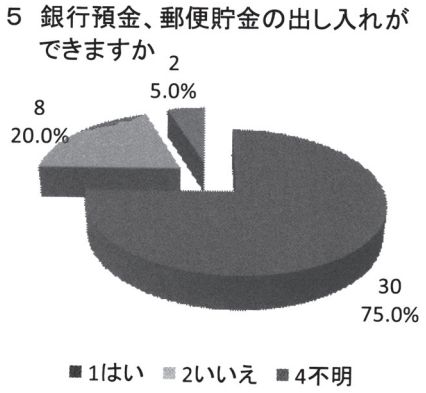
＊「いいえ」と回答

・妻（２）
・夫
・書くこと、確認は出来るが、行くことは出来ないので、妻、息子に依頼
・夫婦で行く
・夫が亡くなった時の名義変更が大変だった
・息子夫婦が管理（自分でも出来るかもしれないが）

質問５　銀行預金、郵便貯金の出し入れができますか

＊「はい」と回答

・ＡＴＭを利用（近所）
・コンビニを利用
・郵便局を利用（近所）
・できる（６）（すべて、自分名義のもの、必要時に、若い時からの継続、画面操作は出来ない）
・今は出来ている（分からないことは聞く、出来なくなったら親戚に依頼しようと思う）
・本人と妻が管理
・家計簿を付けている

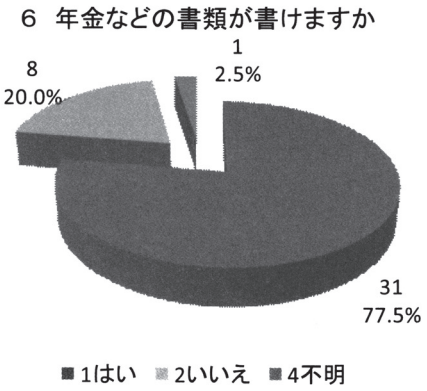


＊「いいえ」と回答

・息子（２）
・妻

・夫（２）（ＡＴＭが使用出来ない）
・ヘルパー（記帳を依頼）、
銀行員の訪問（年金管理）
・書くことは出来るが、行くことは出来ないので、妻、息子に依頼
・息子夫婦が管理（自分でも出来るかもしれないが）

質問６　年金などの書類が書けますか

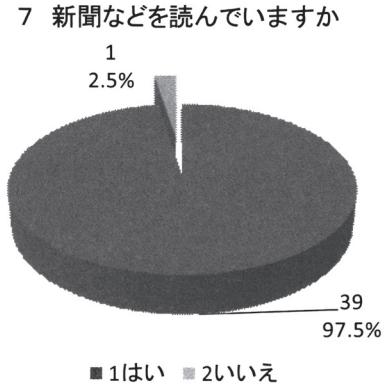


＊「はい」と回答
・できる（若い時からの継続）
・今は出来ている（分からないことは聞く）
出来なくなったら、親戚に依頼しようと思っている
・申告書を書いている（農協で見てもらう）
・名前がきちんと書ける
・書類は熟読していた
・記入は出来る（記入が少ない）
・字は書けるが、書くことが好きではない
・難しい
・うまく書けないと言っているが書ける
（関節リウマチ）
・手が震える（投薬処方あり）
・パソコンを使用（年賀状）
・夫婦で申請（ほとんどの書類は、
息子のところに持っていく）
・息子に相談することもある

＊「いいえ」と回答
・息子
・息子夫婦が管理（自分でも出来るかもしれないが）
・妻
・夫（２）
・生活保護
・年金手帳があるため、書く必要がない
・勝手に来る

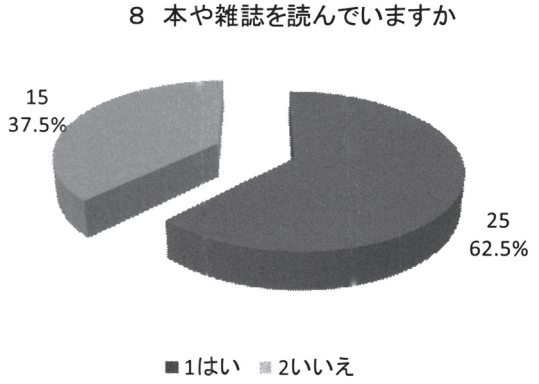
＊「不明」
・本人は字が書けないと言っているが、名前はきれいに書けた

質問７　新聞などを読んでいますか



＊「はい」と回答
・毎日読んでいる、読むようにしている（７）
（１時間程度、メガネなしで読める（２））
・山梨日日新聞（地域のことが分かる）
・朝日新聞（毎朝ゆっくり）
・社会情勢について
・社説、連載小説
・政治以外（特にスポーツ、１時間位）
・三面、お悔やみ欄
・料理
・隅から隅まで（２）（時間をかけて）
・２部とっている
・１部とっている
・読んだり読まなかったり
・部分的に、読める所だけ（２）
・読み書きが好き
・読んでいるとめまい、頭痛、耳鳴りなどがするので長時間は読めない
（読むことは出来る）
・視力（白内障・緑内障・近視）

質問８　本や雑誌を読んでいますか



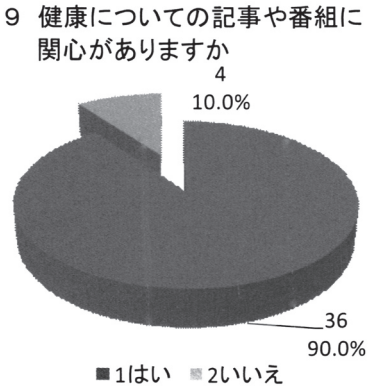
＊「はい」と回答

・読書会に参加
・本好き（２）（特に医学書）
・読書の習慣あり（２）（以前本屋に勤務）
・歴史好き（夜落ち着いて読む）
・日なたで読書
・社会情勢について
・健康に関する本を購入（雑誌など）
・雑誌（通販のもの）
・週刊新潮、週刊文春など
・月刊文芸春秋
・会報（本は読まない）
・クロスパズル（２）
・文庫本
・半日で１冊

＊「いいえ」と回答

・ほとんど読まない
・今は読まない（目がぼやける）
・あまり読まない（脳トレの本はあるが、長続きしない）
・あまり読まない（２）（家では）
・たまに読む（あまり好きではない）
・病院の待ち時間に読む
・読んでいるとめまい、頭痛、耳鳴りなどがするので長時間は読めない（読むことは出来る）
・主にテレビ
・経済的余裕がない
・以前は読んでいた（２）（今は目が悪い）
・以前は移動図書館を利用（今は疲れる）

質問９　健康についての記事や番組に関心がありますか



＊「はい」と回答

・よく見ている
・番組名：「家庭の医学」
・知恵の付く番組が好き（４）（「ためしてガッテン」・みのもんた出演の番組など）
・特にＮＨＫ、教育テレビ（２）
・特に料理について（粗食を心がけている）
・生活の参考にする
・やっていれば見る
・健康に関する番組はすぐに信じてしまい影響を受ける（息子談）
・音がないと寂しいのでテレビはずっとつけている
・本、パンフレット、テレビ、新聞（８）
・友人からの情報
・施設の献立表を参考にしている（ＤＭ）

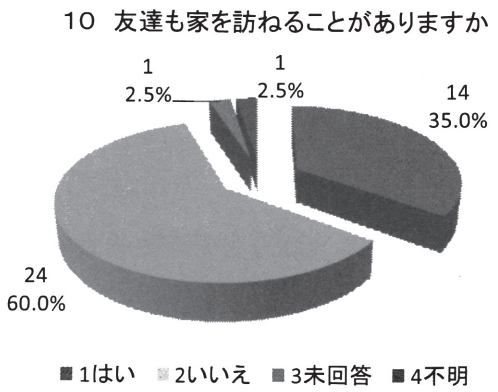
＊「いいえ」と回答

・妻は興味がある（２）（健康グッズを購入）
・今健康なので興味がない
・ニュース、国会討論に関心がある
・看護師の経験がある
・記事などは読まない（自分の症状、周りの人の症状などについて話はする）
・健康に良いことはする、悪いことはしない
・興味があり、リハビリなども行っている
・関心がある（家族が病気だった）

質問１０　友だちの家を訪ねることがありますか

＊「はい」と回答

・習字を教えに行く（友人宅ではない）
・友人宅（２）（近所に多い、
　３か月に１回お茶飲み会）
・近所付き合いがあり、助けあっている
・垣根越しに話をすることもある
・たまに近所のお宅へ（２）
・情報交換
・飲みに行く
・カラオケに行く
・友人が留守の時は、留守宅の郵便物や花の管理などをする
・来てくれるほうが多い



＊「いいえ」と回答

・自宅ではなく、外で待ち合わせる（２）
・訪ねても玄関先まで
・近所へ訪問することはある
・近所付き合いはあまりなく、地域の集まり
　の中で話す
・昔はお茶会などしたが、今はそういう時代
　ではない、昔はあったが今はない（３）
・友人のほとんどが亡くなっている（２）
　残っている友人も足が悪い
・ここ１年は行くことがない
・特に訪ねない
・２年前まで勤めていた
・同居していない息子が２か月に１度
・友人が多く、主に来てもらう
・来てくれる（関節リウマチ・肩の痛み・
　リンパ浮腫で動くのが大変）
・来てもらうことが多い（転倒後）
・気を使うので来てもらう
・足が不自由（２）、来てもらう
・行くことが出来ない
・夫婦共、年齢的に病気になることが多く、
　友人とも電話で少し話す程度でなかなか会
　えない
・施設内では基本的に交流禁止

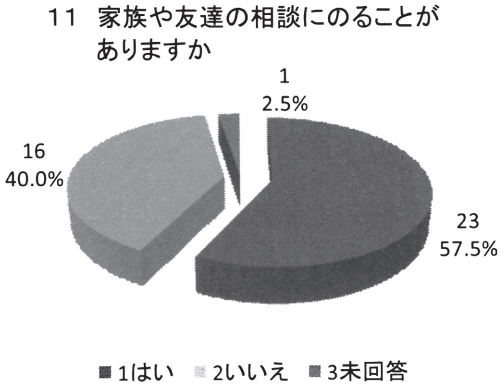
＊「不明」

・一人暮らし、家族は離れに住んでいる

質問１１　家族や友達の相談にのることがありますか

＊「はい」と回答

・習字の時に話す
・日常会話の中で
・頼りにされている（孫、子ども）
・妹（検査技師）に症状について相談
・姉（電話、会って話す）
・よく相談にのる（世話好き）
・ある程度のる
・たまに
・相談があれば
・友達（お互いに相談する）（２）



・たまに友達（電話で）
・娘（たまに電話がある）
・隣人から夫に

＊「いいえ」と回答

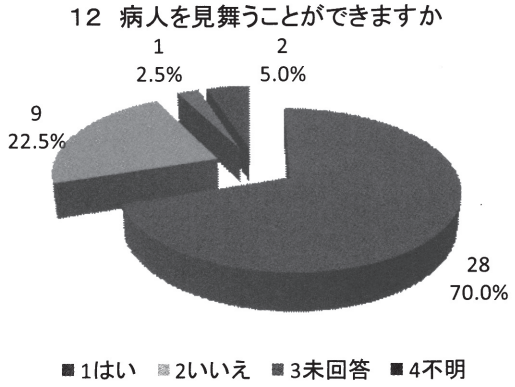
・以前はあった、出来ることは協力していた

・以前は聞く方だったが、今は聞いてほしい
・相談することが多い
・相談されることはない（相談されればのりたい）
・相談ほどの深い話はない、問題はない（２）
・話すだけ
・施設内では基本的に交流禁止
・友達とあまり連絡をとっていない

質問１２　病人を見舞うことができますか

＊「はい」と回答

・行こうと思えば行ける
・体力的につらい時もある
・タクシーを利用して行く（２）
・娘、息子の送迎で（２）
・エスカレーターにかろうじて乗れる
・付き合いがあるので（気を遣う）
・義母が入院していた（先日まで）
・妹（認知症）を去年（７月）に（足が悪いのであまり出歩かない）
・近所の人や友人、親戚（２）（義理と人情）
・一人暮らしの人を訪問（老人クラブの行事）



・友人・家族に依頼

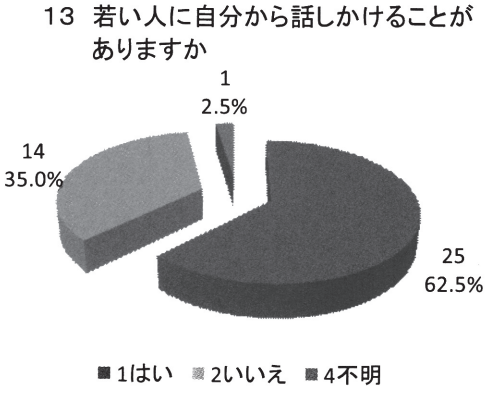
＊「いいえ」と回答

・去年まで見舞っていた
・来てもらうことが多い
・家に様子を見に行ったりはする
・入院している友人はいない
・されたくない人が多い
・葬儀には行く

質問１３　若い人に自分から話しかけることはありますか

＊「はい」と回答

・メール
・自分からどんどん話しかける、話したい（最近は周りに若い人がいない）（２）
・話し好きだが機会がない
・ある（２）（若い人は良い）
・物の使い方をたずねる
・若い人と話すことが好き（４）（気持ちが若くなる）
・付き合わないと、時代に遅れる気がする
・読書会などで
・ヘルパーと（２）
・デイサービスの職員（３）
・実習の学生
・おおくにのスタッフのみ
・保育園児

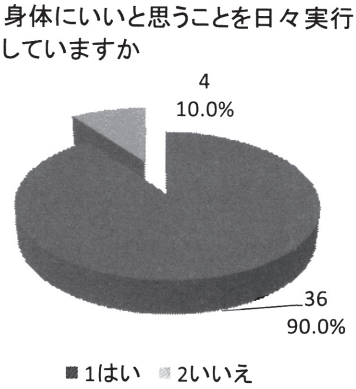


・ガールスカウトの関係者と（ボランティアをしている）
・看護師、病院の受付の人
・飲み屋で
・スポーツ公園などで（２）
・錬武会の人と

＊「いいえ」と回答

・挨拶程度
・孫とは話す
・話しかけたいとは思うが、聞いてもらえない
・現在、機会がない（５）（機会があれば話せる）
・周辺に若い人がいない（２）
・話しかけられない（耳が遠く聞こえない）
・自分からはあまり話しかけない
・おおくにのヘルパーや介護福祉士に話しかける
・たまに薬局の店員に

質問１４　身体にいいと思うことを日々実行していますか



＊「はい」と回答

・階段の昇降
・散歩、ウォーキング（１４）（一日一回は外出、1日3・40分、10分程度、2500歩を目安に、足のリハビリ）
・自宅の周囲を歩く
・医者、寺へは歩くようにしている
・ラジオ体操
・ストレッチ、体を動かす（６）（免疫力をあげるため）
・リハビリ体操（３）
・ダンベル体操
・デイサービスで運動（深呼吸、タオルを使用）
・足踏み
・片足立ち（歯磨きをしながら）
・指先を動かす
・自転車
・グランドゴルフ
・家の中の掃除
・草むしり
・温泉
・マッサージ
・読書
・調理する
・食事（４）（妻が調理）
・食品に気を遣う
・海藻を食べる
・キャベツの千切りを食べる（胃の調子がよい）
・野菜を多くとる（２）
・野菜や肉を食べる
・小魚を毎日食べる（カルシウム）
・お茶を飲む
・油もの、醤油を控える、塩分控えめ（２）
・人にもアドバイスする（保健所で働いていた）
・サプリメントの服用
・薬をきちんと飲むようになった
・健康に良いということは積極的に行う
・早寝、早起き
・ＤＭに対して注意している
・出来ることは自分でする

＊「いいえ」と回答

・腰を痛めてからはしていない（以前は４５分位歩いていた）
・特にしていない（２）（ケアセンターでしている）
・意識はしている
・おおくにに行くことに意義がある
・毎日、指先の訓練をした方が良いことは分かっているがなかなか実行できない

質問１５　身体の調子で気になっていることはありますか

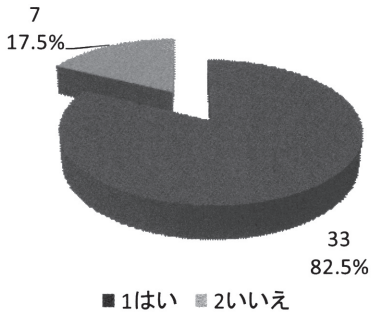
＊「はい」と回答

・肩、肘、腰（骨折）
・膝を痛めた
・肘が痛い（階段で転倒）
・手の麻痺
・手足の浮腫
・手足の痺れ、麻痺（脳梗塞の後遺症）（２）
・腰痛（３）（手術の後遺症）
・足のふらつき（２）
・足が不自由
・足腰（４）
・立ち座りがうまく出来ない（人工股関節になった）
・立つことが大変（失禁経験あり）
・痙攣（就寝時）
・めまい（２）（薬を服用して自己管理）
・リウマチ（４）（腰）（関節）
・神経痛（帯状疱疹の後遺症）
・頭痛（２）（ストレス）
・肩の痛み、肩が張る（２）
・階段の昇降が怖い
・一過性脳梗塞
・緑内障
・糖尿病
・肝臓
・血圧

＊「いいえ」と回答

・今は特にない（妻がいるので）（以前は多発性筋炎、リウマチを患っていた）
・気にしない

15　身体の調子で気になっていることはありますか



・うつ傾向
・がんの再発が心配
・耳鳴り
・片耳が聞こえない、聞こえが悪い（２）
・お腹の張り
・不整脈
・思うように仕事ができない（仕事で身体をこわした）
・寒くなるとつらい
・通院中（３）（皮膚科・内科・泌尿器科・整形外科）
・体調維持
・嚥下障害
・痩せた（夫の病気による）
・薬を服用中（血圧、安眠剤）

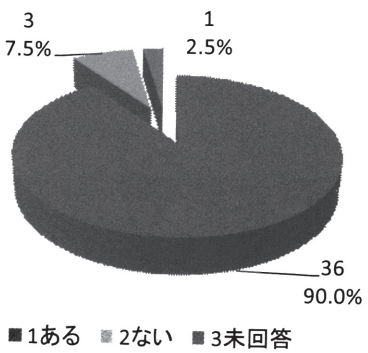
・胃の調子が気になることがある
・視力、聴力の低下

質問１６　楽しみにしていることはありますか

＊「ある」と回答

・篆刻、習字を教えている（週２回）
・俳句（友人と手紙でやりとり）
・孫の成長
・旅行（５）（東京、老人会、友人と、子供・孫に会いに行く）
・出かける
・散歩（近所の友人と、公園での会話）
・温泉（５）（近所の友人と、子供と）
・遊びに来る（孫・ひ孫）

16　楽しみにしていることはありますか



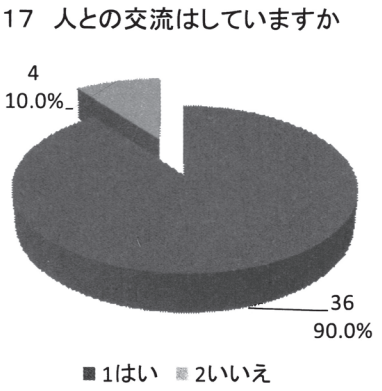
・カラオケ（４）（老人会）

・社交ダンス（夫と）
・筋肉の向上
・集まり、忘年会（老人会）（２）
・人との交流
・食事会
・食に関する講演
・食べること（２）（好きな物を買って）
・料理
・晩酌
・お茶会
・友人と会う
・手芸（３）（作ったものを人にあげる）
・お花
・読書（３）
・クロスパズル
・ボランティア（歴史ガイド）
・グランドゴルフ（３）
・話すことが好き、人との交流（２）
・その日を楽しく過ごすこと
・介護センター、デイサービスの利用（５）
・ヘルパーの訪問
・テレビ（３）（水戸黄門、クイズ番組）
・パソコン（２）
・魚、虫の飼育
・家庭菜園、庭いじり（４）
・今は出来ないが、以前は野菜を作り楽しかった
・以前と同じように絵が描けるようになること（めまいがしてなかなかできない）
・旅行に行けないのが残念（足が痛い）

＊「ない」と回答

・やる気が出ない（腰痛）
・以前はボランティアに参加
・あった方が良いと思っている（地域でチャンスを作ってほしい）

質問１７　人との交流はしていますか



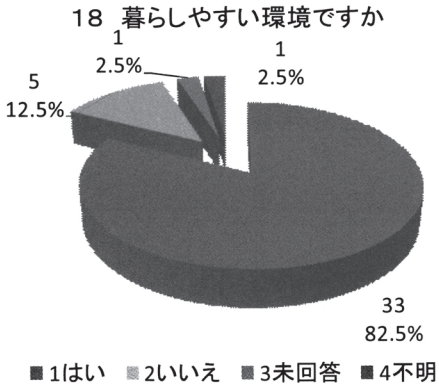
＊「はい」と回答

・息子、娘、孫、ひ孫（５）
・兄弟、姉妹（２）
・甥夫婦
・夫
・地域包括支援センター
・介護センター、デイサービス（７）
・ヘルパー（３）
・医者
・ボランティアの人
・友人（６）（近所、カラオケ、花見に呼ぶ、電話で）
・近所付き合い（９）（病んでいる時に食事を運んでくれた、カラオケ、公園で交流）
・外出先で立ち話
・地域の子供
・食事会（２）
・自治会（２）
・老人クラブ
・檀家の集い
・無尽会（２）
・書道の時（２）
・読書会
・錬武会
・サークル活動
・グランドゴルフのメンバー
・施設の方針で交流はしづらい（してはいるが）
・妻はあまりないので、心がけている
・以前よりは減っている
・女性は病院などでもすぐに話が出来るが、男性はそうはいかない

＊「いいえ」と回答

・家から出られない
・近所付き合いがない
・問題は自分自身にあり、心がけている

質問１８　暮らしやすい環境ですか



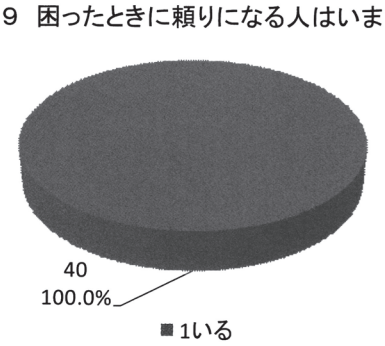
＊「はい」と回答

・近所に何があるのか把握している
・一日中外にいられる
・日あたりが良い
・周りの人にも「幸せだ」と言われるくらい良い環境
・気楽
・落ち着いた静かな環境（２）
・長年住んでいる（２）
・住めば都、慣れてしまった（４）
・ここしか知らない
・トラブルがないようにしたい
・環境としてはまあまあ
・近所との交流が深い（４）（困った時には助けてくれる、遊びに行ける家がある）
・商店街（近所との交流が多少ある）
・干渉しない（近所）
・近所にスーパーあり
・近所にファミリーレストランあり
・近所に医療機関あり（歯科・眼科）
・近所にバス停あり
・近所に温泉あり
・いろいろあって便利
・マンション、アパートが多い（外国人が多いので汚れているところもある）
・５階から１階に引っ越しをした
・廊下が滑りやすい（転倒経験あり）
・娘、息子がよく遊びに来る、買い物に連れて行ってもらう（２）
・息子夫婦、妻がやさしい、孫ともよく話す
・便利だが、交通の便が悪い（車が必要、スーパーが遠い（２））
・以前よりも交流は減った
・旅行が出来れば良い

＊「いいえ」と回答

・会話がしづらい
・朝の集まりに行けない（体調不良のため）
・交通の便がない、バス、電車の利用がしづらい（本数が少ない、駅が遠い）（２）
・店がない

質問１９　困った時に頼りになる人はいますか



＊「いる」と回答

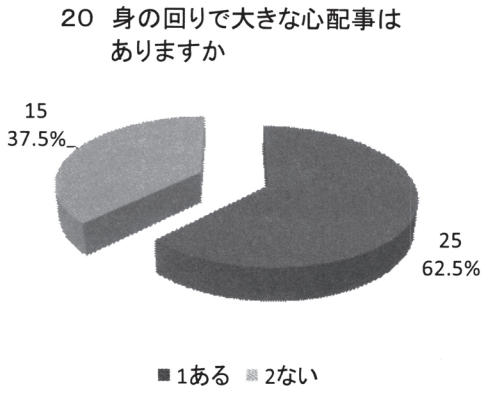
・兄弟、姉妹またはその夫婦（８）
・甥またはその夫婦（２）
・娘、息子またはその夫婦（１８）（同居・近所に住んでいる、遠くに住んでいる）
・嫁（３）（同居または近所に住んでいる、看護師をしている）
・孫
・妻、夫（７）

・家族
・親戚（２）
・友人、仲間（５）
・近所（８）
・ケアマネージャー、ヘルパー（５）
（ケアセンター・やさしい手）
・地域包括支援センター
・訪問看護師（２）
・「こうせいかい」の人（３ヶ月介護してくれた）
・民生委員（２）

質問２０　身の回りで大きな心配事はありますか

＊「ない」と回答

・寝込んでしまった場合は心配
・孫の将来は心配
・家を継いでくれる人については心配
・今後の居住先については心配
・姉妹の健康は心配
・心配しないようにしている



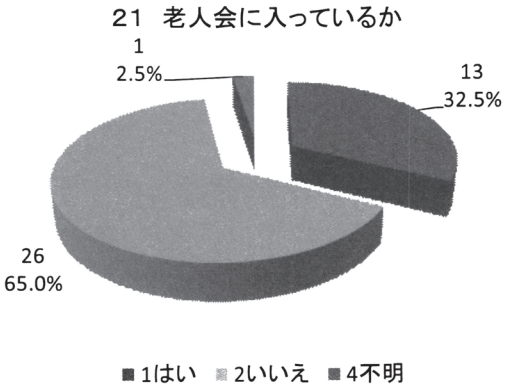
＊「ある」と回答

・自分の体調、体調維持が難しい（３）
・薬の管理
・健康について（６）（病気になった時、寝たきりになったらどうするか、死ぬまで元気でいたい）
・老後をみてくれる人の不在
・誰もいない時に具合が悪くなった時、倒れた時の不安
・ケガや病気（３）（一人暮らし）
・心細い（昼間は一人）
・めまい
・発作
・うつ傾向
・花粉症
・インフルエンザ
・リウマチの悪化
・腰痛
・手足の痛み
・手足が不自由（脳出血）
・夫がショートにいる
・孫が歩けない（障害がある）
・県外に住む孫
・親友の病気
・金銭面（２）（年金）
・不審者（一人暮らし）
・人に迷惑をかけるので早く死にたい
・若い人に迷惑をかけてはいけない

質問２１　老人会に入っていますか

＊「はい」と回答

・新年会
・桜会（新年会・カラオケ・ゲームなど）
・ふれあい会（ヘルパーとゲーム・体操など）
・部活動（カラオケ）
・奉仕活動（２）（草取り・公民館の清掃・ゴミ拾いなど）
・旅行（２）
・ボウリング
・祭り
・運動会



・花配り
・グランドゴルフ
・無尽会

・連合会会長、老人会会長をしている（２）
・行きたくないが、誘われるので

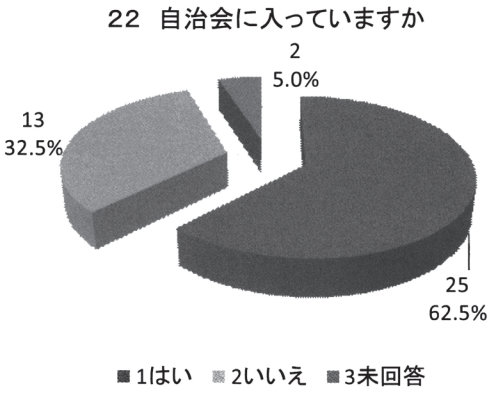
＊「いいえ」と回答

・以前は入っていたが退会した（２）
（今は何も出来なくなってしまった、身体が不自由になった・ゲートボールでも迷惑をかける）
・居づらくなったので退会した
（夫が突然怒りだした）
・体調不良、身体が不自由（４）（耳が遠い・足が不自由）
・夫や近所の人が行かないので
・無尽があるので
・友人と貯金して旅行に行く
・参加する必要なし（友人が多い）
・近所の人との交流で十分
・まだ参加したくない
・老人の仲間になりたくない
・まだ参加出来ない（年齢制限）（２）
・入ってはいるが不参加（高齢・身体が不自由）
・参加出来なかった（忙しかった）
・誘いが来ない
・会長になれと誘われるので
・面倒だ
・互いに気を遣う
・親しい人がいない（越してきたばかり）
・老人会がない、なくなってしまった、存在が分からない（７）（老人が少なくなった、グランドゴルフの集まりが老人会のようなもの）
・あれば参加したい（２）
・遊びに行くなどみんなですることに参加したい
・情報がない
・情報は姉から得ている

質問２２　自治会に入っていますか

＊「はい」と回答

・連合会会長、自治会長、組長をしている、していた（５）
・老人クラブとして参加
・入っているが参加はしていない（２）
（高齢、身体が不自由）
・今は嫁が参加
・義務（町内なので）
・人のためになることは出来る限りした
・公民館の清掃、草取り、草刈り（公園など）
・ゴミ当番（２）
・運動会
・回覧板



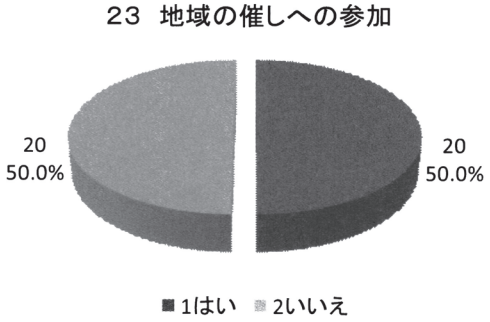
・組の人がやさしく、高齢者に配慮してくれる

＊「いいえ」と回答

・年をとると自分を表現するのが苦手
・地域との関わりがない
・いじめ（近所）
・以前はしていたが、現在は息子に引き継いだ（高齢のため）
・体調不良（３）
（足が不自由、足腰が弱っている）
・夫、息子夫婦が行う
・情報がない（入っているのかも分からない）
・知らない
・自治会がない
・あれば入りたい

質問２３　地域の催しには参加しますか

＊「はい」と回答



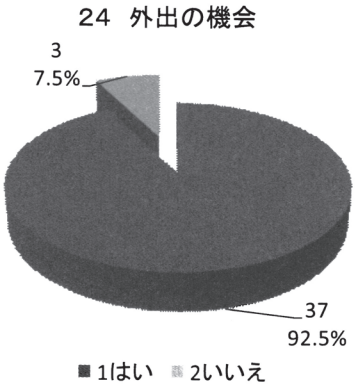
・組長（お祭りの係りは大変）
・組長をしている時
・各種団体長会議
・クリーン活動
・お茶会
・古典の会
・お茶研究会
・朗読会
・運動会（５）（小学校）
・子供たちと交流（学校）
・文化祭（２）
・祭り、夏祭り（４）
・信玄公祭り
・ふれあいクラブ（脳トレ・折り紙など、市）
・クラス会（教え子の）
・大里の会
・同級会
・食事会
・老人会、自治会の活動
・日帰り温泉（敬老の日）
・神輿を担いだり、酒を飲んだりするが、生き生きしたものではない

＊「いいえ」と回答

・あまり外出しない
・自分のペースで外出できないので億劫
・知らない人ばかりなので（孫が参加していれば行く）
・近所の人が不参加
・身体が不自由、後遺症が気になる（６）（腰痛・耳が遠い・足が悪い、悪くなった）
・体調が不良（２）
・息子が参加
・以前は参加していたが、今は任せている
・夫を置いて行けない
・広告のみ
・運動会、祭りなどには参加したいが、高齢のためすぐ休みたくなる、行けばやりたくなってまう
・手伝いが出来ない、邪魔をしてしまう
・地域に催しがない、なくなった（２）（人の減少）

質問２４　現在外出の機会はありますか

＊「はい」と回答



・ボランティア
・栄養についての交流会
・社交ダンス（週１回）
・折り紙教室
・刻字、習字（２）（週１回、月２回）
・川柳の会
・読書（月２回）
・編み物
・墓の清掃
・美容院
・医院、病院（１４）（週１回、週３回、月１回、２ヶ月に１回、半年に１回）（整形外科）
・リハビリ（２）（週２回）

・デイサービス（９）（週２回）（いろいろなところに連れて行ってくれる）
・スーパー、コンビニで買い物（１２）（週２回、毎日、週末）（娘と）（八百屋・魚や）
・散歩（６）（午前午後毎日３０分、毎日、犬と、以前は自転車）
・公園で近所の人、友人と会話（２）
・友人宅（２）
・知りあい宅（市職員、月２回）
・ドライブ（友人と、娘と）
・友人と食事（タクシーで）
・食事会（２）（月１回）
・カラオケ（２）（月２回）
・会合
・公民館、悠遊館（スケジュールの確認）
・自治会
・地域の催し（週１回）
・温泉（３）（隔日）
・旅行（４）（海外へ息子が連れて行ってくれる、誕生日に息子が連れて行ってくれる、寺主催、年２回、京都に隔年）
・兄弟、姉妹の家
・親戚宅（正月）
・同窓会
・畑
・出かけることが好き
・あまり遠くへは行かない

＊「いいえ」と回答

・足が悪い（２）
・近所の人に誘われる
・寒いので、暖かくなったら出かける

質問２５　どういうところへ出かけたいと思いますか

・博物館（自転車で計画中）
・武田神社（夫婦で）
・カラオケ（２）（友人や家族と）
・食事（友人や家族と）
・講演会（学びたい）
・物産展
・風呂
・花見など（２）（季節のイベント）
・温泉（４）（リウマチに効能があるところ、発作や家事が気にならなければ、静かな所で２～３日ゆっくり過ごしたい･海辺など）
・旅行（８）（手足の痛みがなくなったら、しかし、夫がいるので…、体力があれば、十分なサポートがあれば、発作や家事が気にならなければ、外国、伊豆、日帰り・長時間のバスは辛い）
・健康旅行（楽しく・愉快）
・いろいろなところ（３）（歩くのが好き）
・仕事もしたい
・車を運転して遠出
・ウォーキング
・健康な人たちがいる明るいところ
・のんびりとしたところ（賑やかなところは行きたくない）
・皆に連れて行ってもらえるところ（２）（一人では出かけられない）
・行きたい気持ちはあるが行けない（２）
・出かけられない（犬が心配）
・外出はしたいが、遠出はしたくない
・あちこち出かけてきたのでもう十分（２）（ベトナム、タイ、香港、マカオ、中国、台湾）
・特に行きたい所はない（４）（現在行けているので、歩けない、耳が遠い、山梨から出たがらない）
・寒いので出かけたいと思わない
・億劫（交通手段がないので）
・行きたいと言わない

質問２６　「地域にあったらいいなあ」と思う集まりや催し、サービスについてお聞かせ下さい

＊「集まりや催し」

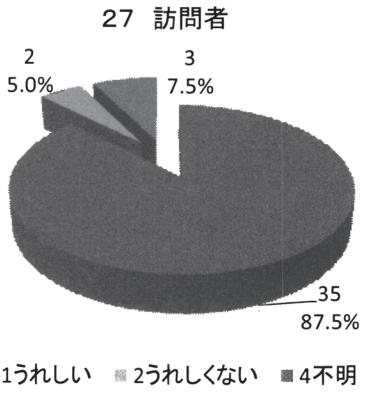
・今までで十分（２）
・人と交流できる機会（誘い合って、歩いて行ける範囲）

・何でも良いので、集まれる催し（集まることで意識が変わってくる）
・気軽に集まれるサークル
・小さい規模で参加しやすいもの
・老人会
・寄席
・演劇
・祭りなど（２）（面白いこと）
・お花の集まり（週１回）
・ボランティア活動
・社会福祉センター

＊「サービス」

・今までで十分
・商店街、買い物ができるところ（４）
・引き売り、車上販売（新鮮なもの、豆腐屋・魚屋・八百屋など）
・買い物にいけるようになりたい
・送迎サービスのあるもの
・体操教室
・運動が出来る施設
・敬老の日の温泉を続けてほしい
・楽にお風呂に入りたい
・コンビニ
・嫌いではない
・あっても行けない
・祭りはあるが、古い人が行かなくなったので、自分も行かなくなった
・特になし（１０）（恵まれているので、小さい子供がいれば思いつくかもしれないが、ケアホームが楽しいので、あまり好きではない、行くにはおしゃれをしたいが古い服しかもっていないので、健康であれば良い）
・デイサービスを増やしてほしい、近くにほしい
・公民館（近所に、行きやすい場所として）
・東屋（公園）
・窓ふき（介護サービスに入れてほしい）
・他の人と話し合う（自分たちの生き方について）
・動物を飼いたい
・特になし（６）（介護保険で手すりをつけてもらった、恵まれている）

質問２７　人が訪ねて来てくれることについて、どう思われますか



＊「うれしい」と回答

・兄弟、姉妹（２）
・娘、息子（６）（来てほしい）
・孫、ひ孫（９）（元気をもらえる、来てほしい）
・嫁
・家族、身内（３）
・妻、夫の友人
・友人（１２）（長居をされると疲れるが）
・仲間（２）（書道、グランドゴルフ）
・近所の人（３）
・若い人（３）（話好きな人、話を合わせて聞いてもらいたい）
・ヘルパー
・誰でも大丈夫
・誰が来てもうれしい、誰とはなしに来てほしい（３）
・話をしてくれる人
・おしゃべりが楽しい、好き（２）
・行くより来てほしい
・一人は寂しい（犬がいるので耐えられるが）
・たまには来てほしい
・夫や弟とは話が合わない、話にくい（難聴がある）
・急に訪ねられると出すものがなく困る

＊「うれしくない」と回答

・看護師は荒っぽい
・気を遣う（昔からの友人・親しい人はうれしい）

＊「不明」

・外で会うことが多い（訪問はない）

質問２８　現在、どういう人が訪ねてこられますか

・夫の仕事関係
・夫、妻の友人
・仲間（２）（書道、晩酌）
・母の友人
・兄弟、姉妹（５）
・娘、息子（１１）（毎朝、線香をあげに）（正月）
・孫、ひ孫（８）
・嫁（２）
・親戚、家族（８）
・友人、知人（１２）（お茶を飲む、たまに）
・同級生
・近所の人（６）（頻繁）
・年下の人（同世代は移動困難な人が多い）
・神社の人
・集金（新聞）
・新聞屋
・業者、セールス（２）
・「こうせいかい」職員
・訪問看護師（２）（血圧測定）
・ヘルパー（９）（週２回）（週１回１時間）
・ケアマネージャー（２）
・デイサービス職員
・地域包括支援センター職員（２）
・市役所職員（年１回）
・訪ねられるより、自分から行く（３）
・若者は自分から訪ねなければ来ない
・孫があまり来なくて寂しい
・昔からの知り合いは、家が遠く身体も不自由で会う機会ない
・ほとんど無い（回覧など必要時に玄関先まで）
・特になし

質問２９　地域包括支援センターへの要望をお聞かせ下さい

・忘年会が楽しみ
・定期的に様子を見に来てくれる
・生きがいになっている
・熱心だと感じる（３）
・楽しい
・親切で嬉しい（３）（耳元で話しかけてくれる）
・優しい
・アドバイスをくれる（２）
・感謝している、満足している（５）（気配りがある）
・すごくお世話になっている（３）（特に保健師、夫が亡くなった時によくしてもらい一人ではないと感じた人は一人では生きられないと思った）
・医者がいて安心
・体温、血圧などを測定し、記録してくれるので安心
・職員は全体をみているので、他に何かあれば行ってしまい寂しい
・行かなくなってから、人との交流が少なくなり寂しい
・丁寧過ぎる
・まだよくわからない（２）
・高齢者と直接話し合うべきだ
・所在が分かりにくい（ＰＲすべきだ）
・どのようなことをしているのか明確にしてほしい
・体操しかしない
・自由に運動できる機械がもう少しほしい
・水やりを自由にさせてほしい
・訪問を増やしてほしい
・経済的問題がある
・健康への配慮をしてほしい（病気になることが怖い）
・その人のことを思って優しく接してほしい（誰でも寂しいと思う）
・もっと本人が熱中していることにまじめに付き合ってほしい（数字の勉強）

・去年、リハビリで世話になったが回復後は来なくて大丈夫と言われる
・近所に寝たきりの人がいるようになり気分が滅入る
・家でゆっくりしたい
・歩くリハビリは嫌な時もある
・今は元気なので、行ってもすることがなく居場所がないように感じる
・特にない（９）（いろいろ面倒をみてくれて良かった、良い人に恵まれた）

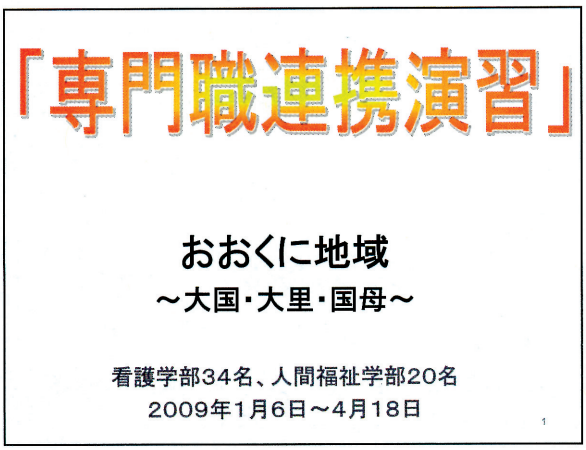
オリジナル質問―まとめ―

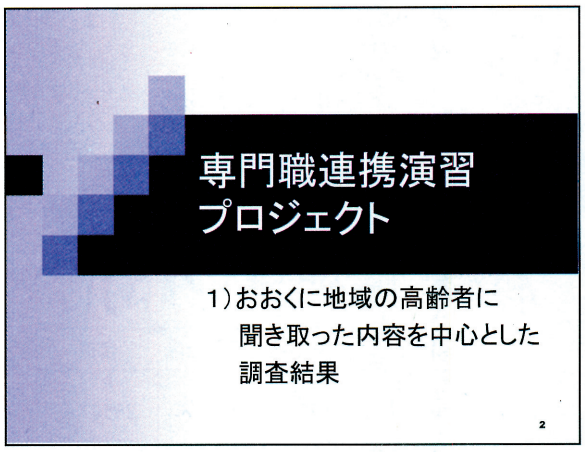
No	質　　問	回　　答
1	現在どのようなサービスを利用していますか	・顔を見に来る程度（年２回）。サービスは受けていない ・市の給食センター、デイサービス、ホームヘルパー ・地域包括支援センター（週1回）、訪問看護（週2回）、通所リハビリ（週1回）
2	“おおくに”に週何回通っていますか	・月、木の週２回
3	地域行事などの情報源	・元中学校の教員なのでその関係の集まりで知る ・回覧板、公民館のパンフレット　無尽は病気してからやめてしまった
4	好きなことは何ですか	・習字、短歌、読書、健康に良いと言われたこと ・ピアノ（週１度：去年まで）
5	生きがいや、趣味はありますか	・特になし　毎日同じような生活 ・以前、踊り（民謡） ・グランドゴルフ、ウォーキング、晩酌、ガーデニング ・短歌を詠んだり作ったりすること　デイケアで体操すること ・俳句のことばかり考えている ・以前はボランティアやスポーツを楽しんでいた ・孫の成長　ケアセンターでのふれあい ・人と関わること　写真 ・孫の成長が楽しみ ・編み物、短歌、カラオケなど ・海が好き ・人との交流　子供の世話 ・本や雑誌を読むが、目が悪くて疲れてしまうのでたくさんは読めない ・編み物、リボンフラワー（準師範）など細かい作業が好き　現在は手がしびれてできないため、植物、お花に手をかけて育てることが趣味となっている　深夜放送を寝ながら聴くことが好き　毎日聴いている
6	生きがいや趣味のために気をつけていることは何ですか	・体操などで健康の現状維持を心掛けている ・食事面　腹いっぱいに食べないよう気をつけたい　塩分も控えたい　また、認知症にはなりたくない　周りにはなるべく世話にならないようにしたい　自分で出来ることは自分でしている
7	老人会では何をしていますか	・ゴミ拾い、旅行、一人暮らしのお宅へ訪問
8	生活する中での不安はありますか	・特になし ・一人暮らしのため急になにかあったとき不安 ・無言電話（毎日）
9	二世帯家族について（嫁との関係）	・お互いストレスをかけないようにしている　お互いに外ではお互いの悪口は絶対に言わない　若い方に迷惑をかけないようにしているが、何かあればどうしても口を出してしまう
10	家族について	・現在一人暮らし　娘が交互に見に来てくれてうれしい ・息子さんと同居　娘がよく来てくれ、色々とやってくれる
11	孫と話をしますか	・テレビを見ながらよく話をする
12	夫婦二人暮らしの様子	・近くに長男や親戚がいるので、何かあればすぐに対応できる　火は使わないようにしている　薬は1日ずつ、2人とも分けてわかりやすくしている
13	家族構成	・夫、息子(2人）、現在は夫との二人暮らし ・息子１人、孫３人、離れて暮らしている　妻：他界（４年前）

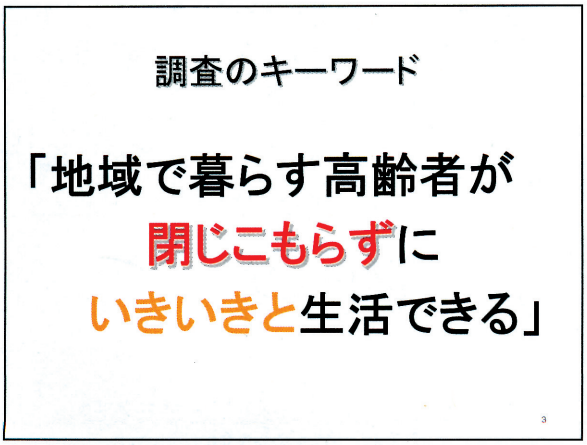
No	質　　問	回　　答
14	兄弟はいますか	・4人兄弟がいたが、3人は亡くなった　子供は娘が近くにいる　妻は4年前に亡くなった ・7人兄弟の上から2番目　家族10人分の食事を小さい頃から作っていた
15	正月の過ごし方	・娘の家で孫に会い、おせちを食べた
16	普段何をしていますか	・テレビを見たり、料理をして過ごしている
17	畑仕事はしますか	・します（ねぎ、白菜、キウイなど）
18	家事は全部自分でしていますか	・基本的には自分でしている（食事、洗濯、掃除）　ふとんを干すことができない（干す場所が高いので大変）　家の中には手の届かない場所もあり、台が必要となるときがある
19	家事などの役割分担はしていますか	・洗濯：自分　掃除：ヘルパー
20	その他の家事はどうしていますか	・洗濯、ごみ出しは自分で出来るが、布団干しは出来ない ・洗濯、乾燥は息子　たたむことは自分
21	自宅の二階に上がることはありますか	・ほとんど一階で生活している
22	近くに友人はいますか	・ご近所付き合い ・何人か
23	大里地区はどんなところですか、好きですか	・あまり外出しないのでわからない ・以前は田んぼばかりだったが、都市計画が進んでから公園や店が近くにできた　家の周りは住宅がなく静か　信号が前の通りにあれば良いと思う ・高齢者が多い　ここにずっと住まなくてはならないので、近所とトラブルを起こさないように空気のように生きていきたい
24	近所付き合いについて	・以前は居間まで上がり、どこの家にもいつも誰かが訪問していた　現在は道が拡幅され店との距離が広くなったことや、互いを干渉しなくなったため、付き合いはほとんどなくなった
25	ずっと山梨在住ですか	・住んでいる ・住んでいる（仕事は県外に出た）
26	仕事は何をしていましたか	・会社員（営業） ・保育士　40年間　園長経験あり ・木工仕事（扉など作成）　妻：塗装 ・10年前まで中小企業診断士（国家資格）として働いていた　経営診断と指導をする仕事　県と商工会議所から依頼されてお金を貸すために調査する　とてもやりがいのある仕事 ・ブローチなどを作る装身具の仕事をしていた ・教員（夫婦とも）
27	以前やっていたこと	・民生委員　孫の子守（3人）
28	起床時間、就寝時間	・朝：6：30～7：00くらいに起床、夜：21：00に就寝　夜は面白いドラマがあると言うが、そんなに見ない
29	睡眠状況	・睡眠薬を服用　1日に4～5時間寝ている　19時就寝、1時に起き、お祈りをしている　昼寝、1時間半位　※信仰心が強いと感じられた ・夜：9時就寝　7～8時起床　薬の利尿作用で、夜中に3回トイレに起きる
30	食生活は規則正しいですか	・朝：7時半に納豆とバナナと決まっている　昼：11時45分　夜：5時45分　好き嫌いはない　毎日排便がある
31	食物の好き嫌いはありますか	・嫌いなものはない　何でも食べる
32	栄養（食事）について	・食事はほとんど家でする　1日2回の外食はしない　7人家族なので食べ過ぎることはない　どうしても濃い味になってしまう
33	飲酒、喫煙はありますか	・どちらもなし ・毎晩缶ビール1本、焼酎のお湯割り1杯程度　タバコは事故で入院後吸わなくなった
34	通院について	・夫婦で通院（2ヶ月に1度）　どうしても半日以上かかってしまう
35	薬は服用していますか	・去年、高血圧で、1ヶ月入院し薬を飲んでいる　今は130くらいで安定している　朝服用　利尿作用でトイレが近い ・睡眠薬と脳梗塞の薬　自分で服薬管理できている

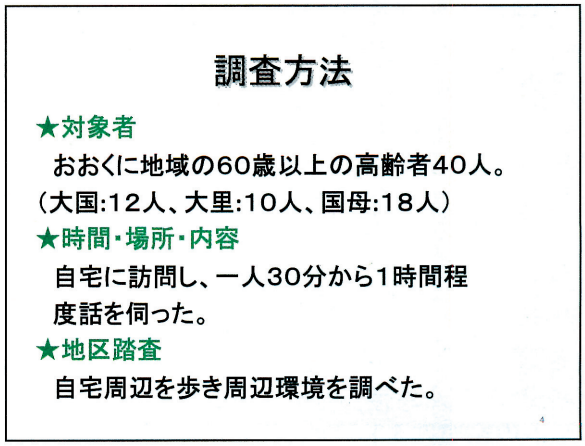
No	質　　問	回　　答
36	風邪をひいていませんか	・インフルエンザの予防接種をしている　秋から冬にかけて鼻水が出る風邪らしい風邪はひいていない ・ひいていない
37	健康の秘訣は何ですか	・毎日歩く　床運動15分・腰かけ運動15分（週２回）
38	その他気をつけていることは何ですか	・薬の管理、体重管理、健康の現状維持
39	車に乗らなくなった理由はなんですか	・「もし何かがあったら困る」と親戚など周囲の人に心配されたため
40	山梨県立大学を知っていますか	・名前は聞いたことがあるが、統合されたことなどは知らなかった
41	山梨県立大学の看護・福祉の学生にどうなってほしいですか	・患者に優しくしてほしい　みんな滅入っているのだから一言言ってもらえるだけでも違う ・特になし

（２）プレゼンテーション資料









面接場面



5

6

質問項目①

凡　例	
1番	バスや電車を使って一人で買い物ができますか
2番	日用品の買い物ができますか
3番	自分で食事の準備ができますか
4番	請求書の支払いができますか
5番	銀行預金、郵便貯金の出し入れができますか
6番	年金などの書類が書けますか
7番	新聞などを読んでいますか
8番	本や雑誌を読んでいますか
9番	健康についての記事や番組に関心がありますか
10番	友達の家を訪ねることがありますか

7

質問項目②

凡　例	
11番	家族や友達の相談にのることがありますか
12番	病人を見舞うことができますか
13番	若い人に自分から話しかけることがありますか
14番	身体にいいと思うことを日々実行していますか
15番	身体の調子で気になっていることはありますか
16番	楽しみにしていることがありますか
17番	人との交流をしていますか
18番	暮らしやすい環境ですか
19番	困ったときに頼りになる人がいますか
20番	身の回りで大きな心配事はありますか

質問項目③

凡　例	
21番	老人会に入っていますか
22番	自治会に入っていますか
23番	地域の催しには参加しますか
24番	現在、外出の機会はありますか
25番	どういう所に出かけたいと思いますか
26番	「地域にあったらいいなぁ」と思う集まりやサービスについてお聞かせください
27番	人が訪ねて来てくれることについてどう思いますか
28番	現在どういう人が訪ねてこられますか
29番	地域包括支援センターへの要望をお聞かせください

おおくに地域の紹介

	大国地区	大里地区	国母地区	合計
人口	9749人	9599人	9249人	28597人
世帯数	3950世帯	3749世帯	3929世帯	11628世帯
65歳以上の割合	13.40%	11.70%	22.70%	15.80%

H20. 4. 1 現在

9

大国地区

特徴

・バスや電車を使って一人で買い物ができる人の割合が66．7%であった。

・身体にいいと思うことを日々実行している人の割合が100%、身体の調子で気になっていることがある人の割合が91．7%であった。

10

大里地区

特徴

・バスや電車を使って一人で買い物ができる人の割合が11．1%、友達の家を訪ねることがある人の割合が25．0%であった。

・身体の調子で気になっていることがある人の割合が100%、身の回りで大きな心配事がある人の割合が70．0%であった。

11

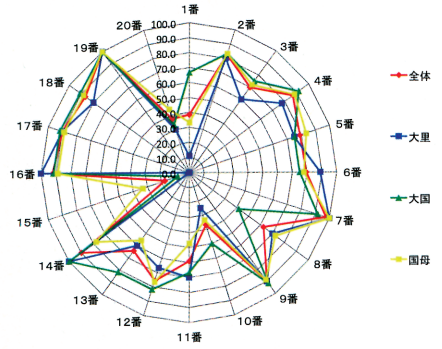
国母地区

特徴

・家族や友人の相談にのることがあると答えた人の割合が47．1%であった。

・身体の調子で気になっていることがあると答えた人の割合66．7%であった。

全体と3地区の比較



13

着目した4点

1：バスや電車を使って一人で買い物ができる。（項目1）
2：友達の家を訪ねることがある。（項目10）
3：身体の調子で気になっていることがある。（項目15）
4：身の回りで大きな心配事がある。（項目20）

14

1．バスや電車を使って一人で買い物ができる？

出来ない理由＜インタビューより＞

・バスの出入り口のステップが高く乗り降りができない、苦手。
・足腰が不自由なため。
・家族やヘルパーさんの助けや生協の宅配に依存している。

→外出する機会が減少し、身体機能が著しく低下したり、閉じこもりやすくなる。

15

閉じこもりを予防するには？

・自治体や地域の催しなど外出する機会を増やす。
・足腰が悪い人に対して送迎や移動介助などサービスを提供する。
・地域の方々に社会福祉サービスの情報を提供していくことが必要（出掛けるときに手助けできるサービスがある）。

16

2．友達の家を訪ねることがある？

出来ない理由＜インタビューより＞

・足腰が不自由。
・転倒してから怖くて行けなくなった。
・昔は行っていたが行かなくなってしまった。

→次第に外に出ることに抵抗が出て、人とかかわることが減り、友達の家を訪ねることが少なくなった。

17

交流の機会をもつには？ ―交流することの必要性―

・人との交流は相互扶助や情報交換の場となり、生活にも張りを与え、外へ出るきっかけにつながる。
・老人会や地域の催しを開催し交流の場を提供することで、閉じこもりがちにならず意欲的に生活していける。

18

3．身体の調子で気になっていることがある？

身体の調子をどう思っているか

・多くの人が持病に対して気になっていたが、「身体にいいと思うことを日々実行している」という人の割合も多かった。

→健康に対して多くの人が興味・関心を持っていた。

19

興味を活かすには？

・健康に対しての興味を活用したサービスやサポートを提供する。
・具体的には、楽しみながら健康を維持できるように、人と交流をしながら行える健康講座の開催や情報交換が出来る場の提供を行っていく。

4. 身の回りで大きな心配事がある？

・ほとんどの人が身の回りで大きな心配事を抱えていた。

どんなことが心配か

・病気のことや、周囲に迷惑をかけてしまう、一人暮らしのため不安が多いなどがあった。

心配事を軽減するには？

・心配事や不安を抱え込まないように、それらを表出できる場の提供が今以上に必要。

21

しかし・・・

心配事はあるが家族やヘルパーさん、包括支援センターの方々など**頼れる人がほとんどの対象者にいた**！！

22

お話を聞いた中で・・・

「外出したい！！」

という声が多く聞かれた

（外出希望先の例）

・カラオケ
・食事
・武田神社
・物産展
・温泉
・旅行

甲府市地域包括支援センター おおくに



24

専門職連携演習 プロジェクト

2）演習を通して専門職の連携について感じたこと、学んだこと

25

1. 看護学部生からみた 福祉学部生の特性

- 「生活の場」「暮らしやすさ」「地域の連携」に視点
- その人が生き生きと暮らせているかという視点で、地域との繋がりなど生活面に着目
- 暮らしをする上で、今の対象の動きを見て不足するニーズを考え、更に今後この方の生活はどうなっていくかに視点を置く
- 地域の連携の面において、制度・サービスに対しての知識が豊富

26

看護学部生→福祉学部生 フィードバックを受けて

- 対象者と共に対象者の生活を取り巻く環境にも同時に目を向けながら関わっていたことに気付いた
- 対象者だけでなく、その周囲の環境にもアプローチしていく専門性を活かしていきたい

27

2. 福祉学部生からみた 看護学部生の特性

- 病気、薬、食事、健康面について知識が豊富
- 情報収集をしたことを予防に繋げる
- 個人の健康状態などの内的環境に目を向けている特徴があった
- 関わり方については、聞くべき内容をストレートにテンポ良く聞いており、看護学生から質問を切り出すことが多く、積極的、的確な印象を受けた

28

福祉学部生→看護学部生 フィードバックを受けて

- 健康面や病気に関連した視点で対象を観ている
- これまでの学習が自然に身に付いているのを実感し、自信につながった

29

3. 専門職連携の利点・大変なこと

〈利点〉

- 他職種と関わることで自分の視点や考え方に改めて気づける
- 二つの視点を合わせることによって対象者にとってもより良いケアやサービスが提供できる

30

3. 専門職連携の利点・大変なこと

〈大変だと思ったこと〉

- 時間を合わせること
- 連絡を取り合うこと
- 専門性があるからこその衝突(しっかり意見を言い合えるか)
- 専門用語

31

4. 専門職連携に向けての課題

〈在学中〉

- 協力して学習する機会を持ち、互いの特性や役割について理解を深める
- それぞれの職種や連携についてのメリットや必要性について考える
- 自己の職種の役割を理解する
- サービス制度を把握する
- 自分の考えを言う・人の意見を聞く・話し合いでは活発な意見交換をする

32

4. 専門職連携に向けての課題

〈卒業後〉

- 互いの目標・情報を共有する
- それぞれの専門性を理解し尊重する
- 専門的知識を利用してさまざまな視点をもつ
- どのようにすれば連携がうまくいくかを考える
- 地域住民のニーズを満たすことを目標にする

5. 全体を通して学んだこと

- 専門性
- 協力の重要性
- 連携するためには、課題がある
- ゴールは一緒

ご清聴ありがとうございました



35

6）学 生 評 価

（1）リフレクションペーパー

① オリエンテーション時（1月6日）

看護：n=34　福祉：n=20

Ⅰ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

1）看護学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	10	7	3
・身体状況（健康状態・疾患の程度・内服）	10	7	3
（2）看護学部の学生の方が得意であると感じた点	4	1	3
・身体状況についての観察	2		2
・対象者を中心とした考え方をもっている点	1	1	
・高齢者との関わり方が上手	1		1
（3）学生の姿勢・態度	4		4
・話しやすい、安心感がある	2		2
・積極的	1		1
・グループワークが上手（まとめが上手、スムーズな進行）	1		1

2）福祉学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	7	6	1
・生活状況	3	2	1
・地域との関係	1	1	
・保険の種別	1	1	
・生きがい	1	1	
・情報源の把握	1	1	
（2）福祉学部の学生の方が得意であると感じた点	5	5	
・地域を対象とする視点、対象を取り巻くあらゆる環境や資源が視野	2	2	
・社会資源の活用方法	1	1	
・コミュニケーション能力の高さ（共感の姿勢 、情報の引き出し方）	1	1	
・在宅への訪問経験が何度かあったとのことで、高齢者の特徴を理解した上で、とても丁寧な関わりを持てていた	1	1	

3）２つの学部で共通の視点・姿勢	記述数	看護	福祉
・相手に対する態度（対象者に寄り添う、対象者中心に物事を見る）	2	1	1
・人と接することに慣れている	1	1	
・互いの意見を尊重する姿勢	1		1
・リーダーシップをとることができる	1		1

4）他学部との協働での取り組みによる学び	記述数	看護	福祉
・質問方法を考える中で、観察の視点や考え方が違うことがわかった	7	4	3
・お互いの視点が異なっていて、とても勉強になった（視野が広がった）	5	4	1
・相互に専門性を活かし、アプローチしていくことで、よりよいケアにつながる	2	2	
・他学部の学生の取得資格、授業、実習などについて知ることができた	2	2	
・こちらが知っていて当たり前のことを相手は知らず、その逆もある	1		1

5）要望・意見	記述数	看護	福祉
・互いの特徴について、今回の取り組みではよくわからなかった	20	13	7
・今後も協働の取り組みがあるということなので、他学部の学生の特徴をみていきたい	12	10	2
・福祉とは何か改めて考えていきたい	1		1

Ⅱ．今後協働で取り組む上で、大切にしたいと思ったこと

1）協働	記述数	看護	福祉
・それぞれの着眼点に基づいて情報収集し多角的に対象を捉え支援を考える（視点の共有・目的の共有・不足部分の補い合い）	26	21	5
・視点が異なることを利点と捉え、意見交換しお互い尊重し合い取り組む	13	7	6
・連携やチームワーク、雰囲気、コミュニケーションを大切にしていきたい	7	2	5
・先生方の助言	3	2	1

2）相互理解	記述数	看護	福祉
・お互いの特性を理解する（看護への理解を深めるための学びが必要、自分の専門性だけではなく相手の専門性を理解する）	8	4	4

3）自己の取り組み・課題	記述数	看護	福祉
・他職種との協働から自己の視点も広げる	10	7	3
・連携についての考察を深める	3	2	1
・積極的に意見を出す	2	1	1
・看護学部の学生の方が多いので、福祉学部の学生に配慮し、協力していきたい	2	2	
・自己の専門性の確認をする	1	1	
・看護は、福祉の知識を身につけておくことも大切である	1	1	
・実際に訪問するので、地域の人への配慮や訪問先では礼儀に気をつける	1	1	

4）事前準備	記述数	看護	福祉
・密な連絡の取り合いが必要	4	3	1
・役割分担	1		1

Ⅲ．今回の体験を、今後どのように活かしたいと考えるか

1）他職種との連携	記述数	看護	福祉
・それぞれの専門性を活かすことで、対象者にとって最良の知識と技術を提供していきたい	13	7	6
・他職種と協働する場面では、積極的に意見交換する（自分の感じたことを言い、相手にも意見を聞いてみたい）	11	4	7

2）互いの学部の学生からの学び	記述数	看護	福祉
・お互いの特徴を活かしていきたい	4	4	
・演習当日には他学部との視点の違いを観察しながら、特性の違いを学びたい	4	4	
・質の高い看護を提供していくためには他職種との連携が欠かせない。　演習を通し、連携の問題点や重要性を学びたい	3	3	
・初対面の人とのグループワークでの雰囲気づくりの大切さを学んだ	1		1

3）学び・今後の取り組み	記述数	看護	福祉
・相手に専門職として情報を与えられるようにしっかりと勉強していきたい（社会福祉の専門性を身につけなくてはならない、福祉の強みを考える、視野を広げる）	5		5
・自分の看護の役割をしっかり把握し、役割が果たせるように努める（知識・技術・地域施設で働く上で臨床経験を積むことが大切）	2	2	
・今後の交流のきっかけにしたい	1		1
・もっと福祉について学んでおかなければいけないと感じた	1	1	
・面接の技術を習得したい（効果的な質問方法、答えやすさなどの工夫）	1		1
・地域のニーズを分析して自分なりにどんなサービスが必要か考えていきたい	1		1
・日ごろから地域に目を向けるようにする	1		1

4）事前準備	記述数	看護	福祉
・話し合いを重ねて実際の演習にのぞむ	4	4	
・包括支援センターについて再学習する	2	2	
・スムーズに質問できるよう考えていきたい（方法、時間配分）	1		1

Ⅳ．その他、どのようなことでも考えたこと、疑問、感じたこと

1）貴重な体験	記述数	看護	福祉
・他学部の学生との協働は様々な考えを知ることができたり、交流をすることができ、良い企画だと思う	3	2	1

2）実施時期	記述数	看護	福祉
・前期が良かった	2		2

3）質問内容・方法	記述数	看護	福祉
	1		1
・あらかじめ質問項目が設定されていたが、学生自らが考える部分を増やせた方が良いと感じた	1		1

4）事前準備	記述数	看護	福祉
	1		1
・“地域で生活を支える”ことを考えるとき、まずその地域のことについてよく学んでおく必要がある	1		1

5）その他	記述数	看護	福祉
	7	3	4
・福祉一人でどう入っていけばよいか困った	2		2
・はじめての講義の形態なので、不安もあるが楽しみ。 不思議な感覚。	2	2	
・違う分野を勉強している学生と学び、新しい知識を自分の中に取り入れていきたい	1		1
・今回の実習以外でも協働できたら、もっと他職種との連携について考えられると思った	1	1	
・レポートはないか	1		1

② 演 習 日（1月31日）

看護：n=34　福祉：n=20

Ⅰ．地域住民の「生活の場」を体感して、感じたこと、考えたこと

1）高齢者に対する理解が深まった		記述数	看護	福祉
（1）高齢者の生活の様子や生活環境が理解できるようになった		60	34	26
実際の生活の場に行き、高齢者の生活が実感できた	・実際に生活の場に行くことで、生活の様子や周囲の状況を実感でき、高齢者の生活がよりわかりやすかった（町や住宅の観察ができた、高齢者の危険や生活の不便さを感じた、時代とともに生活が変わる）	37	18	19
生活環境が整えられていると感じた	・家の中をきれいに整理し、過ごしやすい環境が作られていた。	9	6	3
	・安全な生活を送るために転倒予防対策や内服管理への工夫が感じられた。	6	4	2
住居の工夫をした方がよいと感じた	・段差やコード、高い物干し竿などで、転倒するリスクが高いと感じた	6	4	2
自立して生活していると感じた	・自立して生活していることが感じられた	2	2	

（2）高齢者の思いが理解できるようになった		記述数	看護	福祉
		16	11	5
さみしさや不安を感じた	・一人暮らしをしている人や、体調がすぐれない人にはさみしさや不安を感じた	5	4	1
家への愛着がある	・家への愛着が感じられた	4	2	2
夫婦の協力がある	・二人が自然と互いの存在に助けられているように感じた	2	1	1
地域への思いがある	・地域への愛着が感じられた	2	2	
穏やかな気持ちで生活している	・好きなことをして生活している方は、穏やかな表情をしていて、今の生活が幸せだと感じた	1	1	
	・施設などで話しているときとは違い、リラックスしているように感じた	1		1
金銭の管理が大変	・金銭管理に苦労を感じていた	1	1	

（3）高齢者が楽しみや生きがいを持ち、健康に気をつけて暮らしていることが理解できた		記述数	看護	福祉
		9	6	3
	・高齢者が生き生きと過ごすためには、毎日の生活の中で夢中になれることや楽しいと感じることが大切であると感じた。	7	4	3
	・健康についての不安を抱いているのと同時に、健康についていいと思うことも実践している。	2	2	

2）家族や近隣との関係について理解できた		記述数	看護	福祉
		70	50	20
家族や地域のサポートがある	・地域や家族との関わりがあると安心して暮らせることを感じた	16	10	6
	・家族の有無によりメリットとデメリットがあるように感じた	1	1	
近隣との交流がある	・人間関係が良好で近隣住民が支えあって生活をしている	15	11	4
	・地域への活動に積極的に参加している	3	3	
	・趣味を通じて友人や近所との関わりがあり、それも楽しみになっている	2		2
近所との交流が少ない	・地域の人とあまり交流する機会がない	11	9	2
	・人付き合いには人それぞれの考え方があり、難しいと感じた	2	2	
地域生活の充実	・地域の中での交流できる場や機会を設けることが必要だと感じた	13	7	6
	・ADLの低下があっても周りの支援の状況により、その人のしたいことのできる環境、その人らしい生活のできる環境づくりができると考えた。	5	5	
	・社会福祉サービスは地域の高齢者にとって貴重なものであることを感じた	2	2	

3）その他	記述数	看護	福祉
	37	24	13
・実際に生活の場を見ることにより、対象の全体像が描きやすく、また、その場で安全な生活を送るためのアセスメントができるので、貴重な機会である。	18	10	8
・人それぞれ生活が違うのは当たり前だが、同じ地域間でも生活水準の差、ADL、QOLの差が見られた。	3	3	
・高齢者の方々は話をするのが好きだと感じた。	2		2
・一回の面接で、情報を失礼のないように聞き出すことは難しい。失礼のない配慮や礼儀を保ち、さりげなく観察しなければならないので、観察力が必要であると感じた。	2	2	
・看護職も地域サービスや法律、保険などの知識を持ち、対応しなければならないと感じた。	1	1	
・疾患に対する指導の他、ADLの側面から見た生活指導も必要になると感じた。	1	1	
・今までは自宅で生活することが１番だと思っていたけど、現実は自宅で暮らすことも困難な状態であったり、自宅で生活することで引きこもりがちになってしまったり、家族がいないなど、自宅で暮らすリスクもあるのだということを学ぶことができた。	1	1	
・周辺の地域の様子によって出かける頻度が変わったり交通手段が変わったりしていくのだと思った。	1	1	
・高齢者はいくつもの病気にかかっていたり思うように体が動かないことで、かなり活動が制限されてしまっているのだと感じた。	1	1	
・適切なサービスを利用したり、社会資源を活用することが必要だけれど、そこに誰かが介入して情報提供しなければ、住民が主体的に動き出すのは難しいと思った。	1	1	
・支援の手が必要な人ほど外出が困難で引きこもってしまいがちであることがわかった。	1	1	
・体調が悪くなることで、他者との交流の縮小や筋力の低下などにつながるので、予防していくことが大切だと改めて感じた。	1	1	
・演習に行く前まで、住民の今の生活にしか関心を持たなかったが、実際にお話を伺う中で、今の生活にはこれまでの歴史が影響していることに気づかされた。	1	1	
・意識して地域を見ることの大切さを感じた。	1		1
・地域包括支援センターとのつながりが思っていたよりも密であることに驚いた。	1		1
・山梨県に足を踏み入れた人たち誰もが愛してくれるような街づくりを推し進めていくことが大切ではないかと感じた。	1		1

Ⅱ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

1）看護学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	35	23	12
・身体状況（健康状態、疾患、障害の程度、既往歴、食事内容、服薬、セルフケア能力）	30	19	11
・個人をはじめに見る	3	3	
・家族関係	1		1
・キーパーソン	1	1	
（2）看護学部の学生の方が得意であると感じた点	21	7	14
・話を聞く態度、聞き上手、傾聴	7	4	3
・疾患に関しての知識	6	2	4
・高齢者の方との関わり方	2		2
・原因究明をする姿勢	1	1	
・共感	1		1
・その都度の状況を重んじて健康へと繋げていく短期集中型	1		1
・積極的に話をする	1		1
・身体や健康への配慮	1		1
・観察力	1		1
（3）学生の姿勢・態度	8	3	5
・積極的な話や質問	3		3
・病気の話に過敏に反応する	2		2
・直接的な質問	2	2	
・情報を直接のケアにつなげることを目標とする	1	1	

2）福祉学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	67	39	28
・生活状況（地域活動への参加、ニーズ、人とのつながり、自己管理能力、外出、生活能力、社会関係、金銭管理、食事管理）	28	18	10
・住環境の様子、課題やニーズ	12	9	3
・サービス(福祉用具)	8	5	3
・生活環境	5	1	4
・ＱＯＬやＡＤＬ	5	3	2
・家族関係	2	1	1
・生活歴	2		2
・今後の生活ニーズ	2		2
・生きがい	2	1	1
・地域の連携	1	1	
（2）福祉学部の学生の方が得意であると感じた点	11	10	1
・高齢者の話を受け止め、傾聴する	3	3	
・話の運び方	2	2	
・地域に密着した考え方	2	2	
・くらし全体を見る視点	1	1	
・今後の生活を考える視点	1	1	
・話しかけ、質問の仕方がスムーズ	1	1	
・常に状況の変化を追って寄り添っていき、生活の快適さを追及していく継続的支援	1		1
（3）学生の姿勢・態度	4	2	2
・受容の体勢をとり、「間」を大切にしている	2	1	1
・表情を読み取る	1		1
・話の内容や見た情報を細かく収集する	1	1	

3）２つの学部で共通の視点・姿勢	記述数	看護	福祉
	10	6	4
・どうすれば、この方がより健康・安全に生き生きと暮らせるのだろうかという気持ち	1	1	
・その人のためを思っている、知りたいと思っている、話をしっかり聞いているという姿勢を相手に伝えることができるところ	2	2	
・専門的な視点から全人的に対象理解をしようとするところ	2	1	1
・訪問者のいまの生活への満足感	1	1	
・QOLやADLについてさまざまな目線で考えることが出来る	1	1	
・相手を思うこと	1		1
・家庭での暮らしぶりをみること	1		1
・一人の利用者さんに対し、その人の健康や地域でのニーズを把握すること	1		1

4）他学部との協働での取り組みによる学び	記述数	看護	福祉
	22	10	12
・看護と福祉の2つの視点を合わせることで、高齢者の方に関わる全体の現状を両方の視点から把握することができると考えた	6	3	3
・自分自身に不足している部分が何であるかを実感したことで、今後の対人援助をよりよいものに変えていくことが出来る	2		2
・互いの違いを知るだけではなく、「福祉とは何か？」という自身の専門性を改めて考えさせられる機会をもてた	1		1
・医療と介護は似ているようで別の視点であるということも実感できた	1		1
・この先という「未来」を「～かもしれない」と予測を立ててクライアントと関わっていくことも必要ではないだろうか	1		1
・社会福祉士は看護師だけではなくて、様々な専門職と関わる機会が多いので、違う職種との連携も大切な業務であると学ぶことができた	1		1
・学生のうちから、専門性の違いと協調していく面白さを体験できてよかった	1		1
・普段当たり前の様に福祉に関して幅広い知識を蓄えているうちに、知らず知らず福祉的な考え方に近づいていることに気づいた。	1		1
・私にはない考えを与えてくれたし、私も看護の子がない観点を提供することができたと思う	1		1
・他学部の学生と接する事はとても刺激になった	1	1	
・お互いの考え、視点を知ることで、自分の考えが深まった	1	1	
・他職種との連携があればより対象にとって生活し易い生活の場を提供できるのではないかと思った	1	1	
・協働することで、その方の生活を結びつけて考えることができた	1	1	
・看護師は看護師の視点を持って関わる必要がある	1	1	
・専門的分野での視点だけでは偏った見方しかできないのではないのかということを授業で習った以上に実感することができた	1	1	
・誰に聞けばどの情報が得られるのかということにつながると感じた	1	1	

Ⅲ．今後、協働で取り組む上で、大切にしたいと思うこと

1）協働	記述数	看護	福祉
	62	44	18
・それぞれの着眼点に基づいて情報収集し多角的に対象を捉え支援を考える（視点の共有・目的の共有・不足部分の補い合い）	42	31	11
・視点が異なることを利点と捉え、意見交換しお互い尊重しあい取り組む	10	7	3
・コミュニケーションを多くとり、良好なチームワークを作る（専門職間の距離を作らない、連絡を密に行う）	8	6	2
・クライエントの意向を第一に尊重した上で専門職としての協働支援をしていきたい	1		1
・連携する専門職間での体制を必要に応じて調整していくことが必要である	1		1

2）相互理解	記述数	看護	福祉
	22	16	6
・お互いの特性を理解する（相手の仕事内容や視点を理解し合っておく）	22	16	6

3）自己の取り組み・課題	記述数	看護	福祉
	20	11	9
・自分の意見を言い、他の職種の意見もきちんと受け入れるようにしたい	8	4	4
・自分の考え方だけではなく、他職種の考え方も取り入れて様々な視点から対象を見て、よりよいケアをしていきたい	3	2	1
・自分の分野での視点や気づきを磨き、ケアに携われるようになりたい	2		2
・意見や感じたことなどを素直に言い合える関係作りをしていきたい	2	2	
・今回はあまりお互いの違いを感じることができなかった	2	2	
・福祉分野の役割を相手に伝える技術が必要	1		1
・看護学生の知識、特に医学の基礎知識を共有できれば一層連携が深まると感じた	1		1
・今回の取り組みでは視点が広くなるような気がしてとても楽しかったため、機会があればどんどん関わっていきたい	1	1	

Ⅳ．今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか

1）他職種連携・協働	記述数	看護	福祉
	17	10	7
・他職種と連携していく際に活かしていけたらいい	10	6	4
・専門性を生かして協働して援助を行っていきたい	2	1	1
・他職種との連携について考えを深め、自分の将来につなげていきたい	2	2	
・協力しあう	1	1	
・様々な職種・専門職との連携をとっていきたい	1		1
・連携しあう人たちとの信頼関係を深めていくことに生かしていきたい	1		1

2）他職種理解・尊重	記述数	看護	福祉
	18	6	12
・他職種の専門性について理解したい	11	5	6
・他職種の専門性を尊重したい	2		2
・福祉専門職としての専門性を理解したい	2		2
・他職種の中で看護という特性をどのように活かしていき、どのような役割を担っていくべきか考えたい	1	1	
・他職種の意見によく耳を傾けていきたい	1		1
・互いに尊重し合える職場を作っていきたい	1		1

3）情報交換・共有	記述数	看護	福祉
	15	12	3
・情報交換・意見交換をしていきたい	7	6	1
・情報共有を積極的に行いお互いに対象者さんの全体像を十分に把握出来るようにしたい	4	4	
・話し合いの場をもてるようにしたい	2	2	
・「お互いの意見や感じたことを共有して考える」ことを現場で実践していきたい	1		1
・情報を共有しながらも役割を分担すること	1		1

4）さまざまな視点を持つ	記述数 25	看護 16	福祉 9
・地域住民・生活について目を向けていきたい	6	6	
・いろんな角度から患者さんを見ていけるようになりたい	5	5	
・自分の視点を強制せず、看護からの視点も大切にし、最善の支援をできるようになりたい	4		4
・幅広い目線で学習していきたい	4	1	3
・プラスのことにも目を向けられるようにしていきたい	1	1	
・違った視点を受け入れ、改めて自分の考え方を見つめなおせるようにしたい	1	1	
・高齢者の方に関わる全体の現状を両方の視点から把握する	1	1	
・独りよがりにならず相手の良いところを積極的に取り入れ、意見を受け入れ、また自分の考えも述べてより良いサービス提供に繋げていく	1	1	
・もっと多くの人の話を聞きたい　自分の視野や考え方が広がってくる	1		1
・さまざまな専門職と共通した見方を獲得できるように学んでいきたい	1		1

5）退院後、先を見据えた視点	記述数 6	看護 6	福祉
・対象者の今後も考えながら生活環境にも視点をおいて看護できるようにしたい	5	5	
・患者が退院する際には病院から在宅へのスムーズな移行が出来るように、早い段階でケアマネージャーと綿密に打ち合わせをしたい	1	1	

6）コミュニケーション	記述数 4	看護 1	福祉 3
・コミュニケーション技術を参考にしたい	2	1	1
・どういった形でクライアントとのコミュニケーションを図ることが良いのか実践を積んで考えていきたい	1		1
・挨拶をし、お互い気持ちよく仕事をしていけるような雰囲気作りをしたい	1		1

7）学び・今後の取り組み	記述数 19	看護 5	福祉 14
・対象の特性に合わせたインタビューの方法やアプローチの仕方	1	1	
・地域看護や福祉について考えを深め、自分の将来につなげていきたい	1	1	
・患者への情報提供する場合、具体的にできる	1	1	
・一番患者が納得のいける生活指導や治療方針を、患者と一緒に考えていけたらいい	1	1	
・地域の高齢者がより良い生活ができるようにしていければいい	1	1	
・多岐にわたる知識をさらに付けたい	1		1
・様々な専門性の面から多くのサービスを知っておく	1		1
・もっと病理について学びたい	1		1
・自分自身の福祉援助の質を高めていくために大いに活用していきたい	1		1
・専門性の確立に活かしていきたい	1		1
・勉強へのやる気を高く持ち続けたい	1		1
・包括的なケアに活かしていけたらいい	1		1
・『病院』のもつ意味合いなどを、もっと自分の中で広げていきたい	1		1
・対象者を取り巻く環境に今後もっと注目していきたい	1		1
・健康状態のような細かな点などにも目を向けられるよう、心がけていきたい	1		1
・高齢者を敬う気持ちを大切にしていきたい	1		1
・積極性を持つ	1		1
・毎日を実りあるものとしていきたい	1		1
・ワーカーとして求められる技術を磨いていきたい	1		1

8）意見・要望	記述数 1	看護	福祉 1
・訪問する前に、看護とのコミュニケーションが少なすぎた	1		1

V．その他、考えたこと、疑問、感じたことなど

1）貴重な体験	記述数 13	看護 9	福祉 4
・協働の大切さや重要性が実感できた	5	2	3
・他の専門職との違いを改めて実感することが出来て良かった	4	3	1
・他学部と交流でき、充実した話し合いができた	4	4	

2）実施時期	記述数 4	看護 3	福祉 1
・もっと早い時期にしてほしい	2	2	
・地域住民の方に風邪をうつしてしまわないためにも演習時期は変更した方がいい	1		1
・福祉学生はテスト期間と重なっていて大変だったと思う	1	1	

3）質問内容・方法	記述数 7	看護 4	福祉 3
・質問項目が多く、全部聞き取るのに必死で慌ててしまった。時間配分を考える必要があった	4	3	1
・オリジナル質問を主にするともっと相互理解につながると感じた	2	1	1
・聞きたいことを引き出すことや次の質問に移るタイミングなど、面接の難しさを痛感した	1		1

4）要望・意見	記述数 12	看護 8	福祉 4
・プロジェクトの説明は受けたが、よくわからないまま進んでいき、自ら参加しているというよりも、やらされている感の方が強かった。もう少し準備段階がほしい	2	2	
・訪問前に相互理解できる時間や、事例検討会などができれば、なお有意義な演習になると思った	2	2	
・準備から互いに関われていれば、また違う学びがあったと思う	1	1	
・１日だけでは、看護と福祉の相互理解まで理解するのは難しい	1	1	
・対象の情報を事前に知らせてほしい	1	1	
・バスの時間や終了時間を正確にしてほしい	1	1	
・ぜひ後輩たちにもこの演習を続けていって欲しい	1		1
・看護２人、福祉１人というメンバーで訪問したが、１人ずつという形であれば、また違った学びができたかもしれない	1		1
・２学部が存在する良さを活かし、合同の授業を通し、もっと協働を学ぶことができると良いのではないか	1		1
・自転車、バイク、車など、各自の責任で調査を進めていく方が良いのでないか	1		1

5）感想	記述数 28	看護 13	福祉 15
・訪問先の方、地域包括支援センターの方々、バスの運転手さん、先生方ありがとうございました	6	3	3
・有意義な時間を過ごすことができた	3	1	2
・高齢になっても何か打ち込んでいるものがあると、生き生きと輝いて見えた。	1	1	
・対象者のライフヒストリーを知る重要性を感じた	1	1	
・対象者が、個別性を重視した関わりを求めていることを知った	1	1	
・病院やケアセンターに行く目的は治療やリハビリであるが、それらの場所は人とのつながりにもなっている場所であるとわかった	1	1	
・高齢者からの貴重な意見をどのように活かしていけばいいのか、考えさせられた。	1	1	
・自分の生き方や生きがいについてももっと深く考えていきたいと感じた	1	1	
・２件のお宅を訪問したことで、比較することができて良かった。	1	1	
・着座位置についても考えることができた（１対１の場合は90度の位置に座って話をするのが良い）	1	1	
・時間に焦りどんどん質問したり、話題を変えてしまったが、対象者には沈黙があった。沈黙の意味を確認するような言葉がけが必要であった。	1	1	
・「間」の取り方について考えました。看護学部と福祉学部の違いにどちらが正しいかはないと思うが、少し気になった。	1		1
・福祉の専門性とは何か、他職種との協働とは何か、一人の人間を支えるとは何かを考えていきたい	1		1
・今後も福祉について学んでいきたい	1		1
・福祉と看護では専門分野は違うが、対象者や仕事内容などさほど変わりはないようにも思う	1		1
・高齢者から多くのことも学び、学生のうちから高齢者と関わりをもつ場所を設けて様々なことを学び、地域の人の声を聞いて考えていくことが大事なのではないか	1		1
・年齢や経験などあらゆることが違っている人との協働でも対等な意見交換ができると良いと思う	1		1
・今回の調査までしかこのプロジェクトに関わることができず、残念に思う。	1		1
・緊張したが、同じ目的をもった人とは初対面でも協働しあえることがわかった	1		1
・このプロジェクトを大学のアピールポイントとして今後は地元の高校生や地域の人たちに知っていってもらえたら良いのではないか	1		1
・調査前までの時間で、質問内容を考えていくことは結構ハードであった。	1		1

（2）学　生　評　価　表

２００８年度 教育GP「学際統合型専門職連携演習」評価（学生）				
評　価　項　目	おおくに　(%)			n=50
	A	B	C	D
1　看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。				
1) 自分の専門性(知識・技術)を認識し、説明することができる。	46.0	44.0	8.0	2.0
2) 自分と相手の専門性(知識・技術)について、その共通点と相違点について考えることができる。	66.0	32.0	2.0	0.0
3) 互いの意見を尊重することができる。	86.0	10.0	2.0	2.0
4) 専門職が互いに連携する意義を考えることができる。	84.0	14.0	2.0	0.0
5) チームアプローチを進める方法について考えることができる。	26.0	68.0	6.0	0.0
2　地域特性と生活および健康ニーズについて考えることができる。				
1) 担当した地域の特性について考えることができる。	58.0	36.0	6.0	0.0
2) 暮らしを支える現状の社会資源について考えることができる。	20.0	74.0	6.0	0.0
3) 暮らしにくさについて考えることができる。	80.0	18.0	2.0	0.0
4) 地域の人々のつながりをイメージすることができる。	50.0	48.0	2.0	0.0
5) 生活および健康ニーズについて考えることができる。	66.0	32.0	2.0	0.0
3　実態調査や数的データ分析をし、わかりやすい報告書を作成することができる。				
1) 情報やデータを収集することができる。	58.0	40.0	2.0	0.0
2) 情報やデータを共有することができる。	84.0	16.0	0.0	0.0
3) 情報やデータを多角的に議論することができる。	28.0	56.0	16.0	0.0
4) 情報やデータを客観的に分析することができる。	32.0	60.0	8.0	0.0
5) 報告書を作成することができる。	32.0	58.0	10.0	0.0
4　学習の成果を地域に伝え、その反応から振り返ることができる。				
1) 専門職が互いに協働して学習成果を伝えることができる。	70.0	16.0	10.0	4.0
2) 発表に対する地域の反応を受け止めることができる。				
3) 地域の反応から学習成果について振り返ることができる。				
4) 発表内容や発表方法について評価することができる。				
5) 報告をもとに、地域への予防活動につなげることができる。				
5　主体的・積極的に演習に参加し、相手の意思を尊重する態度を身に付け、グループ内での役割を担うことができる。				
1) 相手の話を傾聴し、自分の意見を述べることができる。	66.0	28.0	4.0	2.0
2) 調査協力者に感謝の意を伝えることができる。	90.0	8.0	2.0	0.0
3) 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないように接することができる。	76.0	24.0	0.0	0.0
4) 得られた情報の保護に努めることができる。	90.0	10.0	0.0	0.0
5) グループワークに積極的に参加し、グループ内での役割を担うことができる。	60.0	34.0	4.0	2.0
総合評価	44.0	52.0	4.0	0.0
評価基準　A：目標を達成できた B：目標をある程度達成できた C：目標を達成するにはやや努力を要する D：目標をほとんど達成できなかった				

7）教員評価—演習内容（企画・実施）の妥当性及び教育効果—

おおくにグループは、「看護学部と人間福祉学部の学生が、協働して地域包括支援センターを核としたフィールドに入り、住民の生活を体感する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる」、「看護・福祉の学生が協働で取り組みむことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできる」という目的のもとに、センターとの話し合いの中で演習計画を立案した。

フィールド調査ではさらに演習目的を「“地域で暮らす高齢者が閉じこもらずにいきいきと生活できる”をkey wordsとして、調査データから高齢者の生活実態（健康・生活ニーズ）を読み、そこから課題を見つけ、どんなことが必要であるかアセスメントすることができる」ことに絞り、2009年1月31日に学際統合型専門職連携演習を行った。

聞き取った内容から演習目的である「地域で暮らす高齢者が閉じこもらずにいきいきと生活できる」ための実態を話し合い、この演習や演習での取り組みを通しての学びをグループ全員で振り返る中で発表会の資料を作成し、4月18日に学際統合型専門職連携演習合同発表会を行った。

（1）「学際統合型専門職連携演習」評価表の集計結果より

①学生評価でA評価の多かった項目で特徴的なもの

1-3)「互いの意見を尊重することができる」が86%、1-4)「専門職が互いに連携する意義を考えることができる」が84%、3-2)「情報やデータを共有することができる」が84%と到達度が高かった。

その背景としては、演習準備から演習・発表会に至る過程の中で、常に小グループ単位で意見交換を行い個の意見を吸い上げ、それらを集約し、おおくに全体としてまとめあげるという作業ができるような組み立てを意図的に行ってきた結果、学生間で互いの意見を尊重しながら効果的な意見交換が行えたものと考えられる。

②学生評価でA評価の少なかった項目で特徴的なもの

2-2)「暮らしを支える現状の社会資源について考えることができる」が20%、2-4)「地域の人々のつながりをイメージすることができる」が50%と到達度が低かった。この点については、1日の演習の中で、午前・午後1ケースずつ訪問させて頂きインタビューを行うという演習方法を取ったことで、個のニーズに焦点をあてたため個の現状については詳細に考えることはできたものの、個と個のつながりや、利用できる社会資源まで深めていくことは、困難であったと思われる。今回、演習目的をセンターとの話し合いの中で「地域で暮らす高齢者が閉じこもらずにいきいきと生活できる」ための個の実態を明らかにすることに絞ったことにも影響される。これを、個から地域全体の実態に広げていくためには、訪問ケースの状況を振り返りまとめる時間を確保し、その結果をおおくにグループ全体で報告、意見交換する機会を設けることで、理解が深まるものと思われる。

（2）演習前と発表会後のリフレクションペーパーより

演習準備から演習・発表会に至る過程の中で、看護学部・福祉学部の学生達は、お互いの特徴について数多くの気づきをしていた。福祉学部の学生から見た看護学部の学生は、まず、対象者の健康状態や疾患の程度などの身体状況、食事・睡眠などの日常生活状況を優先度の高い着眼点にあげ、そこから住み慣れた地域で健康に生活していくにはどうしたらよいかという視点にたって支援をすすめていく特徴があると捉えられていた。また、看護学部の学生から見た福祉学部の学生は、まず、対象者の暮らし方や生活の質、地域や人とのつながりという点を優先度の高い着眼点にあげ、そこから住み慣れた地域でよりよい生活を営んでいくにはどうしたらよいかという

視点にたって支援をすすめていく特徴があると捉えられていた。このように互いの専門性を相互に捉えていたが、最終的に目指すところは、「対象者が住み慣れた地域で健康によりよく暮らしていくために支援を行っていく」というゴールは同じであると数多くの学生が実感していた。

よって、今後は、演習準備の段階でお互いの“対象を理解するためのアセスメントツール”について共有してから演習に臨むことで、互いの専門性がより明確になり相互理解が深まっていくものと考えられる。

（3）演習の成果・課題について

今回の演習を学生達の意見・成果物・評価表や、教員の演習の企画準備・意見交換、センターの所長から「40名という高齢者の方の訪問であったが、地域を歩きながら3地区の特徴をよくつかんでまとめている」という評価も頂き、それらから振り返ると、地域全体の実態を把握するといった点までは至らなかったが、グループとして掲げた演習のねらいは、ほぼ達成できたものと考えられる。特に、「協働する」といった視点からの学びは、評価表やリフレクションペーパーから「情報を共有する」「意見交換をする」プロセスを学ぶことができたと考える。

今後の課題としては、毎年行われる学生の演習を、地域全体の実態把握につなげ地域づくりという観点も視野に入れながらどのように積み上げていくかということである。今回の演習では「地域で暮らす閉じこもりがちな高齢者は、心配事を抱えている」という点が明らかになった。センターの所長から「訪問して頂いた高齢者がとても喜んでくれていて、学生に手紙を出したという話も伺っています。高齢者達は、皆さんとお話したいという気持ちを抱えていると思うので、時間があれば、ぜひ、お話して下さい」という発言もあった。以上のことを踏まえ、今後さらにニーズを分析していく中で、学生達が何か行動をおこすことでネットワーク化を図れるような、例えば“話し相手ボランティア活動”などにつなげていくというような取り組みも検討することが重要である。

◆甲府市地域包括支援センター：きょうりつ

学　　生	看護学部 33 名 / 人間福祉学部 21 名　計 54 名
担当教員	看護学部 2 名 / 人間福祉学部 2 名　　計 4 名
センター職員	1～2 名

1）専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日（火）9:00～12:10

【演習実施計画】

1. 演習目的と内容は、全体の共通事項による

2. 実施概要

甲府市地域包括支援センターきょうりつの春日地区で、**「高齢者と地域とのつながり」をテーマに、「地域とのつながり」「住みやすさ」「不便さ」「生活状況」について高齢者の視点でその生活環境や地域特性について現地調査**を行い、**高齢者の生活実態やニーズを把握**しまとめる。

1）春日地区を歩き、高齢者の視点で、高齢者の日常生活をイメージしながら、写真やメモなどで地域の状況を記録し、そのデータや実態把握に基づき地域マップを作成する
2）春日地区の介護予防プランを作成する高齢者に訪問面接を行い、高齢者の生活や健康現状と課題、地域とのつながり等について聞き取り調査をする。
3）健康や生活ニーズを把握し、数的・質的データ集計を行う。
4）上記は看護・福祉の学生の協働により行い、春日地区の地域特性、及び春日地区高齢者の生活実態やニーズについてまとめる
5）学生による地域住民への報告会を行う

3. グループ編成

学生は 5～6 名 1 グループとして 9 グループ編成する。

戸別訪問面接時は、上記小グループを半分に分け、2～3 名 1 グループとする。

4. 調査地域・調査対象・調査数

・ 春日地区で、介護予防プランを作成した特定高齢者のうち、本調査協力に同意した 18 名。
・ 対象者は、センター職員の協力のもと、口頭で了解を得た方とし、大学・センター・甲府市の連名で訪問依頼書を葉書にて郵送する。

5. 訪問調査用紙の内容

別紙参照

6. 現地調査の進め方

1）地域マップ作成の調査

春日地区のうち予め割り振られた地域の地図とデジタルカメラをもち、6 名 1 グループで担当地域を歩く。その際、高齢者の日常生活をイメージしながら、「地域とのつながり」「住みやすさ」「不便さ」「生活状況」に注目し、高齢者が立ち寄りそうな外出先や商店などを考慮しながら高齢者の視点で現地調査を行う。（例：医療機関・福祉機関・薬局・整骨院・スーパー・小売店・公衆浴場・映画館・ホテル・公共機関・道路の段差・歩道の様子・人通りなど）必要に応じ写真を撮り、メモを取りながら記録する。

なお、地域内は徒歩でまわり、自転車は使わない（自転車で現地まで行くときは、駐輪場などを使用のこと）。

2）戸別訪問調査

聞き取り調査用紙の質問項目により、3 名 1 組で予め連絡し同意を得た高齢者宅へ訪問調査を行う。訪問時の礼儀や挨拶、及び聴き方やメモなどについては、他の授業などで学んだこと

も参考に活用する。

7. 調査結果のまとめ方

1) 小グループごとに、A3 版の紙(予め、ゼンリンの電子地図で担当地域を捜し、印刷して貼っておく)に、高齢者の生活環境がわかるように、写真や情報を書き込み、地域マップを作成する。実際に添付できる写真は、4～6 枚程度である。

2) 訪問した 18 事例の調査結果より、数的・質的な集計を行い、高齢者の生活実態やニーズをまとめる。

3) 小グループごとにまとめた上記の 1)・2)の結果から、担当地域の「高齢者と地域のつながり」をテーマに、「地域とのつながり」「住みやすさ」「不便さ」「生活状況」の 4 点について、地域特性や生活環境をふまえ、報告できるように検討する。

8. 看護と福祉の協働へのフィードバック

7.の終了後、看護と福祉学生が協働で調査結果をまとめ感想を話し合う。また演習後には、各人でリフレクションペーパーを記入し、指定日までに指定場所へ提出する。

9. 地域住民への報告

学生の代表者を選定し、4 月～5 月頃に行う予定である。

10. 1 月 6 日の日程

時　間	内　容	担 当
9:00- 9:30	全体オリエンテーション 配布したグループ表よりグループごとに座る	 神 山
9:40-10:30	きょうりつ地区演習の目的・内容・日程 きょうりつ地区の高齢者と地域特性紹介	神 山 高 山
10:30-10:40	休憩	
10:40-10:55	地域マップ作成の概要と手順　/　調査用紙の説明	神 山
10:55-11:20	グループ毎に自己紹介と調査日の役割分担・連絡網の記入	望 月 吉 澤
11:20-12:00	訪問時の接遇　/　面接の留意点とロールプレイ	大 澤
12:00-12:10	次回調査の連絡事項 / リフレクション用紙の記入	吉 澤

【小グループによる調査日の決定事項について】
演習当日の集合場所と時間
役割分担
＊面接グループメンバー（3 名×2）　＊地域マップ作成（5 名）
＊調査集計（1 名）　＊地域住民への報告者（きょうりつ地区で 4 名程度）
＊グループ発表者（1 名）　＊感想共有記録者（1 名）
調査日の持ち物確認と分担

〈 1 月 6 日までの教員の準備 〉

・春日地区を 9 地域に割る（地区割については、センター所長に依頼する）

・グループメンバー表・地区調査の地図・リフレクションペーパー・演習計画・調査用紙・連絡網の作成及び印刷

11. 1 月 31 日(演習当日) の日程

時　間	内　容	担　当
9:00- 9:20	集合・説明（訪問調査者名と地図を渡す）	2～3 グループ毎に担当教員 1 名が調査地域を巡回し、学生指導や助言を行う
9:20-10:50	小グループ毎に担当地区を歩き、指定された項目について調査を行う。	
11:00-12:00	各グループ代表者　(2 名程度) は、予約をとった高齢者宅で聞き取り調査を行う。	
12:00-13:00	昼食休憩	

13:00-13:30	聞き取り調査の結果を面接グループで共有し、記録するお礼状の記入	マップ作成担当 大澤・吉澤・望月
13:30-14:50	午前中の現地調査をもとに、小グループごとに地域マップの作成と聞き取り調査の集計を行う	調査集計担当 神山・三井
14:50-15:00	休憩	
15:00-15:50	調査結果について、グループで話し合い、協働の感想などを共有する	1～5 グループ担当 大澤・吉澤 6～9 グループ担当 望月・神山
15:50-16:50	9 グループ合同報告会（発表時間は 1 グループ 5 分） センター職員・教員のコメント 15 分	
16:50-17:00	総括・連絡・リフレクションペーパー配布（後日提出）	

12. 指導体制

現地調査：調査開始時には、集合場所で説明し訪問用資料を渡す。調査開始後は、4～5 グループ毎に 2 名の教員で調査地域を巡回し学生指導や助言を行う

地域マップ作成と集計：地域マップ作成に 3 名、集計に 1 名の教員がつき、指導助言。

小グループ検討：教員 2 名ペアで、4 グループと 5 グループを担当する。演習目的や目標をふまえ、専門職連携演習として学生の気づきや学びが深まるように、ファシリテーターとして関わる。

その他：写真記録・資料や書類準備・物品管理担当の分担

13. 調査日までの準備

調査対象者については、センターを通して 2 週間前までに内諾を頂き、学生とのマッチングを行い、1 週間前に甲府市・大学・センターの連名で依頼葉書を送る。調査日前日にも、センターから電話確認をして頂く他、1、2 件取材可能な家(教員が同行訪問し、訪問時の写真撮影をさせて頂く)を選定してもらう。

14. 必要物品

甲府市中心部地図 9 部・カメラ 9 台・パソコン 9 台・プリンター2～3 台・プロジェクター（A3 版印刷物を写せるタイプ） 1 台・写真印刷用高画質用紙（A4 版）・コピーカード・ゼンリン住宅地図（電子）・サインペン 9 組・のりとはさみ 9 個・名札（学生人数分）・葉書 18 枚

【高齢者の聞き取り調査用紙】　　グループ　　No.

地域で生活する高齢者への聞き取り調査　（きょうりつ）

高齢者ｲﾆｼｬﾙ　様	年齢　歳	性別　男・女	同居家族構成　1人　2人　3人　4人以上	調査日時　年　月　日　(　時　分～　時　分)
学部	学籍番号	学生氏名	学部	学籍番号　学生氏名
学部	学籍番号	学生氏名	学部	学籍番号　学生氏名

No	質問内容	回　答（メモ）
1	食事の準備は主にどなたがしますか ご自身で準備される頻度はどのくらいですか	□本人　□家族　□買ってくる　□ﾎｰﾑﾍﾙﾊﾟｰなどの介護サービス利用 □行政の配食サービス利用 □その他（　　） （頻度） 日・週・月　に　　回

2	日用品の買い物は主にどなたがしていますか ご自身で買い物に行く頻度はどのくらいですか	□本人　□家族　□買ってくる　□ﾎｰﾑﾍﾙﾊﾟｰなどの介護サービス利用 □その他（　　） （頻度） 日・週・月　に　　回
3	病院や診療所など、医療機関には、どのくらいの頻度で受診していますか	（頻度） 週・月　に　　回
4	病院や診療所など、医療機関にはどうやって行きますか（複数回答）	□徒歩　□自転車　□自家用車（自分で運転・送迎）　□バス □電車　□バイク □その他（　　）
5	かかりつけ医はいらっしゃいますか	（種類） □総合病院　□医院・診療所 □その他（　　）　□いない
6	新聞や書籍などを読んでいますか	□よく読んでいる　□ときどき読んでいる　□あまり読んでいない
7	普段お出かけになる頻度はどのくらいですか どんな場所にお出かけになりますか また、出かけたいところはありますか	（頻度）　（ほとんど出かけない人はその理由） 週・月　に　　回 □知り合い宅　□病院等　□スーパー等　□公園等 □その他（　　） （出かけたい場所）
8	知り合いの家を訪ねることがありますか	□はい→（頻度）　□いいえ→（理由） 週・月　に　　回
9	人が訪ねて来てくれることについて、どうお感じになりますか	□うれしい→（どんな人に訪ねて来てほしいですか？） □親戚（子ども、孫含む）　□友人　□近所の人 □その他（　　） □うれしくない→（その理由）
10	若い人と接する機会がありますか	□はい→（頻度）　□いいえ→（接する機会はほしいですか？） 週・月　に　　回
11	「健康」についての記事や番組に関心がありますか	□とてもある　□ほとんどない　□まったくない
12	身体にいいと思うことを日々実行していますか	□している→（内容） □していない→（理由・どんなきっかけがあれば実行できるか）
13	楽しみにしていることはありますか	□ある→（どんなこと）　□ない→（どんなことができたら楽しいか）

14	お住まいのあるこの地域は暮らしやすいですか　またその理由を教えて下さい	□暮らしやすい　　□どちらともいえない　　□暮らしやすくない （理由）
15	家族や友達の相談にのることがありますか	□ある→（どんな事柄？）　　□ない→（理由）
16	身の回りで心配事はありますか	□ない □ある→（どんなときに感じますか？）（それはどんなことですか？）
17	老人会や自治会に入っていますか	□はい　　□老人会　　□自治会 □いいえ→（不参加の理由）
18	地域の集まりや催しには参加していますか	□はい→（参加している催しにはどんなものがありますか？） □いいえ→（不参加の理由） （どんなことに参加したいと思いますか？）
19	「地域にあったらいいなあ」と思う助け合いの仕組みやサービスがありますか	（名称や内容を具体的に）
20	（グループごとのオリジナル質問）	

2）　フィールド演習：平成21年1月31日(土) 9:00～17:00

欠席する学生もなく、演習は前述したタイムスケジュール通りに進行した。演習内容については、5)の合同発表会に記述した。

3）　演習に関する打ち合わせ

日　　時	場　所	内　　容	出席者(人)		
			大　学	センター	甲府市職員
20.10.15	センター	教育GP採択の報告	2	1	
11.10	センター	演習打ち合わせ	2	2	
12. 4	大学	同　　上	4	1	1 (保健師)
12.17	大学	同　　上	2	1	
21. 1.27	大学	同　　上	4		
2.19	センター	演習反省会	4	1	
3.10	大学	4/18の合同発表会の演習運営について	2		
3.23	大学	同　　上	4		

4）　合同発表会に向けての事前準備演習 ： 平成21年4月7日（火）14:50～18:00

【 演習目的 】

1. 目　的 ： 演習のまとめと成果発表(4/18)のための準備

※ 前回の演習は9グループに分かれて実施したが、それぞれの担当地区の情報を併せ、「春日地区」全体の地域特性及び協働の成果をまとめる。

2. 目　標

1) **地域特性**(住みやすさ・不便さ・地域とのつながり・生活状況など)について考えることができる。

2) **生活及び健康ニーズ**について考えることができる。

3) **地域及び高齢者の生活課題**について考えることができる。

4) **専門職が協働することの意義**について考えることができる。

3. タイムスケジュール

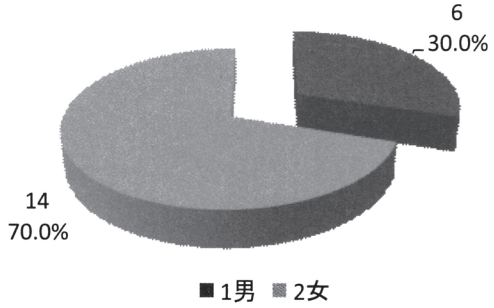
時　間	内　　容	物　　品
Ⅳ限 14:40 15:00 16:10	**オリエンテーション** ・演習の振り返り(専門職連携とは) ・本日のタイムスケジュールについて ・合同発表会について **演習当日のグループ（9 グループ）によるグループワーク** ・地域マップ、聞き取り調査、各自のリフレクションペーパーを基礎資料に、上記の目標1～4について話し合い、まとめる。 ※司会は各Gともリーダーが行い、書記を1人選任する。	**[学生が持参するもの]** ・リフレクションペーパー ・1/6 合同オリエンテーション時の配布資料「きょうりつ地区の高齢者と地域特性」(高山所長の講義資料) **[大学側が用意するもの]** ・地域マップ ・聞き取り調査用紙を集計したもの ・リフレクションペーパーをまとめたもの ・パソコン 9 台 ・延長コード 4 本 ・プロジェクター 1 台 ・デシカメ 1 台 ・プリンター 1 台 ・USB 4 本
Ⅴ限 16:20 17:20	**4 つのグループに分かれてグループワーク** 1) 1 グループを 4 つに分け、分かれたグループで元のグループ 1～9 グループまでを併せて、全体で 4 つのグループ（A、B、C、D）を編成する。 ※ 司会と書記を 1 人ずつ選任する。 2) Ⅳ限で各グループがまとめた原稿を基礎資料に、まずは目標 1～4 までをグループ内で共有し、A グループは上記の目標 1、B グループは目標 2、C グループは目標 3、D グループは目標 4 について話し合い、まとめる。 **グループ発表及び質疑応答、発表会に向けての連絡事項** ・発表時間は、各グループ、質疑応答も含め 5～6 分程度。	・各グループでまとめた原稿 ・パソコン(本日の発表用 PP の作成。PP の枚数は、1 グループ 3～4 枚程度) ※ 4/18 の全体発表会の演者を 4 人(看護学部 2 人、人間福祉学部 2 人)選出。 ※ 5 月(日時は未定)に地域の自治会に向けて本取り組みを発表する予定。発表者を 6 人選出(看護学部 3 人、人間福祉学部 3 人)。
4/18 予定	9:00 ～ 集合 9:10 ～ 模擬発表会(質疑応答) 10:00 ～ 修正・発表の準備 11:30 ～ 最終模擬発表会 12:00 ～ 昼　食 13:00 ～ 発表準備 14:15 ～ 発表会	

５）合同発表会 :4 月 18 日（土）準　備 9:00～14:00 / 発表会 14:15～16:30

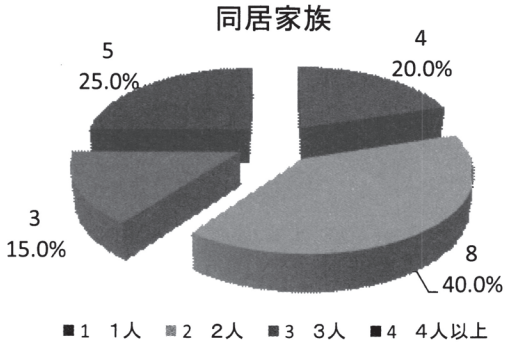
（１）戸別訪問調査結果

n=20　数字は人数
横棒グラフは複数回答

性　別



同居家族

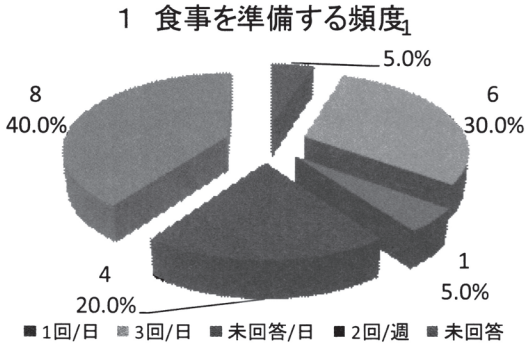


質問１　食事の準備は主にどなたがしますか

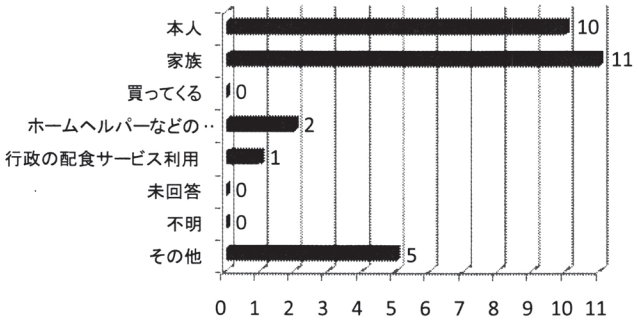
＊「その他」と回答

- 食事、掃除：ホームヘルパー（週２回）（２）
- 息子、孫
- ２階に住んでいる息子夫婦とは別
- 自分で調理するのが好き

１　食事を準備する頻度



１　食事の準備

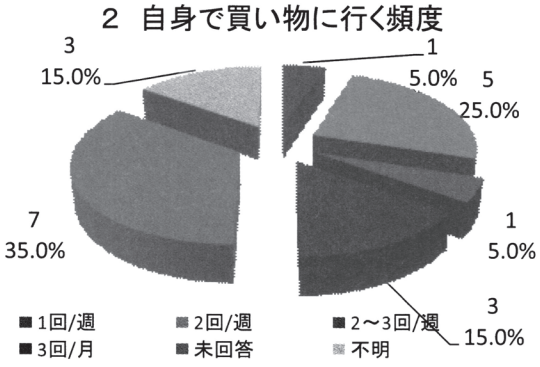


質問２　日用品の買い物は主にどなたがしていますか

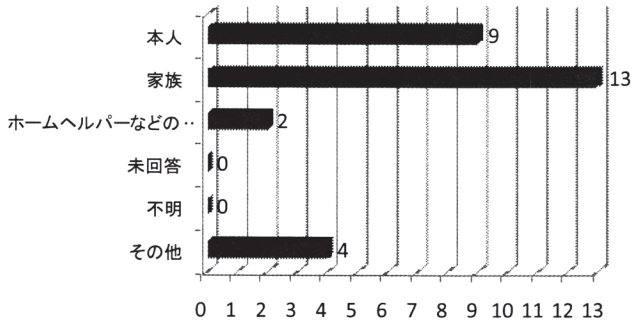
＊「その他」と回答

- 衣服のみ本人
- 夫と一緒に行く
- 妻と一緒に行く
- 娘と一緒に行く

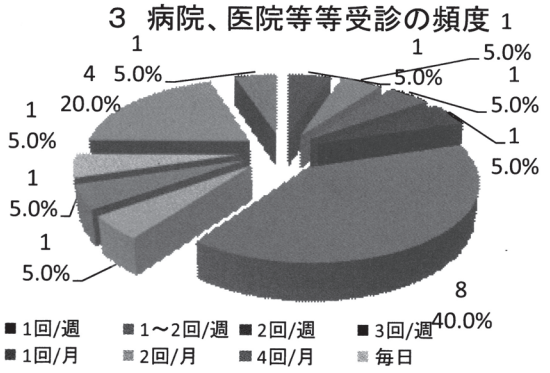
２　自身で買い物に行く頻度



２　買い物



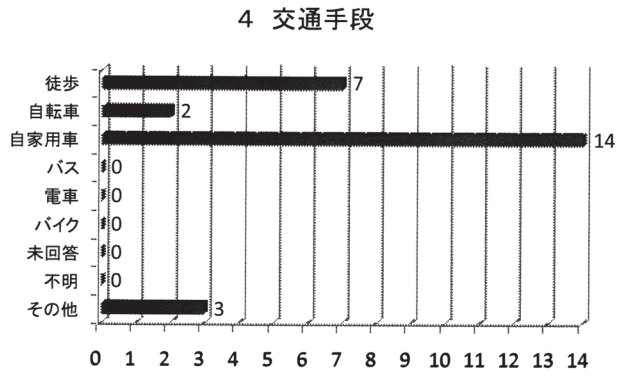
質問３　病院や診療所など、医療機関には、どのくらいの頻度で受診していますか

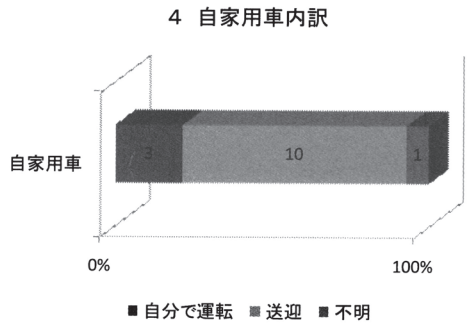


質問４　病院や診療所など、医療機関にはどうやって行きますか

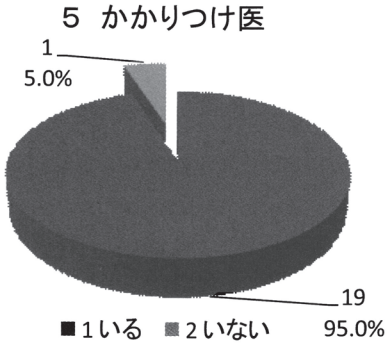
＊「その他」と回答

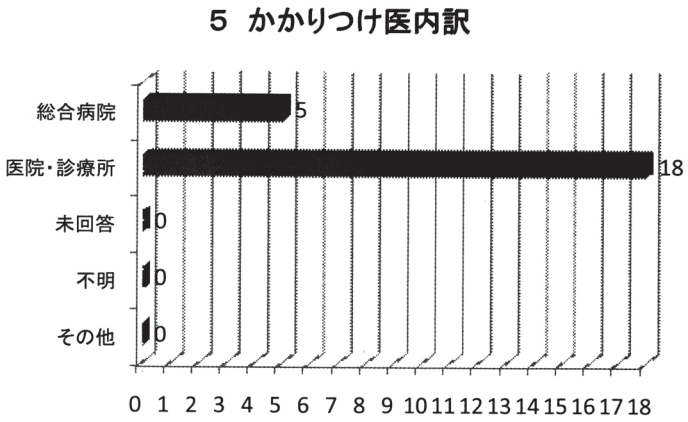
・タクシー（３）



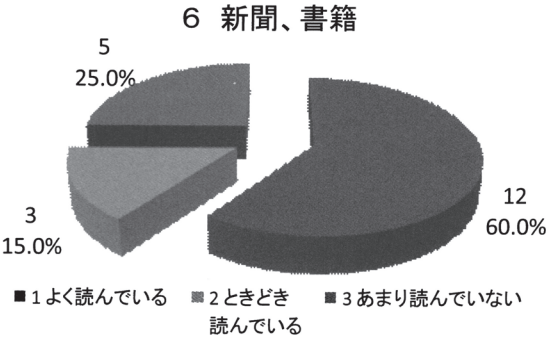


質問５　かかりつけ医はいらっしゃいますか





質問６　新聞や書籍などを読んでいますか



質問７　普段お出かけになる頻度はどのくらいですか

＊出かけない理由

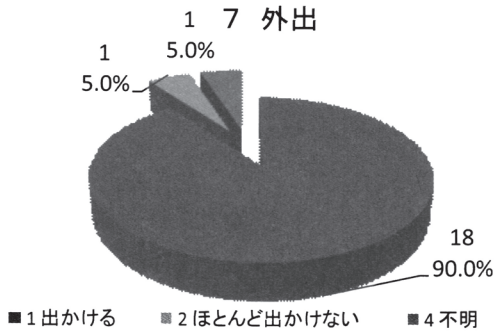
・膝の具合が悪い
・身体への負担がかかる
・近くに店がない

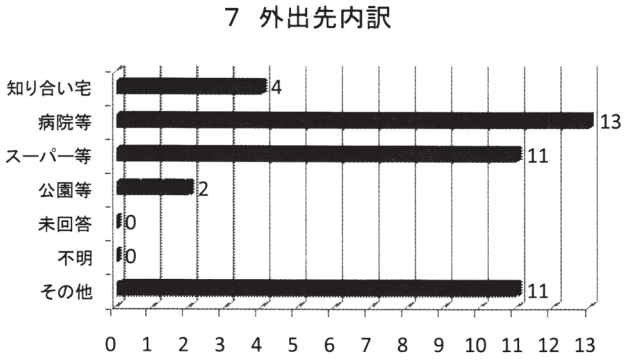
＊どんな場所にでかけるか

・デイサービス（４）
・商店街
・食事
・旅行（年１回・妻と）
・温泉
・親戚宅（東京）
・傷痍軍人の会合
・散歩
・寺
・美容院

＊出かけたいところはあるか

・特になし（６）（足が痛い）
・歌舞伎
・京都の寺めぐり（出かけたいが、身体が大変なため出かけられない）
・国内旅行（厳島神社、京都など）
・東京（孫・ひ孫に会いに）
・温泉（３）



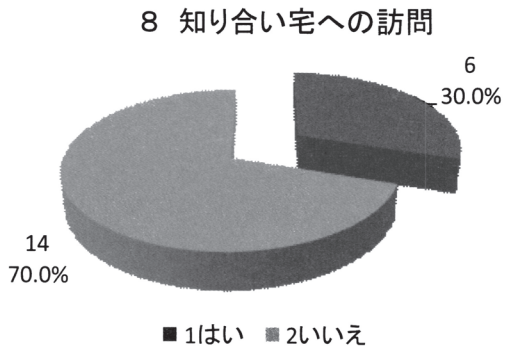


・老人会
・友人宅（以前はよく行っていたが、足をけがしてからは外出の機会が減った）
・デパート（買い物）

質問８　知り合いの家を訪ねることがありますか

＊訪ねない理由

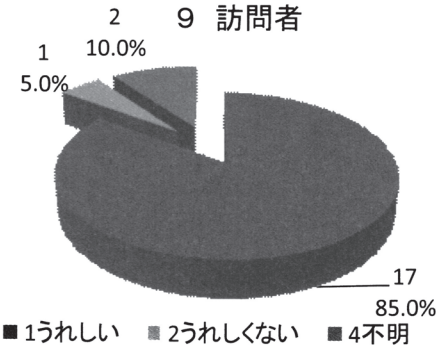
・知り合いがいない（２）
・お互いに干渉しない（２）
・近所で立ち話程度（最近はプライバシーの問題があるので）
・痛い（足ほか）（４）
・店をやっているので、友人が来てくれる



質問９　人が訪ねて来てくれることについて、どうお感じになりますか

＊訪ねて来てほしい人、その他

・会社関係の人（２）
・知人
・ヘルパー（２）
・書道教室、茶道教室の生徒
・兄弟
・店の客



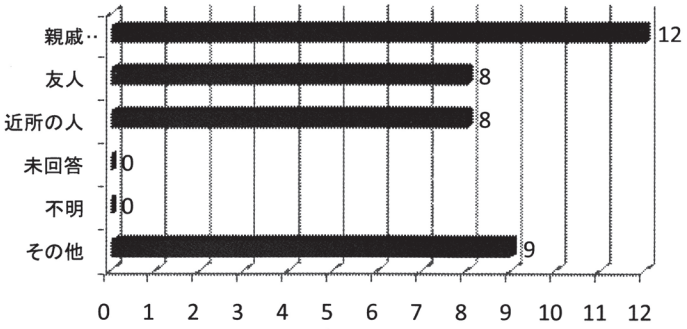
＊訪ねてくれることについて

・人が来てくれることがうれしい
（友人が亡くなってしまったので）

・普通

・大変、気を遣う

9 訪問者内訳



質問１０　若い人と接する機会がありますか

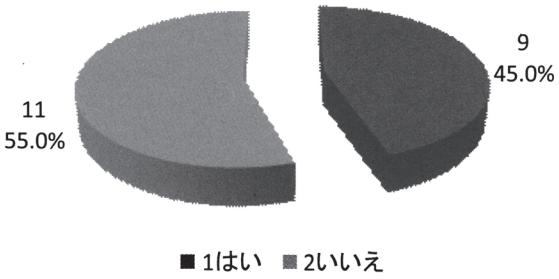
＊接する頻度

・自治会のお祭りなどで接する（息子夫婦が年１回）
・マッサージに行き若い人と話している（週２回）
・孫と会う（毎日）
・デイサービスに行く（週２回）

＊接する機会がほしいですか

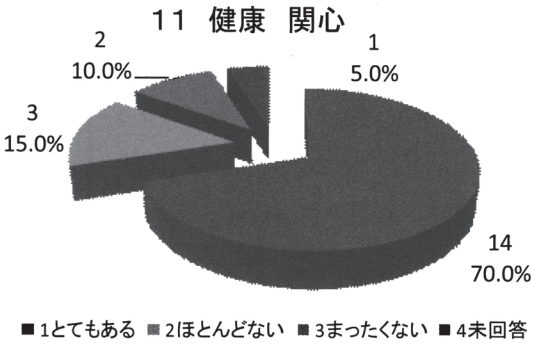
・ほしい（７）（話すことが嬉しい、話が合うか不安、周りに若い人がいない）

10 若者との接点



質問１１　「健康」についての記事や番組に関心がありますか

11 健康 関心

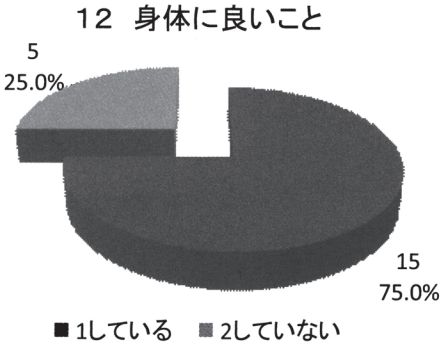


質問１２　身体にいいと思うことを日々実行していますか

＊実行していること

・体操（５）（風呂の中で、デイサービスで：３、テレビを見ながら）
・朝の運動
・自転車に乗る
・散歩（７）（一万歩、家の周りを２０分程）
・掃除（３）
・正しい姿勢

12 身体に良いこと



・転倒しないように
・血圧測定
・健康食の会で教えている（学食研究会）
・薄味

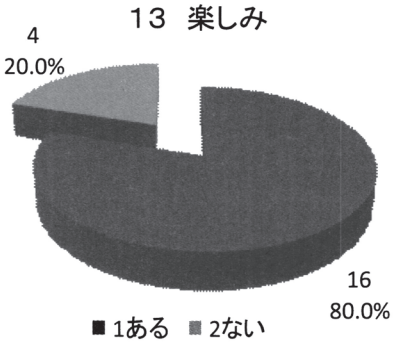
＊していない理由

・腎臓病を患っている（水分・カリウム・タンパク質摂取制限あり）
・太ってきたので、身体が重い
・動かないとダメになる
・自分で料理を作る
・牛乳をよく飲む
・飲酒、喫煙をしない
・無理しないように
・歩くが、足が痛いので毎日はしていない
・両膝の痛み
・心配し過ぎる方が身体に良くない

質問１３　楽しみにしていることはありますか

＊楽しみにしていること

・テレビ（３）（クイズ番組、笑ってこらえて）
・趣味（家庭菜園、編み物、洋裁、陶芸、ちぎり絵、絵を描く、フラワーアート、カラオケ教室：週２回・年２回発表回あり、書道、写仏）
・旅行（２）（妻と）
・美術館（２）
・外出（２）（娘と）
・買い物
・兄弟、姉妹の集まり
・娘、息子の訪問
・孫、ひ孫の訪問、会うこと
・親戚が来ること
・ヘルパーの訪問
・デイサービス（４）（週２回、折り紙）



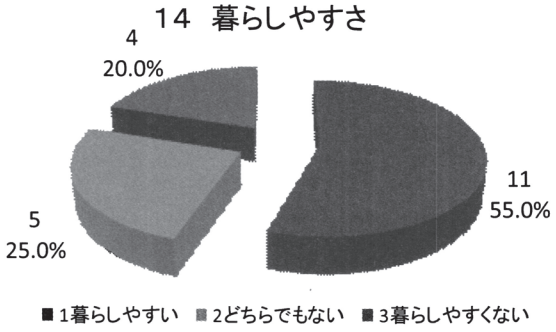
＊どんなことができたら楽しいか

・人との交流
・食事（好きなものが食べたい）
・健康維持。
・無尽会。
・町内の食事会。
・１０時と３時のおやつ。
・友人との会話。（２）（書の話、骨折する前は歌・踊りに参加）

質問１４　お住まいのあるこの地域は暮らしやすいですか、またその理由を教えて下さい

＊暮らしやすいと回答

・住みやすい
・ずっと住んでいる
慣れ親しんだ場所、住めば都（４）
・静か（３）
・駅が近い（３）
・デパートが近い（２）
・治安が良い
・娘、息子が近くにいる
・近所との交流がある（３）



・近所の人が良い

・知り合いがいない
・道が悪い
・浮浪者がいる

＊どちらともいえないと回答

・以前は友人が集まってきたが、今は友人が亡くなってしまった
・話し相手がいなくなった
・町に賑やかさがなくなった
・病院は近いが、頻繁には行かない
・交通の便が良い（バス）
・食料品店が少なく、買い物ができない

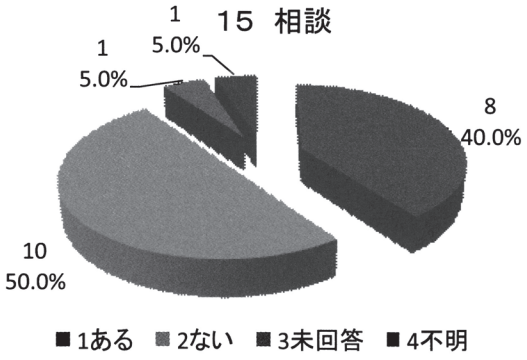
＊暮らしやすくないと回答

・道の段差が多い
・商店がなくなったので食料品が買えず不便
・商店が遠い
・買物に一人で行けない
・都会じみている（表面は良い顔をしているが、真からの優しさがない）

質問１５　家族や友だちの相談にのることがありますか

＊相談内容

・子供の世話を焼く
・兄弟について
・家系について
・家族の相談
・仕事の話
・身体のこと
・近況報告
・相談されない

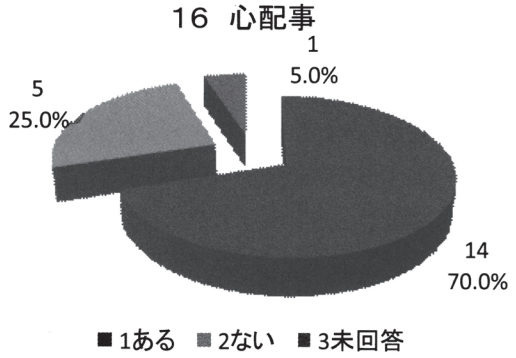


＊相談にのらない理由

・家族に相談することが多い（２）
・相談というより一緒に話をする
・身近な人が来ても、すぐに帰ってしまう
・人に頼らない
・頼むことが多い
・面倒が嫌い

質問１６　身の回りで心配事はありますか

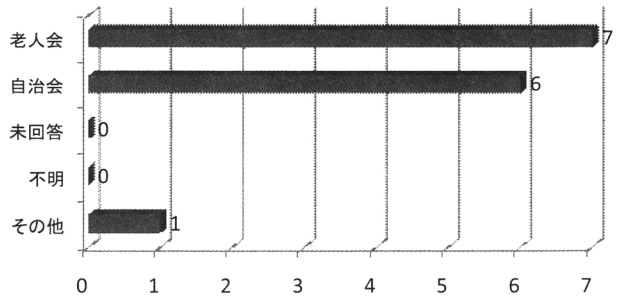
・家族との食事では肉を食べ過ぎてしまう（タンパク質をとり過ぎてしまう）
・病気のこと（４）（骨折による後遺症、心臓発作、手の震え）
・身体の健康について（５）（足腰が悪くなってきた）（２）
・妻の身体が気がかり
・身体が動かなくなった時のこと（２）
・自身の介護について（老人ホームはどうするのか、年をとっても自分で自分のことをしなくてはならない：人に頼れない、娘がいない）



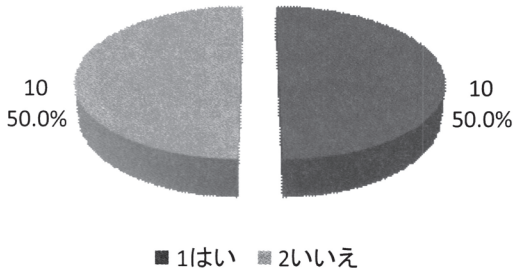
・家族のこと
・金銭面
・泥棒、火事（独居）
・スーパーマーケットがなくなってしまう

質問１７　老人会や自治会に入っていますか

17 老人会・自治会内訳



17 老人会・自治会



＊不参加の理由

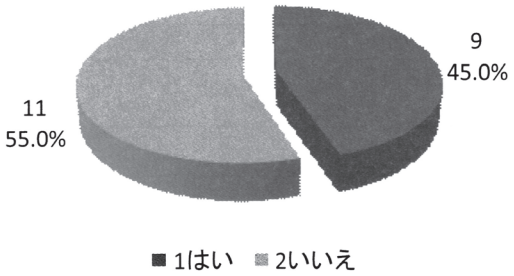
・知り合いがいない
・近所との交流がない
・足が悪く、外出困難
・ケガをしてから周りの人の迷惑になると思い不参加（以前は積極的に参加）
・加齢で足が痛くなった
・若い人に任せる（身体が大変）
・参加者が少ない
・そういった機会があるのか分からない
・行事がない、少ない、無くなってしまった（３）
・他の会合が忙しい（傷痍軍人の会）

質問１８　地域の集まりや催しには参加していますか

＊参加している催し

・温泉
・無尽会（３）
・新年会
・老人会（２）
・文化祭
・地域のお祭り（２）
・町内の食事会
・デイサービス
・レクリェーション
・写仏の会
・学食研究会

18 地域の集まり



・どんど焼き（２）
・餅つき（２）
・節分（２）

＊不参加の理由

・知り合いがいない
・情報が入ってこない
・身体が不自由（３）（足が悪い、身体が辛い）
・周りの人に迷惑をかけると感じる
・不参加だが、配布物は見る
・他の会合が忙しい（傷痍軍人の会）
・地域のことは夫や息子の役目

＊参加したい催し

・話をする場
・地域の人や若い人と交流が持てる場
・もみじがり、花見（老人クラブ）
・特になし

質問１９　「地域にあったらいいなあ」と思う助け合いの仕組みやサービスがありますか

・特になし（６）（自分がやりたいと思わない）
・お店（４）（近所、食料品店）
・近所のつながり（助け合いなど）を持つこと（２）

・高齢者と接する機会
・人と触れ合う場
・病院同士の連携
・介護保険制度（経済的にもっと気楽に看てもらえるようにしてほしい）
・サービス内容を知る機会が欲しい（２）
（サービス内容が分からない）
・今のところはサービスは増やさなくて良い
・頼まれることが多い
・むしろ人にしてあげたい、自分できることを発揮したい
・デイケアに満足している

オリジナル質問 ―まとめ―

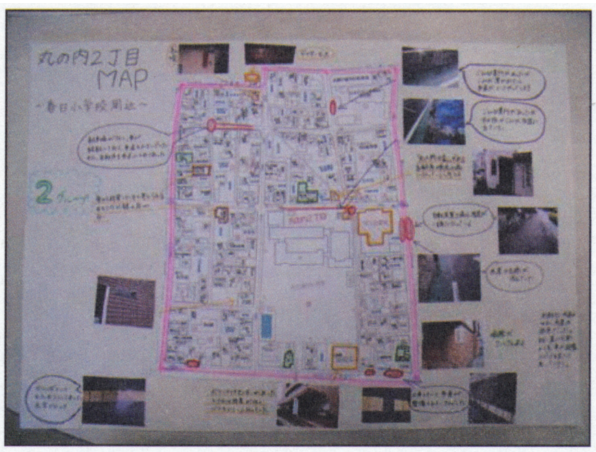
No	質　　問	回　　答
1	情報源はどこか（健康、福祉について）	・TV、きょうりつの人
2	遠出をすることはあるか	・２、３年に１度（県外の姉の家へ）
3	どのくらい、この地域に住んでいるか	・子どもの時から ・６０年
4	生きがいはなにか	・写仏をすること ・健康でいられること
5	職業は何をしていたのか	・洋裁の先生、後に運転手をしていた夫に誘われ、その会社の新人育成などを行う ・タクシーの運転手、その後企業の専用運転手 ・農家に生まれ、女学校を卒業　県外で国家公務員として働き、海外に嫁ぐ、その後、山梨に戻り事業を始める ・ラーメン屋、役所の食堂
6	どんなサービスを利用しているか	・ヘルパー週２回、主に掃除、１時間ずつ（要支援） ・デイケア（リハビリ、お風呂）（お風呂は週1回）
7	これからの生活（理想）	・このままの状態で、スムーズにいきたい
8	防犯対策をしていますか	・している、ＡＴＭでお金をおろさない ・していない、夜はにぎやかだから安心（２）
9	テレビは見ますか	・一日中つけている、ニュースやドラマを見る
10	情報をどこから得ていますか	・テレビ、新聞、地域に出かけたとき
11	困ったときに頼りにしている人はいますか	・同居している孫、近所の民生委員、隣人 ・いるが、自分からは頼ろうとしない

（２）地区踏査と地域 MAP 作成

１グループ



２グループ



３グループ



４グループ







５グループ



６グループ



７グループ



８グループ



９グループ



（３）プレゼンテーション資料



教育GP
甲府市地域包括支援センター
きょうりつ

看護学部33名、人間福祉学部21名
2009年1月6日～4月18日



春日地区とは

・甲府駅南口周辺地域
・人口・・・2856人
・世帯数・・・1426世帯
・高齢化率(65歳以上)・・・32．4%（高齢化が顕著）
・ドーナツ化現象が進み人口が減少
・小学校が統廃合され、3校から1校へ



春日地区の地図



専門職連携演習(1月31日)の内容

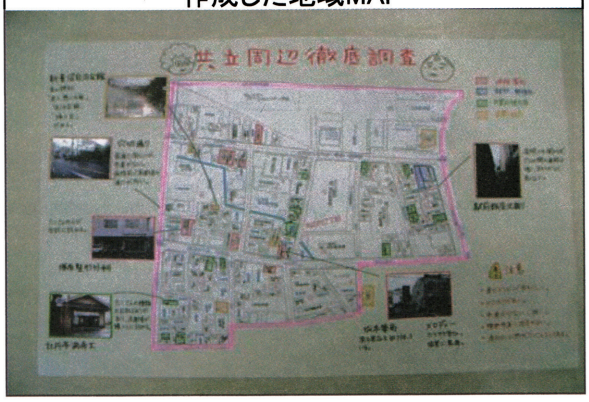
目的
・住民の生活を体感する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる
・高齢者の生活のイメージをしながら、地域マップを作り、高齢者の生活環境を把握する

専門職連携演習(1月31日)の内容

手順

- 春日地区を9つのエリアに分けて調査
- 歩きながら高齢者の日常生活をイメージし、 現地調査を行う
- 3人一組で高齢者宅へ訪問調査を行う
- 事例の結果より、地域マップを作成し、高齢者の生活実態やニーズをまとめる

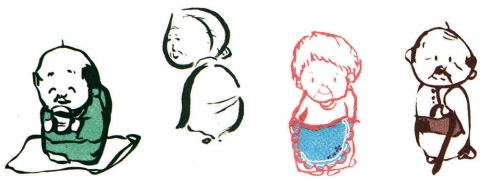
作成した地域MAP





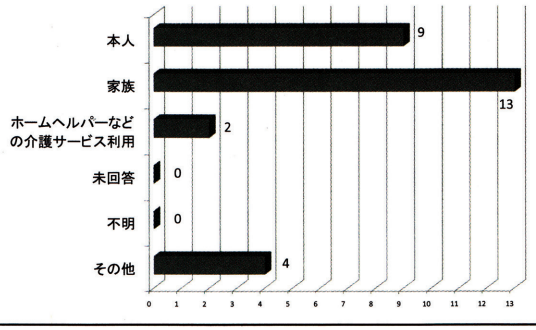


高齢者宅への訪問調査結果

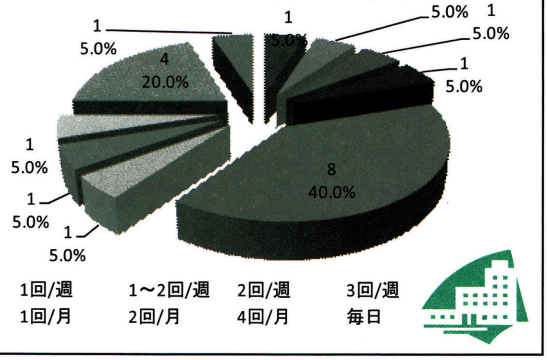


主に買い物をする人



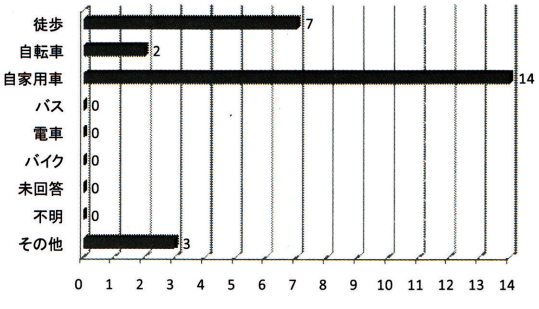


3病院、医院等等受診の頻度

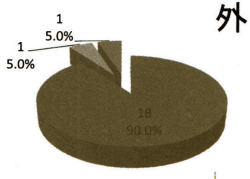


交通手段





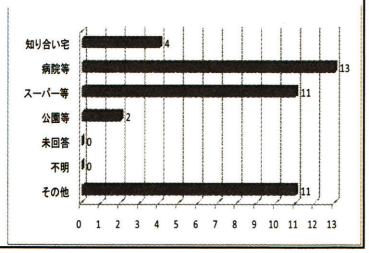
外出状況





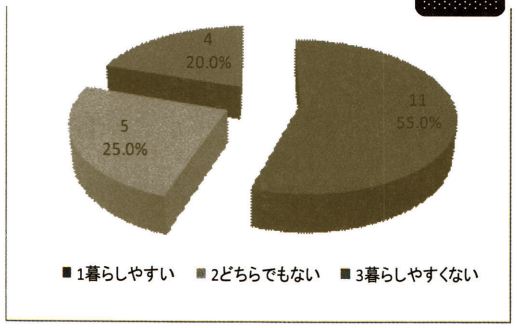
■1 出かける
■2 ほとんど出かけない
■4 不明





暮らしやすさ





発表の流れ

A　地域特性(住みやすさ・不便さ・地域とのつながり・生活状況など)について
B　生活及び健康ニーズについて
C　地域及び高齢者の生活課題について
D　専門職が協働することの意義について

A. 地域特性について

住みやすさ・不便さ
地域とのつながり・生活状況



住みやすさ・不便さ



外から見ると・・・不便 (段差・交通機関等)

実際は・・・不便でないという意見が多い。

〈考察〉　住めば都・・・？
今の生活状況に合わせざるを得ない状況にあり満足してしまっている可能性がある。

地域とのつながり

交流の場はあるが実際に利用している人は少ない。

〈背景〉
情報が高齢者に伝わっていない。
→住民と社会資源を結ぶ仲介役が必要。

高齢者は家に閉じこもりがちである。



生活状況

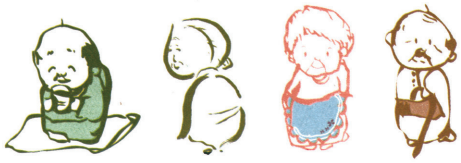


・街自体が閑散としている。
・店が少なく、生活必需品が手に入りにくい。
・高齢者の一人暮らしの割合が高い。

〈考察〉
実際に生活しているのは高齢者が多いので、住民自身による地域の活性化が難しい。

B. 生活及び健康ニーズについて

～自分らしく生活するために～



地域で自分らしく生活するには



・身体・日常生活技術的自立
　介護保険やボランティアなどによる
　サービスが総合的に提供されているか

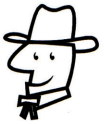
・健康的自立
　医療機関は充実していたが、かかりつ
　け医はいるのか、また医療サービスが
　利用できているのか

・経済的自立
　医療費・交通費・家賃・物価などが高
　く、生活困難になっていないか

・社会的自立
　バリアフリー化がされていないなど、
　住環境面に問題はないか
　交流の場はあるか、活用できているか



調査から得られた生活実態



・個人医院が多くあり、居住地の近くに
かかりつけ医がいる。

・緊急時ホットラインがあり、すぐに連絡の
とれるサポート体制が整っている。



現状から出てくるニーズ



・地域交流の場所はあるが、身体的要因や周囲への
遠慮により、参加できない。

・近くに買い物できる店が少ない。

・道路が整備されておらず、段差があったり道が狭く
歩きにくい。

・介護保険が改正されて、金銭的負担が増えたため、
ヘルパーの回数が減るなどサービスが低下した。

生活及び健康ニーズのまとめ

さまざまなニーズがあったが、
住みなれた環境でずっと暮らしたいという
住民の願いが多く聞かれた。

さらに自分らしく生活するために
身体・日常生活技術的自立、健康的自立、
経済的自立、社会的自立、これら全ての面の
バランスを考えて支援することが大切である！



C. 地域及び高齢者の生活課題について



＜地域の問題＞

①情報提供する上での問題

・サービス利用時の申し込みに関して全て
高齢者任せになりがちであった。

・情報が確実に高齢者へ伝わっていない。

②交流が持てない



・地域で集まる機会が減っている。
・隣人の状況が分からない。
・人が信用できない。
・身体問題（足腰の痛みなど）を抱えているため、
一人での外出が困難である。
・移動手段がない。
・自分の持つ情報の信憑性を確かめられない。
・自分がその場に溶け込めるか不安だから、
気軽に参加できない。

＜問題の解決策＞

・地域密着型の商店街を作る。（老若男女問わず、誰でも利用できる街並みを作る。）

・病院など高齢者がたくさん集まる場所を利用し、交流会を設ける。またその場で情報の伝達を確実に行う。

・高齢者同士が誘いあえる関係が築けるように、専門職者が橋渡しをしていく。

・情報を提供する際に、すでに参加している高齢者に呼びかけの協力をしてもらう。

・外出の少ない高齢者には、民生委員や包括支援センターの職員、行政窓口が個人の家庭を訪問し、安否の確認や地域の情報提供を行う。

・送迎をするなど、高齢者の金銭や身体面での負担を減らす。

・段差を解消するなど、バリアフリー化による安全な環境を作る。

＜問題が解決すると…＞

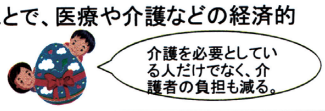
・地域住民の交流が盛んになり、街が活気づく。

・社会参加ができる人が増える(生活の場が拡大)。

・世代を超えて、お互いを理解し尊重し合える。

・福祉、医療サービスが適切に利用できる。

・健康を維持することで、医療や介護などの経済的負担が減る。

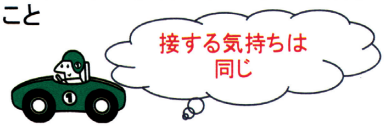


D. 専門職が協働することの意義について



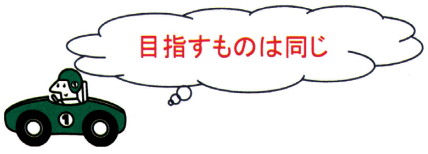
両職種の共通点①

- 高齢者が自分らしい生活を送れるよう支援すること
- 相手の立場に立って理解しようとすること
- 相手に寄り添う気持ちで接すること
- その人の今だけでなく、これからの生活まで考えること



両職種の共通点②

- 高齢者の生活の質が向上するように働きかけること
- 高齢者だけでなく、家族や地域住民を含め、現在だけではなく、今後の生活についても考えていること



福祉の専門性

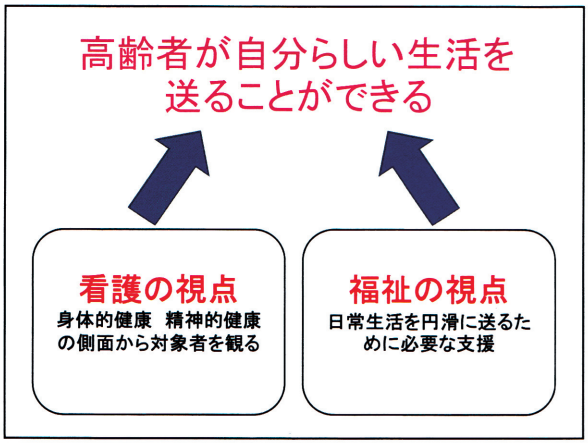
- サービスや社会保障制度などの知識が深いので、社会的側面から対象を捉えることができる。さらに、社会資源の活用方法に長けている

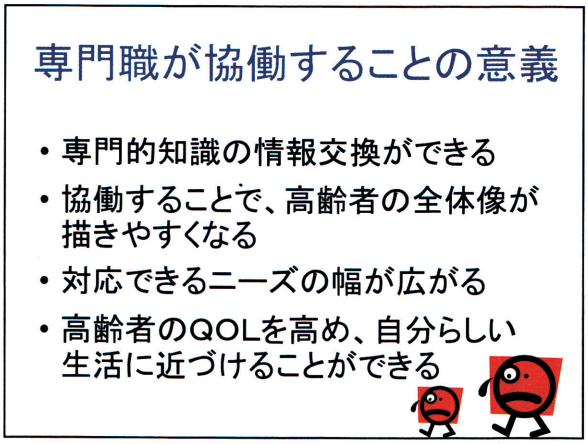


看護の専門性

- 疾患や治療などの知識が深いので、健康的側面から対象を捉えることができる









6） 学 生 評 価

（1）リフレクションペーパー

① オリエンテーション時（1 月 6 日）

看護：n=28　福祉：n=16

Ⅰ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

1）看護学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	18	12	6
・身体状況（健康状態・疾患の程度・内服）	13	8	5
・日常生活状況（生活状況、金銭管理）	3	2	1
・いきがい、楽しみ、思い	2	2	
（2）看護学部の学生の方が得意であると感じた点	5	3	2
・対象者を中心とした考え方をもっている点	1		1
・身体状況についての観察	1	1	
・生活から健康面を考える視点	1	1	
・福祉の視点も持っている点	2	1	1
（3）学生の姿勢・態度	8		8
・積極的	5		5
・グループワークが上手（まとめが上手、スムーズな進行）	3		3

2）福祉学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	12	9	3
・生活について（生活の様子）	4	3	1
・利用している・過去に利用した社会福祉サービスについて（社会資源、サービス）	3	3	
・社会交流（友人関係）	2	1	1
・家庭の状況について	1		1
・生きがい	1	1	
・情報源の把握	1	1	
（2）福祉学部の学生の方が得意であると感じた点	11	10	1
・介護、介護保険、福祉についての知識、社会資源の活用方法	4	4	
・対象を取り巻くあらゆる環境や資源を視野に入れ対象をとらえる	2	1	1
・コミュニケーション能力の高さ（ロールプレイでの話し方）	1	1	
・在宅への訪問経験が何度かあったとのことで、高齢者の特徴を理解した上で、とても丁寧な関わりを持てていた	2	2	
・地域にいる対象者、そして生活へと広く捉えられていた	1	1	
・対象のニーズに着目している	1	1	
（3）学生の姿勢・態度	3		3
・看護学生に比べて消極的	3		3

3）2つの学部で共通の視点・姿勢	記述数 10	看護 8	福祉 2
・全人的な見方は変わらない	1		1
・相手に対する態度（対象者に寄り添う、対象者中心に物事を見る）	3	3	
・「人」を相手とした専門職	1	1	
・家族を含めた視点をもっている	1	1	
・互いの意見を尊重する姿勢	1		1
・生活という視点をもっている	1	1	
・実習などで人からの大きな学びを得る	1	1	
・お互いの知識について曖昧	1	1	

4）他学部との協働での取り組みによる学び	記述数 23	看護 16	福祉 7
・質問方法を考える中で、観察の視点や考え方が違うことがわかった	6	1	5
・相互に専門性を活かし、アプローチしていくことで、 よりよいケアにつながる	6	6	
・お互いの視点が異なっていて、とても勉強になった（視野が広がった）	4	3	1
・他学部の学生の取得資格、授業、実習などについて知ることができた	4	4	
・切り口、視点が違うので、お互いが連携を図ることでその人をより多角的に捉えられる、異なる分野の考え方が合わさることで様々な視点で意見が抽出できる	3	2	1

5）要望・意見	記述数 19	看護 11	福祉 8
・互いの特徴について、今回の取り組みではよくわからなかった	11	7	4
・今後も協働の取り組みがあるということなので、他学部の学生の特徴をみていきたい	6	4	2
・福祉とは何か改めて考えていきたい	2		2

Ⅱ．今後協働で取り組む上で、大切にしたいと思ったこと

1）協働	記述数 40	看護 27	福祉 13
・それぞれの着眼点に基づいて情報収集し多角的に対象を捉え支援を考える（視点の共有・目的の共有・不足部分の補い合い）	18	14	4
・視点が異なることを利点と捉え、意見交換しお互い尊重し合い取り組む	18	11	7
・コミュニケーションを大切にしていきたい	4	2	2

2）相互理解	記述数 14	看護 8	福祉 6
・お互いの特性を理解する（ 相手の専門性を理解する・パーソナルな部分での理解も必要）	14	8	6

3）自己の取り組み・課題	記述数 11	看護 11	福祉
・連携についての考察を深める	4	4	
・他職種との協働から自己の視点も広げる	2	2	
・自己の専門性の確認をする	2	2	
・看護学部の学生の方が多いので、福祉学部の学生に配慮し、協力していきたい	2	2	
・看護は、福祉の知識を身につけておくことも大切である	1	1	

Ⅲ．今回の体験を、今後どのように活かしたいと考えるか

1）他職種との連携	記述数 16	看護 10	福祉 6
・それぞれの専門性を活かすことで、対象者にとって最良の知識と技術を提供していきたい	11	6	5
・他職種と協働する場面では、積極的に意見交換する（自分の感じたことを言い、相手にも意見を聞いてみたい）	3	3	
・他職種間で連携を図っていく上でそれぞれの役割を明確にする	1	1	
・地域で生活する人達の援助をしていく上で、看護と福祉の連携の強さがとても影響することがわかった	1		1

2）互いの学部の学生からの学び	記述数 7	看護 5	福祉 2
・お互いの特徴を活かしていきたい	2	2	
・演習当日には他学部との視点の違いを観察しながら、特性の違いを学びたい	2	1	1
・質の高い看護を提供していくためには他職種との連携が欠かせない。演習を通し、連携の問題点や重要性を学びたい	2	2	
・初対面の人とのグループワークでの雰囲気づくりの大切さを学んだ	1		1

3）学び・今後の取り組み	記述数 12	看護 4	福祉 8
・相手に専門職として情報を与えられるようにしっかりと勉強していきたい（自分の看護の役割を把握し、役割が果たせるように努める、社会福祉の専門性を身につけなくてはならない、福祉の強みを考える、視野を広げる）	6	2	4
・今後の交流のきっかけにしたい、交流していきたい	4	1	3
・ロールプレイでは誘導的な質問になってしまったため、演習当日は高齢者の本来の思いを見落とすことがないように注意する	1	1	
・今後関わることによりもっと福祉とは違う「看護の視点」を知りたい	1		1

4）事前準備	記述数 2	看護 1	福祉 1
・話し合いを重ねて実際の演習にのぞむ	1	1	
・スムーズに質問できるよう考えていきたい（方法、時間配分）	1		1

Ⅳ．その他、どのようなことでも考えたこと、疑問、感じたこと

1）貴重な体験	記述数 4	看護 4	福祉
・学生のうちから他職種を目指す学生との関わりがあることで、より実践的に連携について学ぶことができるのでとてもいい機会、連携の大切さについて気づくことができた、協働の取り組みは自分の看護感を深めることにもつながる	4	4	

2）実施時期	記述数 4	看護 2	福祉 2
・もう少しお互いを知る時間がほしい	3	2	1
・もう少し早くしてほしい	1		1

3）事前準備	記述数 1	看護	福祉 1
・調査日程などもう少し早く連絡や情報提供してほしい	1		1

4）その他	記述数 19	看護 9	福祉 10
・他学部との協働により様々な視点や看護と福祉での関わり方の違いなど、多くのことを学びたい。積極的に交流し、他学部の知識も吸収していきたい	8	4	4
・学部を超え仲良くなりたい。自分たちの専門性を知ってもらいたい	3		3
・他学部の学生からいろいろな話を聞きたい	2	2	
・少し不安はあるが、みんなで協力しよりよいプロジェクトにしていきたい	1		1
・今回の実習以外でも協働できたら、もっと他職種との連携について考えられると思った	1	1	
・対象者の情報も教えてほしかった	1	1	
・高齢者がどのようなお話をしてくれるか楽しみ	1	1	
・最後に行われる報告会はどのような形になるのか。	1		1
・演習当日も看護の学生の比率が多いのか	1		1

② 演 習 日（1月31日）

Ⅰ．地域住民の「生活の場」を体感して、感じたこと、考えたこと

看護：n=33　福祉：n=21

1）高齢者に対する理解が深まった		記述数	看護	福祉
（1）高齢者の生活の様子や生活環境が理解できるようになった		69	42	27
実際の生活の場に行き、高齢者の生活が実感できた	・高齢者の住む街について様々な発見ができた	29	18	11
	・地区踏査により、生活の不便さ、高齢者への危険、また、生活しやすい点を発見できた	38	23	15
自立して生活していると感じた	・自立して生活していることが感じられた	2	1	1

（2）高齢者の思いが理解できるようになった		記述数	看護	福祉
		40	24	16
地域への愛着	・地域への愛着が感じられた	35	22	13
暮らしにくさがある	・暮らしにくい、わからないという意見も聞かれた	3	1	2
さみしさや不安を感じた	・一人暮らしの方は不安が感じられた	1	1	
家への愛着がある	・家への愛着が感じられた	1		1

（3）高齢者が楽しみや生きがいを持つことの重要性が理解できた		記述数	看護	福祉
		3	1	2
	・生きがいについて話す時の表情が生き生きしていて、生きがいをもって生活することがこんなにも重要なことだと実感した	2		2
	・散歩を楽しみにしている	1	1	

2）家族や近隣との関係について理解できた		記述数	看護	福祉
		56	36	20
地域生活の充実	・今の街での暮らしを維持、または向上させる工夫や援助の手助けが必要になるだろうと感じた（一人一人の心がけも含め）	16	8	8
	・高齢者の多い地域、また高齢者のみの世帯が多いので、地域で協力できるような体制を整えることが重要だと感じた	3	3	
	・地域の人との交流ができる場が必要ではないかと感じた	3	3	
	・デイサービスなど医療福祉サービスが行き届いていることが、高齢者の地域での生活を支えている大きなポイントである	1	1	
	・地域の活性化には古くからのその地域の特色や生活を尊重しつつ、新旧をうまく溶け込ませていくことが必要だと感じた	1	1	
	・高齢者も駅前に出てくることが可能になるような街づくりをすることで街の活性化にもつながるのではないかと考えた	1	1	
近隣との交流がある	・近所付き合いが活発な様子で、不便なことも近隣で助け合って生活している	15	8	7
近隣との交流が少ない	・高齢者にとっては地域とのつながりや他者との交流などあまりなさそうであると感じた	12	7	5
	・地域に生活してきた人とそうでないその地域にいなかった人というのを分ける傾向にあるのを感じた	2	2	
	・足が悪いなどの身体状況や老人会などの催しものが少ないといった地域特性により地域との関わりが少ない現状も知ることができた	1	1	
家族のサポートがある	・家族で支えて暮らしている	1	1	

3）その他		記述数	看護	福祉
		25	14	11
	・実際に暮らし方の生の声を聞いたことによって、不便に感じているところや、地域のいいところなどが自分で歩いて感じたことより、明確にすることができた	13	9	4
	・よく知っている地域でも、歩いて調査することによって発見できることがたくさんあって驚いた	5		5
	・地域の住みやすさは自分たちだけで調査するだけではわからないことも多く、住みやすさ、住みにくさも人によってさまざまであると感じた	1		1
	・地域に在宅で暮らすことが大きな意味を持つことを実感できた	1		1
	・高齢者の生活や健康を、その地域の特性を踏まえながら考えていくことが大切であると感じた	1	1	
	・地域とのつながり、身近な頼れる人の存在、また自分が求められているという感覚などその地域の人々から受けるその地域での存在の認識は住民の「住みやすい」という感情に非常に影響していると感じた	1	1	
	・一人暮らしで地域の人と関わりのない人に対しての援助など、何ができるのだろうと考えなければと感じた	1	1	
	・今回1件訪問して何がわかったかといえば、よくわからない。感じたことや考えたことはたくさんあったけれど結果や結論なんかを出すにはまだまだだと思う	1	1	
	・住んでいる町にもっと興味を持つことが必要であると思った。	1	1	

Ⅱ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

1）看護学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	28	17	11
・身体状況（疾患、体調、栄養、ニーズ、既往歴）	12	7	5
・医療機関・公共機関	11	6	5
・生活状況	2	2	
・生活習慣	1	1	
・交流の場	1	1	
・人間性	1		1
（2）看護学部の学生の方が得意であると感じた点	12	2	10
・疾患の知識	5	2	3
・コミュニケーション能力	4		4
・訪問の際、落ち着いて、しっかりと向き合えていた	1		1
・言葉づかいが丁寧	1		1
・質問項目を関連付けて考えること	1		1
（3）学生の姿勢・態度	16	5	11
・積極的	4		4
・気付きが多い	2		2
・現状を把握する質問をする	1	1	
・一つのことに対して「なぜか」を考えることが多い	1	1	
・同じ仲間には積極的に質問をする	1	1	
・「交流」を大事にする	1	1	
・話の仕方が柔らかい	1	1	
・協力的	1		1
・自分の意思をはっきり伝える	1		1
・リーダーシップが発揮されていた	1		1
・元気で楽しそうに行う	1		1
・傾聴の姿勢	1		1

2）福祉学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	33	24	9
・生活環境（段差、障害物、点字ブロック）	20	13	7
・生活状況（ニーズ）	5	5	
・社会資源	3	2	1
・住環境	3	2	1
・地域の特性・雰囲気・実態	1	1	
・観察からの推理力	1	1	
（2）福祉学部の学生の方が得意であると感じた点	6	6	
・高齢者の方に話を聞くこと	2	2	
・福祉サービスの知識	2	2	
・地域といった広い視野から対象者を見ること	1	1	
・共感	1	1	
（3）学生の態度	7	4	3
・傾聴	1		1
・チームで取り組んでいる	1	1	
・高齢者の過去についての話を持ち出す	1	1	
・記録優先	1	1	
・話の仕方が固い	1	1	
・同調することが多い	1		1
・あまり意見は出さない	1		1

3）２つの学部で共通の視点・姿勢	記述数 14	看護 7	福祉 7
・対象者のよりよい暮らしを求めて、問題解決にアプローチすること	4	1	3
・高齢者に共感すること	2	2	
・高齢者に合わせた会話や態度ができる	2	2	
・相手のことを思いやる	1		1
・優しさ	1		1
・取り組みに真剣	1		1
・コミュニケーションを取ろうという前向きな姿勢	1		1
・様々な分野に目を向けながら話を聞くことができる	1	1	
・対象を尊重する	1	1	

4）他学部との協働での取り組みによる学び	記述数 32	看護 16	福祉 16
・看護と福祉の両方の視点からかかわることで、対象にとって、よりよいサービスが提供できる	4	4	
・社会福祉士が地域でどのような役割を果たしているのか知ることができ、視野が広がった	3	3	
・新しい視点で考えることができた	2		2
・お互いの考えに耳を傾け、理解しようとする姿勢が大切だ	2		2
・様々な職種の様々な専門性を多面的に捉えることが大切だ	2	1	1
・看護職としても、在宅で生活する高齢者の視点で、地域の特徴など把握することが必要	2	2	
・様々な視点から対象者を捉えアプローチしていくには、やはりこの二つの業種が連携して対象者に向き合っていかねばならないと感じた	2		2
・他学生に教えることで、自分たちも見落としがちなことを意識するよいきっかけになった	1		1
・互いの意見を共有することで、深く広く多くのことが学べ、他学部との調査は大いに意味がある	1		1
・自分の専門性の考えを押し付けないことも大切だと感じた	1		1
・医療のことは福祉に関係ないわけでなく、私たち福祉の人間もある程度の医学の知識も必要であると感じた	1		1
・生活の中の医療の位置づけを見直す必要性を感じた	1		1
・ソーシャルワーカーとしての役割についてもう少し自信を持って「こうだ」と言えるよう考えを深めたい	1		1
・福祉の視点とはどのようなものなのだろうと自分自身で考えさせられた	1		1
・自分らしい楽しい生活を送るためには、健康を維持することが何よりも大切であり、高齢者にとって医療機関は生活の一部であるということに気付いた	1		1
・コミュニケーション能力を学んだ	1		1
・自分自身がより看護としての目線で活動に参加していけば、気づけるのかなと思った	1	1	
・福祉の学生がどのくらい医療について学んでいるかを知ることで、働いてから福祉関連の職業の人と接するときに会話をしていく上で相手がどのくらい知識があるかわかっていると話しやすい部分が出てくるのではないかと思った	1	1	
・他学部の学生とかかわることは、目的の事柄を行うことだけでなく、その中でお互いの専門職の活動内容についても知る機会の場となると思った	1	1	
・自分の看護感を深めることができた	1	1	
・相互に理解し合えることにもつながった	1	1	
・今まで自分の属する分野の職のみにしか、興味や視野を向けていなかったということに気づいた	1	1	

Ⅲ．今後、協働で取り組む上で、大切にしたいと思うこと

1）協働	記述数 60	看護 35	福祉 25
・それぞれの着眼点に基づいて情報収集し多角的に対象を捉え支援を考える（視点の共有・目的の共有・不足部分の補い合い）	34	19	15
・視点が異なることを利点と捉え、意見交換しお互い尊重しあい取り組む	21	13	8
・コミュニケーションを多くとり、良い人間関係を築く	5	3	2

2）相互理解	記述数 9	看護 7	福祉 2
・お互いの特性を理解する	9	7	2

3）自己の取り組み・課題	記述数 14	看護 8	福祉 6
・お互いに積極的に意見交換することで、学びを深めていきたい	2	2	
・同じ演習を協働で行い、お互いの知識を吸収したい	2		2
・福祉についても学び、福祉に関わる人たちにも看護について興味をもってもらいたい	2	2	
・もっと自分の意見を発言していきたい	2		2
・話しやすい雰囲気を作ってグループみんなで協力して活動していけるようにしたい	2	1	1
・他職種に看護の専門職として説明できるような知識や技術を身につけておきたい	1	1	
・他職種ならではの違う視点や関わり方があると思うので、それらを大切に参考にしながら自分のケアに上手く取り入れていきたい	1	1	
・今回わからなかったそれぞれの学部の特徴を見つけ、今後に活かせるようにしたい	1	1	
・地域への発表では、福祉と看護を学んでいる学生ならではの発表ができればいいと考えている	1		1

4）事前準備	記述数 10	看護 7	福祉 3
・取り組みの時間が短かったので、十分意見交換をすることができなかった	4	2	2
・もっとお互いに何を学んできたか知りたい	2	2	
・お互いの特性を理解し、その上で地域の活動にどのように取り入れていくべきかを考えていきたいと感じた	1	1	
・地域の利点を生かしどのように改善できるかを頭に置きながら、取り組んでいかなければならないと感じた	1	1	
・もっと連携をとるべきだと感じた	1	1	
・地域密着の視点をもっていなければ、問題が見えてこないのではないだろうか	1		1

Ⅳ．今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか

1）他職種連携	記述数 11	看護 6	福祉 5
・連携に生かしていきたい	4	1	3
・スムーズに連携が取れるようになりたい	2	1	1
・積極的に連携をとりたい	1		1
・よりよい支援を提供できるよう連携していきたい	1	1	
・お互いの足りないところを補い合いながら連携していきたい	1	1	
・コンタクトを取り合い、対象が直接その専門職に頼ることのできるようにしたい	1	1	
・他職種のネットワークを持ちたい	1	1	

2）他職種理解・尊重	記述数 20	看護 10	福祉 10
・他職種の理解・把握する	10	7	3
・違った職種の意見を柔軟に受け止め、対象者に有効な援助を行っていきたい	3		3
・他職種の意見を聞くことを大切にしたい	2		2
・自分には何ができるのか確認し、考えていきたい	2	2	
・互いの専門性を尊重したい	1		1
・それぞれの職種の専門性とその必要性の理解できるように働きかける	1		1
・他職種の存在を意識したい	1	1	

3）情報交換・共有	記述数 11	看護 8	福祉 3
・情報を交換・共有する	5	2	3
・お互いの意見を大切にして関わっていきたい	2	2	
・専門職の助言をもらう	1	1	
・他の職種の考え方も参考にしていきたい	1	1	
・他の職種の人と自分の視点と両方を共有して、より多くの物を得たい	1	1	
・それぞれの職種の専門性とその必要性を全体で共有したい	1	1	

4）さまざまな視点を持つ	記述数 9	看護 6	福祉 3
・いろんな視点や思考を得ていけるようにしたい	2	1	1
・それぞれの二つの視点で個人、そして地域を見ていく	1	1	
・看護の視点から意見が言える	1	1	
・よい点にも目を向けていって、さらにいい視点で観察することに活かしていきたい	1	1	
・対象やその家族を多角的にとらえる	1	1	
・広がった視点を大切にしたい	1	1	
・看護の視点を理解し、現場で生かしたい	1		1
・看護の視点を理解できるよう、学校での学びを大切にしたい	1		1

5）退院後、先を見据えた視点	記述数 5	看護 5	福祉
・退院後の生活を見据えて、アセスメントや看護の視点を持っていきたい	3	3	
・患者さんの退院後の生活について個別な視点を持ってプランを考えることが大切	1	1	
・病院で出会う人たちもゆくゆくは地域に帰っていくことを見越して関わっていく	1	1	

6）コミュニケーション	記述数 7	看護 2	福祉 5
・他職種間で積極的にコミュニケーションをとっていきたい	2		2
・病院実習で高齢者とコミュニケーションをとっていきたい	1	1	
・人の意見や人の考えをじっくり聞けるようにしていきたい	1	1	
・聞き取りのスキルを生かしていきたい	1		1
・どれだけ小さなことでも、発言していこうと思う	1		1
・目上の人に対しての敬語をもっと学ばなくてはいけない	1		1

7）住民・高齢者の視点・気持ちについて	記述数 7	看護 7	福祉
・高齢者の目線を意識する	2	2	
・高齢者が住み慣れた地域や在宅で生活したいと思う気持ちを大切にした関わりをしていきたい	1	1	
・実際の声を大切にしながら今後に活かしていきたい	1	1	
・住民の方の視点に近づけるようにしていきたい	1	1	
・地域の活性化も含め、高齢者の人が住みやすいような地域になるようにしたい	1	1	
・看護の視点から、地域住民の望む生活の実現のためにどのようなことができるのか、考えたい	1	1	

8）地域の現状の把握	記述数 9	看護 4	福祉 5
・サポート体制は整っているのか、また地域には医療機関があるのか、高齢者が集うような場所があるのか等、看護師が情報として捉えておくことが必要	2	2	
・地域の情報や現状に興味を持ち、どのような支援が必要なのか、自分には何が出来るのかということを考えていきたい	2	2	
・「地域でくらすこと」について考えたい	1		1
・地域と環境がどのように相互作用するのかなど考えていきたい	1		1
・地域に暮らす高齢者のつながりについても深く見ていきたい	1		1
・専門職として現場で働けるようになったら、まずは自分の足で地域を歩き知ることから始めていきたい	1		1
・今後就職した時、今回のようにどこにどういう公共の施設、お店、またどのような方達が住んでいるのかを調べてみようと思う	1		1

9）学び・今後の取り組み	記述数 18	看護 4	福祉 14
・保健師の実習で生かしたい	1	1	
・高齢者が健康に、また楽しい生活を送っていけるよう医療者側も支援方法や介入方法を考え、環境を整えていけるよう働きかけていくことも大切な役目なのではないか	1	1	
・スタッフ間の関係が作られ、良好に保つには何が必要になってくるのかこれから考えていきたい	1	1	
・私達自身も自転車の路面駐車をやめたり、スピードを落とすなど、できることは取り組むべきだと学んだ	1	1	
・利用者のニーズ解決だけではなく、潜在的にある問題点に気づいたり、地域の問題点など個人のニーズを多面的にとらえ、解決できるような力を培っていけたらと思う	1		1
・気づきの姿勢をこれからの学習にも生かしたい	1		1
・身の回りの地域環境が、私と高齢者や障害者とでは、捉え方、感じ方が異なる	1		1
・何が不自由で、どう改善すべきなのかという視点	1		1
・働く場所の中だけを見るのではなく、周囲の方々の意見も取り入れられるといい	1		1
・違う視点を持っているからこそ見えるものがあるということをしっかり頭の中に入れておきたい	1		1
・危険だと思われるところでは、人に手をかしてあげられるようになりたい	1		1
・人との関わりなどこれからの自分の成長につなげていきたい	1		1
・地域の特性を活かす事とその地域の変化を良いものにしていく為の地域福祉とはどのようなものかを学び、地域福祉への理解を深めていきたいと思う	1		1
・実習や授業の中でさらに自分の目指す場所について考えを深めていきたいと思う	1		1
・普段から町の様子をみて、どのように改善していけば、よりよい町になるかを考えていきたい	1		1
・もっと地域住民にとって暮らしやすい甲府にするためにはどうするべきなのかを考えていけたらと思う	1		1
・違法駐輪や歩道の破損がどれだけ迷惑になっているのか、改善するにはどういった心がけが必要なのか考えて生活することで、少しでも暮らしやすい街になるのではないだろうか	1		1
・まずは4月の発表に向けて、もう一度演習での体験を話し合いたい	1		1

10）意見・要望	記述数 1	看護	福祉 1
・キャンパスは違うが同じ大学内にある学部同士であるから、もう少し早い段階で、例えばSW実習が終わった直後などに行ってみてもいいのではないかと思った	1		1

V．その他、考えたこと、疑問、感じたことなど

1）貴重な体験	記述数 15	看護 7	福祉 8
・違った視点を学ぶことができ、協働することを実感として学べた。	10	4	6
・実際に地域に行き、住民の方の生活の場をみたり、話を伺ったりすることで高齢者の生活を把握できたので、とても実践的で学びの深まる体験ができた	5	3	2

2）実施時期	記述数 2	看護 1	福祉 1
・時間的に余裕のある学年の時にしてほしい	1	1	
・演習時期を早くしてもらいたい	1		1

3）要望・意見	記述数 8	看護 3	福祉 5
・時間が短くて１日でまとめるのは大変であった。	3	3	
・演習の日程や発表の方法などを早く知らせて欲しい	2		2
・これからもこの教育GPを続けてほしい	2		2
・ヒールでの地区調査は歩きにくく、つらかった	1		1

4）感想	記述数 21	看護 10	福祉 11
・地域調査の時間が短いように感じた。	2		2
・対象者の方の力になれるよう、看護と福祉、そして、地域住民の方々と連携しあっていければと感じた	2	2	
・協力してくださった、地域の方々には本当に感謝したい	2	1	1
・高齢者の、私たちを「もてなす」気持ちがすごく感じられた	1		1
・地域調査時に、目的地を探していたり、何を撮影するかなどに気を取られていて、すれ違う住民に挨拶をすることができず、恥ずかしく思っている。相手から話しかけられるのを待つのではなく、自分たちの活動について話をすることで、地域の方との交流が図れたし、地域の方も今回の活動に興味・関心を持ってくれたのではないかと感じた	1		1
・調査結果の発表などに時間を掛けたり、グループ内での専門職の連携について話し合う時間があったりすればより充実したものになったのではないか	1		1
・多くのグループの活動内容を共有できたのでよかった	1	1	
・初めは看護２人、福祉１人という状況に不安を感じていたが、みんな優しく素敵な人で良かった	1		1
・卒業後も大学を通した多職種者とのネットワークをもてるといいと感じた	1	1	
・地域における看護・介護について考えることができたので、今後の学びや実践につなげていきたい	1	1	
・今後働くようになれば、他職種との連携が必要となる場面が多くなるので、今からお互いにどのような勉強をしているのか、何を専門としているのかを知っておくことは大切だと感じた	1	1	
・将来、専門職として地域に介入する際は、常に地域の目線を忘れずに本当の支援とは何かを考えながら働いていきたい	1		1
・集計したデータは、ご本人たちには冊子などで個別に結果を提示するのか。全体の発表はあるが、私たちが訪問させていただいたお宅の方はご自分では外出できない方でしたので、気になった	1		1
・今回の訪問宅は、一人暮らしの方はいたのか。家族からサポートを受けずに生活している方など他の環境も知ったらもっと視野も広がるのではないか	1		1
・閑散とした商店街がとても目立ったため、活性化のための具体的な取り組みがあるのかどうか疑問に感じた	1		1
・相手や自分のいいところ・悪いところをそれぞれに還元できるといいと感じた	1	1	
・互いの特徴や相違点を感じることができなかった。それらを明らかに感じる方法などはないかと感じた。	1	1	
・大変だと思った	1	1	

（2）学　生　評　価　表

２００８年度 教育GP「学際統合型専門職連携演習」評価（学生）				
評　価　項　目	きょうりつ　(%)			n=53
	A	B	C	D
1　看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。				
1）自分の専門性(知識・技術)を認識し、説明することができる。	41.5	47.2	11.3	0.0
2）自分と相手の専門性(知識・技術)について、その共通点と相違点について考えることができる。	47.2	50.9	1.9	0.0
3）互いの意見を尊重することができる。	84.9	15.1	0.0	0.0
4）専門職が互いに連携する意義を考えることができる。	73.6	24.5	1.9	0.0
5）チームアプローチを進める方法について考えることができる。	30.2	49.1	20.8	0.0
2　地域特性と生活および健康ニーズについて考えることができる。				
1）担当した地域の特性について考えることができる。	64.2	35.8	0.0	0.0
2）暮らしを支える現状の社会資源について考えることができる。	20.8	64.2	15.1	0.0
3）暮らしにくさについて考えることができる。	79.2	20.8	0.0	0.0
4）地域の人々のつながりをイメージすることができる。	50.9	34.0	15.1	0.0
5）生活および健康ニーズについて考えることができる。	50.9	45.3	3.8	0.0
3　実態調査や数的データ分析をし、わかりやすい報告書を作成することができる。				
1）情報やデータを収集することができる。	56.6	39.6	3.8	0.0
2）情報やデータを共有することができる。	69.8	26.4	3.8	0.0
3）情報やデータを多角的に議論することができる。	22.6	64.2	13.2	0.0
4）情報やデータを客観的に分析することができる。	28.3	62.3	9.4	0.0
5）報告書を作成することができる。	30.2	56.6	13.2	0.0
4　学習の成果を地域に伝え、その反応から振り返ることができる。				
1）専門職が互いに協働して学習成果を伝えることができる。	50.9	47.2	1.9	0.0
2）発表に対する地域の反応を受け止めることができる。				
3）地域の反応から学習成果について振り返ることができる。				
4）発表内容や発表方法について評価することができる。				
5）報告をもとに、地域への予防活動につなげることができる。				
5　主体的・積極的に演習に参加し、相手の意思を尊重する態度を身に付け、グループ内での役割を担うことができる。				
1）相手の話を傾聴し、自分の意見を述べることができる。	54.7	35.8	9.4	0.0
2）調査協力者に感謝の意を伝えることができる。	75.5	22.6	1.9	0.0
3）身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないように接することができる。	64.2	32.1	3.8	0.0
4）得られた情報の保護に努めることができる。	94.3	0.0	5.7	0.0
5）グループワークに積極的に参加し、グループ内での役割を担うことができる。	47.2	43.4	9.4	0.0
総合評価	30.2	67.9	1.9	0.0
評価基準　A：目標を達成できた B：目標をある程度達成できた C：目標を達成するにはやや努力を要する D：目標をほとんど達成できなかった				

7）教員評価―演習内容（企画・実施）の妥当性及び教育効果―

（1）演習回数及び方法の妥当性について

【演習回数及び内容】

回数	日　時	内　　容
1	1/6(火)9:30～12:10	講義(きょうりつ地区の高齢者と地域特性について / 地域マップの作成の概要と手順 / 聞き取り調査用紙の説明と面接時の接遇及び注意点)→グループワーク(自己紹介・演習当日の役割分担の決定など)→ロールプレイ(聞き取り調査)
2	1/20(火)13:30～15:00	聞き取り調査宅の地図の印刷と訪問用マップ作り ※9 グループの各リーダーのみ出席
3	1/31(土)9:00～17:00	フィールドワーク(地区踏査、高齢者聞き取り調査)→グループワーク(地域マップの作成、訪問調査のまとめ)→プレゼン(9 グループによる発表)
4	4/7(火)14:50～18:00	グループワーク(1 回目:9 グループ、2 回目:4 グループ)→プレゼン(4 グループによる発表)
5	4/18(土)9:00～14:00 14:15～16:30 発表会	模擬発表会(質疑応答)→グループワーク(4 グループ:発表に向けて修正)→最終模擬発表会(質疑応答)→グループワーク(4 グループ:発表に向けて最終修正)

【分析・評価】

「専門職連携演習」は、正課科目ではないため(平成 23 年度から必修科目)、現存する科目(看護学部 ： 看護学原理Ⅱ・地域保健活動論Ⅱ・在宅看護活動論、人間福祉学部 ： ソーシャルワーク技術演習Ⅲ・Ⅳの一部に充当する)と連動させたり、課外学習として時間を確保しながら展開した。ゆえに、正規の講義時間外での活動については、限られた学生(リーダー、サブリーダー)だけが負担を担うことがないよう、学生全員が平等に演習に参加し学びを共有することを前提に、演習目標を達成するための教育プログラム(演習内容)を企画した。

また演習形態としては、本演習の目的が学際的教育にあることから、ロールプレイやフィールドワーク、グループワークなどを用い、両学部(看護学部・人間福祉学部)の学生が互いに情報及び意見交換を行う中で、互いの専門性を学ぶ機会を多く提供した。

演習の中でも、特に重点を置いたのは、グループワーク 5 回の展開方法であった。最初の 3 回を「作業期」と位置づけ、フィールドワークで自分たちが集めたデータ(担当地区を 9 のグループに分け地区踏査し作成した地域マップと聞き取り調査の結果をまとめたもの)を、グループ毎に整理し、地域の特性や高齢者が抱える健康及び生活課題、互いの専門性の共通点・相違点について話し合った。その後、9 つのグループを 4 つのグループに再編し、9 つのグループがまとめた結果を基礎資料に、前述した 4 つの演習目標に沿ってそれぞれディスカッションし、演習のまとめと発表会に向けての準備(パワーポイントの作成・模擬発表会)を行った。またグループワークには、オブザーバーとして教員が入った(担当制)。

このように、きょうりつの演習の組み立てのベースには、常に「学生の全員参加」を置き、「学生と教員がともにゼロから作り上げること」を目標にした。そのため、演習方法として、作業グループを数回に渡って再編成し、ステップ方式によりグループワークを展開したことは、始めに属したグループメンバーだけではなく、より多くの「他者と話し合う場」を提供することとなり、様々な視点と向き合う中で、自己の専門性や協働の意義を問う好機となったと考える。またグループの再編成は、学部を越えた学生間交流を促すためにも大きな効果があり、4 月 18 日の合同発表会後には両学部の学生間の積極的な交流がみられた。

今回の演習は初年度であり、試行錯誤しながらの展開であったが、演習全体を通して、学生全員が最終発表会に向けて懸命に取り組めたと評価する。

（2）学生の達成度・満足度 － リフレクションペーパーと評価表から －

本演習によって、学生たちは何を学び、その達成度・満足度などの成果はどのようなものであったのだろうか。参加した全学生に対し、2 回のリフレクションペーパーへの記載による振り返りと、演習全体を通しての授業評価をしてもらった。

以下、質問順にその主な回答内容を記載した。

1）1 月 6 日のオリエンテーション終了後のリフレクションペーパー

提出者は看護学部学生（以下、看護学生）が 28 人、人間福祉学部学生（以下、福祉学生）が 16 人の合計 44 人であった。

Ⅰ．他学部の学生と協働で取り組んで互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

看護学部の学生が調査において観察する優先度の高い着眼点は、「身体状況（健康状態・疾患の程度・内服）を良く見ている」が 13 人と最も多く、この他には「日常生活状況や生きがい、楽しみなどを把握している」を挙げた者もいた。また福祉学部の学生の優先度の高い着眼点は、「生活の様子（をよく観察する）」が 4 人、「利用中や過去に利用した福祉サービス」と「社会交流（友人関係）の把握」がそれぞれ 3 人などであった。

また、看護学生が福祉学生より得意であると感じた点では、「身体状況についての観察」「生活から健康面を考える視点」などが少数ながら挙げられた。さらに看護学生の姿勢・態度で得意である点は、「（取り組みが）積極的」を挙げたのが 5 人、「グループワークが上手」としたのが 3 人いた。

一方、福祉学生の方が得意である点については、「介護保険や福祉サービスについての知識（が豊富）、社会資源の活用方法」などが 4 人おり、その他「高齢者を取り巻く環境や資源を視野に入れ、対象をとらえる」、「コミュニケーション能力が高い」、「過去の在宅訪問の経験を生かし、（個々の）高齢者の特徴を理解した上での接触が出来ていた」などがみられた。また福祉学生の姿勢・態度に関しては、3 人が「看護学生より消極的」という評価をしていたが、この点については、グループ構成が看護学生と福祉学生がほぼ 2：1 という人数割合であったことが影響し、看護学生の方がより積極的に発言できたように推測する。

2 つの学部で共通する視点・姿勢では、「高齢者に接する態度として、高齢者に寄り添い、高齢者を中心に物事を見る」を挙げたのが 3 人おり、「人を相手とした専門職」「家族を含めた視点を持っている」「双方の意見を尊重する」「生活という視点をもっている」「お互いの知識についてあいまい」などを挙げた者もいた。

また、「双方が協働して取り組むことでの学び」については、最も多い 23 人が意見を出し、福祉の学生 5 人は「（高齢者への）質問を検討することで、観察の視点や考え方の違いが分かった」、看護の学生 6 人は「相互の専門性を活かしてアプローチすることによってより良いケアにつながる」を挙げていた。その他、「相互の視点が異なってとても勉強になり視野が広がった」「他学部の取得資格、授業、実習などを知ることができた」「双方が切り口・視点が違うので、連携によって高齢者をより多角的に捉えられる」などが挙げられた。

最後に要望・意見では、「お互いの特徴について、今回の取り組みでは良く分からなかった」が 11 人、「今後の取り組みによって他学部の学生の特徴をみていきたい」が 6 人いた。また福祉の学生 2 人からは、「福祉とは何かを改めて考えていきたい」という記載があった。

以上のことから、両学部の学生とも、連携して取り組む意義については理解できたことがうかがえる。

Ⅱ．今後、協働で取り組む上で大切にしたいと思ったこと

「協働」については、44 人中 40 人と最も多い記述があった。「双方の着眼点に基づく情報を収集し、多角的に捉え支援を考えたい」「視点が異なることを利点として捉え、意見交換を行い、相互を尊重しながら取り組んでいく」がそれぞれ 18 人であった。さらに「(双方の) コミュニケーションを大切していきたい」が 4 人いた。このことから、演習の基本的目標はほとんどの学生が理解したといえる。

「相互理解」では、14 人が「相互の特性（専門性など）を理解する」を挙げた。

また「自己の取り組み・課題」においては、7 人の看護学生が記述し、「連携についての考察を深める」「協働から自己の視点を広げる」「自己の専門性を確認する」「看護学生も福祉の知識は必要」などの記載があった。その他、「看護学生の（演習参加）人数が多いので福祉学生に配慮・協力したい」という心配りを記述した者も 2 人いた。

Ⅲ．今回の体験を、今後どのように活かしたいと考えるか

「他職種との連携」では、「双方の専門性を活かすことで、高齢者にとって最良の知識・技術を提供していきたい」は 11 人と最も多く、「他職種との協働場面では積極的に自分の意見を出し、相手の意見を聞いてみたい」などが出された。

「他学部学生からの学び」については、「お互いの特徴を活かしたい」「双方の視点の違いを観察しながら、特性の違いを学びたい」「質の高い看護を提供するためには他職種との連携が欠かせないと思うので、連携の重要性や問題点を学ぶ」などが挙げられた。

「学び・今後の取り組み」では、「それぞれの専門職としての情報を提供できるように勉強していきたい（看護は看護として、福祉は福祉としての役割、専門性、強みを考える)」が 6 人、「今回の演習を機会に交流を深めていきたい」が 4 人となっていた。

Ⅳ．その他、考えたこと、疑問、感じたこと

「学生の時から他職種を目指す学生との関わりがあることで、より実践的な連携について学ぶことが出来るいい機会で、連携の大切さや自らの看護観を深めことになる」といった意見が、看護学生 4 人からあった。

「実施時期」などについては、「もう少しお互いを知る時間を増やして欲しい」が 3 人あり、「時期を早くして欲しい」「調査日程など、もう少し早く情報提供して欲しい」という意見もみられたので、今後、カリキュラムの内容・時期などを改善していく必要があるだろう。

「その他」としては 19 人の書き込みがあり、「双方の学生がその違いなど多くのことを学びたい」「積極的に交流したい」「学部を超えて仲良くなりたい」「自分たちの専門性も理解して欲しい」「少し不安があるがみんなで協力してよいプロジェクトにしたい」などの積極的な意見が寄せられた。

以上、本演習 1 回目のオリエンテーション時のリフレクションペーパーの記述を紹介したが、全体的に見て、単に未知なるもの・好奇心だけではなく、高齢者などサービス対象者に対し、看護と福祉、それぞれの専門性が連携して協働することの意義は理解していることがわかった。しかし、それぞれがどのような専門性を持っているか、協働するとは具体的にはどのようなことなのかについては、この時点では明確に理解していないことがうかがえる。これらの点については、今後の実践によって解明し、理解を深めていくことへの期待感はにじみ出ていた。

2) 1月31日、フィールド演習終了後のリフレクションペーパー

提出者は看護学生が33人、福祉学生が21人の合計54人であった。以下に質問項目別に主な記述をみていく。

Ⅰ．地域住民の「生活の場」を体験して、感じたこと、考えたこと

「高齢者の生活の様子や生活環境が理解できるようになった」では、複数回答を含め69人から回答があった。「高齢者の住む街について様々な発見ができた」が29人、「地域踏査により生活の不便さ、高齢者への危険、生活のしやすい点の発見」に38人が挙げた。普段、何気なく生活している街でも高齢者の立場・視点からみるとたくさんの発見があったようで、フィールド演習を行うことの重要性が確認できた。

また、高齢者家庭の訪問では、高齢者の思いが理解できるようになったとして、「地域への愛着が感じられた」が35人で最も多く、その他3人が「暮らしにくいといった高齢者がいた」を挙げていた。

さらに、「家族や近隣との関係について理解できた」では30人から回答があったが、「今の街での暮らしを維持・向上させる工夫や援助が必要であろうと感じた」が16人いた他、「高齢者が多い地域、さらに高齢者のみ世帯が多いので地域で協力できるような体制をつくる必要性を感じた」「地域で交流できる場が必要では」などの意見もあった。

一方で、「近所付き合いが活発な様子で不便なことも近隣で助けあって生活している」とした学生も15人いたが、反対に近隣との交流が少なく「高齢者にとって地域や他者との交流がなさそう」と感じた者が12人いた。一人ひとりの高齢者の状況によって交流状況には大きな差があり、それぞれの援助方法が異なることも理解することが必要であろう。

この項の最後には、「その他として感じたこと」として25人の記入があった。13人からは「高齢者から生の声を聞いたことによって、不便さ、地域の良さなど、地域踏査よりもより明確できた」とあったが、5人は「よく知っている地域でも歩いて調査することで発見できることがあって驚いた」と答えていた。学生は、地域踏査の必要性とともに、家庭訪問により直接高齢者から聞き取りすることの重要性を認識したようだ。この他、「1軒の家庭訪問だけではよく分からない。感じたこと考えたことはたくさんあったが、結論・結果を出すにはまだまだだと思う」と冷静に自己分析をし、今後の課題としている意見もあった。

Ⅱ．他学部の学生との協働で取り組んで、互いの特徴で気づいたこと、考えたこと

この設問は、1月6日のオリエンテーション時に行ったものと同様であるが、フィールド演習によって、学生はどのように変化し、また深まりがみられたのだろうか。

看護学生の特徴として、「優先度の高い着眼点」では28人から回答があり、そのうちの12人が「疾患、体調、栄養、既往歴などの身体状況」を、11人が「医療機関、公共機関」などを挙げていた。一方、福祉学生の特徴としては33人が回答し、その中で20人が「生活環境（段差、バリアフリー、道路舗装、商店、信号機の音など）を見る視点が高い」ことを挙げた。また、「生活上のニーズ」、「社会資源」「住環境」なども視点として挙げていた。まさに、それぞれの専門性が発揮されていると見ていいだろう。

また「福祉学生より得意であると感じた点」では、「疾患の知識」が5人、「コミュニケーション能力」を4人が感じていた。一方「看護学生より得意である点」では、「高齢者の話をよく聞くこと」「福祉サービスの知識」などを挙げていた。

さらに、看護学生の姿勢・態度では16人から意見があり、最も多かったのが福祉学生4人からの「積極的」、2人からの「気づきが多い」などであった。この他、「話の仕方がやわらかい、自分の意思をしっかり伝える、リーダーシップをとる」など、全て好意的な意見であった。また福

祉学生の態度についても、「傾聴」「チームで取り組んでいる」など好意的な見方がある反面、「記録優先」「話の仕方が硬い」「あまり発言しない」など否定的な意見もあり、これらは反省すべき点であろう。

両学部に共通する視点・姿勢においては、「高齢者のより良い暮らしを求めて問題解決にアプローチすること」が4人、「高齢者への共感」「高齢者に合わせた会話や態度が出来る」が2人ずつ、「相手を思いやる」「優しさ」「さまざまな分野に目を向けながら話を聞く」などが挙げられていた。

「協働での取り組みによる学び」では、32 人から様々な意見が寄せられた。「双方の視点から関わることでより良いサービスが提供できる」と連携の必要性を言及した学生が4人いた。また看護学生から、「社会福祉士が地域でどのような役割を果たしているかを知ることが出来、視野が広がった」という記載があり、認知度が必ずしも高くない社会福祉士の理解促進にもつながっていることがわかった。この他、「新しい視点で取り組めた」「お互いの考えに耳を傾け理解しようとする姿勢が大切」「多様な専門性によって多面的に捉えることが重要」「業種間の連携の重要性に気づいた」など、単に看護と福祉だけに限定しない幅広い専門職の連携の重要性を指摘した意見も少なくなかった。

Ⅲ．今後、協働で取り組む上で、大切にしたいと思うこと

「協働」では、看護学生30人、福祉学生30人の計60人からの記述があった。「双方の着眼点に基づき情報収集し多角的に捉え支援を考える（視点・目的の共有、不足部分の補い合い）」としたのが34人と最も多く、次いで「視点の異なることを利点と捉え、意見交換し尊重しながら取り組む」が21人であった。いずれの学生も、連携・協働の重要性を理解した取り組みを認識していることがわかった。その他5人が、「（双方の）コミュニケーションを多くとり、よい人間関係を築く」と、協働作業における基本的な留意点を指摘していた。これと関係して「相互理解」では、「お互いの特性（専門性）を理解する」とした意見が9人あった。

一方で「自己の取り組み・課題」として認識していることは、「相互が積極的に意見交換することで学びを深めたい」「同じ演習を協働で行い、相互の知識を吸収したい」「福祉についても学ぶが、看護についても興味を持って欲しい」などとそれぞれの専門性に固執することなく、双方の専門性あるいは専門知識を出来るだけ共有することが必要であるとの認識を示していた。

また、「自分の意見を発言していきたい」「話しやすい雰囲気をつくりみんなで協力した活動を」などと前述した協働作業での留意点を課題として挙げている意見もあった。

では、このフィールド演習にあたっての「事前準備」はどのようにしたのだろうか。「時間が短かかったため十分意見交換が出来なかった」が4人、「もっとお互いに何を学んでいきたいかを知りたい」が2人いた。これらの指摘は、今回の演習が限られた日程・時間の中で行われていることから、当然のことであり、演習目標の明確化などとともに、学生が自主的に考えられる時間的ゆとりを確保することもカリキュラム編成にあたっては留意しなければならない点であろう。

Ⅳ．今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか

「他職種連携」の項では11人が回答しており、「連携を活かしていく」が4人、「スムーズに連携が取れるようにする」が2人などであった。連携の重要性については、すでに十分理解しているため、改めて回答する必要はないと考え、少数の意見にとどまったのだろうか。

「他職種理解・尊重」では20人が記載し、「他職種の理解・把握」が10人、「他職種の意見を柔軟に受け止め、有効な援助を行っていく」が3人、「他職種の意見を聞くことを大切していく」が2人であった。一方で、「自分が何が出来るのか確認し、考えていく」という意見もあり、他職

種の意見を大切にすると同時に、自分自身の専門性を発揮することの重要性を認識していることがわかった。

「情報交換・共有」では、9 人が「さまざまな視点を持つ」と回答し、情報交換によって共有することが、より良い支援に結びついていくことを理解していることがわかる。

「退院後の先を見据えた視点」では、看護学生 5 人が回答していた。病院勤務の看護師が入院患者に対して院内における最善の治療・療養環境を提供することを考えることは当然のこととして、退院後の生活を視野に支援を行うことまで視点にすることへの気づきは評価されていいだろう。

「コミュニケーション」については 7 人が回答し、「他職種間や高齢者とのコミュニケーションが大切」「人の話をじっくり聞くこともスキル」などという意見があった。

「住民・高齢者の視点・気持ち」においては、7 人の看護学生から回答があった。地域で生活する高齢者に直接面接したことから、「高齢者の目線を意識」「高齢者の気持ちを大切にしたい」「住民の視点に近づきたい」など高齢者や住民、地域の目線に立って考えることを認識したのであろう。

「地域の現状の把握」では、9 人（看護学生 4 人、福祉学生 5 人）から回答があり、地域踏査や高齢者訪問などを通じて「高齢者へのサポート体制、地域医療機関の存在、集いの場などについての情報把握の必要性」「地域情報の把握による支援方法や自らの役割の検討」など、単なる個別支援だけではなく、地域という面からの支援方法・体制などの視点を持つことができるようになっていることが伺える意見であった。

「学び・今後の取り組み」では 18 人の記載があったが、そのうち 14 人は福祉学生からであり、「利用者のニーズ解決だけでなく、その潜在的な問題にも気づきたい」「地域特性を活かすことや地域の変化を良い方向にもっていくために地域福祉ということの理解を深めたい」「住民にとって暮らしやすい地域にするための方策を考えたい」の個別から地域の視点への広がりを意識していた。また看護学生からは、「保健師実習に活かしたい」「在宅高齢者が健康に楽しい生活を維持していけるよう医療従事者の援助・介入方法を考える必要がある」などがみられた。

「意見・要望」では、福祉学生から「今回の演習実施を現場実習直後に行って欲しい」との要望があった。今後、カリキュラムを検討する中で、開催時期についても考慮していく必要があるだろう。

V．その他、考えたこと、疑問、感じたこと

15 人の学生からの記述があったが、これまでの重複を避けて記述する。

「実施時期」では、「時間的に余裕のある学年で」「時期を早くして欲しい」という意見があった。全体のカリキュラム編成から時期を考えなければならないが、本演習は、それぞれが一定の固有の専門性を履修した上でなければ教育効果は半減することが予測できるので、「余裕のある時期、早期実施」だけでは問題があろう。

「要望・意見」の中に、「演習時間が短く 1 日でまとめるのは大変だった。他学部の学生と関わる時間がもっと欲しい」があった。確かに実態調査とまとめを 1 日で行うことはかなりハードなスケジュールであったに違いない。ある程度時間的にゆとりを持つ中で、双方の学生が相互に理解し合うことが、より円滑な協働作業にもつながるであろう。また、「演習日程・発表方法を早く知らせて欲しい」という要望もあった。

これらのいずれもがもっともな意見であり、今後のカリキュラム編成において十分検討すべき点である。

「感想」では、21 人から記述があった。「地域踏査時間が短かった」「看護と福祉、そして地域

住民との連携が重要」「地域踏査時に調査することに気をとられ、すれ違う住民との挨拶が出来ず恥ずかしかった。挨拶することによって地域との交流は図られ、自分たちの勉強のことも理解が得られたのではないか」「今後、就労後も連携が必要なる場面も多くなるので、今から他職種の仕事内容の勉強が必要だと思った」「将来、専門職として地域に介入する際には、常に地域の目線を忘れずに本当の支援とは何かを考えていきたい」等々、様々な視点からの記述があり、今回の演習が学生にとって大きな学びになったことがわかった。

3）4月18日合同発表後の演習評価表から

先に示した評価表の項目ごとに、「A：目標を達成できた」、「B：目標をある程度達成できた」、「C：目標を達成するためにはやや努力を必要とする」、「D：目標をほとんど達成できなかった」の4区分により自己評価をしてもらった。きょうりつグループは、54人中53人から提出があった。

まず、演習全体を通じての「総合評価」では、「A」が30.2%、「B」が67.9%、「C」が1.9%、「D」がなしという結果だった。「A」評価は少ないが、この要因のひとつとして考えられるのが、4月18日発表会当日、看護1人、福祉9人が就職活動などによって欠席したことが挙げられる。つまり、発表会に参加していなければ全日程を消化したことにはならず、自己採点として「A」評価をつけることはできないであろう。このことを勘案すれば、「A」と「B」を合わせて98%という数値は、ほぼ全員の学生が演習目標を達成、あるいは、ある程度達成したことになり、連携教育の目的は果たせたと考えてよいだろう。

「看護学生と福祉学生の相互理解ができる」では、「互いの意見を尊重することができる」は、「A」が84.9%で残り全員が「B」であった。次いで「専門職が互いに連携する意義が考えられる」は、「A」が73.6%、「B」が24.5%となっており、それぞれに専門性の理解とともに連携に意義が理解できたことが伺える。しかし、「チームアプローチを進める方法について考えることができる」では、「C」が20.8%と多く、「A」が30.2%と低くなっている。これについては演習時、話し合う時間が少なかったことが要因として挙げられるだろう。

「地域特性と生活及び健康ニーズについて考えられる」については、「暮らしにくさについて考えることができる」は、「A」が79.2%、「B」が20.8%で全員が「A」か「B」としており、実際の地域踏査や家庭訪問による聞き取りが効果をあげていることがわかる。

一方で「暮らしを支える現状の社会資源について考えることができる」では、「B」が64.2%と最も多く、「C」も15.1%あった。地域踏査をしたにも関わらずこの数字になったのは、社会資源とは何かや、これまで地域という面からの観察体験がなかったことなどがその要因であろうか。「地域の人々のつながりをイメージすることができる」においても、似たような結果になっている。今後、地域で活動する民生委員や自治会役員、地域配置の公民館・福祉施設などの調査を組み込むことによって、「地域と人を結ぶ」点についても理解を促していくことが必要であろう。

「実態調査や数的データ分析をし、分かりやすい報告書を作成することができる」では、「情報やデータを収集することができる」や「情報やデータを共有することができる」など「A」が69.8%で、「B」と合わせると96.2%と、ほぼ全員の学生が一定の達成感をもつことができた。反面、「情報やデータを多角的に議論することができる」「情報やデータを客観的に分析することができる」「報告書を作成することができる」では、「B」が60%前後で最も多く、「C」も10%前後と少なくない。情報収集、分析、報告書作成は専門職として不可欠なスキルであるため、カリキュラム編成において時間的配慮とともにその獲得方法の検討を行う必要があるだろう。

「学習の成果を地域に伝え、その反応から振り返ることができる」は、今回発表会が関係者向けのみの1回に限られたため、十分な評価は不可能であった。しかし、「双方の専門職が協働して

学習成果を伝えることができる」では、ほとんど全員が達成感を持つことができた。短時間であっても成果をまとめ、意義ある発表ができたことからの満足感であろう。今後、幅広い地域住民に対する発表機会を提供することが課題であろう。

最後の「主体的・積極的に演習に参加し、相手の意思を尊重する態度を身に付け、グループ内での役割を担うことができる」では、「調査協力者への感謝の気持ちを伝える」と「個人保護の守秘」などは「A」が多かった。「相手の話を傾聴と自分の意見発表」「グループワークへの積極的参加、グループ内での役割を担う」などは「A」と「B」が拮抗していたが、この点は、前述したように看護学生と福祉学生の人数的割合が 2:1 であったことから、福祉の学生がなかなか積極的に参加することができなかったことも評価に影響していると思う。

以上、2 回のリフレクションペーパーと評価表によって学生の成果などを振り返ってきた。全体的にみれば、評価表における総合評価にあるようにほぼ全員の学生が、一定の達成感を持っていることがわかり、様々な限られた制約の中にあっても連携教育の成果が得られたといってよいだろう。

（3）教育効果—成果と課題—

1）タスクゴール（演習目標）と課題

演習目的・目標と学生の達成度・満足度を照らし合わせてみると、本演習によって、「看護学部」及び「人間福祉学部」の学生が相互の専門性を意識しながら、両者が様々な視点から情報及び意見交換をする中で、将来自分が得るであろう資格について振り返ることができ、かつ他職種が「協働することの意義」について学び取れたと考える。また、グループワークを重ねたことにより、視点が広がり、得られた情報や調査結果を多角的に分析することの重要性に気づくことができたと思う。また、何よりも良かった点は、合同発表会終了後に、学生たちから「限られた時間の中で、ものすごく頑張った。発表会をするために、みんなで話し合ったことで、この演習の意味を考えることができた。達成感を味わうことができた」という言葉が聴かれたことであった。但し、最終の合同発表会に欠席した学生については、評価表から達成感・満足度が低いという結果が出ているので、演習日程の組み方については今後の課題であるといえる。

さらに反省点として、評価表を学生に提示するのが合同発表会当日、即ち演習最終日になってしまったということが挙げられる。演習に入る前に学生に評価表を提示することによって、評価すべき視点が明確になり、学生自身が具体的に何を学び、達成すべきタスクゴールがどこにあるのかが理解しやすくなる。実際に学生からも、この演習で何を学び取ればよいのかが見えにくかったとの意見も出されたことから、評価表の配布方法に関しては、次年度の課題であると考える。

本演習は、「地域マップの作成」と「高齢者への聞き取り調査」という 2 本柱で行ったが、センター職員の皆様の多分なご支援とご協力なくしては運営することができなかった。心より感謝したい。高山所長からは、合同発表会で、「今回、高齢化率が 35%と高い地域で演習をしてもらったが、高齢者が住み慣れた環境でずっと暮らしたい、自分らしく暮らしたい、という思いを持って暮らしていることに気づいたことは大変素晴らしい発見だったと思う。学生の目から見ると、商店街は普段人通りがなく、道はガタガタで、都市部なのに過疎化が進んでいるが、掛かりつけ医が近くにあったり、商店街や近所との結びつき、緊急通報装置の活用など、遠く離れたご家族ではなく、近隣の人とつながりながら生活しているという地区の特性が理解できたと思う。また、一人暮らし、あるいは高齢者二人暮らしを続けるためには、生活面及び健康面において自立していることが大事ということも学び、看護学部・人間福祉学部それぞれに専門性は違うが、対象者を社会的な側面、治療的・健康的側面から捉えると全体像を描きやすくなり、これがＱＯＬ（クオリティー・オブ・ライフ）を高めることになるということにも気づけたように思う」というコ

メントを頂戴した。今回の演習で得たものについては、きょうりつの活動にフィードバックできるよう検討していく。

また合同発表会では、会場から「春日地区は高齢者の一人暮らしが多く、住民自身の活性化が難しいという点に気づき、福祉を越えて、中心市街地の活性化に関しても今回の調査結果を投げかけたというところでは非常に参考になった」という意見も頂いた。

2）教員の教育的介入と課題

演習目的及び目標を達成し、教育効果を上げるためには、まずは教員自身がしっかりと内容を理解した上で取り組むことが不可欠である。そのためには、教員間の連携、学際的な演習の運営方法などについて、看護学部及び人間福祉学部の各教員間での意見交換を密に行うことが必須である。しかし今年度は、演習の運営に追われ、それぞれの学部の教員が互いの専門性を理解するための学習会や、教育内容及び介入方法に関する検討などが不十分であった。次年度は、事前検討を行う時間を十分に設定していきたい。

教育的介入については、下記のような反省点が上がった。まず学生が、互いの専門性を知るきっかけ作りとして、第１回目のオリエンテーション時に「導入教育」を実施した方が良かったという意見が出された。具体的には、それぞれの学部で履修している科目や演習・実習内容について、互いにパワーポイントなどを使用し、演習風景などの映像もまじえてプレゼンテーションなどを行うと、互いの学習内容をより具体的にイメージすることができ、相手に対する親近感も沸き、演習の効果的な導入につながると考える。また、限られた時間の中での演習運営なので、演習目標を達成するためには、学生に自己学習(課題学習)を課した方が、グループワークなどにおいても、より質の高い、活発な意見交換をすることができたと思う。次年度に向け、グループワークの展開方法などについて、具体的に検討していきたい。

本演習の基本姿勢はPDCA――計画(Plan)、実施(Do)、評価(Check)、改善(Action)――サイクルを意識しながら運営をすることにあるが、各演習において、教員自身が自己分析(評価)し、それを教員間で共有して、課題に対する改善策を検討するという体制を作ることができなかった。その点においては、学生だけではなく、教員もまた、リフレクションペーパーや評価表を用いて、自らの課題に気づくことが必要だったように思われる。今後の検討課題としたい。

◆甲府市地域包括支援センター：甲府西

学　　生	看護学部 33 名 / 人間福祉学部 20 名　計 53 名
担当教員	看護学部 2 名 / 人間福祉学部 2 名　　計 4 名
センター職員	3 名

1）専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日（火）9:00～12:10

【実施概要】

全体のオリエンテーション後、甲府市地域包括支援センター甲府西をフィールドとして演習を展開する学生 53 名は第 8 講義室に移動し、教員の方で用意した A～J の 10 グループが 20 チームに分かれて座席に着席した。チームとは戸別訪問する単位で、人間福祉学部の学生 1 人と看護学部の学生 1 人～2 人で構成された。グループとは、戸別訪問の準備段階で聞き取り調査内容を検討する話し合いの単位で、2 チームより構成された。教員は、20 チームのうち一人 4～6 チームを担当する担当制とした。

その後は、演習スケジュールに沿って、担当者の紹介及びオリエンテーションを開始した。センターの職員からは、地域の特性について説明がなされた。教員からは演習の重点目標や演習方法について説明した。休憩後はチーム並びグループごとに自己紹介し、チームごとリーダーを決め、グループワークの課題である「①聞き取り調査内容」、「②家庭へ伺う時の態度や面接する時の配慮」などについて、担当教員の助言を参考に、意見交換を実施した。なお、学生が戸別訪問する対象者の選定にあたっては、センター職員に交渉を依頼した。

本演習解散後は、戸別訪問対象者の決定の連絡をセンター職員より受けた後、授業時間外を利用してチームごと集合をかけ、対象者に電話による依頼のし方や戸別訪問を通知するはがきの作成などの打ち合わせ、聞き取り調査時のシミュレーションなど、戸別訪問に向けての準備を実施した。また、前日までに対象者宅の場所やその周辺の特徴を、直接現地に出向いて確認しておくよう指導した。

以下に、本演習で配布した資料の主な内容を掲載した。

【演習実施計画】

Ⅰ．重点目標

演習全体の共通目標をふまえ、センターのフィールドでは合同のプロセスを重視し、次の重点目標を設定して実施する。

1　看護学部と福祉学部（以下両学部）の学生がチームで高齢者の戸別訪問調査を行い、高齢者の生活を実感し、高齢者の視点から生活や健康ニーズを考えることができる。

2　両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、特に、地域に暮らす高齢者の人とのつながりや周辺地域の理解を深めることができる。

3　両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、相互の理解を深め、互いの専門性や協働することの利点を明確にすることができる。

Ⅱ．演習方法

1　対象学生：看護学部及び人間福祉学部の 3 年生
看護学部 33 名、人間福祉学部 20 名、合計 53 名

2　調査対象者：甲府西石田地区及び貢川地区に居住の要支援高齢者（介護予防ケアプランに登録

されている）20名とする。対象者については、センター職員による事前の調整で、了解が得られた方とする。

3　方　　法

演習方法は、事前学習（オリエンテーションと事前学習、調査当日までの準備と学習）、調査の実施とまとめ、グループ報告会、地域への報告会とする。また、新年度には、全体の合同研修会にて発表する。

1）オリエンテーションと事前学習（1月6日）
2）調査当日までの準備と学習（1月7日～2月6日の1ヶ月間）
3）調査の実施とまとめ、グループ報告会（2月7日）
4）地域への報告会（検討中）

4　記録用紙

1）調査対象者：No.1：地域で生活する高齢者への聞き取り調査
　　No.2：○○さんの人とのつながりＭＡＰ
　　No.3：○○さんの住まいの周辺地域ＭＩＮＩＭＡＰ
2）グループ：グループワーク記録用紙
3）そ の 他：リフレクションペーパー、ハガキ　他

5　演習内容とスケジュール

1）オリエンテーションと事前学習（1月6日）

時　間	内　　容	備　考
9:00～ 9:30	全体オリエンテーション	
9:30～	教室の移動、チームごとの着席	資料配布
9:40～10:00	担当者紹介 担当教員の紹介 センター職員の紹介 センターの紹介	
10:00～10:40	オリエンテーション 演習の重点目標、内容、スケジュールなどの説明 対象者への聞き取り調査内容の説明	
10:40～10:50	（休　憩）	
10:50～11:40	グループワーク チームごとの自己紹介→2チームの自己紹介（グループ） ①聞き取り調査内容の学習（30分程度） 質問内容の理解、質問の仕方、聞きやすい順番、 オリジナル質問の検討など ②家庭へ伺う時の態度や面接する時の配慮（15分程度） 電話での留意事項など ③調査に備え①②で主体的に学習することを各自確認 ＊本日の記録用紙は事前学習用でありメモしてよい	学生は適宜担当教員に相談する 担当教員の確認
11:40～12:00	グループごとに担当教員へ報告と確認 リフレクションペーパーの記入 連絡網の確認 リーダー、サブリーダーの選出（各学部1名づつ）	連絡網の確認と配布
12:00～12:10	今後の予定など連絡事項	
・・・・	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
配布資料	実施計画、調査記録用紙（No.1・2・3）、 甲府西の資料（簡易的な地図、地域配布のお便り）、 学生名簿、連絡網、リフレクションペーパー、他	

2）調査当日までの準備と学習について（1月7日～2月6日の1ヶ月間）

(1) 1月6日に教員の確認が得られなかったグループは、担当教員の確認を得るようにする。

(2) 調査対象者については、教員がセンターから対象者名簿を頂き次第、学生へ連絡するため、学生は担当教員の所に行って、対象者の確認を行い、連絡用ハガキや地図などの必要物品を受け取る。

(3) 事前に、調査対象者の住まいや、往復の交通手段などの確認をしておく。

(4) 調査実施日の1週間前に調査対象者に電話を入れて、訪問日時の確認を行い、事前連絡用ハガキを書いて郵送する。

(5) その他、チームで密に連絡を取り必要な準備を進める。

3）調査の実施とまとめ、グループ報告会の予定（2月7日の計画）

時　間	内　　容	備　考
9:00	集　合（飯田キャンパス）	
9:00～ 9:10	オリエンテーション	
9:10～ 9:30	チームごとに聞き取り調査内容の再確認 （調査内容、対象者宅、電話での最終確認他）	物品確認
9:30～12:00	調査出発～帰校　チームごとに調査内容をまとめる	
12:00～13:00	（昼食）（お礼状の記入）	
13:00～14:30	チームごとに記録用紙を整理し仕上げる No.1：地域で生活する高齢者への聞き取り調査 No.2：○○さんの人とのつながりＭＡＰ No.3：○○さんの住まいの周辺地域ＭＩＮＩＭＡＰ パソコン入力	学生は適宜担当教員に相談する
14:30～14:40	（休　憩）	
14:40～15:40	グループワーク：演習目標に沿っての気付きや学びなど	
15:40～16:40	グループの発表、報告会 センター職員のコメント	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰの確認
16:40～17:00	リフレクションペーパーの配布（後日回収） 連絡事項	
・・・・・・	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
記録用紙	チームごと　調査記録用紙（NO１・２・３） お礼状（ハガキ） グループワーク記録用紙、リフレクションペーパー、他	

4）地域への報告会の予定

センター及び甲府市職員の方々と検討中である。

Ⅲ．担当教員の体制

1）限られた時間のなかで、各グループへの支援が出来る限り実施できる体制とするため、原則として、チーム及びグループを分担して教員が担当する小グループ支援体制とする。
（グループ・教員表の配布）

2）学部とキャンパスが異なることを配慮し、学生の相談支援に対応できるようにするため、教員同士が適時的確に情報交換を行い学生をサポートする。

3）教員への連絡（研究室及び直通電話についても伝える）

池田キャンパス　看護学部　　清水惠子　　河野由乃

飯田キャンパス　人間福祉学部　小野興子　　伊藤健次

Ⅳ．連絡体制

グループメンバー及び担当教員との連絡体制づくり

個人情報の厳守

Ⅴ．留意事項

1）全体のオリエンテーション資料の「その他の事項」の留意事項を厳守する。

2）追加事項

・時間をとって協力して頂いていることに感謝して接する。

・訪問時間は1時間程度を目安とし、対象者の体調に配慮する。

・調査票へのメモは、その場で了解をとってから行う。

2）フィールド演習：平成21年2月7日(土) 9:00～17:00

【実 施 概 要】

戸別訪問実施の当日は、学生達は飯田キャンパス B208 教室に集合した。教員からのオリエンテーション後は、チームごと聞き取り調査の内容を確認し合ったり、訪問先の対象者宅に電話で最終確認したりして出かけた。オリエンテーションでは、「地域の皆様に『地域にお住まいの皆様からお話しをお聞きする』ことへのご協力のお願い」と題した学長からの依頼文と訪問対象者にご署名頂く同意書の取り扱いについて説明した。

19チームは予定通り出かけられたが、1チームのみ、訪問直前の電話連絡がつながらない状況が発生した。そこで、訪問し直接様子を伺ったが留守であり、センター職員からの連絡を待った。その後、予定の対象者は昨晩急遽入院したことが分かり、新たに戸別訪問に協力して頂ける住民の選定・調整・交渉にあたった。さらにその後、当初の対象者ではなかったが、本学の本プログラムである学生のフィールド演習に理解のある石田地区の高齢者の住民の方の協力が得られ、午後から訪問させて頂いた。なお、対象者の変更は、センター職員から訪問対象者としての名簿を頂いた後にも数件発生し、その都度再調整しながら、訪問対象者を最終決定していった。

戸別訪問から帰校後は、学生は順次昼食を済ませ、チームごと調査内容を記録用紙No.1、No.2、No.3にそって整理し、前半の報告会の準備をした。担当教員4名は、各チームをラウンドして質問に答えたり助言をするなど、ファシリテーターとしての役割を担った。なお、前半のチームの発表や後半のグループの発表での司会進行は担当教員が実施した。

前半の発表チームについては、まとめの進行状況をみて教員の方で推薦した。前半の発表の主な内容は、主として、No.2（○○さんの人とのつながりMAP）とNo.3（○○さんの住まいの周辺地域MINIMAP）を用いて、地域に暮らす高齢者がどのような方々とつながり、どのような場所に出かけているかについての発表があった。また、その地域の商店や病院や住宅、道路状況、公園や緑の状況などを当事者である高齢者の立場に立って考え高齢者の生活と暮らしやすさについて考察した内容であった。センター職員にはチーム発表の時間から出席を依頼し、学生の疑問に対しての回答や発表内容についてのコメントを頂いた。(資料参照)

後半は、演習の合同プロセスを通じて学んだことや考えたこと、特に重点目標に沿ってグループ単位で意見交換を実施した。前半に発表チームでなかったチームが集まった5グループの代表者に発表を依頼した。後半の発表内容については、グループ単位にまとめた。(資料参照)

最後に、本日の演習のふりかえりとして、リフレクションペーパーの書き方や提出の仕方について連絡した。

以下に、本演習で配布した資料の主な内容を掲載した。

2月7日のスケジュール　（飯田キャンパス）

時　間	内　容	備　考
9:00	集合（チームごと）	
9:00～ 9:10	オリエンテーション	
9:10～ 9:30	チームごとに聞き取り調査内容の再確認 （調査内容、対象者宅、電話での最終確認　他）	物品確認
9:30～	出　発	
	戸別訪問調査	
	帰校後　順次、チームごとに**調査内容をまとめる**	No.1～3は
（帰校後、昼食・休憩はチームで適宜とること）	**お礼のはがきを記入**し担当教員へ提出する **チームごとに記録用紙を仕上げる** No.1：地域で生活する高齢者への聞き取り調査 No.2：○○さんの人とのつながり MAP	チームごとに清書し提出、 No.2・3 はコピーしてグループメンバーに配布
14:20 まで	No.3：○○さんの住まいの周辺地域 MINIMAP	
14:20～15:00	**チームの発表、報告会** 調査を元に作成した MAP（No.2：○○さんの人とのつながり MAP、No.3：○○さんの住まいの周辺地域 MINIMAP）を代表のチームが発表し意見交換する センター職員よりコメント（深澤様）	ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰの活用
15:00～15:10	（休　憩）	
15:10～15:40	**グループワーク（グループごと）** 演習の合同プロセスを通じて学んだことや考えたことを意見交換する	グループ記録はコピーしてグループメンバーに配布
15:40～16:00	**グループの発表、報告会** グループで話し合われたことを代表のグループが発表する	
16:00～	**調査集計結果の中間報告（仮）** センター職員よりコメント（滝花様・深澤様）	中間報告のコピーは全員に配布
	連絡事項（リフレクションペーパーなど）	物品確認
16:30～	終了　片付け （名札、ブルゾンは各自保管しておくこと）	

<聞き取り調査用紙>

調査日時21年2月7日（　　時　分～　　時　分）甲府西（　　）地区、学生ｸﾞﾙｰﾌﾟ（　—　）記録用紙No1

地域で生活する高齢者への聞き取り調査

学部	学籍番号	学生氏名	学部	学籍番号	学生氏名
学部	学籍番号	学生氏名	学部	学籍番号	学生氏名

利用者様イニシャル：　　様		年齢：　　歳 性別：　男・女	同居家族構成：
番号	質問内容	回　答（メモ）	
1	食事の準備をご自身でしていますか	□している→（どんな料理） □していない→（理由）	
2	日用品の買い物をご自身でしていますか	□している→（よく行く店は） □していない→（理由）	
3	銀行預金、郵便貯金の出し入れをご自身でしていますか	□している　□していない→（誰がしてくれている） □配偶者　□同居の子　□同居の孫 □同居以外の子　□同居以外の孫 □友人 □その他（　　）	

4	年金などの手続き書類をご自分で書いていますか	□している　□していない→（誰がしてくれている） □配偶者　□同居の子　□同居の孫 □同居以外の子　□同居以外の孫 □友人 □その他（　　）
5	新聞や書籍などを読んでいますか	□読んでいる→（どんな記事や内容） □読んでいない→（理由）
6	普段どのようにお出かけしていますか	（出かけている場所・頻度・移動手段・同行者） （出かけていない場合→理由とどんな場所ならば出かけたいか）
7	家を訪ねたり訪ねられたりすることがありますか	□はい→（どなたが（を）　どれくらいの頻度） □いいえ→（理由）
8	人が訪ねて来てくれることについて、どうお感じになりますか	□うれしい→（その理由）　□うれしくない→（その理由） （これからの生活で訪ねて来て欲しいひとがいれば教えて下さい）
9	普段電話でおしゃべりをしていますか	□している→（こんなときに・こんな人と・これくらいの頻度で） □していない→（理由）
10	若い人と接する機会がありますか	□はい→（頻度・どんな時） □いいえ→（機会がほしいか）
11	健康についての記事や番組に関心がありますか	□ある→（どんな記事・番組） □ない→（どんな内容なら）
12	身体にいいと思うことを日々実行していますか	□はい→（どんなことを） □いいえ→（理由・どんなきっかけがあれば）
13	身体の調子で気になっていることはありますか	□はい→（どこがどんな風に）　□いいえ
14	楽しみにしていることはありますか	□ある→（どんなこと） □ない→（どんなことができたら楽しい）
15	お住まいのあるこの地域はどんなところが暮らしやすい・暮らしにくいですか	（こんなところが）
16	家族や友達の相談にのることがありますか	□はい→（どんな事柄） □いいえ→（理由）
17	頼りにしているのはどなたですか	□配偶者　□同居の子　□同居の孫 □同居以外の子　□同居以外の孫 □友人 □その他（　　）
18	身の回りで心配事はありますか	□ない □ある→（どんなときに感じますか）（それはどんなことですか）
19	老人会や自治会に入っていますか	□はい　□老人会　□自治会 □いいえ→（不参加の理由）
20	地域の集まりや催しには参加していますか	□はい→（参加している催しにはどんなものがありますか） □いいえ→（不参加の理由 （どんな催しならば参加したいと思いますか）
21	「地域にあったらいいなあ」と思う助け合いの仕組みやサービスがありますか	（具体的にどんな）
22	オリジナル　質問1～3（学生が考える）	

「　　さん」の人とのつながり MAP＜A4 版縦＞

学生ｸﾞﾙｰﾌﾟ（　　—　　）　記録用紙 No. 1

作成者
（学部　　番号　　学生氏名　　）
（学部　　番号　　学生氏名　　）
（学部　　番号　　学生氏名　　）
調査日　　年　　月　　日

図で描いてみましょう	
全体像を文章で書いてみましょう	

「　　さん」の住まいの周辺地域 MINIMAP＜A4 版縦＞

学生ｸﾞﾙｰﾌﾟ（　　—　　）　記録用紙 No. 2

作成者
（学部　　番号　　学生氏名　　）
（学部　　番号　　学生氏名　　）
（学部　　番号　　学生氏名　　）
調査日　　年　　月　　日

図や写真などで描いてみましょう	
全体像を文章で書いてみましょう	

＜2月7日　甲府西グループワーク用紙＞＜A4版縦＞

グループ（　　）

演習の合同プロセスを通じて、感じたこと、考えたこと、学んだことを
重点目標に沿って意見交換する

1．看護学部と福祉学部（以下両学部）の学生がチームで高齢者の戸別訪問調査を行い、高齢者の生活を実感し、高齢者の視点から生活や健康ニーズを考えることができましたか。具体的にどのようなことでしたか。

2．両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、特に、地域に暮らす高齢者の人とのつながりや周辺地域の理解を深めることができましたか。実際にMAP（記録用紙No2･3）を作成してみてどのようなことを感じましたか。

3．両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、相互の理解を深められましたか。お互いの専門性についてどのように考えていますか。
演習前と演習後ではどうですか。

4．その他、何でもお書き下さい。

3）演習に関する打ち合わせ

日　時	場　所	内　容	出席者（人）		
			大学	センター	甲府市職員
20.11. 7 16:50-17:50	センター	甲府西地域の状況及び演習への要望	4	3	
11.20 17:30-18:00	大学	演習内容及び方法の検討	4		
12.12 16:45-17:45	センター	演習内容及び方法の検討	3	3	
12.25 16:30-18:00	センター	演習内容及び方法の検討 聞き取り調査の内容及び対象者の検討	3	3	1
21. 1.15 15:00-16:00	大学	聞き取り調査の内容及び方法の検討	4		
1.19 9:00-10:00	センター	聞き取り調査の内容及び方法の確認	1	2	
4. 6 16:00-18:00	大学	演習のまとめと発表に向けての検討	3		
5.14 18:00-19:00	大学	報告書の内容の検討	4		

4）合同発表会に向けての事前準備演習 ： 平成21年4月7日（火）14:50～18:00

【実 施 概 要】

石田地区のフィールド演習から約2ヶ月が経過した。2月に戸別訪問を実施した学生のうち人間福祉学部の3名は卒業し、合同発表会に参加予定の学生は人間福祉学部17名、看護学部33名であった。

本日は戸別訪問から長時間が経過しているため、Ⅳ限はまずこれまでに実施してきた演習について想起できるよう資料を用いて丁寧に説明した。次に、戸別訪問した20件全体の概要を把握できるよう聞き取り調査結果のグラフと聞き取った内容の資料を関連づけて共有するためにグループワークを実施した。そして、2月7日の演習後に提出されたリフレクションペーパーの記述内容を全体で共有するために、各自が記述した5つのテーマ「地域住民の『生活の場』を体験して感じたこと」「他学部学生との協働の取り組みを通してお互いの特徴に関して気づいたこと」「今後協働して取り組む上で大切にしたいと思うこと」「今後この体験をどのように活かしたいか」「学生である私たちが地域や高齢者に対してできそうなことはなにか」ごとの内容を振り返り、それに基づいて各自が最も強い学びとなった事柄の意味内容を、テーマごと一つずつ抽出してポストイットに記入し、全学生が記入したポストイットをテーマごとに配分した。

Ⅴ限は、テーマごとのポストイットをKJ法でまとめるにあたって、10個グループのうち5個グループが、担当するテーマを争奪戦で決めて進めた。模造紙1枚にカラーマジックを用いて50枚のポストイットの意味内容の類似性を検討しながら整理した。一方、残りの5個グループは、戸別訪問で聞き取り調査内容の資料を5分野に分配し、まとめを担当する分野を同じく争奪戦で決めた。

これらをまとめるにあたってはパワーポイント画面を使ってグラフと内容、またオリジナル質問の場合はそれらの内容をグループの独自のまとめ方で整理した。

これらまとめの作業を行うにあたっては、合同発表会も見据えてリーダーを新たに決め、Ⅴ限の後半は中間発表を実施した。

しかし、時間内ではそれぞれのグループとも中間発表が精一杯で、4月18日の合同発表会に向けて、発表時間20分に発表するテーマや内容の意見交換する時間はまったくとれなかった。そこで、新たに決まった10人のリーダーに授業後、そのまま教室に残ってもらい後輩の3年生や他のエリアで演習した4年生に自分達は何を伝えたいか、話し合いを持った。リーダーたちからは、KJ法でまとめようとしている5つのテーマについて発表したい、訪問事例をまじえると分かりやすいと思うなど、主体的な意見が出された。

そこで、4月18日の合同発表会には5つのテーマでまとめているグループのリーダーが中心になって発表すること、聞き取り調査を分野ごとにまとめているグループは地域住民に報告する際に発表することが決まった。

合同発表会に向けての準備は4月8日～4月17日の約10日間にわたって自主的に行われた。学生の話し合いによって決定した発表会の内容について、担当したグループの学生たちが、休み時間などを活用して両キャンパスを行き来しながら自主的に集まり、調査結果の分析や演習の学びのまとめを実施した。

それらの結果は、4月16日の放課後行われた合同発表会の発表者（リーダー）の打ち合わせにおいて確認され、発表原稿の検討や発表の順番や役割などについて話し合いながら作業を進めた。

また、翌日の4月17日においても、休憩時間を利用して、リーダーが集まり、発表原稿の作成を行った。

以下に、本演習で配布した資料の主な内容を掲載した。

【発表に向けての振り返り資料及びスケジュール】

Ⅰ．全体の演習目的

1．看護学部と福祉学部の学生が協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体験する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる。

2．看護・福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできる。

Ⅱ．全体の演習目標

1．看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。

2．地域アセスメント（地域特性と社会資源）が行える。

3．実態調査や数的データ分析、個別面接などを通して、生活及び健康ニーズの把握ができる。

4．地域住民への報告会に参加することができる。

Ⅲ．甲府西では

上記の全体の目的、目標を踏まえて、合同プロセスを重視し、次の３点を重点目標として取り組み、聞き取り調査やグループワークを通して話し合い、発表及び意見交換を行った。

1．看護学部と人間福祉学部（以下両学部）の学生がチームで高齢者の戸別訪問調査を行い、高齢者の生活を実感し、高齢者の視点から生活や健康ニーズを考えることができる。
→その人をみていく：聞き取り調査させて頂いた高齢者の個別ニーズの理解

2．両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、特に地域に暮らす高齢者の人とのつながりや周辺地域の理解を深めることができる。
→その人の周りに目を向ける：聞き取り調査させて頂いた高齢者の人とのつながりMAP、その高齢者が暮らす周辺の観察と周辺 MINIMAP 作成

3．両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、相互の理解を深め、互いの専門性や協働することの利点を明確にすることができる。
→相互理解や専門性などについてのグループでの話し合い

Ⅳ．実施時期と内容

1月６日　オリエンテーション、グループワーク

1月中旬　担当教員とグループ毎の打ち合わせや事前準備、高齢者へのアポイントメント

2月７日　高齢者への聞き取り調査の実施、その結果をもとに、各チームにて、調査用紙、高齢者の人とのつながりMAP、周辺 MINIMAP を作成し発表、重点目標を踏まえてグループワークを行い合同プロセスを通して学んだことを発表

4月７日　全体の発表会に向けて準備、甲府西としてのまとめ

１）聞き取り調査結果の整理・考察、→グループワーク「調査結果、生活の場の理解」

２）リフレクションペーパーをもとに→グループワーク「合同プロセス、協働の学び」「学生の私たちがこれからできそうなこと」→グループワーク

4月 18 日　発表会に向けて準備、合同発表会開催

まとめのスケジュール

日時・場所：4月７日（火）　Ⅳ・Ⅴ限　　池田キャンパス第８講義室

日時・場所：4月 18 日（土）　9:00～　　池田キャンパス

4月7日、Ⅳ限、Ⅴ限　（池田キャンパス）

時　間	内　　容	備　考
14:50～ （15分）	1．オリエンテーション ・3年次の演習の振り返りと合同プロセスの確認 ・合同発表会の方法と発表にむけての準備 ・発表にむけての具体的な準備 内容と方法についての説明とグループ分け	全体
（30分）	2．甲府西エリア内の20件の聞き取り調査結果についての共有 ・説明 ・グループワークにて概要の把握（20分程度）	全体 ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ
（20分）	3．リフレクションペーパーの振り返り ・各自リフレクションペーパーを振り返る ・質問の1～4及び学生である自分たちができそうなことの計5つについて、ポストイットに記入する（1質問1枚） Ⅰ 地域住民の「生活の場」を体験して感じたこと Ⅱ 他学部学生との協働の取り組みを通してお互いの特徴に関して気づいたこと Ⅲ 今後協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと Ⅳ 今後この体験をどのように活かしていきたいか Ⅴ 学生である私たちが地域や高齢者に対してできそうなことはなにか ↓ ・各自が記入したポストイットを担当のグループに提出する （休憩中にポストイットの提出）	全体
―休憩―		
16:10～ （50分）	4．グループワーク　　（次頁参照） ・各グループワークの担当する内容　上記Ⅰ～Ⅴについて共通項をまとめてネーミングする ・聞き取り調査結果の整理、考察、聞き取り調査項目（21の質問） ・記載内容の整理、オリジナル質問（20の質問） ・記載内容の整理、発表に向けてのMAPの活用：人とのつながりMAP 住まいの周辺地域MAP	ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ
（30分）	5．中間発表（進捗状況）と意見交換	全体共有
（15分）	6．4月18日までの取り組みの確認 **4月16日（木）17:00まで**に各グループでまとめた部分を池田キャンパス河野まで提出する→4月18日には全員に配布する。18日は修正や追加、発表に向けての準備を行う。 7．連絡事項　情報保護、（学内のパソコン使用） 次回予定	
終了 ～17:50	終了 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8．合同発表会についての話し合い（グループリーダー） ＊終了後、各グループリーダーが集まり、合同発表会の内容、方法や役割について話し合う。	

担当するテーマとグループワーク（学生の話し合いにより決定）

テ　ー　マ	担当グループ	リーダー	役　割
Ⅰ 地域住民の「生活の場」を体験して感じたこと	C	学生 C	合同発表会
Ⅱ 他学部学生との協働の取り組みを通してお互いの特徴に関して気づいたこと	F	学生 F	合同発表会
Ⅲ 今後協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと	G	学生 G	合同発表会
Ⅳ 今後この体験をどのように活かしていきたいか	E	学生 E	合同発表会
Ⅴ 学生である私たちが地域や高齢者に対してできそうなことはなにか	I	学生 I	合同発表会
聞き取り調査結果の整理（質問 1～ 6） 聞き取り調査項目、記載内容の整理や分析	J	学生 J	地域報告会
聞き取り調査結果の整理（質問 7～13） 聞き取り調査項目、記載内容の整理や分析	H	学生 H	地域報告会
聞き取り調査結果の整理（質問 14～21） 聞き取り調査項目、記載内容の整理や分析	A	学生 A	地域報告会
オリジナル質問について記載内容の整理や考察 （オリジナル質問 1～ 7）	B	学生 B	地域報告会
オリジナル質問について記載内容の整理や考察 （オリジナル質問 8～20）	D	学生 D	地域報告会

＊教員窓口　　池田キャンパス：河野、清水　　飯田キャンパス：伊藤、小野
＊配布　　全員（調査集計結果、レジメ）グループ（ＭＡＰ2 種類）、
＊物品　　ポストイット、A3 や A4 の用紙、模造紙、色鉛筆、修正ペン、パソコン、ＵＳＢ

5）合同発表会 :4 月 18 日（土）準　備 9:00～14:00 / 発表会 14:15～16:30

【実 施 要 項】

合同発表会当日の準備の時間帯には、4 月 7 日の演習では各グループとも中間発表にとどまった内容の完成版、つまり聞き取り調査「生活の場の理解」について最終発表、演習の合同プロセスや協働を通じての学んだことや学生の私たちがこれからできそうなことの最終発表を行った。特に、KJ 法でまとめた後者は、午後に行われる合同発表会の予行を兼ねてリーダー達が行った。

また、リーダー達の発案で、自分達の発表テーマは、全体の場で皆から募集し、意見交換して決定したいとの思いがあり、9 時からの 301 講義室での第 1 回目の予行時のスライドの 1 枚目は、タイトルは「?」のままであった。意見交換後は、テーマが「YES, WE Can!　we love 地域」と決まり、11 時からの講堂での第 2 回目の予行にはタイトルを入れることができ、午後行われる合同発表会の準備を整えることができた。

このとき学生から、本演習が 2 つの学部の合同演習ということで土曜日を何コマか使わざるを得なかったことに対して、学びは大きいが負担も大きかったという本音が聞かれた。

午後からの合同発表会では、準備したものを思い切って発表することができ、予行の時以上の成果であった。「おおくに」「きょうりつ」と比べ、学んだ内容には大きな違いはなかったが、「甲府西」の発表には具体的な状況や内容を盛り込まれていて、実施してきた演習を後輩たちに分かりやすく伝えられたと考えている。特に、フィールド演習に出向く前にどのような準備をしたか、どのようにフィールドに出向いたか、フィールドから戻ってきたらどのようにまとめたか、本日の発表会までにはどのようにまとめ上げてきたか、それらの経過が分かり易く説明できていた。

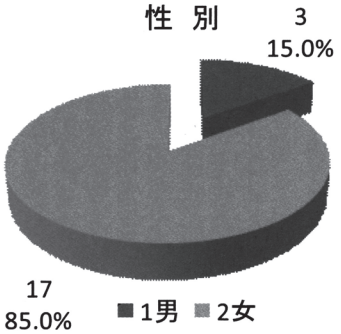
以下に、4 月 18 日のスケジュール及び合同発表会で使用したパワーポイント原稿を掲載した。

4 月 18 日、9:00～16:00　（池田キャンパス）

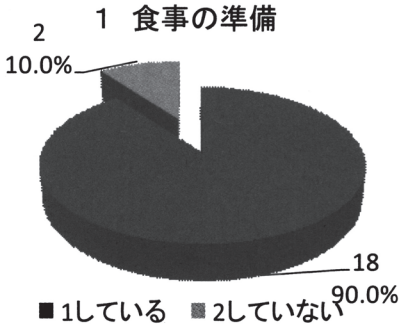
時　間	内　　容	備　考
9:00～	1．オリエンテーション 2．各グループの内容の発表 ①「高齢者への聞き取り調査」担当　5 つのグループ （パワーポイント） ② 演習を行って感じたことや学んだこと 5 つのグループ（模造紙にて） 3．合同発表会の担当リーダーによる発表　5 名 （パワーポイント） 4．意見交換	301 講義室
10:30～10:45	（休憩） 5．講堂にてリハーサル 模造紙の展示、記念写真	講堂
13:45～	（昼食） （片付け）	301 講義室
14:00～ 16:00	講堂へ移動 合同発表会 終了　ブルゾンや名札の返却、学生自己評価表の提出	講堂

（1）戸別訪問調査結果

n=20　数字は人数
棒グラフは複数回答



質問１　食事の準備をご自身でしていますか



＊料理内容

- 味噌汁（３）（具沢山・野菜）
- スープ（具沢山・野菜）
- 煮もの（２）（野菜）
- サケのハンバーグ
- 果物
- 栄養に気をつけた料理（コレステロールが高い、塩分・脂質に気を付ける、肉はあまり食べない）
- 和食中心
- 自分の好きなもの
- 朝の残り（昼）
- 弁当
- 食の好みが変わった（あっさりしたものが好き）
- 少食になった
- 娘がいないときのみ自炊
- ３食自炊
- 娘、孫と一緒に食べることもある
- 夕食は時々息子夫婦に作ってもらう
- 食料品は自分で買う

・一人くらいはどうにかしている
・調理師免許を取得
・料理好き
・地域の役割、家事もあるので、たまには外食で済ませたい

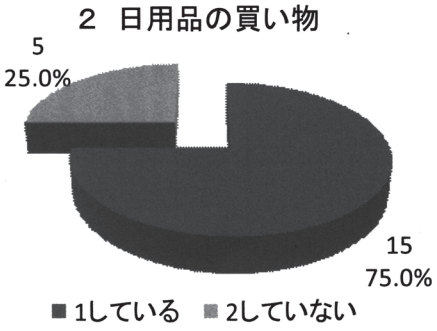
＊していない理由

・妻がつくる
・火が危ないので使用しない（レンジは使用する・テーブルに運ぶことはする）
・家族一緒に食べる

質問２　日用品の買い物をご自身でしていますか

＊よく行くお店

・スーパー、コンビニ、ショッピングセンター（９）（妻と一緒に）
・薬局
・デパート
・クリーニング屋（洗濯）
・雑貨はデイサービスの「買い物レクリェーション」時にまとめ買い
・畑を持っており、採れたものを利用
・生協の配達（２）（足りないものは若い人に買ってきてもらう）



・徒歩で
・自転車で（２）（重い物を購入する時）
・娘に連れて行ってもらう

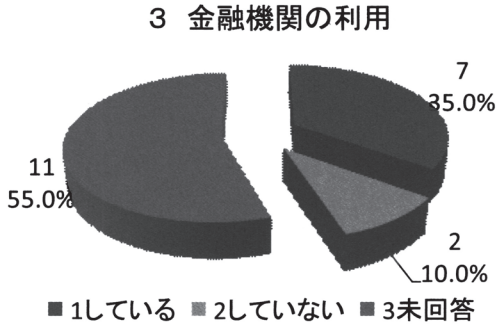
＊していない理由

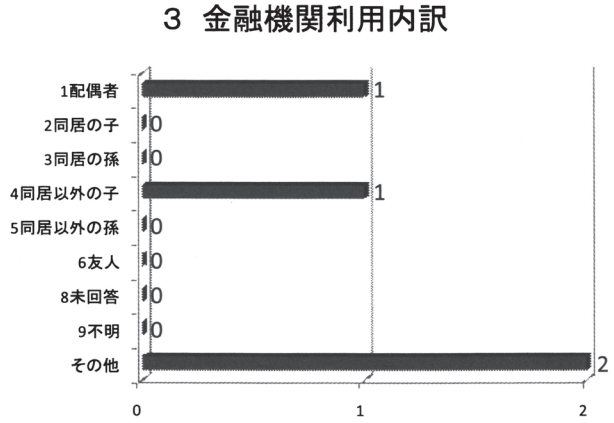
・ヘルパー（４）（近所に依頼することもある、以前ケガをして足に金属が入っている、関節リウマチ・脳梗塞、足腰に不自由がある）
・息子
・足腰に不自由がある
・外出して転倒するといけないので

質問３　銀行預金、郵便貯金の出し入れをご自身でしていますか

＊その他と回答

・金銭面では困っていない（貯金していた）
・金融機関の人が訪問してくれる

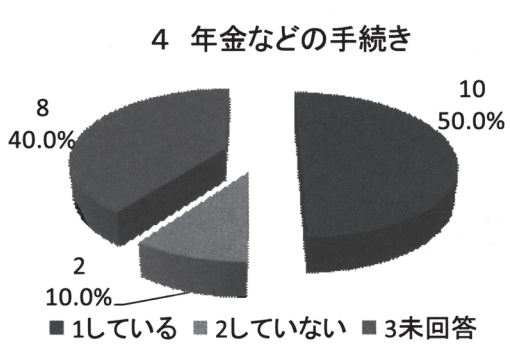


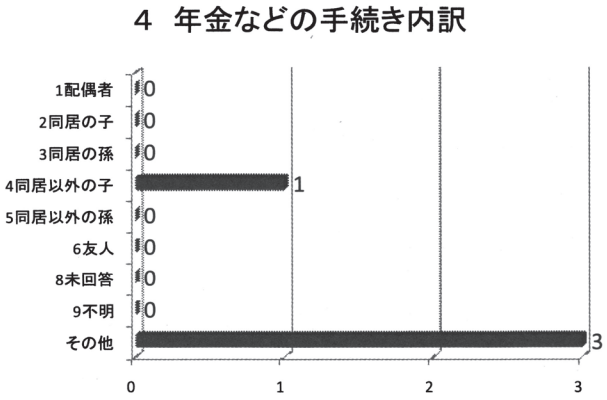


質問４　年金などの手続き書類をご自分で書いていますか

＊その他と回答

・分からないところのみ娘
・提出はしてもらう
・最近は書類そのものがない

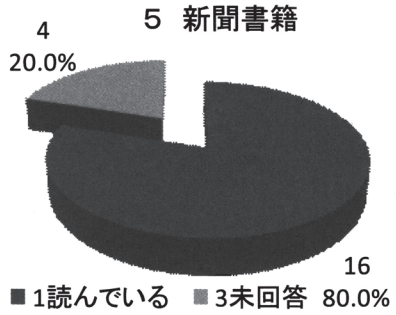




質問５　新聞や書籍などを読んでいますか

＊読んでいる記事や内容

・新聞の地域欄
・新聞のコラム（２）
・新聞の健康についての記事
・新聞の社説（毎日）
・政治について
・スポーツの記事
・芸能欄
・興味のあるところを重点的に（２）
・新聞
・端から端まで。まんべんなく（３）
（最近は失業問題が気になる）
・テレビ欄（２）
・チラシ
・本



・土地の本
・短歌の本
・雑誌はあまり読まない
・書籍はあまり読まない
・ＴＶはあまり見ない
・ＴＶは一日つけっぱなし
・老眼鏡を３つ持っている

質問６　普段どのようにお出かけしていますか

＊出かけている場所

・買い物（１０）（薬局、スーパー、ショッピングセンター、百貨店、食料品、子供が来た時に車で連れて行ってもらう）
・デイサービス（３）
・病院、かかりつけ医（７）（総合病院、整骨病院）
・リハビリセンター
・温泉（２）（近所）
・旅行
・ヨガ
・カラオケ
・レクリェーション
・美容院
・食事会（友人・若い人）
・散歩（２）（河川敷、途中で郵便局や銀行に寄ることもある）
・墓参り
・自治会館（近所）
・別宅（市外）
・妹宅（県外）
・独居の老人宅
・小学校
・老人会
・孫の送迎
・遠出
・外へ出かけるのは好き

＊出かける頻度

・月１～２回、週１回（病院・医院）
・毎日（整骨院）
・頻繁、毎日（散歩・買い物）
・たまに（百貨店。ショッピングセンター）
・週１～２回（デイサービス）
・まれに（兄弟・姉妹の家）
・月１回（美容院・墓参り・食事会）

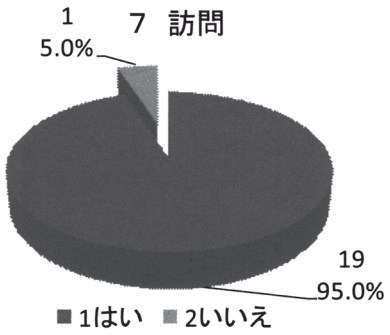
＊移動手段

・徒歩（買い物、散歩、デイサービス、病院、かかりつけ医、近場）
・自転車（スーパー）
・タクシー（病院、近所の温泉、百貨店、美容院、墓参り、食事会）
・自家用車：夫の運転、自分の運転、娘・息子の運転、友人の運転、近所の人の運転
（小学校、スーパー、百貨店、温泉、病院、リハビリテーションセンター、カラオケ、ヨガ、遠出）
・バス（遠出）
・送迎バス（デイサービス）
・列車（旅行）

＊同行者

・一人（買い物、病院、散歩）
・友人（デイサービス、温泉、旅行、カラオケ、ヨガ）
・娘、息子、孫と（買い物、施設、病院）
・家族と（遠出）
・スタッフ（デイサービス）
・ケアマネージャー、ボランティア（自身が地域福祉活動推進員として）
・遠出は一人では不安

質問７　家を訪ねたり訪ねられたりすることがありますか



＊訪問者と頻度

・娘、息子またはその家族（６）（用事がある時に連絡すると、毎朝、隔日：仕事帰り、月１回、年1～3回、週末）
・兄弟、姉妹またはその夫婦、家族（電話をするとすぐに）
・親戚
・昔からの友人（時々、週1～2回、訪ねることはあまりないが訪ねてくれる）
・近所の友人（７）（頻繁、用事がある時に連絡すると、毎晩2～3時間話す）
・近所の人（たまに）
・自治会の人（月１回）
・婦人会（月１回）
・ヘルパー（週１回）
・訪問リハ（週１回）
・デイケアの人（週２回）
・民生委員
・生協（週１回）
・福祉ネットワークに参加

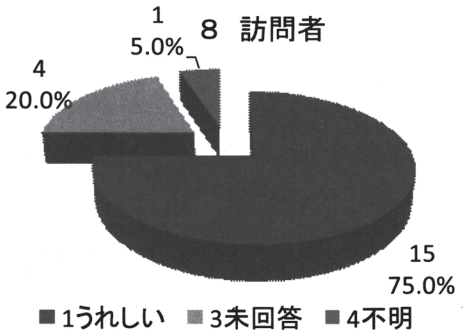
＊いいえと回答

・足が痛くて、外出できない、友人も訪ねてくるのが大変

質問８　人が訪ねて来てくれることについて、どうお感じになりますか

＊うれしいと回答

・寂しさがまぎれる　一人だと寂しい（２）
・人と話をすることが楽しい　好きだ
　話し相手が出来る（４）
　（交流している人がたくさんいる）
・料理をふるまうことが楽しい
・お互いにおかずのおすそ分けが出来て良い
・複数で食事をする方がおいしい
・近所の人がお互いに来る
・ケガをした時に近所の人、家族、ヘルパーが手伝いに来てくれ、人のありがたみを感じた　心配してくれて嬉しかった



＊不明、未回答

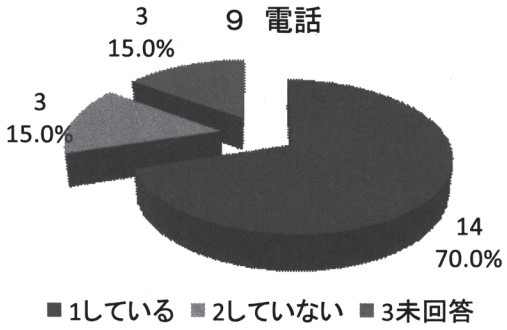
・話好きな様子

・消防署とすぐに連絡が取れるようになっているので安心
・身体のことを聞かれるのは嫌だ
・日課のようなもの、「うれしい」など感情とは別のもの

質問９　普段電話でおしゃべりをしていますか

＊電話をする時

・時間がある時
・留守番役



＊電話の相手

・兄弟、姉妹とその家族（３）
・別に暮らしている家族（４）（子供や孫）
・友人（２）
・いろんな人

＊頻度

・頻繁（家族、友人、いろんな人）
・時々　用事がある時（兄弟、姉妹とその家族）

＊その他

・互いの様子を知るために。心配してくれる（兄弟、姉妹とその家族）
・1 回 30 分くらい話す（友人）
・電話をかけてくれる（友人）
・連絡を密にしている人が 2～3 人いる
・携帯電話を使用（家族）
・常に電話がつながるよう転送設定がしてある
・夫の妹と夫の３回忌について話す
・すぐ忘れてしまうのでメモを書く

＊電話していない理由

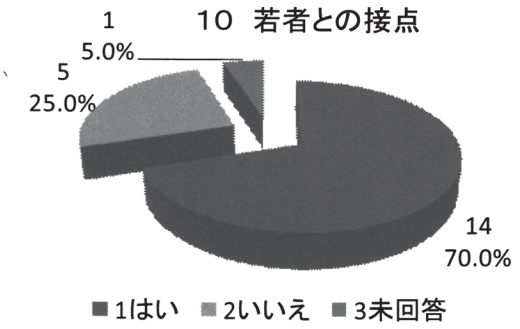
・おしゃべりは好きではない
・用事がある時だけ
・連絡には使う
・携帯電話もそんなに必要ないと思っている
・補聴器のノイズで聞き取りづらい

質問１０　若い人と接する機会がありますか

＊頻度、どんな時に

・孫、ひ孫（６）（買い物時：月に何度か、週２日程度、時々、同居）

・娘、息子夫婦（２）（同居、一緒に旅行に行くこともある）
・通院、通所先のスタッフ（２）
・銀行員（週１回訪問）
・看護専門学校生とゲートボール、
　グランドゴルフを行う（２）（年２回）
・バレーボールの見学
・交通ボランティア
・自治会
・社会福祉協議会
・食事会（月１回程度）
・若い人と接すると楽しい



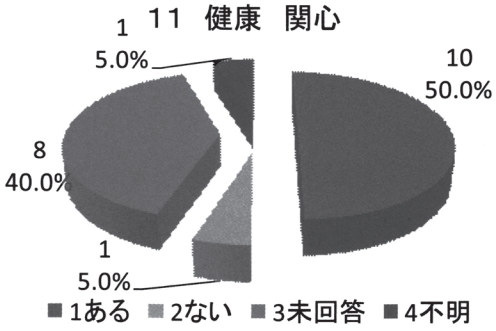
＊接する機会がほしいか

・今回の様に、学生の役に立てることが
　あれば喜んで引き受ける
・今回来てもらってうれしい
・小学生の通学路の見回り当番がある
・特に欲しくない（価値観も違いすぎる）
・子供達が出ていってから接する機会がない
・地区にも若い人が少ない

質問１１　健康についての記事や番組に関心がありますか

＊記事、番組の内容

・病院からの指導（食事、運動について）
・デイサービス発行の便り（病気の知識、
　健康法について）
・体操（デイサービス）
・新聞（２）（病院の情報など）
・テレビ（４）（メモをとる）
・裏ワザ
・健康に良い食品



・健康についてのテレビは見ないようにしている（医者から病気は人それぞれだと言われた）

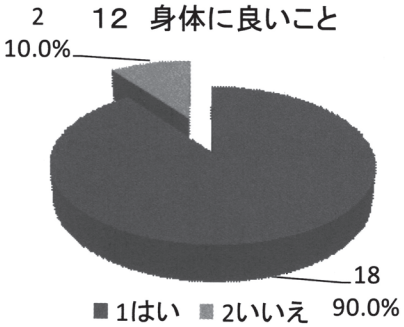
＊関心がない

・テレビなどでやっていれば見る程度

質問１２　身体にいいと思うことを日々実行していますか

＊どんなことをしているか

・出来るだけ人の中で話しをする（認知症予防）
・楽しむ
・栄養を考えて食べる（５）（野菜・果物・乳製品
　を摂る、塩分・脂肪分に気をつける）
・野菜ジュース（毎日コップ半分）
・好き嫌いをしない
・栄養バランスのとれた食事づくり



・出来あいのものは買わず、自分で調理（２）（結局自分好みの味付けになってしまうが）
・体重管理（足に負担をかけないため、１日に何度も体重を測り鏡を見る）

・散歩　ウォーキング（５）（近所の神社、毎日１時間程度、夫婦で毎日 30 分、家の中でも掛け声をかけて歩く）
・かかりつけ医まで歩く
・家の中を歩く（外に出ない）
・運動（６）（腹筋、鉄棒、手足、くるみ・日本手ぬぐいを使用、入浴時、施設で筋トレ、テレビ体操）
・リハビリセンター（腰痛）
・舞踏

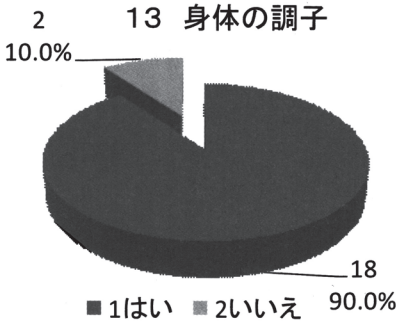
＊「いいえ」と回答

・動くのが大変
・グランドゴルフ（２）（4～5 年）
・ヨガ（月３回）
・フォークダンス（過去）
・手洗い、うがい
・マスクをする（風邪予防）
・早寝、早起き　規則正しい生活（３）
・飲酒、喫煙をしない（２）
・姿勢に気をつける（腰痛）
・自分で出来ることは自分でする

質問１３　身体の調子で気になっていることはありますか

＊どこがどんな風に気になっているか

・骨折（２）（右手首・自転車で転倒、腰の圧迫骨折）
・足が悪い　足の痛み（５）（薬を服用、通院：月１回）
・関節痛（膝：長時間の立ち仕事で痛みが増強）
・腰痛（４）（整骨院通院、整形外科通院・湿布による炎症あり、長時間の同じ姿勢、立ち上がり時が大変）
・背中の痛み
・五十肩
・骨粗鬆症
・関節リウマチ（２）（手のこわばり・文字が書きにくい、痛みは完治しないので痛みの訴えはしないようにしている）
・パーキンソン病（２）（手の震え、薬の服用で現状維持、日常生活が大変　いつまで趣味が続けられるか）
・耳が遠くなった（２）（加齢による）
・高血圧（４）（降圧剤服用、毎日３回計測・ノートに記載）
・高脂血症
・胃腸の調子が悪い　下痢（２）

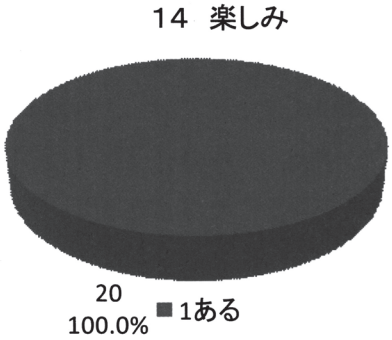


・前立腺がん（治療済み）
・風邪をよくひく（予防接種をする）
・物忘れ
・うつ（夫の死後：精神科に通院-回復しつつある）
・通院（内科、整形外科、眼科）
・薬の管理は自分で行う
・栄養剤を服用
・全体的に健康を意識
・子供がいないので治す気がない
・とりわけないが、足腰が弱くなり外出をしなくなった

質問１４　楽しみにしていることはありますか

＊「ある」と回答

・老人会（月２回）
・デイサービス（２）（週１回：友人と過ごす）
・おしゃれ
・旅行
・温泉（２）（近所の夫婦と）
・猫の世話



・孫や子供たちとのふれあい、訪問（３）（花見：毎年）
・友人たちとの交流
・食事会、お茶会（２）（友人）
・食事（おいしいもの）
・趣味（１０）　（グランドゴルフ、手芸、俳句、短歌の会、民謡部、舞踏部、ヨガ、カラオケ、日本画を描く、パンフラワー教室：月２回、習字、和裁、茶道、華道、読書）
・散歩（四季折々の風景を見る）
・ＴＶの視聴（４）（ビデオにも撮り必ず視ている番組がある、息子から大型ＴＶをプレゼントされた）
・食事のおすそ分け（近所、独居の高齢者に：楽しみにしている姿を見るとうれしい）
・地域活動（生きがい）
・人と真から向き合う：「今日一日良かったと思える生活を送ることが大切」
・考えることは良いこと
・遠方に住む息子が定年後に帰ってくる
・つまらないことはない

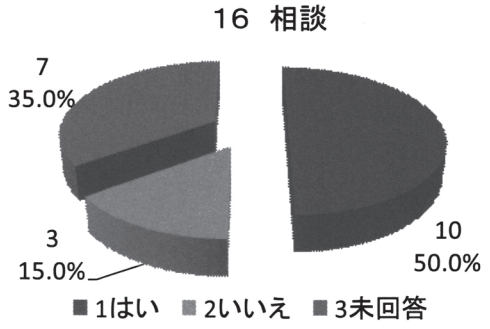
質問１５　お住まいのあるこの地域はどんなところが暮らしやすい・暮らしにくいですか

・生活の便が良い（６）（バス停・郵便局・銀行・大型スーパー・薬局・病院・医院・整形・歯科が近い）
・道が良い
・過ごしやすい（静かで車通りが少ない）
・日あたりが良い（２）
・近所付き合いがしっかりしている、助け合いがある、仲良し（６）（30 年以上住んでいる）
・幅広い年代が住んでいる（子供から高齢者まで）
・地区が熱心に活動している
・神社のお祭り
・車がないと不便
・スーパーが少し遠い（３）
・道が狭く、荒れている
・近所の団地住人との交流はない（高齢者が多い）
・近所付き合いがない（組合がない）
・高齢者から若い人への世代交代
・手伝ってくれる人がいないことが悩み
・高齢者世帯が多い
・若い人がいない

質問１６　家族や友だちの相談にのることがありますか

＊「はい」と回答

・妹（県外：相談がある時）
・友人と（夫を亡くした者同士）
・身体のこと（物忘れ・身体の調子）
・今後の暮らしについて
・よく相談される
・愚痴を聞く程度
・いろんなこと（２）（家庭内のこと、生活のこと）
・家族の会話
・主に自治会関係（地区ではまとめ役・頼られている）



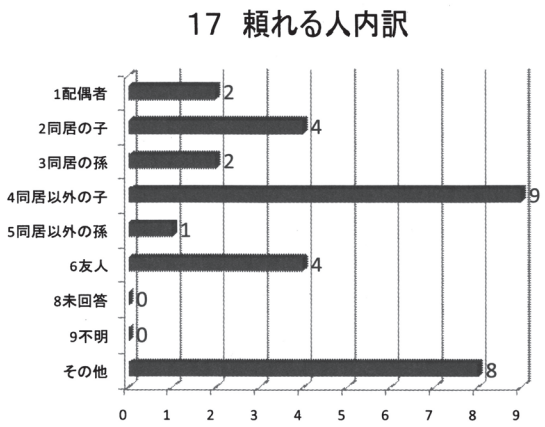
＊「いいえ」と回答

・誰も相談してくれない（考え方も違う）
・自分の身体の話をすることが多いが、若い人の意見は素直に全部受け止める

質問１７　頼りにしているのはどなたですか

＊「その他」と回答

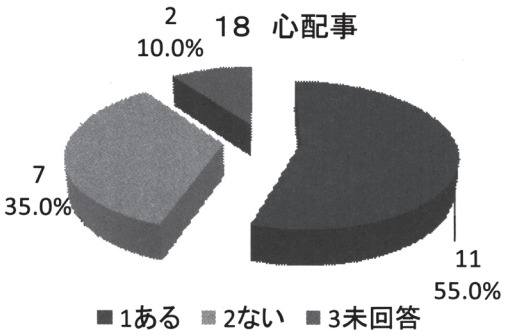
・娘、息子家族（３）（近くに住んでいる）
・兄弟、姉妹夫婦やその家族（３）
・近所の人（２）
・かかりつけ医
・ヘルパー（２）
・民生委員（２）
・娘に頼るにしても向こうの生活がある



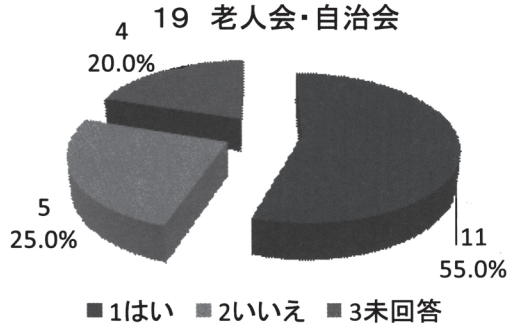
質問１８　身の回りで心配事はありますか

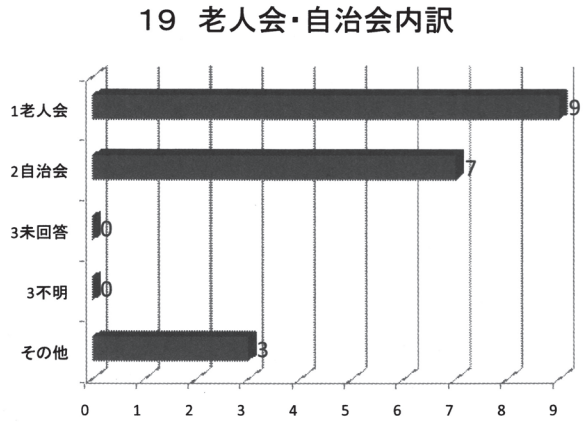
＊「ある」と回答

・家の中の段差による転倒（娘が心配している）
・散歩が出来ない（自由に動けない）
・仕事が遅くなり歯がゆい
・急に具合が悪くなったとき、倒れたときなど、助けが呼べるか（５）（一人暮らし、夫と二人暮らし、寝付けない夜に考える）
・病気になったら
・自身が亡くなった後の、家、土地、墓が気になる
・病気の進行（２）（リウマチ）
・病気による日常生活への影響、趣味の継続（パーキンソン病）
・身体の不調（長年付き合ってきたので最近は病気と上手に付き合っている）
・パンフラワー教室が開かれなくなり、楽しみがなくなった、何をして過ごしたらよいのか
・経済、金銭面（２）（年金生活）
・しつこいセールス（増加した）



質問１９　老人会や自治会に入っていますか





＊老人会、自治会以外の会

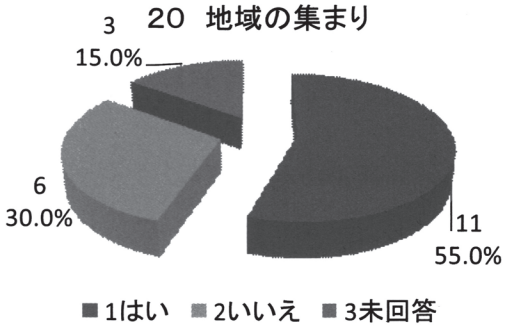
・短歌の会
・氏子総代
・自治会の副会長、ブロック長をしている
・社会福祉協議会（看護師になりたかったという思いや、福祉が好きだという思いから自主的に参加）

＊不参加の理由

・足が悪い（２）（行事は年 1～2 回あるようだ）
・外出が億劫
・情報がない（本人はないと思っている）
・今までは夫の世話をしていた
・神経質な性格が合わないと思う

質問２０　地域の集まりや催しには参加していますか

＊参加している催し



・地域活動が活発
・交通ボランティア
・自治会（３）
・文化祭
・老人会（３）（役員経験あり）
・老人クラブ（旅行・季節の会、役員をしており感謝状をもらった）
・子供クラブ、地域の催し（地区のまとめ役）
・健康ランド（月１回）
・食事の配膳（独居高齢者対象）
・夏祭り、昼食会（独居高齢者対象）
・祭り（２）（食事づくり）
・うどん会（２）
・無尽会（食事会：月１回）
・新年会
・旅行
・花見
・グランドゴルフ（２）
・ふれあいの会（２）
・趣味の会（４）（日本画、カラオケ、民謡部手芸部、舞踏部）
・高齢者学級（月１回）
・食生活改善推進委員会（研修会：年１回）
・参加、企画もする
・一人になったので、無理をしない程度に参加したい。

＊不参加の理由

・足が悪い（２）
・外出が億劫
・情報がない（本人はないと思っている。）
・若い人に迷惑をかけてしまう（移動は車なので、車出しを頼まなくてはならない）

＊参加したい催し

・落語会（以前参加して楽しかった）
・いらないもの交換会（バザー）

質問２１　「地域にあったらいいなあ」と思う助け合いの仕組みやサービスがありますか

・タクシー（通院に使用：割引にはなるが負担が大きい、循環タクシーは待ち時間が長く不便）
・自宅での介護
・ボランティアにちょくちょく来てほしい（介護支援）
・一人暮らしとの人との関わり
・集まりに出てこない人に来てもらうにはどうすればよいのか（人と接することが嫌いなのか？）
・民生委員が最悪（市との連携が取れていない、サービスについて教えてくれない）
・熱心に診てくれる訪問医
・側溝清掃時の蓋開けをしてほしい
・雪かき
・地域の助け合いが強いので、現状で良い
・特になし（３）（元気なので特にサービスを必要と感じていない、参加できないので、趣味があるので）

オリジナル質問 －まとめ－

No	質　　問	回　　答
1	近所の人との付き合いはあるか 仲良くしている人は	・民生委員や老人クラブの会長や会員とも仲が良く、カラオケを自宅でするなどしている　団地内はほぼ知り合いである　一緒に出かけたりする ・近所は4軒の内、3軒が高齢である　近所同士の助け合いが良い ・交流は普通　挨拶はする ・隣のおばあちゃんとよく話をするが、それ以外最低限の付き合いしかしていない（良くもないが、悪くもない）　身体のことを色々聞かれるのが嫌なので自分からは出向かないが、人が来ると「寄ってけし」と言っておしゃべりするのが好き ・特に親しい人はいないが、近所付き合いは無尽会などを通じて行っているようだ
2	生活歴、どのくらい現在の家でくらしているか	・40年ほど　結婚後引っ越してきた　以前は借家であった ・団地に住んで10年位、以前は息子の所で一緒に住んでいた　県内には昔（戦中）から住んでいた ・昔から市内に住んでいる　家具職人を長年続けており、県外にも仕事をしに行っていた　1990年代には、病院に勤務していた　妻が病院へ入院してからは一人暮らし ・和裁の教員免許　会計事務所に勤めた　家族の介護により、うつ病に、その後パーキンソン病 ・嫁に行くまではお嬢様だった　嫁に来て、養蚕や畑仕事をするようになった　戦争中、実家に逃げようとしたが、姑に止められ諦めて戻ってきた　戦争や震災を経験したが、ここまで生きるとは思わなかった ・○○市出身で、今の団地に来たのは昭和50年代　そのため、仲間も多く、住みやすい ・戦後に家を建て、それ以来ずっと暮らしている：夫との思い出が詰まっているから壊せない
3	以前の職業、現在の職業	・夫は大工 ・自営業で寿司屋を営んでいた　息子の手伝い ・小学校、中学校の教師（理科、数学）　教頭、校長もした ・縫製（戦時中）：兵隊や看護師の服を縫っていた　主婦（結婚後、50年くらい）：子供が大きくなってから内職をした ・銀行員として40年勤務　気が張る仕事だが、やりがいのある仕事だった ・今は働いていない　夫の介護を5年間していた ・百貨店の食品サービス部で十数年働いていた
4	生き甲斐、人柄	・貯金していたこともあり、経済的には困っていない　恋愛結婚
5	家族関係について	・毎週末には息子家族と一緒に夕食をとっている　平日の夕食時にも一品分けてもらっている　基本的には別々に生活 ・同敷地内の離れに息子夫婦が住んでいて現在は一人暮らし　３年前に夫が亡くなっている　犬が2匹いる　孫が8人（医者、薬剤師など、医療関係者）、ひ孫が2人（英語を習っている） ・家族関係は良好　息子が毎朝来る（弁当を作っている）　孫はいない　嫁との仲も良好　実家にもたまに行く（墓参り）　兄弟とも仲が良い ・とても良い　何をするにもほとんど娘が付いていてくれる　孫も出かけたり移動の時など肩を貸してくれたりする　3人でごはんを食べたり出かけたり、とても仲良し
6	一緒についている家族はいるか	・独居（夫は20年前に死別）　息子が2人、別居：1人が県外に転勤、1人は県内在住　孫が1人、仲は良い　兄弟もかなりの人が亡くなっている
7	住居環境	・手すりをつけてある　段差は２段にしている　段差はリハビリである

No	質　　問	回　　答
8	日中の過ごし方	・デイケアに通って運動　訪問リハの人と散歩によるリハビリ　訪問マッサージ　娘と買い物など ・週2回ヘルパーを利用：入浴、洗濯、掃除、爪切りなど　7時頃起床、午後11時頃就寝　朝起きたら、ポットで湯を沸かす　平日の日中は1人で過ごす 食事：牛乳、パン、バナナ、ヨーグルトなど日３回 血圧を測るのが日課　テレビ（戦争についてのもの、動物が出ているもの、笑い）　なるべく人に頼らず、自分で出来ることはする　すぐ忘れてしまうので、メモをとるようにしている ・夕方の散歩、デイサービスへ行く以外は家にいることが多い　食事の準備や洗濯は自分でしている　空いた時間はこたつに入ってテレビを見たり、新聞を読んだりして過ごしている ・6時起床～体操　22時～23時就寝　午前中に新聞を読んだり、県外にいる娘と電話したりしている　食事の準備、洗濯物は自分でしている 部屋の掃除：週1回、ヘルパーが来てくれる　日記をつけていて、俳句、短歌を書いている ・居間のこたつにいる　週1回、病院に行く　テレビを見たりする 火、土曜にヘルパーが来る　週に1回民生委員が来る
9	生活に満足しているか、充実感を感じているか	・年々、体の衰えを感じ、「前まではこんな感じじゃなかった」と思うこともあったが、しょうがないと思うと満足できる ・返答はなかったが、満足した生活を送っているようだ
10	地域などのサービス利用の様子、自分の意志の反映がされていると感じるか 地域での生活	・このまま一人でこの家に暮らしていくことに何の不満もない 何かあっても電話すれば子供も近くにいるからすぐ来てくれる
11	利用しているサービスはあるか （頻度、内容）	・右手首を骨折時、ヘルパーが2ヶ月来てくれた（食事の下ごしらえ、部屋掃除など）風呂場で使用するための椅子を包括支援センターに用意してもらった ・地域包括支援センターのみ ・ヘルパー：週1回（木曜日）、掃除をしてもらっている
12	現在利用しているサービスは どのようなきっかけで利用するようになったか	・9年前に足をケガして、大腿部に金属が入っており要支援1となった　痛みもあるため利用するようになった（地域包括支援センター、ヘルパー） ・利用しているサービスはない　回覧版は回っている
13	生活をしていく上でのニーズについて	・一人での外出が困難なうえ、娘夫婦も共働きで、外出することが出来ない 入れ歯が合わなくなっているので歯科にかかりたいが、難しいので訪問歯科の制度があるか調べてほしい（娘より）
14	今後の生活に向けてどうしたいなどの意思や思い	・このまま生活していければ、足が悪くても口が大丈夫なら大丈夫
15	生活上、不便だと思ったところ	・特にない　室内はつたい歩きをし、転ばないようにしていることや、買い物をした荷物を一段一段（3～4段の階段）昇らなくてはならないことくらい ・一人でいること　具合が悪い時の看病　背中まで手が届かない、手当てをする時など
16	体調管理、内服管理、病気、通院について	・近所の医院は誤診されたので行かない　少し遠くてもきちんと診てくれる病院へ行く　足は総合病院にもう10年通っている　今は、薬をもらうだけ　足の鎮痛剤と脳梗塞予防の薬を内服している ・通院：2ヶ月に１回、総合病院へバスで行く
17	薬の服用について 持病	・多発性脳梗塞、関節リウマチ、腰部脊柱狭窄症、変形性頚椎症、歩行困難　多数の服薬を自己管理　雨にあたると蕁麻疹がでる　風邪をひかないようにタバコを吸っている　肝硬変になり、飲酒はやめた ・腰痛があるため、湿布を貼っている　内科にかかっており、血圧とコレステロールの薬を服用している ・薬：管理は自分でしている

No	質　　問	回　　答
18	地域包括支援センターはどのような時に利用するか	・「ふれあいの会」などの地域住民を対象とした会を食生活改善推進員と一緒に企画している（月1～2回）　その会に地域包括支援センター職員を招いている ・食生活改善推進委員　介護予防のための会
19	学生とこのような話をしたことはあるか	・昔は多少機会があった ・明確な回答なし
20	学生に向けて一言	・時代に合った生き方があると思うが、そんなに人生は甘くない　友人を多くつくり、何でも話せる友人を少なくとも１人はつくること　イラっときても、その時は耐えて時が解決してくれる（聞き流すことも必要）

（２）プレゼンテーション資料

Yes,We Can ！
we love 地域

甲府西グループ（53名）
看護学部33名、人間福祉学部20名
2009年1月6日～4月18日

取り組みプロセス

- 私たちが今回のプロジェクトを行うにあたって、やってきたこと、学んできたことを説明します。



オリエンテーションと事前学習

1月6日、池田キャンパスにて
- 全体オリエンテーション
- 担当教員、甲府市地域包括支援センター甲府西職員紹介
- 聞き取り調査内容の学習
- アセスメントを行うにあたっての配慮
- 各グループ（2～3人）で打ち合わせ
- 調査協力者の住まい、交通手段の確認
- 訪問日時の確認、事前連絡用ハガキの郵送



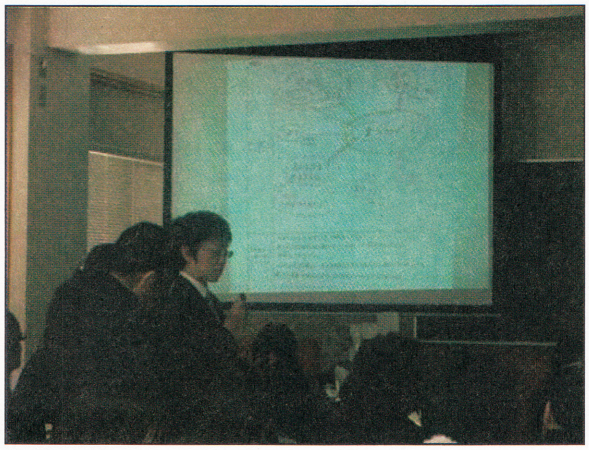
調査の実施とまとめ

2月7日、飯田キャンパス＆各協力者宅
- グループごとに調査内容の再確認
- 協力者のお宅へ訪問、聞き取り
- 記録用紙を仕上げる。調査をしての気づきや学びをまとめる。
- グループごとの発表。甲府市地域包括支援センター甲府西職員からのコメント
- 協力者にお礼状の郵送









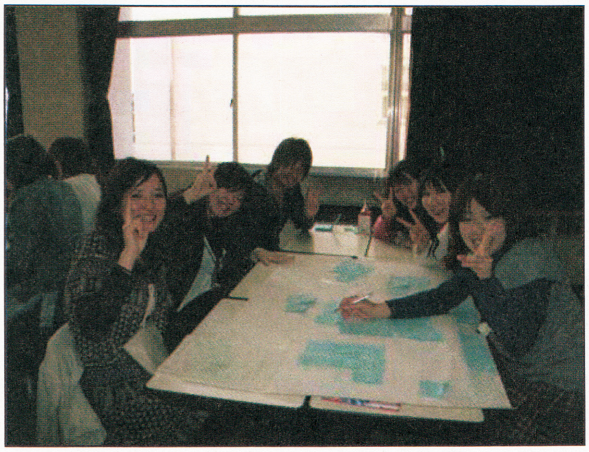


報告会に向けての準備

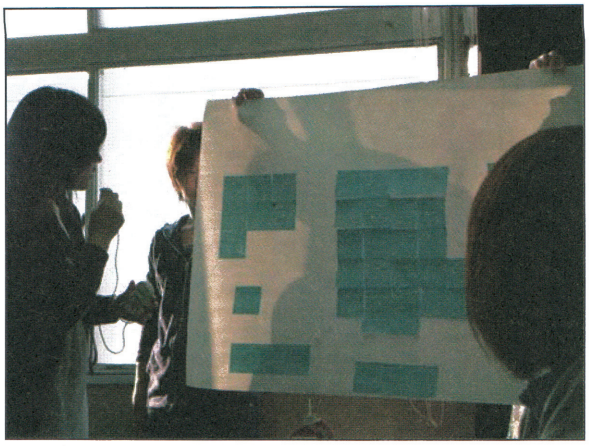
4月7日、池田キャンパスにて

- 甲府西エリアの聞き取り調査結果の共有
- 演習の学びの振り返り
  →テーマごとに、自分が一番印象に残ったこと、感じたことをポストイットに記入
- グループごとにポストイットの整理、考察
- 意見交換、発表資料づくり(模造紙、パワーポイント)
- グループリーダーの打ち合わせ











訪問したお宅を示した地図



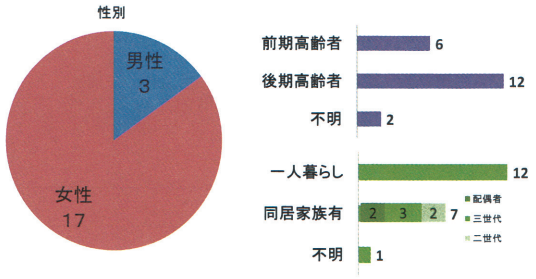
石田地区の特性　H20．4現在

- 人口
  - 甲府市　198336人（84308世帯）
  - 石田地区　8526人（3782世帯）
- 高齢化率
  - 甲府市　65歳以上　24．3%
  - 石田地区　65歳以上　24．4%
  - 75歳以上　10．6%

→甲府市とほぼ同じ高齢化率

調査協力者の背景

- 石田地区に居住の介護予防プランのある要支援者で、包括職員による事前の調整で、了解が得られた20名。



調査項目

- 基本項目（21項目）

1．食事の準備をご自身でしていますか
2．日用品の買い物をご自身でしていますか
3．身体の調子で気になっていることはありますか

etc…

- オリジナル項目（1グループ2項目）

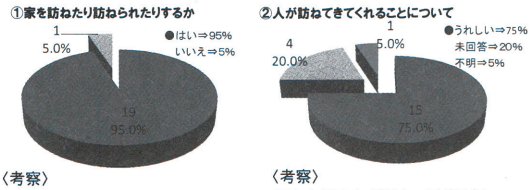
1．生活歴、どのくらい現在の家で暮らしていますか
2．生活に満足していますか、充実感を感じていますか
3．薬の服薬について、持病　について

etc…

調査結果のなかで・・・

地域とのつながりに焦点を
当てて考えたこと

家を訪ねたり訪ねられたりすることがありますか



〈考察〉
*ほとんどの地域住民が家族、友人、訪問介護サービス等で訪問されていることがわかった。
*家族の人の場合は、家族の仕事や住んでいる場所によって訪問頻度が違っている。

〈考察〉
*ほとんどの人が訪ねてくることに対し、うれしいと感じている。
*理由としては、寂しさがまぎれる、話すことが楽しい等があった。
*人の役に立つことによってうれしさを感じる人もいた。

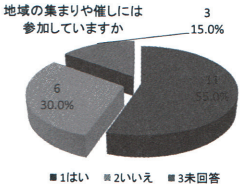
近所の人との付き合いや親しい人は？

・民生委員や老人クラブの会員との交流が多い。
・近所同士は顔見知りで、お互いに助け合っている。
・最低限の付き合いしかしていない人もいる。

〈考察〉
・地域のつながりはその人自身の生活を支えている
・いい距離感が保たれている
・コミュニケーションはその人にいい刺激をもたらす
・認知機能の低下や老化防止につながっている
・共助関係が存在している

25

地域の集まりや催しへの参加状況



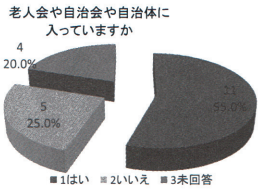
*参加している催し
交通ボランティア・文化祭・夏祭り・旅行など様々

*不参加の理由
足が悪い・外出が億劫・情報がない

〈考察〉
地域で様々な催しがあり、半数以上の人が参加しているが、参加の意思があってもできない人がいた。若い世代が中心となって多くの高齢者が参加できる集まりを考えていくことも必要だと考える。

26

老人会や自治会への参加状況



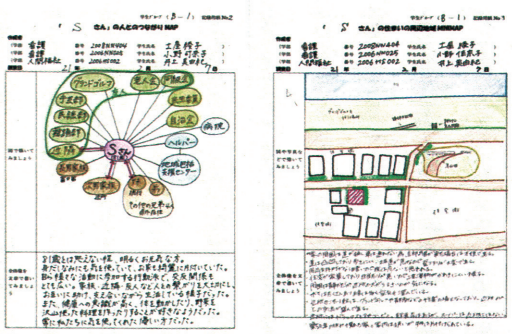
半数以上が参加していた。
*老人会、自治会以外の会
・短歌の会・氏子総代・
社会福祉協議会　など

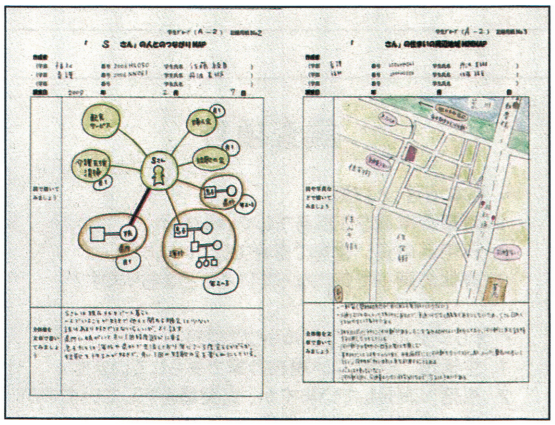
*不参加の場合
足が悪い・外出が億劫・
情報がない(本人はないと
思っている)

〈考察〉
不参加の理由で情報がないということがあがっていた。
地域の人と協力しながら必要な情報を提供したり、参加を促すことも必要だと考える。

27

作成した「人とのつながりMAP」と「住まいの周辺MINI MAP」





お住まいのあるこの地域の暮らしやすさ・暮らしにくさ

*暮らしやすさ
近所付き合いがある・幅広い年代の人が暮らしている・交通の便が良い・日当たりが良い

*暮らしにくさ
近所付き合いがない・若い人がいない（高齢者世帯が多い）

〈考察〉
暮らしやすさ、暮らしにくさのどちらにも人との交流についての回答があったことから高齢者の生活において人との交流が暮らしやすさや暮らしにくさに関わっている。

30

「地域にあったらいいなぁ」と思う助け合いの仕組みやサービスは？

*タクシーに変わる交通手段(割引にはなるが負担が大きい。循環タクシーは待ち時間が長くて不便)
*気軽に使える在宅サービス
*一人暮らしの人との関わり
*ボランティアにちょくちょく来てほしい
*熱心に診てくれ、訪問してくれるお医者さん
*地域の助け合いが強いので、現状でいい。

31

今後の生活に向けての希望

*今のままの生活を維持していきたい。不自由に感じることがあっても、他の事で補っていける。

〈考察〉
支援する立場の者が、高齢者(利用者)の望むような生活ができるように考えていくことが必要だと考えられる。



32

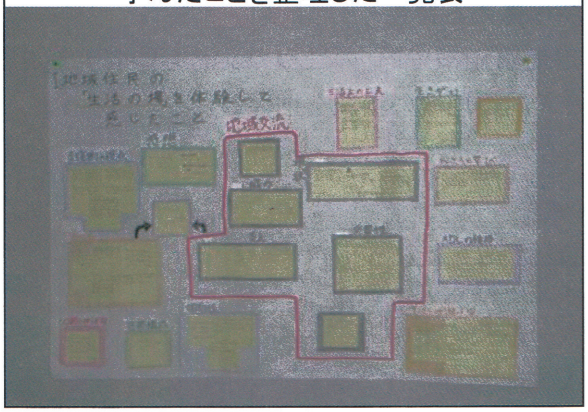
学生へ向けて一言

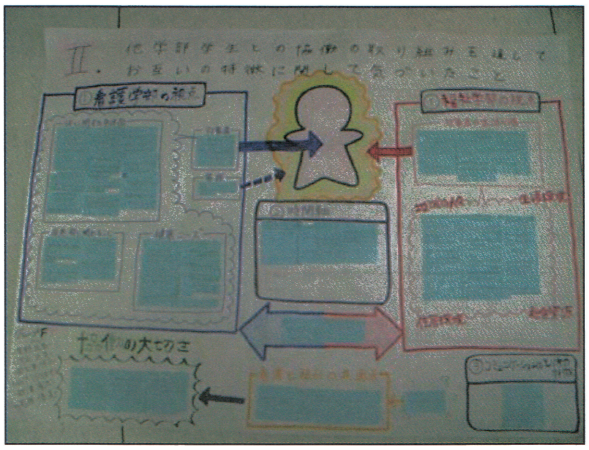
＊時代に合った生き方があると思うが、そんなに人生は甘くない。
＊友人を多く作り、何でも話せる友人を少なくとも一人は作ること。
＊イラッときても、その時は耐えて時が解決してくれる（聞き流すことも必要）

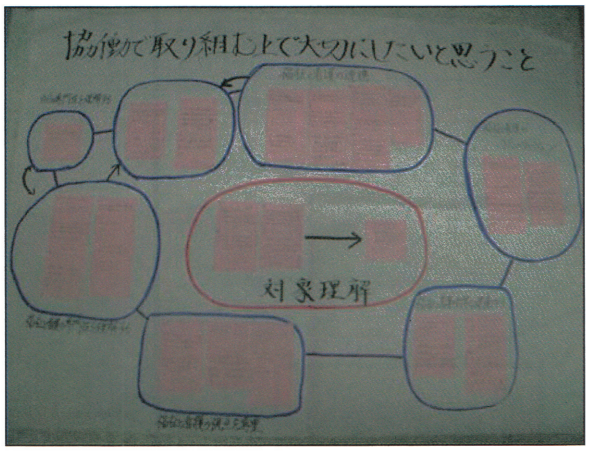
演習を通しての学び・考えたこと

Ⅰ．地域住民の「生活の場」を体験して感じたこと
Ⅱ．他学部学生との協働の取り組みを通してお互いの特徴に関して気づいたこと
Ⅲ．今後協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと
Ⅳ．今後この体験をどのように活かしていきたいか
Ⅴ．学生である私たちが地域や高齢者に対してできそうなことはなにか

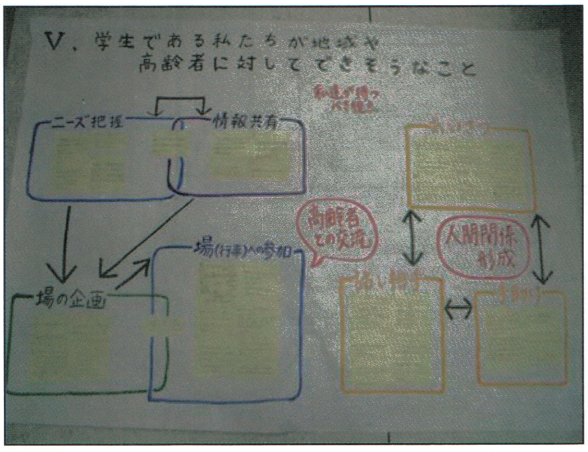
学んだことを整理した一覧表











まとめ

- この取り組みを今後の活動や社会に出た際に活かしていきたい！
- 看護と福祉がお互いに考え、行動を起こすことで相乗効果を生み出す！
- 新しい専門学科を増やしてほしい！＝連携職種の数を増やしてほしい！



感謝

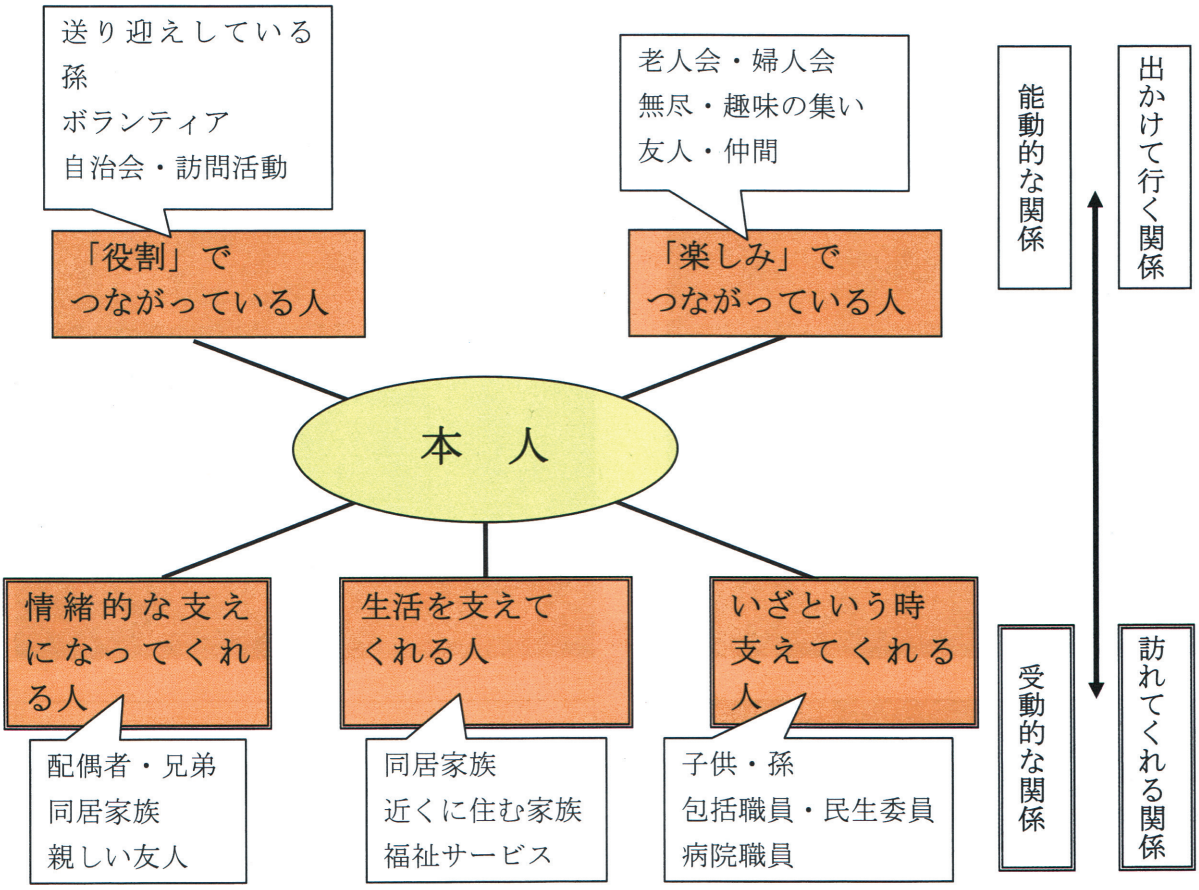
- 調査に協力して頂いた高齢者の方々、甲府市地域包括支援センター甲府西の職員の方々、発表までサポートして頂いた先生方、どうもありがとうございました。
- ご静聴ありがとうございました。



（3）「人とのつながりMAP」、「周辺地域MINIMAP」から見える特色

訪問調査の際に、「人とのつながりMAP」と「周辺地域MINIMAP」の二つのMAPを作成することによって、高齢者の様々な人との幅広いつながりと、周辺地域の状況を把握した。

＜人とのつながりMAPから見える特色＞



多くの人が何らかの支援をうけて生活を成り立たせていて、具体的な援助で生活の支えとなってくれる存在や、情緒的な拠り所や、困ったときに支援してくれる人たちの存在が把握されている。ここでは「訪れてくれる人」の存在が地域で生活する高齢者にとって大きな意味を持っていることが示されている。一方で、与えられるだけでなく、与え手として自らの役割を持って頼られる存在として機能していたり、積極的に自らの住む地域と関わったり、能動的に楽しんでいた

りする「出かけていく」存在としての高齢者の姿も把握されている。「役割」や「楽しみ」の側面も含めて多くの人と様々な形で関わり、地域社会で大きな役割を占めている様子が示されている。

＜周辺地域 MINIMAP から見える地域環境＞

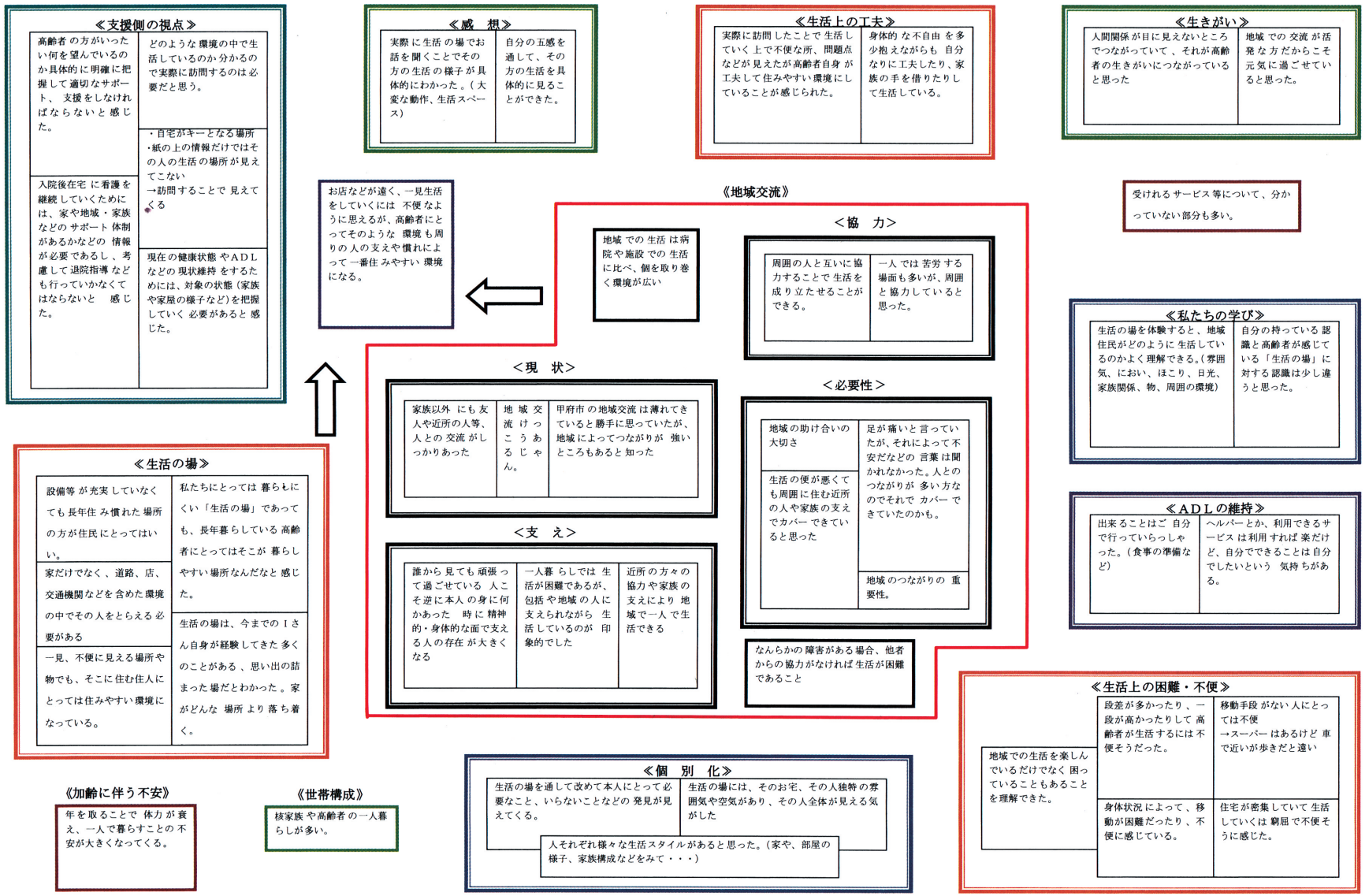
周辺 MAP には、徒歩圏内のスーパー、ドラッグストア、コンビニなど日常生活品を購入する店や、かかりつけの開業医院・病院・整骨院・などが記入され、これらの施設が生活の支えとなっている様子が示されている。地図とあわせて、徒歩や自転車で日常の買い物や散歩に出かけている様子が記述され、河川敷や車の少ない通りなど、高齢者が歩きやすい環境と、交通量の多さや、段差や坂、路面の凹凸などの歩きにくさについても聞き取りが行われ、多くの情報が地図に記されている。公営団地のエレベーターがない環境や、その人の徒歩圏内に日常の買い物が出来る店がないなどの環境が存在すると、訪問介護や宅配など、訪問系のサービスがそれを補う形で活用されている様子も示されている。

（４）グループワークのまとめ

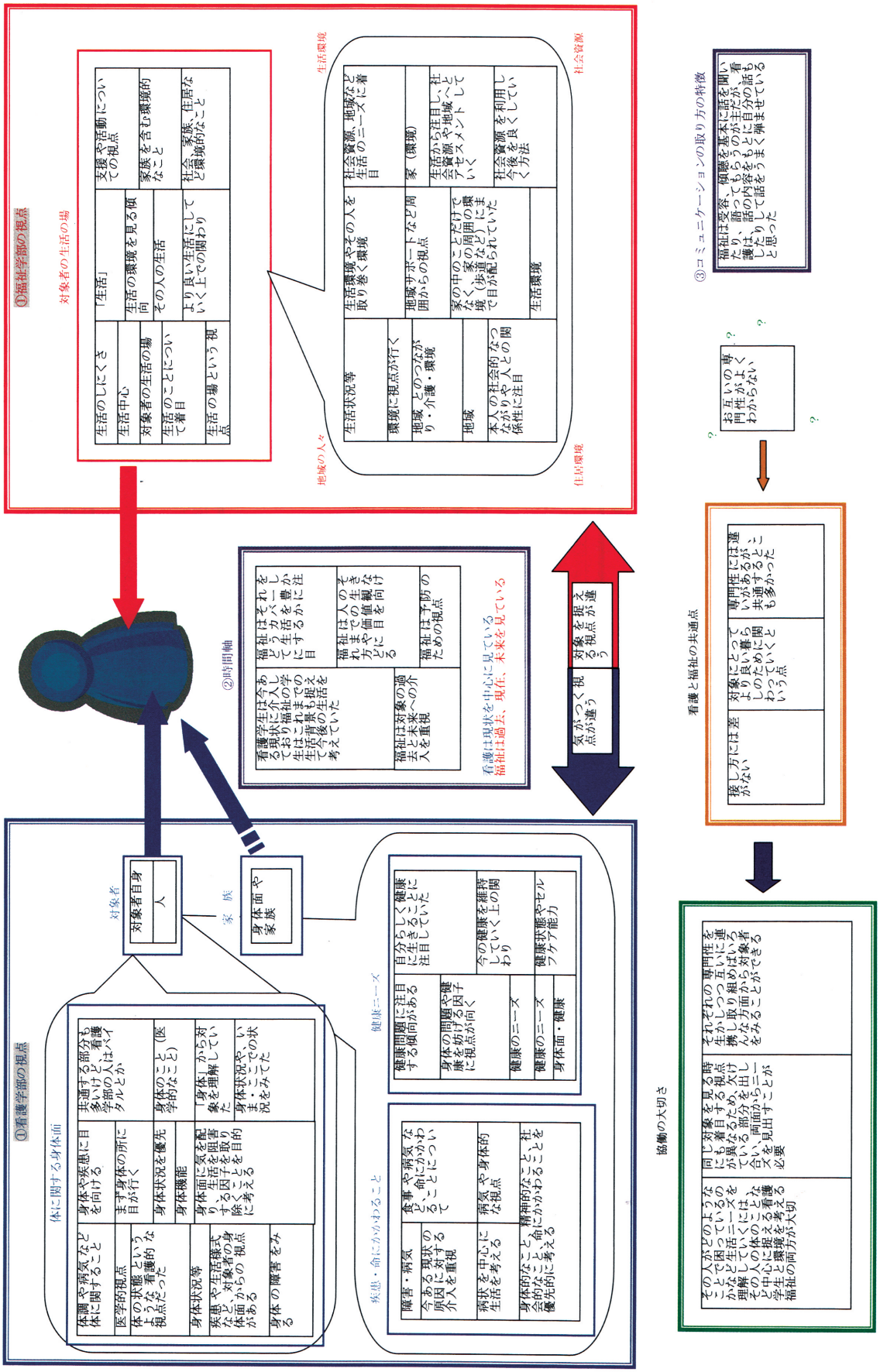
＜３点の重点目標に沿った話し合い＞　　平成 21 年 2 月 7 日

重点目標	1、看護学部と福祉学部（以下両学部）の学生がチームで高齢者の戸別訪問調査を行い、高齢者の生活を実感し、高齢者の視点から生活や健康ニーズを考えることができましたか。具体的にどのようなことでしたか。	2、両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同プロセスを通して、特に、地域に暮らす高齢者の人とのつながりや周辺地域の理解を深めることができましたか。実際にMAP（記録用紙No2-3）を作成してみてどのようなことを感じましたか。	3、両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同プロセスを通して、相互の理解を深められましたか。お互いの専門性についてどのように考えていますか。演習前と演習後ではどうですか。
Aグループ	・実際に訪問して生活の場でお話を聞くことで、その方の生活の様子が具体的にわかった。（生活のスペース、家の中での大変な動作） ・健康のために自分なりに努力している様子がわかった（くるみで手の運動、散歩、鉄棒など） ・一人暮らしなので、寂しい気持ちは強いが、くよくよせず頑張っている様子が伝わった ・一人で倒れた時のための緊急装置を用意していた ・交通が不便(タクシー代が高い) ・兄弟とのつながりを心の支えにしていた	・徒歩での行動範囲が広かった ・一人暮らしなので不安を抱えているので、近所の人との交流をこころの支えにしていた ・買い物にも、往復１時間くらいかかってしまい大変だと言っていた。（特に外出） ・男女間で、人との交流への意識が違った。（男性は人との付き合いを面倒くさがるが、女性は交流を大切にしている）	・人間福祉学部の生徒には、制度や地域包括支援センターの特性を聞けたりした ・看護学部の生徒には、本人の身体状態を見ることを優先される傾向があったが、福祉学部の生徒は生活の環境を見る傾向があった。 ・地域で生活している高齢者を見る根本的な視点は共通していた。（地域で健康に暮らしていくための援助）
Bグループ	・Nsの高齢のイメージは不健康、地域で暮らす人は健康だなと。 ・退院後地域で生活していく上での病院との連携が必要。	・人間関係など目に見えないことなどのつながりを確認できた ・道の狭さ、坂など生活しにくそうに思ったが、住み慣れることでその人にはいい環境になっている ・周辺地域との交流が深い。 ・地域のつながり強いことが、健康へつながると思った。	・人間福祉と看護の視点の違い。 ・聞き出し方に慣れている人間福祉。相手に語っていただく。 ・入院していても、自宅にいても高齢者にとっては「話すこと」はいい刺激になっている。
Cグループ	・今後の生活、健康についての不安があるとわかった。 ・漠然とした不安が強いと感じた ・子どもたちに迷惑をかけたくないと思っていると感じた	・思っていたより人とのつながりがあって驚いた ・積極的な人だから人とのつながりも多い ・自治会などの地域の活動が多いと感じた ・活動が多くてもその人の性格次第で活かせるかどうか違うと感じた ・つながりMAPと周辺MAPを両方作ることで、高齢者を統合的に捉えることができた。	・看護は対象者の身体的な面や家族とのつながりに視点を向ける ・福祉は、社会支援や地域とのつながりに視点を向ける
Dグループ	・高齢者は自分が受けれるサービスについてわかっていない人もいる。そしてそれに対して不満・不安を感じている様子。 ・病院と違って自宅は落ち着ける場であるからか、正直に気持ちの表出がみられた。 ・一人暮らしや、高齢者同士の暮らしでは、病院への移動も困難であり、昭和の医療のような訪問医療や相手を思う医療を求めていた。 ・市や民生委員の対応で不満を体験したことで、苦労もしたし、改善を望んでいる。 ・今は息子さんたちも近くにいて、子どもにある程度頼れるけど、これからは親２人に子１～２人という構図になると支援していくのも難しいという心配もしていた。	・生活していくということは一人ではできない。 ・家族や近所、地域のサービスなどの資源を活用している。 ・地域によって、高齢者ばかりの世帯が多かったりすると、お互いに協力したり、お茶したりと交流があり、特に一人暮らしの人にとっては大切なつながりであると思った。 ・近所の人に車を出してもらい病院にいくなど助け合っている様子がうかがえた。 ・公共交通機関は、思っていたより少なかったが、使用している状況もあまりなく、お互いに車を出し合ったり、歩いて行ける範囲での生活など、工夫して生活していると思った。	・看護と福祉でのつながりがうすい気がした。つながっていれば良いのに、お互いにお互いの専門内容についての知識不足・理解不足によりどう関わってよいか分らない、連携できていないなと感じられた。 ・お互いに専門としない（？）、例えば今の段階であるからかもしれないが、看護は地域のサポートや制度について分らない部分が多かったのを、福祉の方にフォローしてもらうなどの関わりができたことから、こういったお互いの専門性を活かした関わりをしていけたらいいと思った。
Eグループ	・「ヘルパーを利用すると、生活は楽になるけれど、自分でやろうとしなくなる」と話しており、今の健康状態やADLなど、現状を維持することが大切であると感じた。 ・デイサービスやヘルパーなど、利用できる社会資源を活用しながらも、自分でできる部分は自立しようと努力している様子が見られた。その人らしく生きていくことを支えるためにも、情報・資源の提供は大切。	・人とのつながりが多い。その中でも、家族とのつながりは重要（娘が外出時に車を出してくれるなど） ・歩行が困難になるほどの現病歴があるけれど、それにも関わらずデイサービスに積極的に出かけたりしている。人とのつながりを持ちたいと思えるよう支えていくことが必要。 ・自分達にとっては近い職場でも、高齢者にとっては、歩行が困難であると感じた。	・看護→対象の安静した生活を妨げるような因子（疾患や家族との関係など）は何なのかを捉え、そこに介入していくことで、対象が自分らしく健康に生きていくことを支えようとする。 ・福祉→対象の生きてきた背景を知り、その人の価値観や、考え方を理解し、その人の今後の生き方を支えようとする。 ・看護は、今ある現状の原因に対する介入に重視しがちであり、福祉は、対象の過去を知り、今後を支えることを重視している。双方が連携することでよりよく対象がその人らしく生きられるよう支えることができる。
Fグループ	・高齢者がもっている病気から先の見えない不安を感じることができた。 ・ニーズにあった支援がされていた ・支援のさじ加減→意志がある人ならいいが、判断できなくなった時はどうするか？？	・一人暮らしでも包括の人、家族、自治会などとの交流があった ・自治会の人が主体的に一人暮らしの家庭をサポートしている。（地域によっても違う）	・福祉は生活やネットワーク、年金などの制度について知識があった。 ・看護は食事や病気など命に関わることを聞いていた。 ・利用者にとっても、福祉はよくわからないけど、看護師の方が仕事を知られているから安心。 ・看護師は主に病院にいるから生活史がみえない→勉強になった。
Gグループ	・話し相手がほしそうだった（けど、自分から特に動いていない？）→喪失体験が大きいから ・段差がない環境がいい。歩道がほしい。 ・「デイサービスがもっと使えるなら毎日でも行きたい」→それに近いサービスを受けれる場がほしい	・近所の人との交流が思っていたより希薄だった（必要なのにない感じがした）→体が不自由なところをみられるとお互い気を使うから。 ・必要最小限の行動範囲 ・車が通るのに歩道が少ない	・看護は医学的視点から見てたけど、福祉は生活の視点から高齢者を知ろうとしてた。 ・家に行って最初に目がいったのは、看護は高齢者自身、福祉は家全体（環境）
Hグループ	・地域に住んでいて、深く関わるのは結局、家族や地域の人である。 ・福祉職の人や公的な機関からの関わりがもっとほしい	・MAPを作る上で、思ったより多くの人と関わっていたり、そうでなかったり、話を聞く以上に書いたことで理解が深まったことは事実。	・一緒にやれてうれしかった。もっと時間をかけて交流をしたり、同じ授業に参加することで、お互いの理解を深めたり、共通意識を持って参加できたらと思った。半日集合して、あとはグループで・・・といってもなかなか専門性の理解を深めるのは難しいかもしれないです。話し合う時間がもっとほしい。 ・お互いの専門性に違いがあり、それぞれの能力やその活かし方にも様々なアプローチ法があるのはわかっているが、学生間において「頭」以外の部分で理解しあう方法がわからないのかもしれない
Iグループ	・一人暮らし→周りの協力が必要 ・訪問したことで地域の周辺がわかった。そのことにより、今抱えている悩み、生活していく上での問題点がわかり、解決する糸口が見えてきた。 ・実際に訪問しないと、言葉や書類ではわからないことがたくさんあると思った。 ・近所との付き合いがあまりなく、孤立していることが多いことがわかった	・周辺を知ることで、高齢者の移動手段や行動範囲など生活スタイルを知ることができ、生活していく上での不便な点や危険な場所を知ることができた。 ・人とのつながりマップを作ることで、普段どのような交流があるのか、今後どのようなつながりが必要となるのかわかった	・看護では健康ニーズを注目し、対象をアセスメントしていくが、福祉では生活ニーズから注目し、社会資源や地域のアセスメントへつなげていく ・記録をまとめていく上で、看護学生は疾患を中心に作成していくが、福祉では、家族などその人とのつながりを中心に作成する。
Jグループ	・足腰が悪い96歳女性 看護：ヘルパー、サービス等の利用・足腰が悪い 福祉：社会資源の活用	・外に出るか出ないかで人間関係や行動範囲が変わる。	・違うものだと聞いていたからあまり変わらなかった。 ・“社会資源”の捉え方の違い ・（看護は）医師と一緒に病気を治す人／(福祉は）“介護士”のイメージが強い　お互いにこのようなイメージを持っていたが、今回の演習を機に、高齢者のためには看護と福祉の力を合わせるとよりニーズを満たすことができるので、連携することの大切さを学んだ。

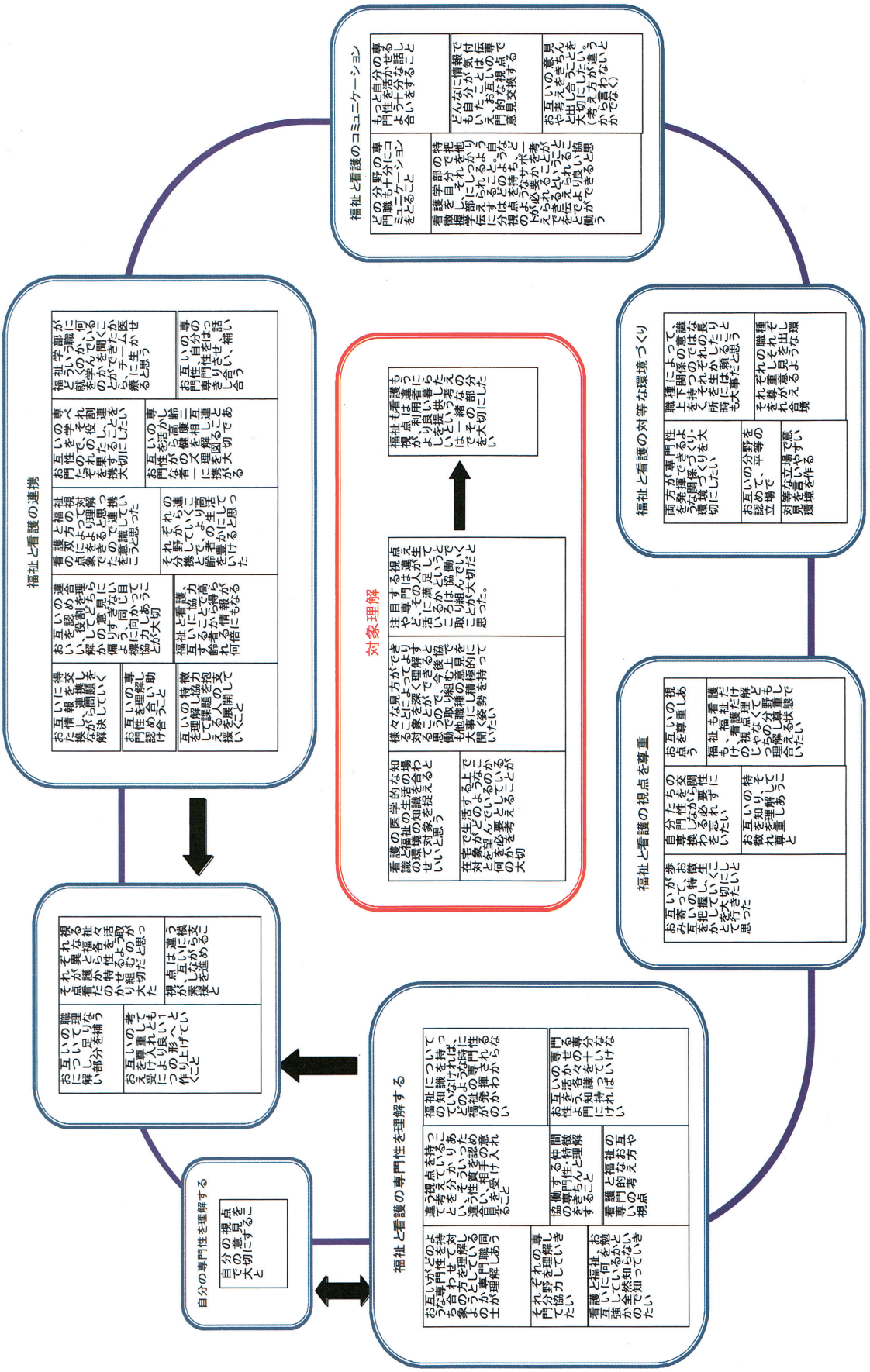
＜地域住民の「生活の場」を体験して感じたこと＞

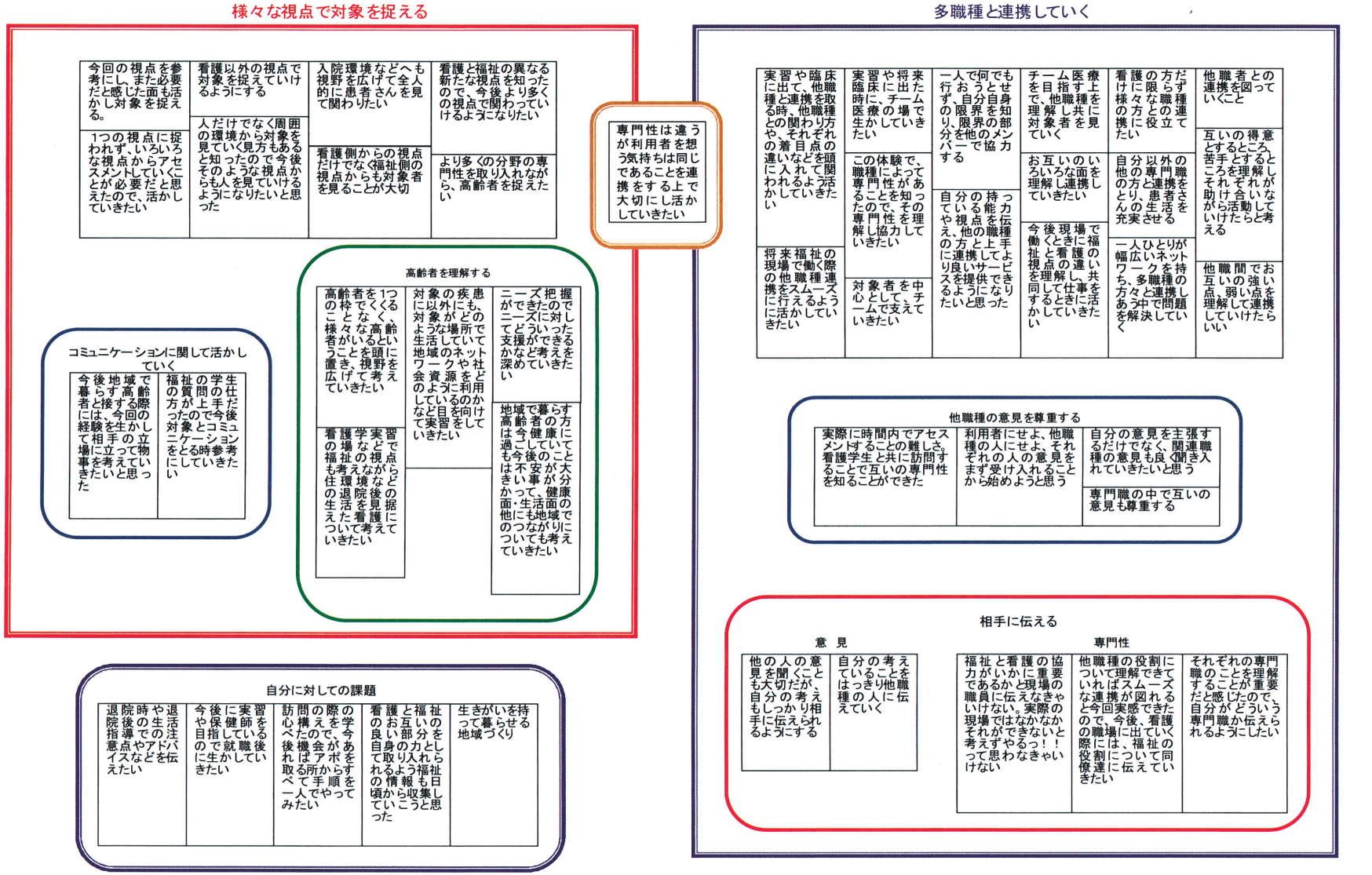


＜多学部との協働の取り組みを通してお互いの特徴に関して気づいたこと＞

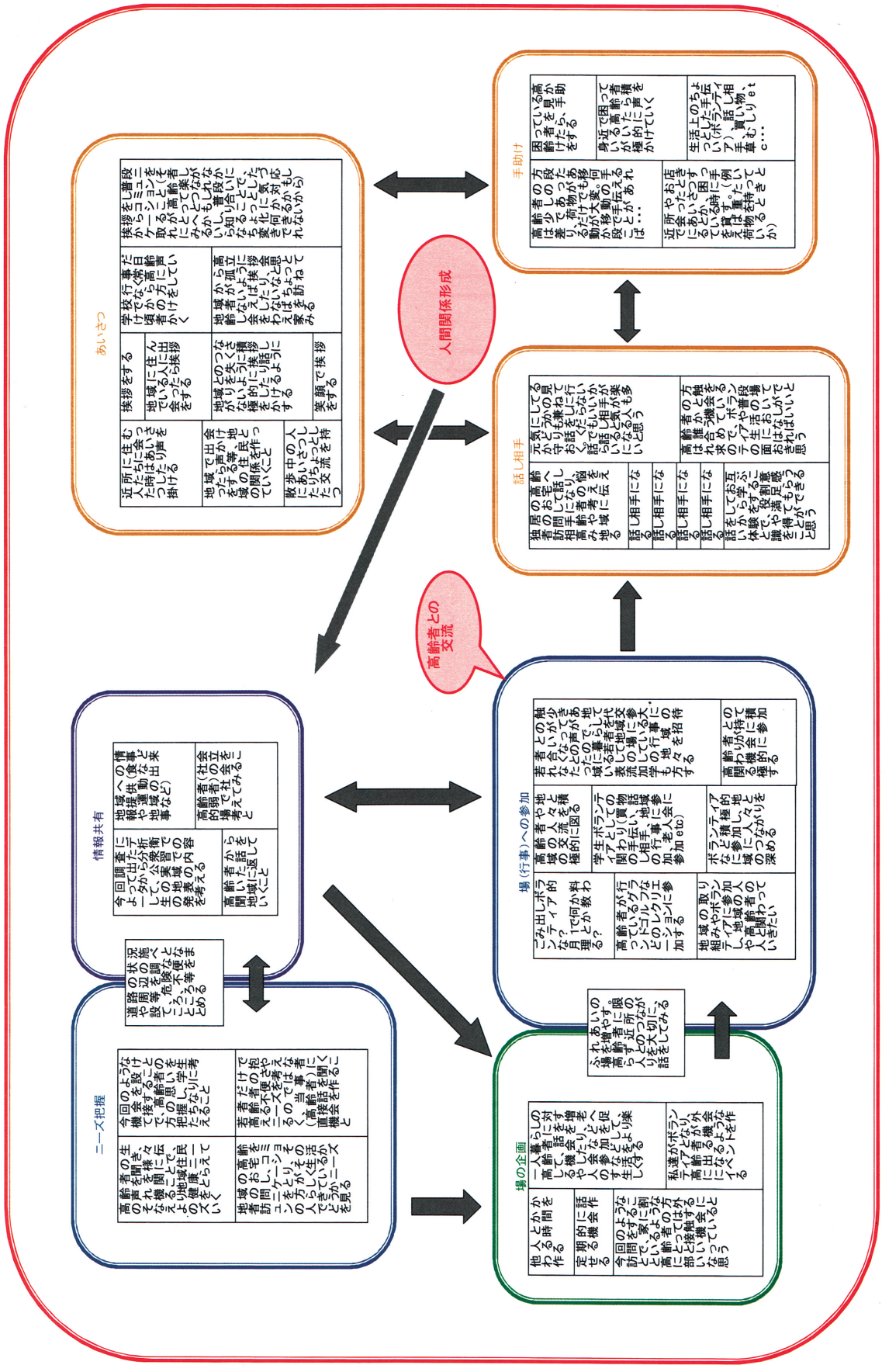


＜今後協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと＞




様々な視点で対象を捉える
参要を必も活捉える。
今回の視点を考にし、また面も感じた対象を捉だと感じた
看護以外の視点で対象を捉えているようにする
人だけでなく周囲を対象をある後今も点るで視点もいける見方を見ていけるようになりたいと思った
1つの視点に捉われず、いろいろなアセスメントしていくことが必要だと思えたので、活かしていきたい
環境を広げて患者さんを見たい
看護側からの視点だけでなく福祉側からの視点も対象者を見ることが大切
看護と福祉の異なる視点を知り多くの新たな視点で関わっていくようになりたい
専門の分野の方の視点で関わっていけるようになりたい
看護と福祉の異なる視点を知り多くの新たな視点で関わっていくようになりたい
専門性が違うと利用者は同じ気持ちであることを連携をする上で大切にしていきたい
高齢者を理解する
患者の疾患にも、対象者のどの場所にも、以外のネットワークや資源になっているなど対象者を取り巻く環境を含めて生活を理解していきたい
把握でしたったに対できたいこと考えていきたい
ニーズがニーズなどの援助を深めていきたい
暮らす方にて大分健康のでにえていきたい
地域で暮らす高齢者の健康状態や今後の安否不安について、生活地域のつながりも考えていきたい
高齢者のこと様を頭に置き、広げていきたい
1つくる高齢者をとらえるのではなく、高齢者を取り巻く環境を含めて理解していきたい
習で点などの据にて実際の視野がなく後見護学など環境院を看考えて退活たいて生えついていきたい
看護の福祉も考え住の生えついていきたい
コミュニケーションに関して活かしていく
生仕だ後学の手今コミュニケーションとるにしたい
社会の問上で対人参考していきたい
福祉の質がったので高齢者と接する時に
地域で高齢者と接する際のコミュニケーションの立ち物いっ
今回のし方かし
暮らす方には、経験を生かして場事をきたい
相手の立って考えてと思
多職種と連携していく
医療上をに見す種を共し
医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、薬剤師、ソーシャルワーカー、臨床心理士、管理栄養士、歯科衛生士、義肢装具士、視能訓練士、臨床工学技士、救急救命士、歯科技工士、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床検査技師、臨床工学技士、臨床心理士、臨床検査技師、臨床工学技士、臨床心理士、臨床検査技師、臨床工学技士、臨床心理士

＜学生である私たちが地域や高齢者に対して出来そうなことは何か＞



6） 学 生 評 価

（1）リフレクションペーパー

① オリエンテーション時（1月6日）

看護：n=33　福祉：n=18

Ⅰ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

1）看護学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	34	25	9
・身体状況（健康状態・疾患の程度）	22	15	7
・日常生活状況（食事・睡眠、運動、ADL）	4	2	2
・いきがい、楽しみ、思い	3	3	
・家庭の状況について	2	2	
・精神状況	2	2	
・社会的状況	1	1	
（2）看護学部の学生の方が得意であると感じた点	8	5	3
・対象者を中心とした考え方をもっている点	4	4	
・身体状況についての観察	2		2
・生活から健康面を考える視点	2	1	1
（3）学生の姿勢・態度	4		4
・積極的	2		2
・グループワークが上手（まとめが上手、スムーズな進行）	1		1
・面接方法が慣れている	1		1

2）福祉学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	29	21	8
・生活について（生活の様子、暮らし方、一日の流れ、生活の質）	7	5	2
・利用している・過去に利用した社会福祉サービスについて（社会資源、サービス）	11	10	1
・家庭の状況について	3	1	2
・社会交流（地域や人とのつながり）	2	1	1
・保険の種別	2	1	1
・経済状況	1	1	
・居住地域の様子	1	1	
・学生の訪問目的の認識度	1	1	
・過去の職業	1		1
（2）福祉学部の学生の方が得意であると感じた点	3	3	
・介護保険、介護認定を受けている人のイメージができる	1	1	
・コミュニケーション能力の高さ（共感の姿勢、情報の引き出し方）	1	1	
・地域にいる対象者、そして生活へと広く捉えられていた	1	1	
（3）学生の姿勢・態度	1	1	
・人との関わりを大切にしている	1	1	

3）2つの学部で共通の視点・姿勢	記述数	看護	福祉
	10	6	4
・全人的な見方は変わらない	5	4	1
・「人」を相手とした専門職	2	1	1
・家族を含めた視点をもっている	1	1	
・リーダーシップをとることができる	1		1
・お互いに知りたいと思っている	1		1

4）他学部との協働での取り組みによる学び	記述数	看護	福祉
	17	9	8
・お互いの視点が異なっていて、とても勉強になった（視野が広がった）	6	4	2
・質問方法を考える中で、観察の視点や考え方が違うことがわかった	4	1	3
・相互に専門性を活かし、アプローチしていくことで、よりよいケアにつながる	3	1	2
・他学部の学生の取得資格、授業、実習などについて知ることができた	2	2	
・切り口、視点が違うので、お互いが連携を図ることで、その人をより多角的に捉えられる、異なる分野の考え方が合わさることで様々な視点で意見が抽出できる	1	1	
・高齢者が地域で暮らすために、密に関連している	1		1

5）要望・意見	記述数	看護	福祉
	1		1
・今後も協働の取り組みがあるということなので、他学部の学生の特徴をみていきたい	1		1

Ⅱ．今後協働で取り組む上で、大切にしたいと思ったこと

1）協働	記述数	看護	福祉
	44	27	17
・それぞれの着眼点に基づいて情報収集し多角的に対象を捉え支援を考える（視点の共有・目的の共有・不足部分の補い合い）	18	14	4
・視点が異なることを利点と捉え、意見交換しお互い尊重し合い取り組む	16	11	5
・連携やチームワーク、雰囲気、コミュニケーションを大切にしていきたい	7	1	6
・傾聴	2		2
・役割を決めて会話をすすめていく（看護は健康面、福祉は地域サービスというように）	1	1	

2）相互理解	記述数	看護	福祉
	4	3	1
・お互いの特性を理解する（他職種の考え方、知識を学ぶ）	4	3	1

3）自己の取り組み・課題	記述数	看護	福祉
	16	10	6
・他職種との協働から自己の視点も広げる	4	2	2
・積極的に意見を出す	4	2	2
・連携についての考察を深める	2	1	1
・実際に訪問するので、地域の人への配慮や訪問先では礼儀に気をつける	2	1	1
・自己の専門性の確認をする	2	2	
・看護は、福祉の知識を身につけておくことも大切である	1	1	
・看護とは何か理解してもらえるように努力する	1	1	

Ⅲ．今回の体験を、今後どのように活かしたいと考えるか

1）他職種との連携	記述数	看護	福祉
	24	18	6
・それぞれの専門性を活かすことで、対象者にとって最良の知識と技術を提供していきたい	20	14	6
・他職種と協働する場面では、積極的に意見交換する（自分の感じたことを言い、相手にも意見を聞いてみたい）	2	2	
・他職種間で連携を図っていく上でそれぞれの役割を明確にする	1	1	
・地域で生活する人達の援助をしていく上で、看護と福祉の連携の強さがとても影響することがわかった	1	1	

2）互いの学部の学生からの学び	記述数	看護	福祉
	10	6	4
・お互いの特徴を活かしていきたい	3	3	
・演習当日には他学部との視点の違いを観察しながら、特性の違いを学びたい	3	1	2
・初対面の人とのグループワークでの雰囲気づくりの大切さを学んだ	2		2
・質の高い看護を提供していくためには他職種との連携が欠かせない。　演習を通し、連携の問題点や重要性を学びたい	1	1	
・社会資源の理解が今の自分には不足していることがわかった	1	1	

	記述数	看護	福祉
3）学び・今後の取り組み	6	4	2
・身体面だけではなく、色々な側面から対象を捉えていきたい	2	2	
・今後の交流のきっかけにしたい	2		2
・自分の看護の役割をしっかり把握し、役割が果たせるように努める（知識・技術・地域施設で働く上で臨床経験を積むことが大切）	1	1	
・今後も他学部の学生と交流していきたい	1	1	

Ⅳ．その他、どのようなことでも考えたこと、疑問、感じたこと

	記述数	看護	福祉
1）貴重な体験	2	2	
・他学科との協働ということで、初めは必要性の有無を感じたが、実際やってみたら新たな気づきがあって楽しかった。意見交換をすることで自分に足りない知識を感じた。	2	2	

	記述数	看護	福祉
2）実施時期	1		1
・フィールドワークをする前にグループワークが一回というのは少ないと思った	1		1

	記述数	看護	福祉
3）その他	8	3	5
・看護の視点を学び、新しい知識を吸収したい	2		2
・初対面の相手に１対４は疲れた	1		1
・すごく大変そう	1	1	
・実習を多く経験しているため、刺激があり勉強になった	1	1	
・自分が何のために地域に出て、聞き取り調査を行うのか理解した上で取り組まなくては意味がないと思う	1		1
・地域に暮らす高齢者を自分たちなりにイメージしてみたが、どのくらいギャップがあり、現状はどうなのか、看護学生と連携し学んでいきたい	1		1
・個別性に合わせていく必要性を改めて感じた	1	1	

② 演 習 日（２月７日）

看護：n=33　福祉：n=20

Ⅰ．地域住民の「生活の場」を体感して、感じたこと、考えたこと

		記述数	看護	福祉
1）高齢者に対する理解が深まった				
（1）高齢者の生活の様子や生活環境が理解できるようになった		54	43	11
実際の生活の場に行き、高齢者の生活が実感できた	・実際に生活の場に行くことで、生活の様子や周囲の状況を実感でき、高齢者の生活がよりわかりやすかった(町や住宅の様子を観察できた、高齢者によっての危険や、不便さを感じた)	35	27	8
自立して生活していると感じた	・できることは自分でやるという気持ちが感じられた	11	9	2
	・周囲の支援を受けながら、一人での生活を継続していると感じた	1		1
生活環境が整えられていると感じた	・快適に生活できるような工夫が感じられた	4	4	
	・近所の人に合鍵をもっていてもらったり、緊急時に医療機関につながるボタンが設置されていた	1	1	
住居の工夫をした方がよいと感じた	・段差が多く、転倒するリスクが高いと感じた	2	2	

		記述数	看護	福祉
（2）高齢者の思いが理解できるようになった		19	15	4
さみしさや不安を感じた	・一人暮らしの人は特に不安や寂しさを抱えている	5	5	
	・今後について漠然とした不安を抱えている	2	2	
	・話す相手がいないことが寂しさを感じている	2	2	
	・定年を迎える息子が帰ってくるまで元気でいることを、心の支えにしている	1	1	
	・サービスについて理解できていない部分があると不安や不満が感じられた	1		1
家族への思いがある	・家族を大切に思う気持ちが感じられた	4	3	1
地域への愛着がある	・地域への愛着を感じた	4	2	2
家への愛着がある	・家への愛着を感じた	3	2	1

		記述数	看護	福祉
（3）高齢者が楽しみや生きがいを持ち、健康に気をつけて暮らしていることが理解できた		20	13	7
	・自分の楽しみをもっていて、地域の集まりや催し物にも積極的に関わっている人が多いように感じた	11	9	2
	・健康意識が高く、今後もより健康に過ごしていこうと、食事や運動に気をつけている	6	4	2
	・精神的にも身体的にも元気な高齢者が多いと感じた	3		3

		記述数	看護	福祉
2）家族や近隣との関係について理解できた		59	32	27
近隣との交流がある	・近所の人や友人とのつながりが感じられた	23	11	12
	・地域の人との交流が生きがいや楽しみ、元気に健康で過ごせる源になっているように感じられた	3	3	
	・地域住民が頼りにするのは地域住民であることを思い知らされた	1		1
家族のサポートがある	・地域や家族との関わりがあると安心して暮らせることを感じた	14	11	3
地域生活の充実	・交通機関やサービス、地域活動の充実が必要であると感じた	5	1	4
	・住民のニーズを発見し、それを社会資源やサービスにつなげる必要がある	4	2	2
	・人との交流を持とうとしない高齢者であっても、地域はその人に目を向けて、何か問題が生じたときに周囲の人々がいち早く気づけるようなシステムが必要だと感じた	2	2	
	・訪問してくれる医師がほとんどいないことを不満に思っていたので、そういったニーズも私達が改善していかなければならないと感じた	1	1	
近隣との交流が少ない	・外出が困難な方は近所との交流は少ない	3	1	2
	・地域とのつながりを希望する声が聞かれた	2		2
	・男性の方が地域住民との交流が少ないのではないかと感じた	1		1

	記述数	看護	福祉
3）その他	33	23	10
・実際に生活の場を訪れ、高齢者の立場になり五感を通して生活を知ることで対象の特徴やニーズをつかみやすい	17	12	5
・その人が何を望んでいるのかを明確にして、サポートしていく必要を感じた。本人・家族を含めみんなで考え、同じ目標に向かって支援していくことが大切だと感じた	4	4	
・高齢者の健康ニーズを考えるときは、身体面だけではなく精神面も重要だと感じた	2	2	
・サポート体制、近所づきあいの差が地域によりあると感じた	2		2
・「生活の場」とは自宅だけでなく、生活に関わる全ての場所であることがわかった	1	1	
・家や地域、家族などのサポート体制を考慮して退院指導を行っていく必要を感じた	1	1	
・予防的視点で考えることができた	1	1	
・親世代や、私たちが地域に住む高齢者のことを支えていかなければならないのだろうけど、何もできていない。情けなさも感じた。	1		1
・一回の訪問で個を取り巻く環境をすべて把握してくるのは大変だが、医療・福祉の専門職の目からその人を捉え意図的な質問もしていかなければならないと実感しました。	1	1	
・初めて会う方に生活や個人情報も質問するので、挨拶や説明、雰囲気作りなどが大切だと思った	1	1	
・生活している空間に入ることに戸惑いを感じた	1		1
・訪問したところ突然の入院と思わぬ状況であったが、高齢者が在宅で生活をするということは、そのようなことがあり得るのだと思った	1		1

Ⅱ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

	記述数	看護	福祉
1）看護学部の特徴			
（1）優先度の高い着眼点	47	32	15
・身体状況（疾患、服薬、ＡＤＬ、食事、栄養、ニーズ、精神面）	42	28	14
・家族関係	4	3	1
・生活歴	1	1	
（2）看護学部の学生の方が得意であると感じた点	9	2	7
・疾患の知識	3	1	2
・初対面の人との会話	2		2
・柔らかい話し方	2	1	1
・話を弾ませる	1		1
・話の中でうまく質問をする	1		1
（3）学生の姿勢・態度	9	5	4
・現状を見る	6	3	3
・会話の中から、自分の意図したことを聞き出そうとしている	2	2	
・対象が自分らしく健康に生きていくことを支えようとしている	1		1

2）福祉学部の特徴	記述数	看護	福祉
（1）優先度の高い着眼点	87	58	29
・社会資源・サービス	21	16	5
・生活状況(経済状況、社会関係、ニーズ、家族関係)	19	11	8
・生活環境	14	11	3
・住環境	14	7	7
・地域ネットワーク	9	7	2
・生活歴・価値観	9	6	3
・ストレングス	1		1
（2）福祉学部の学生の方が得意であると感じた点	13	7	6
・傾聴	2		2
・話を引き出す聞き方	2	2	
・制度やその仕組み	2	2	
・受容	1		1
・高齢者目線に立つこと	1		1
・話しながらメモを取ること	1		1
・その人を広い視野で捉える	1		1
・質問の投げかけ方	1	1	
・決められた時間の中で必要な情報をとること	1	1	
・地域包括支援センターの働きや対象	1	1	
（3）学生の姿勢・態度	9	5	4
・対象の過去と未来への介入を重視している	3	3	
・質問を項目立てて順に聞いていく	2	2	
・生活歴を知った上でより良い生活を支援する	2		2
・ただやらされている状態	1		1
・固い形式	1		1

3）2つの学部で共通の視点・姿勢	記述数	看護	福祉
	11	10	1
・地域住民が健康に暮らしていくための援助という目標	3	3	
・よりよい暮らしのためにかかわっていくこと	3	3	
・その人がその人らしく暮らしていくためにはどうすればいいかという視点	1	1	
・対象の生活における不自由な点はどこなのかという根本の考え	1	1	
・地域住民の安全で安心な生活を望み、考えていくという目標	1	1	
・高齢者が地域で生活していくためには、周囲の人の支えが必要だという考え	1	1	
・課題を抱えている人に対するかかわり方	1		1

4）他学部との協働での取り組みによる学び	記述数	看護	福祉
	31	25	6
・お互いの専門性を生かして協力していくことが大切なのだと思った	6	6	
・他職種と協働することで、お互いに不足している視点を補うことができる	6	5	1
・いろいろな方面から対象者を見ることができ、より良い支援・サポートを対象者に提供できると思った	5	5	
・異なった視点から高齢者をみていくことで、気づくことができなかったところをお互いに意見交換でき、高齢者の理解によりつなげていくことができた	3	2	1
・看護の視点、福祉の視点それぞれで対象者を捉え一緒に生活や健康ニーズを考えていくことが重要だと感じた	1	1	
・専門職同士での関係性がうまく築かれていることが重要	1	1	
・「その人の生活のことを考えた看護」というものを実感することができた	1	1	
・それぞれが自分の専門を十分に把握できていないと協働して取り組んでも本来の目的を達成することができないと強く感じた	1	1	
・人間福祉学部の生徒と意見を交わすことで、新たな視点で高齢者の取り巻く環境について見ることができたように思う	1	1	
・福祉のように、地域と連携のとれる結びつきが大切だなと感じた	1	1	
・お互いが異なる視点を持っていたことでより幅広い観察ができたと思うし、そういうことを感じたからお互いを尊重しあって動くようになっていたと思う	1	1	
・仕事内容の違いも面接の行動に表れているのかと考えた	1		1
・同じフィールドに立っていても、どこか違うことを考えているのだと気付くきっかけになった	1		1
・お互いの専門性を理解していれば、提供できるサービスの幅は広がるし、内容も深まると思った	1		1
・お互いの違いについて認め合えば、良き協力者となると感じた	1		1

5）意見・要望	記述数	看護	福祉
	3	3	
・まだお互いがどのようなことを勉強しているかなどを理解はできていないので、もっとお互いの職種を理解できたらさらによい連携が取れると感じた	1	1	
・最初から、もっと互いの学部の特徴が分かればもっとよい演習ができたのではないかと思った	1	1	
・学部同士が質問を考えあうことで、それぞれの学部の特徴性のある質問が出てきて、互いに違った視点を持っていることもわかったのではないかと思った	1	1	

Ⅲ. 今後、協働で取り組む上で、大切にしたいと思うこと

1）協働	記述数	看護	福祉
	64	35	29
・それぞれの着眼点に基づいて情報収集し多角的に対象を捉え支援を考える（視点の共有・目的の共有・不足部分の補い合い）	44	26	18
・視点が異なることを利点と捉え、意見交換しお互い尊重しあい取り組む	10	8	2
・コミュニケーションを多くとり、良好なチームワークを作る	6	1	5
・対等な立場で協働していく	3		3
・役割分担をする	1		1

2）相互理解	記述数	看護	福祉
	11	7	4
・お互いの特性を理解する	11	7	4

3）自己の取り組み・課題	記述数	看護	福祉
	16	10	6
・他職種への理解を深めておく必要がある	5	3	2
・自分の専門性だけにこだわるのではなく、視野を広げていきたい	4	4	
・それぞれの専門性をこれからの授業などでさらに深めたい	3		3
・看護の専門性を他職種にしっかり伝えられるようにしたい	2	2	
・各々の専門知識を十分に持っていなければならない	1	1	
・初めての人との協働では、踏み込んだコミュニケーションをとることができなかったので、次の機会ではもう一歩踏み込んだ話し合いをしたい	1		1

4）事前準備	記述数	看護	福祉
	3	2	1
・今回の関わりだけではお互いの専門職としての役割を把握することは難しい	2	2	
・話し合える時間が足りなかった	1		1

Ⅳ. 今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか

1）他職種連携	記述数	看護	福祉
	27	17	10
・他職種と連携していきたい	13	8	5
・チームで支えていけるような看護をしたい	4	4	
・ネットワークを持ち、広げていきたい	3	3	
・円滑な連携をしたい	1		1
・いつでも連携できる姿勢でいられるようになりたい	1		1
・看護と福祉が互いに力を合わせ、連携できる様に努めていきたい	1		1
・福祉と看護の協働がいかに重要であるかを現場の職員に伝えていけたらい	1		1
・ますます望まれる連携の需要にこたえられるようになりたい	1		1
・自治会や消防署とも連携できるようにしたい	1	1	
・協力しあう	1	1	

2）他職種理解・尊重	記述数	看護	福祉
	22	15	7
・他職種の専門性について理解したい	10	7	3
・お互いの専門性・意見を尊重していきたい	6	5	1
・看護という職種についても理解を深めたい	3	3	
・福祉の役割について同僚達に伝えていきたい	1		1
・専門職の中で社会福祉という分野の専門性をしっかり主張していきたい	1		1
・互いに足りない部分を補い、互いの長所を活かせていきたい	1		1

3）情報交換・共有	記述数 5	看護 5	福祉
・情報交換・共有をしていきたい	5	5	

4）さまざまな視点を持つ	記述数 13	看護 9	福祉 4
・生活の視点を活かしていきたい	4	4	
・看護・福祉その他の職種の視点をお互いに見つけながら支援を行いたい	2	1	1
・福祉側の視点からも考えることをしていきたい	2	2	
・自分の一つの視点だけではなく、他の人の視点で見ることを忘れないようにしていきたい	2		2
・他分野の視点を大切に、その人の取り巻く環境を考えていきたい	1	1	
・他の他分野の職種相手にも同じ姿勢で臨みたい	1		1
・高齢者に対してひとつの考え方ではなく様々な考え方をもち、展開していきたい	1	1	

5）退院後、先を見据えた視点	記述数	看護	福祉
・退院後のその人の生活という点にも視点を置けるようにしていきたい	2	2	

6）コミュニケーション	記述数 8	看護 4	福祉 4
・コミュニケーションをとる時に参考にしたい	2	1	1
・意見や考えをしっかり聞いていきたい	2	1	1
・対人関係の発展に活かしていきたい	1	1	
・自分の意見をしっかり言えるようにしたい	1	1	
・相手が話しやすい雰囲気をつくることの大切さ	1		1
・必要な情報を得たり、話を広げるためにどのようにお話を聞いていくかなど考えていきたい	1		1

7）学び・今後の取り組み	記述数 27	看護 16	福祉 11
・「その人の生活のことを考えた看護」ができるようにしたい	3	3	
・生活の場を考えたケアにつなげていきたい	3	3	
・よりよい対象とのかかわりができるようにしていきたい	2	2	
・良い医療・看護が提供できるようにしていきたい	1	1	
・自分の看護というものに活かしたい	1	1	
・仕事の場で利用者のニーズを発見し対応していくときに活かしていきたい	1	1	
・高齢者が必要とするニーズについて資源の開発等の環境改善の視点を考えていきたい	1		1
・人とのつながりが薄い人に、どう支援すればよいのか考えていきたい	1		1
・ニーズに対してどういった支援ができるかなど考えを深めていきたい	1		1
・地域住人の方と積極的に交流し、看護の子とも交流を深めていければいいと思う	1		1
・私個人のスキルを向上させる	1		1
・お互いの意見や主張をしっかりまとめながら進行できるような立場のソーシャルワーカーになりたい	1		1
・福祉職を世に広める全体的な活動への課題もこれから考えていこうと感じる	1		1
・様々な面の“福祉”を広めることが必要だと感じた	1		1
・自分の知る知識などは自分の近くの人のためにフルに活用したい	1		1
・毎回毎回の経験をしっかり振り返って、次へいかせるようなワークショップを行っていきたいと思った	1		1
・地域のつながりについても考えなくてはならない	1	1	
・地域生活の特徴を大切にしていきたい	1	1	
・行政制度をもっと勉強していきたい	1	1	
・福祉の情報も日ごろから収集していこうと思った	1	1	
・高齢者が健康についてどこまで考え何を実践しているのかを聞いたうえで直すところは直すよう教育していけばいいと改めて思った	1	1	
・高齢者の住みやすい社会を作っていきたい	1		1

8）意見・要望	記述数 1	看護	福祉 1
・パートナーとなる人との信頼関係というものもしっかり築いた上で訪問したい	1		1

Ⅴ．その他、考えたこと、疑問、感じたことなど

1）貴重な体験	記述数 13	看護 8	福祉 5
・他分野の学生と連携しながら学ぶことはとても有意義で、協働や連携の必要性を実感できた。連携が大切だと言われていたが、自分たち自身が体験したことによって、より連携の大切さについて意識づけることができた。	10	5	5
・他学部の学生と交流を深めることができてよかった	3	3	

2）実施時期	記述数 2	看護 2	福祉
・飯田の学生はテスト期間であり、時間の調整がうまくいかなかった	1	1	
・実習する時期を考慮すべき	1	1	

3）質問内容・方法	記述数 2	看護 2	福祉
・全てをオリジナル質問にした方が、お互いの特徴について理解できるのではないかと感じた	2	2	

4）要望・意見	記述数 1	看護 1	福祉
・対象者の性別に偏りがありすぎたのではないかと感じた。男性の一人暮らしと女性の一人暮らしでは、やはり違いがあると思うし、その違いを共有していけたらよかったと少し感じた	1	1	

5）感想	記述数 21	看護 11	福祉 10
・全体的に時間が少なく、もう少し一緒に活動できる場があれば、お互いの特徴を知ることができると感じた	7	4	3
・他学部との初めての協働でうまくいくか不安もあったが、とても身になる演習であった。	2	2	
・既に行われているかもしれないが、行政の制度を高齢者にもわかるように地域の場に出向いて紹介していく必要がある	1	1	
・その時々の社会形態に合わせて医療や福祉も変わる必要性を感じ、地域や利用者さんの近くにいる私達が自分たちで変えていかなければならないと感じた	1	1	
・予想していなかったことが起こることは今後もあると思うので、どう行動したり対処したりするかも考えなければならないと思った	1	1	
・将来地域で活躍したいと考えていたので、とても勉強になった	1	1	
・介護認定調査にはどの程度実際を反映しているのか疑問に感じた（一人暮らしとそうでない方での配慮があるか）	1	1	
・普段の講義の中でも福祉と看護の交流を活発にしていけばよいのではないか	1		1
・実際の現場ではもっと早く進むので、連携に関する技術などはしっかり個人に身についていないと難しいのではないかと感じた	1		1
・看護学生は実習が多いためか、話をするのが上手だと感じた	1		1
・プロジェクトに最後まで参加できないことがとても残念	1		1
・拾い上げたニーズはどうするのだろうか、私たちが理解を深めるだけで終わっていいのだろうか	1		1
・見ず知らずの学生が来て、年金などプライベートな質問まで聞かれる対象者の気持ちがどうであったのかという疑問が残った	1		1
・福祉はプライベートなところまで聞かなければいけないところがあるが、本人が言いにくいようなことに対して、どう信頼関係を崩さず聞くのか、どの程度で引き下がるのか、気になった	1		1

（2）学　生　評　価　表

２００８年度 教育GP「学際統合型専門職連携演習」評価（学生）				
評　価　項　目	甲府西　(%)			n=50
	A	B	C	D
1　看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。				
1) 自分の専門性(知識・技術)を認識し、説明することができる。	50.0	48.0	2.0	0.0
2) 自分と相手の専門性(知識・技術)について、その共通点と相違点について考えることができる。	72.0	28.0	0.0	0.0
3) 互いの意見を尊重することができる。	92.0	8.0	0.0	0.0
4) 専門職が互いに連携する意義を考えることができる。	82.0	16.0	2.0	0.0
5) チームアプローチを進める方法について考えることができる。	30.0	68.0	2.0	0.0
2　地域特性と生活および健康ニーズについて考えることができる。				
1) 担当した地域の特性について考えることができる。	66.0	32.0	2.0	0.0
2) 暮らしを支える現状の社会資源について考えることができる。	38.0	58.0	4.0	0.0
3) 暮らしにくさについて考えることができる。	72.0	28.0	0.0	0.0
4) 地域の人々のつながりをイメージすることができる。	74.0	26.0	0.0	0.0
5) 生活および健康ニーズについて考えることができる。	72.0	28.0	0.0	0.0
3　実態調査や数的データ分析をし、わかりやすい報告書を作成することができる。				
1) 情報やデータを収集することができる。	82.0	16.0	2.0	0.0
2) 情報やデータを共有することができる。	82.0	18.0	0.0	0.0
3) 情報やデータを多角的に議論することができる。	32.0	60.0	8.0	0.0
4) 情報やデータを客観的に分析することができる。	46.0	42.0	12.0	0.0
5) 報告書を作成することができる。	48.0	48.0	4.0	0.0
4　学習の成果を地域に伝え、その反応から振り返ることができる。				
1) 専門職が互いに協働して学習成果を伝えることができる。	78.0	20.0	0.0	2.0
2) 発表に対する地域の反応を受け止めることができる。				
3) 地域の反応から学習成果について振り返ることができる。				
4) 発表内容や発表方法について評価することができる。				
5) 報告をもとに、地域への予防活動につなげることができる。				
5　主体的・積極的に演習に参加し、相手の意思を尊重する態度を身に付け、グループ内での役割を担うことができる。				
1) 相手の話を傾聴し、自分の意見を述べることができる。	76.0	18.0	6.0	0.0
2) 調査協力者に感謝の意を伝えることができる。	100.0	0.0	0.0	0.0
3) 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないように接することができる。	84.0	16.0	0.0	0.0
4) 得られた情報の保護に努めることができる。	98.0	2.0	0.0	0.0
5) グループワークに積極的に参加し、グループ内での役割を担うことができる。	68.0	24.0	8.0	0.0
総合評価	64.0	32.0	4.0	0.0
評価基準　A：目標を達成できた B：目標をある程度達成できた C：目標を達成するにはやや努力を要する D：目標をほとんど達成できなかった				

7） 教員評価—演習内容（企画・実施）の妥当性及び教育効果—

（1）演習のプロセスについて

「演習のプロセス」についての一覧表を作成し下記に示した。

一覧表をみると、学生は大学で指定した日程のみではなく、自主的にグループまたはチームで連絡調整を行い、グループワークを実施していたことがわかる。また、担当教員は、必要に応じて学生への連絡を行うとともに、適宜、学生からの相談を受けていた。科目としての位置づけのあいまいさはあるものの、学生達の自主的、主体的な取り組みは評価できる。今後は、必要に応じて、学生の相談や指導に対応できる教員の体制整備が必要である。

演習のプロセス一覧表

日　　時	項　　目	内　　容
1月6日 9:30～12:10	3包括全体　：オリエンテーション センターごと：オリエンテーション グループワーク	演習の目的、意義など センター職員の説明、甲府西の重点目標の確認 聞き取り調査内容の検討、面接時の配慮など
1月中旬～2月上旬 （適宜日程調整）	対象者や地域の確認 事前準備 （グループまたはチームごと）	担当教員との打ち合わせ 学生の事前準備と学習 対象者への連絡、対象者宅、周辺地域の確認 連絡の仕方や訪問場面の練習
2月7日 9:00～17:00	聞き取り調査の実施 調査実施後のまとめ グループワーク 発表	聞き取り調査 チームごとの調査結果のまとめ（調査用紙、人とのつながりMAP、地域周辺MINIMAP） チームごとに調査結果の発表 グループワーク（重点目標に対して） グループでの学びを発表
4月7日 14:50～18:00	合同発表会にむけての準備 グループワーク リーダー打ち合わせ	グループワーク(聞き取り調査結果の整理と考察) グループワーク（合同プロセス、協働の学び） 発表内容の検討
4月8日～4月15日 （適宜日程調整）	グループごとの自主学習	グループワークの継続
4月16日　17:00～ 20:00	リーダーのグループワーク	発表内容の確認、発表原稿の作成
4月17日 （適宜日程調整）	リーダーのグループワーク	発表原稿の作成
4月18日 9:00～16:30	グループワークの結果発表 リハーサル 合同発表会	グループ学習の発表 リハーサル、質疑応答 作成した模造紙の展示、記念写真、合同発表会

（2）学生の自己評価の結果に沿った分析

学生が自己評価した評価票の中項目に沿ってまとめた。

1　看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。

学生の自己評価は、細目別では「目標を達成できた」「目標をある程度達成できた」を合わせると98～100%に達しており、高い目標の達成状況であった。特に、細目「互いの意見を尊重することができる。」は、「目標を達成できた」が92%と高かった。

現行カリキュラムの学生においては、合同演習の日程は土曜日などの授業時間外を使用しており、実質の負担感は大きい。そのような中にあって、2 つの学部の学生がお互いの意見を尊重しながら相互理解を深めることができたという点で、負担感以上に学びが大きい演習だったといえる。

2　地域特性と生活及び健康ニーズについて考えることができる。

学生の自己評価は、細目別では「目標を達成できた」「目標をある程度達成できた」を合わせると96～100%に達しており、高い目標の達成状況であった。

また、フィールド演習日のリフレクションの内容分析からは、看護学部の学生の多くは対象者の身体状況を観察の着眼点とし、人間福祉学部の学生の多くは対象者が活用する社会資源やサービス、生活状況や生活環境を観察の着眼点としていた。このように両学部の特徴が見られたが、学生達は本演習において観察やアセスメントの着眼点を学び合うことができ、地域特性を踏まえて対象者の生活や健康ニーズを捉えることができたのではないかと考える。

3　実態調査や数的データ分析をし、わかりやすい報告書を作成することができる。

学生の自己評価は、細目別では「目標を達成できた」「目標をある程度達成できた」を合わせると88～100%で、高い目標の達成状況であった。また、細目「情報やデータを客観的に分析することができる。」が、「目標を達成するにはやや努力を要した」12%で、中項目を超えて一番低かったことについて、今回のデータ数は20件であり、また地域を代表している対象ではないことから、客観的に分析することは困難だったことから妥当な評価といえる。むしろ、これでも学生の自己評価は高すぎるのではないだろうか。「情報やデータを多角的に論議することができる。」が、「目標を達成するにはやや努力を要した」8%については、話し合う時間が十分取れていないことが背景にあると考えられる。

今後これらを目標を挙げるのであれば、尺度作成やデータ入力・分析のプロセスも踏めるように検討する必要がある。

4　学習の成果を地域に伝え、その反応から振り返ることができる。

これについては、合同発表会に来校された甲府市及びセンター職員の皆様には、成果を伝えることができたと考える。今後は、地域住民への報告の機会を調整し、本演習を発展させることが課題といえる。

5　主体的・積極的に演習に参加し、相手の意思を尊重する態度を身に付け、グループ内での役割を担うことができる。

学生の自己評価は、細目別では「目標を達成できた」「目標をある程度達成できた」を合わせると92～100%に達しており、高い目標の達成状況であった。細目「グループワークに積極的に参加し、グループ内での役割を担うことができる。」が、「目標を達成するにはやや努力を要した」8%であった。この背景には男子学生の中に、グループメンバーのほとんどが女子学生であったことから苦手意識が働いたというものであった。男子学生の数は看護学部の方が人間福祉学部以上に少数で、このような演習ではバランスをとることは極めて難しい。卒業後に出向く実践現場での協働するスタッフやケアの対象者は様々であることから、苦手意識は自己の課題として克服することを期待する。

以上、学生の自己評価を受けて、教員の所見を加えて評価を論じた。本演習が目標とする内容に対してはほぼ達成できているといえる。しかし、カリキュラムに位置づいていないことから、学生にとっても教員にとっても授業時間外の時間を使用することによる負担は大きい。

また、本演習は、「演習」ではあるが、現場に出向くという点では「臨地あるいは現場実習」という学び方である。現場に出向く前の準備として、事例検討などのトレーニングが必要ではないだろうか。

（3）演習の成果と課題

演習後、担当した教員としての振り返りを行い、次の項目に沿ってまとめた。

1　演習プログラムについて

1）「大学」、「センター」、「甲府市役所」三者の調整による企画と「教員間」の連携

本演習での取り組みは、学生、教員さらにはフィールドをご提供頂いたセンター職員においても、はじめての試みであり、試行錯誤を繰り返しながら実施した演習であった。従って、当初より形が整っていたわけではなく、フィールドのニーズに基づき、演習内容を組み立て、「専門職連携演習」としてどのように効果的な演習を展開するかが常に課題としてあった。演習を進めるにあたっては、センター職員の多大なる協力と甲府市役所のバックアップがあればこそ実現できたプログラムであったことはいうまでもない。また、教員としての学生への関わりなどについても、看護、福祉双方の教員で話し合い、歩み寄り、一致点を見い出す、いわば「教員間」の連携作業による取り組みでもあったといえるであろう。

2）演習の準備、実施、まとめの合同プロセスを通しての効果的展開の工夫

センターでは、看護と福祉の学生がチームとなって「高齢者への聞き取り調査」を一人の高齢者に対して実施したが、その一人の高齢者から多くのことを学び、また、看護と福祉の特徴を互いに実感することができた。このことは、オリエンテーションでのグループワークの実施、準備期間での対象者が暮らす地域を両学生で確認するなど、調査に至るまでに学生が主体的に取り組んだことなどにより、調査までの意識づけが高まったのではないかと推察される。従って、調査当日は、わずか一人の高齢者との出会いではあったが、学生が協働で事前に準備してきた内容をふまえ、高齢者の生活の場で、高齢者及び看護と福祉の学生の三者が一緒に同じ空間を共有できたという点は、学生の満足感を高める要因となったのではないだろうか。

さらに、調査後のまとめに関する具体的な方法として、「人とのつながりMAP」や「住まいの周辺地域MINIMAP」の作成について提示したが、学生が力を合わせて作成したMAPは当事者に視点をおいた個別性豊かなMAPであった。これらのMAPは、わかりやすいうえに、得られた情報を目的を持って統合していく作業ができるため、看護と福祉の学生の協働を進める手法として有効であったのではないかと考える。

今回、時間的制約があったため、調査項目については、半分以上の項目をGPワーキング教員側で準備することになり、学生のオリジナル質問は数項目であった。しかし、短い準備時間しかないとはいえ、オリジナル質問は各チームやグループの特色や工夫がみられ、学生が智恵を絞った結果が伺える。従って、今後も「聞き取り調査」を実施することがあるならば、学生が、より多くの項目のオリジナル質問を考えることが可能となるような演習内容と時間の確保が必要と考える。

3）全体の目的・目標に基づいたセンターとしての重点目標の設定

本演習の時間的制約があるなか、センターでは、演習全体の目的・目標をふまえたところの3点の重点目標を設定し、準備期間からまとめの期間を通じて一貫性を持たせた展開になるように工夫した。時間の少なさ、演習期間の間延び、科目としての位置づけのあいまいさなどの課題が残されているが、学生のグループワークやリフレクションなどから目標の達成状況については高い割合であったと判断できる。

演習全体のオリエンテーションスタート時から、この演習に臨むビジョンとゴール（目標）を明らかにして取り組めるように、今後検討していくことが重要であると考える。

2　演習のプロセスを小グループ担当制で教員が支援する具体的方法の意義

センターでは、本演習の目的・目標の達成に向けて、チームまたはグループによる小グループ体制による参加型方式として、学生がディスカッションできる機会を多く設け、教員はファシリテーターとして、学生の気づきや主体性を促すような教育支援を心がけた。また、教室内でのラウンドや適宜行う教員の意見交換などを学生が散見しており、これらについても、学生が「連携」を実感するひとつの場として認識する意識づけになったのではないかと考えられる。反面、教員としても、学生の気づきからさらに学びを深めたのではないかと考える。

3　時間的制約の中での学びと演習の年次的つながりの検討

前述したように、時間の少なさ、演習期間の間延び、科目としての位置づけのあいまいさなどの課題が残されているが、学生の自己評価は概ね高い割合を占めている。従って、今年度の学生の成果を次年度の学生へつなぎ、かつ、演習でかかわった高齢者や地域のニーズを大切にするなかで、学生として、大学として、どのように今後の展開を考えていけばよいか、本演習をふまえた方向性を分析し、年次的なつながりを持たせた今後の展開を考える必要がある。

また、学生同士は、離れたキャンパスでありながら、情報の媒体を使い情報交換を効率的に行いつつ、時には、どちらかのキャンパスに集まってディスカッションを積んでいた。さらに、より多くの職種をめざす学生との「専門職連携演習」を期待する声が学生自身から発せられたことを付け加えたい。

4　教員のリフレクションと教員へのサポートの充実

「専門職連携演習」を推進する教員のサポートについては、研修、学会などへの参加により研鑽する機会があるが、最も重要なことは、教員自身が自らのリフレクションを行い、自分自身が持つ課題と良さを自己覚知しながら、積み上げ、さらなるステップアップをすることではないかと考える。時間的制約をはじめ様々な課題はあるが、教育背景、専門分野などの異なる教員のディスカッションのチャンスを設けるなどの工夫が求められる。本演習プログラムは、両方の学生の協働ではあるが、そのことはまさしく教員間の協働であるといえよう。

また、このような新しい試みを実施している教員へのサポート、つまりスーパーバイザーの支援を検討していく必要がある。

幸い、センター職員等研修会において、教員も受講生となり、ひとつのグループを構成し、講師の指導のもと、KJ 法を活用したグループワークを行い、課題及び戦略について検討した。このグループワークでは教員が考えている課題を具体的にとりあげ、「ラベル」という一人ひとりが平等に持つカードを用いて議論することができた。そのプロセスは看護と福祉の教員の協働作業であるといえるのではないだろうか。今年度は、センター職員等研修会を活用することができたが、今後は、さらに具体的な題材（事例検討など）を用いてのディスカッションを実施することにより、教員間の連携と理解が今以上に深まるのではないかと考えられる。

Ⅲ　甲府市地域包括支援センター研修会

１．甲府市と大学との連携による地域包括支援センター職員等研修会実施要項

１）開 催 目 的

平成 20 年 8 月、甲府市主催の甲府市地域包括支援センター職員研修会が、「日常活動の中から把握した地域の課題を明確にし、地域へのかかわりを深め地域包括ケア体制の整備を学ぶ機会とする」ことを目的とし、山梨県立大学との連携により実施された。今回その継続の研修として、地域の課題をより具体的に明らかにすることによって、地域包括ケア体制の整備に向けて、取り組む課題や方策について検討し、今後、高齢者が生き生きと暮らせる地域づくりの実践に繋げることができることを目的に、山梨県立大学との共催で継続的に研修を開催していく。

２）目　　標

（１）地域の課題を分析し明らかにする。
（２）課題解決に向けての方向性が明確になる。
（３）具体的な方策を検討し業務に繋げることができる。
（４）共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる。

３）研修方法及び講師

（１）研修方法：KJ 法を用いてのグループワーク演習を基本とする。
（２）講師：情報工房代表　山浦晴男先生（千葉大学大学院非常勤講師等歴任）
講師は、KJ 法の開発者である川喜田二郎氏の門下である。地域のまちづくりや訪問看護事業及び大学院教育などに関わるなど、多くの実績を持つ。

４）参 加 者

甲府市地域包括支援センター職員
甲府市役所職員
山梨県立大学教員

５）開催時期及び場所

（１）時　期：平成 21 年 2 月～平成 21 年 7 月（時間：平日昼間・夜、土曜日などを候補）
（２）回　数：5 回程度とする。ただし、研修内容や到達ステップの進捗状況により調整する。
（３）場　所：山梨県立大学とする。

６）具体的展開

年　度	開催月日		時　間	場　所
平成 20 年度	第 1 回	2 月 27 日（金）	18:30～21:00	山梨県立大学 池田ｷｬﾝﾊﾟｽ 101 講義室
	第 2 回	3 月 13 日(金)	18:30～21:00	
平成 21 年度	第 3 回 中間報告	5 月 1 日（金）	18:30～21:00	
	第 4 回	5 月 22 日（金）	18:30～21:00	
	第 5 回	6 月 22 日（金）	18:30～21:00	
	発表会及び 交流会の予定	7 月 18 日（土）	13:00～17:30	

２．研修実施に至るまでの打ち合わせ

１）甲府市との打ち合わせ

日　　時	場　　所	出席者（人）		内　　容
		大学	甲府市	
平成 20 年 8 月 4 日 16:00～17:00	県立大学 池田キャンパス	5	2	甲府市と県立大学との連携について
平成 20 年 8 月 6 日 18:30～20:30	県立大学 池田キャンパス	4		甲府市主催：地域包括支援センター職員研修会への協力について
平成 21 年 2 月 12 日 9:30～10:10	甲府市役所	3	2	甲府市と県立大学との連携について
平成 21 年 2 月 23 日 13:30～14:30	甲府市役所	4	3	研修内容について

２）研修依頼

日　　時	場　　所	出席者（人）		内　　容
		大学	甲府市	
平成 21 年 1 月 20 日 13:30～15:00	(有)情報工房 会議室	3		山浦晴男先生 研修依頼、日程調整

３．研修講師の紹介



情報工房代表　　山浦　晴男先生
　　シンボリックアナリスト（質的情報の体系化・指導）
　　ファシリテーター（ワークショップの運営・指導）
地域生存支援有限責任事業組合（LLP）　組合員
千葉大学大学院　非常勤講師
東京農工大学大学院　非常勤講師
東京医科歯科大学大学院　非常勤講師
創造学園大学　客員準教授
日本質的心理学会　会員
日本地域学会　会員
廃棄物学会　会員

＜プロフィール＞

1948 年　長野県生まれ、中央大学卒。

1971 年 株式会社川喜田研究所入社、KJ 法の研究・普及に従事。同主任研究員を経て、1991 年 情報工房設立。その後、株式会社認知科学研究所取締役、株式会社アヴァンインターナショナル取締役副社長、財団法人科学技術広報財団宇宙プロジェクト室客員研究員、宇宙開発事業団客員開発部長、国土交通省アイランドテラピー推進構想調査アドバイザー、財団法人山梨総合研究所特別研究員、国土交通省離島地域国際交流推進調査アドバイザー、国土交通省近畿地方整備局「コミュニケーション研修」講師、市町村アカデミー講師、山梨県戦略的産業ビジョンオブザーバー会議メンバー、国土交通省「しまづくりサポーター育成支援に関する調査」ワーキングアドバイザー、NPO やまなし県民政策ネットワーク「持続可能な社会を導く県民主体の政策形成プロセス」委員会副委員長、文部科学省臨地実習責任者研修講師、文部科学省看護学教育指導者研修講師、文部科学省国公私立大学病院管理者講習会講師、和歌山県「参詣道と水土里のむら機能再生支援事業」アドバイザー、山梨県新任所属長・知事との対話研修ファシリテーター、国際協力事業団東欧圏研修講師、国際協力事業団集合研修講師、中国・北京大学看護学院質的研究法研修講師（千葉大学・北京大学共同研究／文科省 21 世紀 COE プログラム）など歴任。

■著　書

「ビジネスマンのための自分の考えを深める技術」　1998 年、PHP 研究所

「一念を貫く～経済の時代から新人間主義の時代へ」（共著）　1998 年、ビジネス社

「本当に役立つ！エクセルでできる文書データ活用術」　2001 年、日本経済新聞社

■論　文

「科学的な質的研究のための質的統合法（KJ 法）と考察法の理論と技術」

2008 年、看護研究１、医学書院

「北京大学看護学院教員・院生の研修体験感動から浮かび上がる質的統合法（KJ 法）の姿」

2008 年、看護研究１、医学書院

４．研修実施状況

１）各グループの研修テーマと参加者数

グループ別研修テーマ	参加人数（人）		
	第１回（2 月 27 日）	第２回（3 月 13 日）	第３回（5 月 1 日）
甲府市地域包括支援センター（6 グループ） 地域包括支援センターの業務で抱えている問題は何か	30	28	29
甲府市役所（1 グループ） 介護支援情報センターの業務で抱えている問題は何か	4	4	4
大学（1 グループ） 専門職連携演習を終えての悩みと課題	10	7	12
合　計	44	39	45

２）研　修　方　法

（１）ＫＪ法の簡略型の説明

第１回	第２回	第３回
意見交換、ラベル作り、ネットづくり、図解化	ラベルの抽出、ラベルづくり、ネットづくり、図解化	図解化、中間発表

３）研　修　内　容

（１）第１回（2 月 27 日）



和歌山県で行われた地域づくりでの取り組みを例に、質的統合法の一連のプロセスについて講義を受けた。その後、「地域包括支援センターの日常活動での地域への関わりについて抱えている悩み、問題は何か」を今回の研修テーマとし、グループワークに入った。

＜ラベル作り＞

「パルス討論法」について説明を受け、各グループでテーマに沿った意見交換を行った。その後、各自の考えをラベルに記入した。(1 枚につき 1 項目で、この意味にしかとれないという的確な表現を心掛け、1 人につき 5～10 枚記入した)



ラベルを配置しているところ

＜ネット作り＞

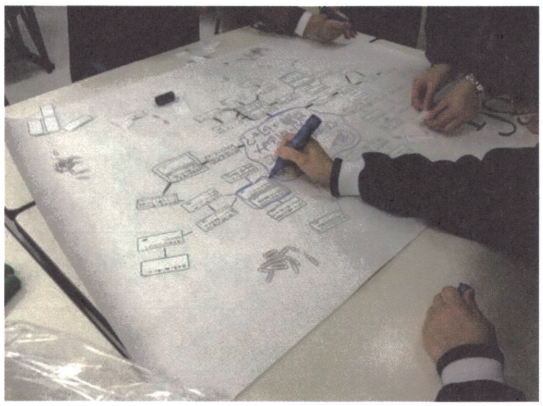
各自記入したラベルを発表しながら、似かよったデータを集合させ、関係を配慮して模造紙に配置していった。配置にあたっては、「類似・セット・続きもの」「反対・対立・矛盾」「なんらかの関係」のどれになるかに注目した。

＜図解化＞

クリップを使用しラベル間の関係を考え、[関係記号の記入]を行い、続いてひとまとまりになりそうなところを探していく[島取り]作業を行った。



クリップで関係を考えているところ



島取りをしているところ

(2) 第 2 回 (3 月 13 日)



2 日目は、質的統合作業 (KJ) 法に移る作業を進めていくため、「多段ピックアップ法」を用い、1 回目に出されたラベルを目標の数に絞り込んでいった。

各自残しておきたいと思うラベルに印を付け、目標の数に近づくまでピックアップを繰り返す作業を行った。

ピックアップが終了後、選ばれたデータを新たなラベルに転記した。

新しく書かれたラベルも、1 日目と同様に＜ネット作り＞・＜図解化＞を行い、この段階の[島]を「1 段目の島」とした。さらに、「島」の中身の全体感を表現する[表札作り]を行った。



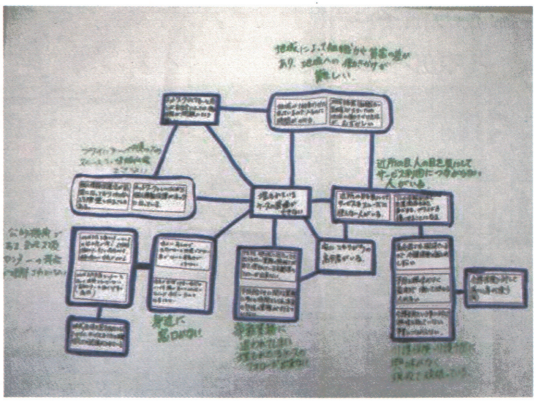
ピックアップをしているところ



ラベルの関係をみているところ



表札作りをしているところ

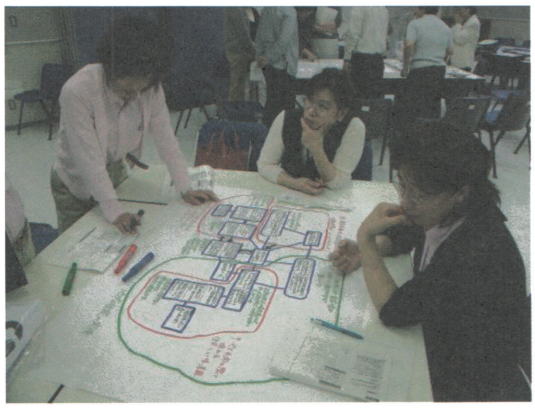


２回目終了後の模造紙

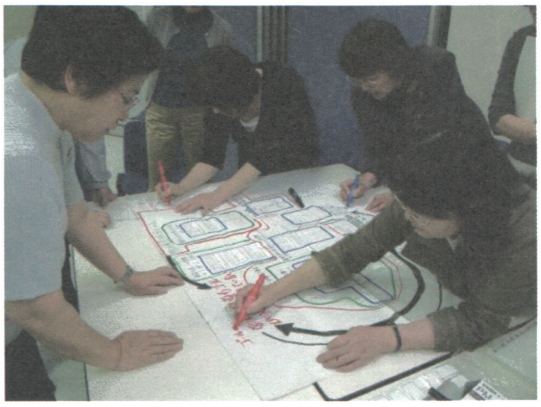
＊参加者からは、「業務を振り返ることができて良い、バラバラなものがまとまっていく過程で新しい発見がある」などの感想が聞かれ、充実したグループワークを行うことができた。
（後述アンケート結果参照）

（３）第３回（５月１日）

これまでの振り返りをした後、前回作成した「島」を最終的に５～６個のブロックになるまでまとめる作業を行った。最終的なブロックにも、表札を付けた。



最終ブロックに絞り込んだところ



関連記号を付け終え、表札をつけているところ

＜叙述化＞

全体のストーリー化を図る。どの「島」の順序でストーリー化を図るか作戦を練った。そしてブロックや「島」と「島」の間に関係記号を付けていった。

続いて、『衆目評価表』により、質的分布を把握する作業に入った。「１段階目の島」とその時の「島」に属さなかったラベルを対象とし、それぞれに番号を付ける。各自１～５点の点数を持ち、投票を行った。投票結果をまとめ、順位を付け、評価表を模造紙に記入していった。

ここまでの成果を、それぞれのグループが抱える悩みやそれらの因果関係、優先順位を発表していった。

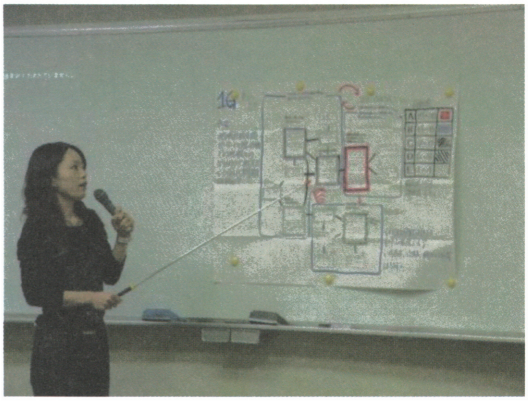
＜中間報告＞

甲府市地域包括支援センターの発表は、１～６グループで、テーマは「地域包括支援センターの業務で抱えている問題は何か」であった。

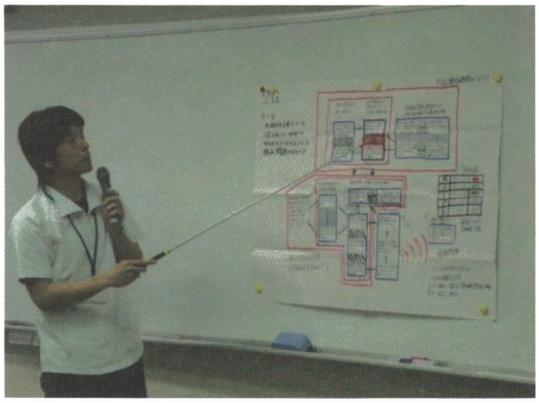
７グループは甲府市役所の発表で、テーマは「介護支援情報センターの業務で抱えている問題は何か」、８グループは大学教員の発表で、テーマは「専門職連携演習を終えての悩みと課題」であった。

—発表の様子—

1グループ



2グループ



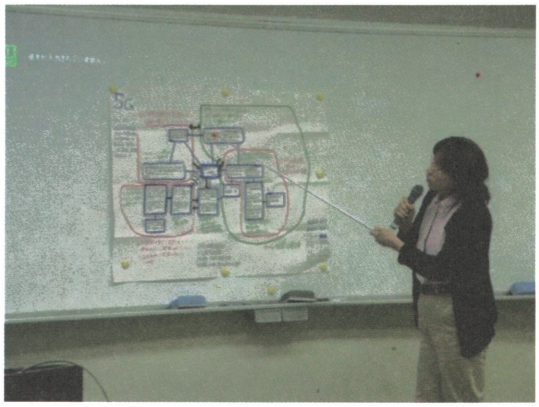
3グループ



4グループ



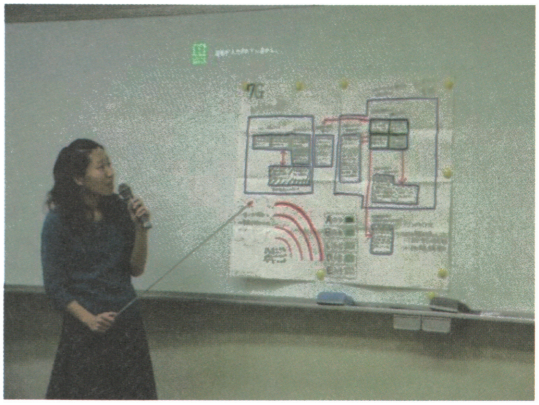
5グループ



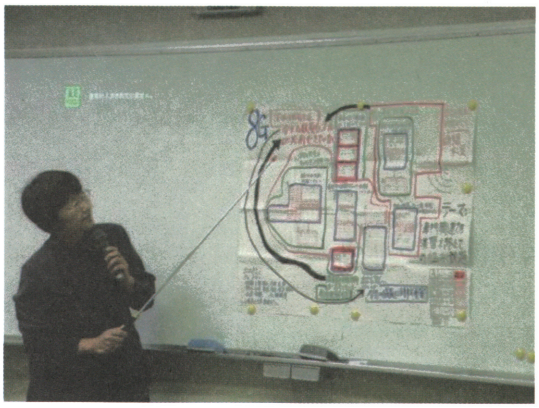
6グループ



7グループ



8グループ



	共通内容	1 G		2 G		3 G		4 G		5 G		6 G		7 G		8 G	
		表札	点数	表札	点数	表札	点数	表札	点数	表札	点数	表札	点数	表札	点数	表札	点数
1位	地域包括センターの認知度・理解度が低い	地域包括センターの認知度は低く、正しい理解がされていない	19	地区組織とのかかわりがうすく、入り方に課題がある	18	包括の役割が理解されていない	19	ネットワークの構築ができていない	9	埋もれているケースが発見できない	14	山村地域の為困りごとを解決するすべがない	24	役所内は縦割りなので、連携が取りづらい	17	教員がお互いの専門性を言語化していない	35
								個別ケースの問題を発展させ、線につなげることができない	9								
2位	地域の実態把握不足と関わり方の未整備	独居高齢者の世帯が多い	15	保険者との委託業務の中での研修・個人情報ケースの優先順位に問題	16	個々のニーズは見えても、地域全体のニーズは捉えにくい	16	多問題ケースで別のことができない	5	公共機関である包括支援センターの機能が理解されていない	12	高齢者の集まる場所がない社会から孤立した老人が多いので生きがい役割が見つけにくい	21	包括への支援が不十分・・・？	14	演習の評価指標が明確ではない	29
3位	対象者の高齢化と地域での孤立化	隣近所との関わりが薄く、支援・助けが少ない	14	認知症が重症となり、かかわりが困難	14	高齢者が集まる場所や集まりが把握できていない	13	地域になかなか出られず、十分把握できていない	3	事務業務に追われてしまい埋もれているケースのフォローが出来ない	11	孤立した独居高齢者が多い。特に団地に密集している	17	市民の実態がつかみにくい	11	最終的な教育プログラムの到達点を共有できていない	26
4位	支援の目から漏れてしまう人たちの存在	バスに乗ることが大変である	4	地域活動・情報収集にもれてしまう人に支援の手が届いていない	8	虐待の疑いがあるケースが眠っている可能性がある	7	達成感を味わうことがなく、不全感が残る毎日	2	介護保険・介護予防に興味がなく現役で頑張っている	7	引きこもりの人が多いのではないか？（団地・アパートなど）	16	予防事業は分かりにくいので、理解されにくい	10	実施上の教員のパワー（数・時間）が足りなかった	22
						地区の中で集まれる場所が不足している（引っ越してきたばかりの人は昔からの老人クラブに入りづらい）				プライバシー保護のためスムーズに情報収集できない							
5位	生活基盤の不便さが問題を増幅	問題のある家庭ほど、支援に手間がかかる	3	予算の問題もあり周知が徹底していない	7	外出手段がなく閉じこもりがちの方もいる	5	市内は駐車場がない家が多く困る	1	地域によって組織力や貧富の差があり、地域への働きかけが難しい	5	銀行・ATM、店や大型スーパーが少ないため、買い物など不便である	13	個別ケース対応は評価されにくい	2	現在はカリキュラム上の位置付けがない	17
		元気な高齢者の力をうまく生かされていない		介護予防事業への参加・継続が難しい				人の配置が同年代に固まったため、夜間動ける人に負担がかかる						生活機能評価の情報がデータ化されていない			
														総合相談の環境が整わない			
														業務量が多いが職員が少なく負担が大きい			

５．参加者の研修に対する意見

１）第２回研修会終了後のアンケート結果

項目	第２回アンケート結果（記述内容）　　提出２７名	記述数
研修内容	・業務を振り返ることができて良い（意識して考えなかったことが見えてくる、自身の問題などがわかった） ・講義の進行が興味深い（バラバラなものがまとまっていく過程で新しい発見がある、課題のラベルが徐々にまとまっていくことを考えていくことが新鮮、課題が少しずつ明らかになってきてくる） ・先入観で考えるのではなく、フラットな視線で考えることができ、新鮮だった ・業務につながる内容であり、充実している ・担当地区の特性が見えてきて、面白い ・ジグソーパズルの話から、新しい発想の展開が学べた ・KJ 法によって、包括のもつ課題を浮かび上がらせ、甲府市とともにその課題解決に向けてともに取り組んでいけるようになるといい ・書き出すことの大事を知った所 ・物事を理論的に捉えていくことの深さを実感した ・出席者が少なく、みんなの課題になりにくかった ・グループ内の参加者が少なく、意見の偏りがみられ、今後の研修の進行に不安がある	5 4
研修方法	・改めて包括のスタッフで地域のことを考えられるのも良い（問題の整理、共有化） ・他包括職員との意見交換は参考になる ・このような研修形式は良い（それぞれの意見を出し合いとても良い、グループ内での意見が多く新たな発見ができた）	5 2
全体について	・楽しく取り組むことができている ・研修会に感謝している（KJ 法を学べる機会が持てた、貴重な研修会、レベルが高い） ・大学との共催は良かった（現場・教育の様々な視点で話し合える、緊張感がもてる） ・専門分野と違ったことを学ぶ機会が得られて勉強できたことは良かった ・包括の業務についての理解が浅い中、何が悩みで困難かわからない点が多々あった ・自身のスキルアップのためにも、様々な内容の研修会をどんどん受けていきたい ・包括の業務に活かせるようにがんばりたい ・前回の研修を行って、今回は来ることが楽しみだった ・今後も、業務の参考、役に立つ勉強会をお願いしたい ・頭が固くなっていることに気づいた ・前回欠席したので、最初理解するのが大変だった ・予定が多く入り、気力・体力で疲れ気味だった	6 3 2
その他	・実践をしていろいろ感じることはありますが、それを解決する（まとめる）力がありません。まとめ方に対しての援助を一緒にやって頂けたらと思います。まとめることで地域へ報告することが出来て、そのことで地域の方に訴える力があると思われますので、一緒に動いて下されたらと思います ・開催時間がもう少し早い時間帯だとありがたい	

２）第３回研修会終了後のアンケート結果

項目	第３回アンケート結果（記述内容）　　提出２３名	記述数
研修内容	・日常常務の課題が明確になっている　問題同士につながりがあり、新たな発見がある ・（初めての参加）予想以上に楽しく進めることができ、様々な気付きがあった ・地域住民と同じ視線で地域を深くみる！！という学びとなった（他とはテーマがずれてしまいましたが、私達らしい話し合いができている） ・発表したが、うまく発表出来なかった（急で心の準備ができなかった）聞いている人に分かりやすい説明の仕方も知りたかった	5
研修方法	・中間発表により、各包括で抱える現状や課題、また、共通の課題が発見できたことは興味深い　とても面白かった ・グループワークをしながら課題などについてまとめるので、整理される ・他包括と合同での意見交換もでき、良かった ・各包括として解決していくこともあるが、共通の課題については手法を共に考える機会が持てると良いと感じた ・初回のメンバーと２回目のメンバー構成に大差あり、意見の方向性がみえなくなってしまった	１０ 2 2
全体について	・今後も楽しみ ・むずかしく、足でまといを感じている　頑張らなければと思っている	4
その他	・開催する日程（曜日・時間・期間）を検討してほしい ・夜の研修会ですが、できるだけ参加していきたい	3

６．研修会の成果と課題

甲府市と大学との連携による地域包括支援センター職員等研修会は、教育 GP の一環として位置づけられ、演習のフィールドとなるセンターの職員を対象に開催した。

本研修会は、KJ 法の簡略型の手法を用いて、講師の指導のもとにグループを単位として展開し、職員が実践現場で抱えている課題をあげ、整理し、明確化していく作業、そして、その課題を解決していく方策の検討を行った。（本報告書では第３回までの研修会について記載した。）

１）研修内容

(1) 課題の明確化、中間発表

地域包括支援センターの職員から共通して提出された課題は、センターの理解度や認知度が低いという点、地域の実態把握や関わり方がまだ十分でないという点などであった。また、市役所職員や大学の教員からは、関係者との連携の在り方や、互いの専門性の理解などの課題があげられた。

(2) 課題から方策へ（戦略の検討）

各グループでは、中間発表をふまえて戦略の検討を実施し、今後の業務へ繋げることができるように話し合っているところである。

(3) 方策の実践と評価（今後に向けて）

今後の実践とその評価に向けて、継続した研修や関わりが必要であるため、今後も研修会を企画する予定である。

２）参加者の評価

第２・３回研修会における参加者からのアンケートを前述の一覧表にまとめた。その結果、「業務を振り返ることができる」、「楽しく取り組むことができる」という意見が多くみられた。しかし、日中の業務を終えての夜間の開催であったため、開催日時に対する要望が寄せられた。

Ⅳ　広報活動及び他大学との交流

平成２０年度「教育ＧＰ」として選定を受けた本学プログラムは、「広く社会に情報提供する」とともに、「我が国全体としての高等教育の質保証と国際競争力の強化に資すること」が求められている。そこで、採択を受けた直後から、プログラムの推進と並行して、本プログラムが密接に連携する地域社会（甲府市）への理解を求めるための広報活動と山梨県内外の大学関係者へ情報発信及び海外の大学と連携するための広報活動と情報交換を行ってきた。初年度である 2008 年度の具体的活動は 10 月から行い半年という短期間の中、以下の広報活動を実践した。（巻末資料参照）

１．平成 19 年度の広報活動

本プログラムは前年度より、試行段階としての取り組みを開始しており、学生がモデル地区の一部をフィールドとして高齢者への調査活動を行った。この教育成果が基盤となって採択に至った。その実施状況が地域のニュース（UTY ニュースの星「大学生高齢者調査」）として取り上げられた。(2008/1/22)

２．平成 20 年度の広報活動

１）学内・外への周知と協力体制への呼びかけ

（１）プログラムの立ち上げと組織化は、本学「地域研究交流センター」に位置づけられている「教育開発」担当として企画されたものであり、採択結果もセンター長から全学情報ネットワークを通じて伝達され、実施における全学協力体制の呼びかけがセンター長からなされた。(2008/9/26)

その後のプログラム進捗状況は、毎月の各学部教授会において、センターの報告事項の一環として全教員に報告されている。

（２）教育ＧＰに選定されたことについて、本学ホームページのトップにトピックスとして掲載し、学内外へ広く周知を図った。

（３）新聞への報道

山梨県公聴広報課の組織を通して、本取り組みの概要について説明する文書を報道機関に周知した。その結果、本プログラムについて山梨日日新聞に掲載された。(2008/10/1)

（４）学内教員フォーラム「水曜フォーラム」の開催

開学以来、地域研究交流センター主催で年 2 回開催してきた学内教員の教育・研究活動の報告・意見交換会である「水曜フォーラム」の機会をとらえ、本プログラムについて学内教員への周知を図った。また、本プログラムと連携が予定されている甲府市職員と甲府市地域包括支援センター職員への周知と協力を求めるために、関連機関の皆さまにもご出席を頂いた。参加者は学内教員 39 名、甲府市職員及びセンター職員など学外からの参加者 16 名、計 55 名であった。発表者は佐藤、神山(2008/10/29)

（５）学内にポスターを掲示

本学取り組みについてのポスターを作成し、両キャンパスに掲示し、学内関係者及び学外から訪れる方々へプログラムを紹介している。(2009/1/12)

（６）「学生による専門職連携演習合同発表会」開催ポスターの作成

本年度の教育活動「専門職連携演習」として甲府市地域包括支援センターを中心に行った地域で生活する高齢者訪問調査を通して学んだことを発表した。この発表会への参加を呼び掛けるポスターを作成し、関係者への配布とともに学内へ掲示し、参加を呼びかけた。(2009/4)

（７）パンフレット・ボールペンの作成

「教育ＧＰ」についての概要と本学取り組みの概要について、パンフレットを作成した。（発行部数 1,000 部）配布先は本学学生、甲府市、甲府市地域包括支援センター、教員及び下記の「大学教育改革プログラム合同フォーラム」に参加された全国の大学関係者へ配布し、説明資料とした。（2009/1）

また、「教育ＧＰ」と本大学名を入れたボールペンを作成し、パンフレットとともに配布した。

（８）調査時に学生のブルゾン着用と調査対象者への本プログラム紹介の文書の配布

本年度の教育実践として、地域で生活する高齢者への訪問調査を行ったが、本学学生の訪問であることが確認できるように大学名入りのブルゾンを作成し着用させた。それと同時に大学からの依頼文を持参させた。依頼文には「教育ＧＰ」の一環として行う旨を記述した。

（９）本学ホームページに「教育ＧＰ」ページを開設

ＧＰについての概説、本学取り組みの概要と取り組み状況、スケジュールなどについて掲載し、その進捗状況や関連行事・事業について更新しつつ周知している。（2009/1/30 開設）

（10）本学地域研究交流センター発行のニューズレターへの掲載

本プログラムの前準備の取り組みについて本学地域研究交流センターが定期的に発行しているニューズレターに紹介した。（山梨県立大学地域研究交流センターニューズレターVol.6、2008/2/4 発行、佐藤が掲載）

また、本プログラムが採択され、取り組みが開始されたことを「教員の地域貢献」として掲載し、その概要を県内市町村関係者や報道機関、教育機関、図書館や公民館など公共施設等へ配布され、取り組みの概要について広く周知した。（山梨県立大学地域研究交流センターニューズレターVol.8、2009/2/19 発行、佐藤が掲載）

（11）ラジオ放送を通してのプログラム紹介

「教育ＧＰ」についての概要、採択の理由、本取り組みの特徴、具体的内容、成果などについて、インタビューに応える方法で周知した。（FM 甲府「生涯学習の時間」2009/2/10 放送、佐藤、神山が担当）

２）国内・外大学関係者への周知と交流

（１）平成 20 年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスターセッションへの参加

全国から参加した大学関係者に、本プログラムについて説明し意見交換を行った。掲示用ポスターを持参し、それを基礎資料に説明するとともに、本学の大学案内及び教育ＧＰパンフレット・ボールペンを配布（配布数 200 部）した。出席者は教育ＧＰ担当教職員 8 名。（2009/1/12、パシフィコ横浜）

（２）教育ＧＰパンフレット英訳版の作成

英国調査研修（専門職連携教育視察）に持参するため、教育ＧＰパンフレットの英訳版（200 部）を作成し関係者に配布した。（2009/3）

V　英国調査研修

はじめに

IPE(多職種連携教育)に関するテーマは、近年の教育GPの中でも採択されることが多いテーマである。すでに、埼玉県立大学や千葉大学においてもGP採択を受けたIPE（多職種連携教育）が行われており、IPEの語源や概念は英国より導入されている。

日本では、各大学のIPEの取り組みの蓄積より、日本保健医療福祉連携教育学会（JAIPE）が設立され、2008年11月30日にその第一回学術集会が埼玉県立大学において開催された。その学術集会において、埼玉県立大学のIPE推進者の1人である、保健医療福祉学部 朝日雅也先生より、CAIPE（英国専門職連携教育推進センター）のヘレナ・ロウ氏をご紹介頂き、山梨県立大学においてもその知見を学び調査・研修する機会を得た。現地調査にあたり通訳者は、英国との関係も深い本学国際コミュニケーション学科の教授 千森幹子先生よりご紹介頂き、有意義な調査研修を実施することができた。

1．調査研修の概要

今回の調査テーマと目的、及び調査項目は以下の通りである。

1）テ ー マ：「英国の専門職連携教育と専門職連携の実際」

2）目　　的：「英国の専門職連携教育のカリキュラム、教育方法、評価、及び課題と、専門職連携現場での現状と課題などについて調査し、本学の専門職連携教育プログラムの開発資料とする」

3）調査項目：

（1）専門職連携教育の内容　（概要・教材・設備・指導資料・教育の実際・評価）

（2）専門職連携の実際　（連携先の機関や施設を視察）

調査先は、英国CAIPEのヘレナ・ロウ氏の調整により、以下の3ヶ所に決定し、山梨県立大学の看護学部教員4名と福祉コミュニティ学科教員4名、及びGP事務局2名により実施した。

4）調 査 先

（1）英国専門職連携教育推進センター

CAIPE: The UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education

本調査全体調整：Helene Low （CAIPE 開発部長）

（2）キングスカレッジ（ロンドン大学）

King's College London, Strand, London WC2R 2LS, England, United Kingdom

セント・トーマス病院

（担当：Jayne Slonina, MA, RN, HV cert. Lecturer in Interprofessional Education）

Division of Medical Education, Kings College London

（3）ブルックス大学

Oxford Brookes University, Headington Campus, Gipsy Lane, Oxford OX3 0BP, UK

ジョン・ラドクリフ病院・ナッフィールド整形外科センター

（担当：Elizabeth Westcott, Pre Qualifying Director and IPL lead）

Oxford Brookes University

5）調査日程

3月26日（木）

15:00-17:00　CAIPE事務局へのインタビュー　場　所：キングスカレッジ

Professor Hugh Barr 氏　（CAIPE 代表）

Helena Low 氏　（CAIPE　CAIPE開発部長）

通　訳：田中けいこ 氏

3月27日（金）

（1）キングスカレッジグループ

10:00-13:00　キングスカレッジのIPE（多職種連携教育）学習と演習の説明と質疑応答
Jayne Slonina 氏

13:00-14:00　IPE　1年目履修中の学生と教員とともに昼食

14:00-15:30　患者教育への授業の視察（医学部と看護学部学生）　Emily Crocker 氏

15:30-16:00　1日のまとめと質疑応答　Jayne Slonina 氏

通　訳：田中けいこ 氏

（2）ブルックス大学グループ

13:00-13:30　歓迎昼食会　Dr Rob Wondrak （副学部長）
Dr Ann Ewens （専門職開発部門長）
Mrs Liz Westcott（資格課程開発準備部門長）

13:30-14:00　学部内の実習・演習施設の案内　Liz Westcott（前掲）
Julia Sloan,（実習教育担当者）

14:00-14:30　学部と英国のIPL（多職種連学習）概要　Liz Westcott

14:30-15:20　Partnerships 1 and 2 modules（連携1・2の授業内容の説明）
Dr Helen Aveyard and Dr Phil Harper （上級講師・連携授業の主任）

15:20-15:30　タクシーでラドクリフ病院（ORHT）に移動

15:30-17:00　ジョン・ラドクリフ病院見学　John Campbell and ORHT staff

通　訳：吉田えみこ 氏

3月28日（月）

（1）キングスカレッジ

10:00-12:30　キングスカレッジのIPE（多職種連携教育）学習と演習の説明と質疑応答

13:00-14:00　小児科集中ケアユニット視察　セント・トーマス病院
Jayne Slonina　Fiona Lynch

14:00-15:00　Florence Nightingale Museum 視察　セント・トーマス病院

通　訳：田中けいこ 氏

（2）ブルックス大学

9:00-11:00　ナッフィールド整形外科センター　Kate Walkey,（臨床実習指導者）
ＩＰＬ履修中の看護学生との懇談

11:00-11:15　タクシーで大学に移動

11.15-12:00　CAIPEの役割　Anne Ewens（専門職開発部門長）

12:00-12:45　昼食会　June Girvin（学部長）　Tony Perry（財務部門長）出席

12:45-14:00　IPLの実際　Netta Lloyd Jones and （臨床実習指導者）

14:00-14:15　学生指導への戦略と学習プロジェクト
Bev Gillings and　Sue Hutching（IPLの上級講師・研究者）

15:15-15:30　休　憩

15:30-16:00　Partnerships 3（連携3の授業内容説明）
Gus Strang （上級講師・Partnerships 3主任）

16:00-16:50　IPLバーチャル学習　Louise Stayt （上級講師・専門職実践技術）

通　訳：Mio Murphy-Shaw 氏

2．CAIPE 事務局へのインタビュー調査

1）CAIPE の概要



（CAIPE: The UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education）

（1）目　的：CAIPE は、公共サービスに従事する専門職及び組織の連携を促進し、専門職連携教育の権威ある国際的な拠点になることを目指している。

（2）CAIPE の活動及び地位：CAIPE は、1987 年に設立され、大学や職場において専門職が相互に相手から相手について学び、尊重し、連携への障壁を克服し、行動を起こせるよう、その方法の開発に重点的に取り組んでいる。CAIPE は、サービス利用者及び地域を重要なパートナーとして捉える専門職連携学習を促進している。CAIPE は、登録された非営利団体である。

（3）CAIPE と会員及び他団体の関係：CAIPE の会員は約 300 で、全英の公立及び私立の教育機関、保健及び社会ケア機関、司法関連の団体や個人が会員である。会員は CAIPE や CAIPE のウェブサイトによって、ネットワーク作りを行っている。また、CAIPE は同様の考えを持つ機関と密接な連携をとり、国際交流も図っている。

（4）CAIPE の提供内容：実践例を含め、専門職連携の学習及び実践に関する研究や信頼できる情報の提供・情報交換の機会の提供・専門職連携のテーマに関する大会、研究会、シンポジウムのプログラムの提供

（5）CAIPE の実践：連携を強化し、改革を行うための業務ベースプロジェクトの促進・政府、保健及び社会ケア機関、公共及び民間サービスのための相談業務・教員、指導員、スーパーバイザー、実践者、管理職が、専門職連携の促進方法を学ぶための専門職連携研修 ・専門職連携教育の評価に関する研修など

（6）最近の業績：保健省のための専門職連携学習の事例研究・ロンドンにおける新しい保健及び社会ケアの協力関係の促進・プライマリケアトラスト、病院、高等教育、社会ケア機関などに委託された、管理職、教育者、スーパーバイザーに対する専門職連携研修・最近の研究の評価を盛り込んだ専門職の協働に関する新しいシリーズの書籍出版・海外からの専門職の雇用によって起こる文化的問題に関するカンファレンスなど

2）英国専門職連携教育の現状と課題

（1）専門職連携が求められる背景



英国では、第 2 次大戦後から National Health Service（NHS）Act（国民保健サービス法）と National Assistance Act（国民扶助法）による地方自治体の社会サービス供給体制が整備されてきた。しかし、両者のニーズを抱える人々に対して連携したサービスが行われていたわけでなく、保健サービスと社会サービスの重複や隙間が常にあった。

1990 年の National Health Service and Community Care Act（国民保健サービス及びコミュニティ・ケア法）以降、保健と福祉連携への政策的要請は高まり、2000 年の「The NHS Plan（国

家保健サービス計画)」により、専門職の連携による質の高いケアや、専門職アセスメントの統合、地域の社会サービス部と保健セクションを統合した Care Trust など、保健福祉連携を進める様々な取り組みが行われた。ヘルス部門とソーシャルサービス部門の近代化と統合が施策推進の上でも課題であり、それは両部門の組織統合によるシステム構造だけでなく、職員の意識をどう変えるかが課題であった。

このような状況の中で、2001年には「Working Together－Learning Together（ともに働き－ともに学ぶ)」という政府文書が出され、生涯教育と専門職養成の教育課程における専門職連携教育の推進が提起され、大学教育への導入が開始された。

（2）専門職連携教育について、英国の利用者（患者）や関係者からの関心や期待度

IPE プログラムは、英国保健局（ＤＨ）の推進により、どの大学でも設置することになっているが、初年度である 2000年は、全英で４つの大学（キングス・サウザンプトン・ニューキャッスル・シェフィールド）に補助金が支給され開始された。

かつて実践現場では、患者の安全性が専門職連携の不足により脅かされる事件が起こっていた。例えば、小児病院の心臓手術による死亡者数の多さや、児童虐待による子供の死亡など、いずれも多職種で対応していたにもかかわらず、コミュニケーション不足や不十分なチームワークにより起こった事故であった。これらの事件は社会問題となり国民の関心も高かった。

このように IPE への総合的関心は高まっているものの、医療・保健・福祉の実践現場、そして大学、政府とそれぞれが期待するところが異なるので、その調整が今後の大きな問題である。

（3）専門職連携教育効果の実証

CAIPE 代表の Hugh Barr 氏が、107 の専門職連携の実証的研究を分析し、IPE の効果を分析した論文がある。また、政府に「Higher Education Academy」という機関があり、IPE の研究成果が蓄積されている。評価の視点としては、コスト・効率性・協力・教育課程・学生満足度など様々であるが、何を優先するかは実践現場（利用者）と教育現場（学生）で違いがある。

全英の医療保健福祉系大学では、IPE を必須科目として導入しているところが多く、その教育実践は、英語圏全体に広がっている。1987年に CAIPE が設立されたが、20 年間で世界中に普及した。政策的にも実践的にも多職種連携が求められる社会的背景はあるが、大学教育への普及が、その効果の一端を示しているのではないか。

「コンタクト・セオリー」という理論――人種や国籍が異なる人々が協力すると、単一人種や国籍の集合体より良くなる――があるが、多職種連携もこれに当てはまるのではないだろうか。

（4）専門職連携教育の課題

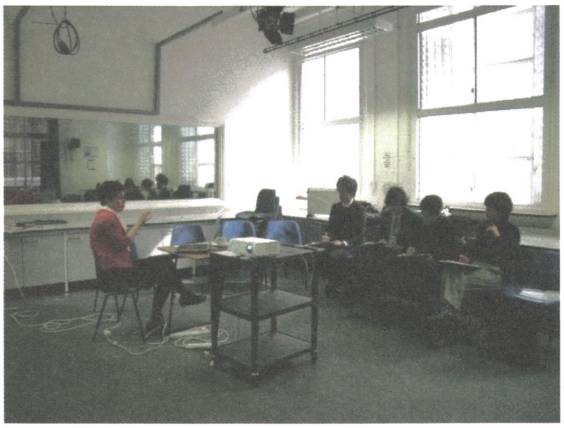
教員は、学生の演習場面で起こる葛藤、例えば職種間の相互理解の不足や異なる視点への軽視、同等な立場での公平なメンバーシップの欠如など、誤解や対立を招く事柄が発生した場合、その解決のためにファシリテーターとして介入する必要がある。ゆえに、ファシリテーターである教員自身の指導力向上は重要な課題である。

しかし、専門職は同じ専門職により教育されてきたので、教員自身の他職種に対する理解不足や、連携の不得手さも存在するので、まずは教員自身が他職種の仕事内容を知り、その上で共通課題にどのように取り組むかや、他の専門職の貢献や優れている点をポジティブに捉え、自己の専門性も活かしつつ、互いの良さを認め合うパートナーシップの視点なども学ぶことが大切である。

3．King’s College LONDONにおけるInter-professional Education（IPE）の概要

佐藤・小野・望月・三井

1）専門職連携教育プログラムの概要



King’s College LONDONのIPEは、複数の領域の専門職が連携し、ケアの質を改善して、「患者中心の医療」を実現するために、同じ場所で、互いに互いのことを学び合う目的で始まった。基礎教育の段階から、専門職間に存在する壁を取り払った教育体制を確立することは、とても重要であり、ここでは、医師と看護師の他、助産師や薬剤師、栄養士、理学療法士などがIPEプログラムを体感している。

King’s Collegeの構成組織については、学長、学部長を中心とした「IPE委員会」を立ち上げ、その中に地域医療を管理する「Trust」という団体が含まれている。また、実動組織として「IPE 実践戦略委員会」を構成しており、ここには学生の代表者も含まれる。

IPEの目的を達成させるための3つの焦点として、「個人レベル」「協力体制」「サービス改善」を挙げており、1年生から最終学年まで段階を追って積み上げていけるよう、計画が組まれている。最近では、女性の導尿場面を想定し、患者役と専門職役を交互に行いながら、お互いの評価を行っている。

探求型学習（IBL：Inquiry-Based Learning）に重きを置き、方法論の一つとしてグループによるコラボレーション（collaboration）を実現させている。つまり、複数の学校関係者（学生、教員、管理職など）が長いスパンで共通のプロジェクトに自分たちの役割を明確にして深く関わっていく。学生たちのグループ活動や学校関係者たちの協働学習・協働実践（collaborative learning or collaborative work）とも重なる概念である。IPEの段階を簡潔に述べると、

1年目　　：患者・利用者中心のチーム医療を推進するために必要なコミュニケーションを実践する能力を身に付ける。

2年目以降：チームメンバーそれぞれの職種の役割・機能を把握して効果的なチームビルディングのための知識を理解する。また、患者中心の医療という目標を共有し、チームとして問題解決を行うための方法を学ぶ。

最終学年　：患者中心の専門職連携の実現のために専門職者としてどう行動するかを学ぶ。

また、具体的な到達目標が設定されており、グループの中で自分の専門性を活かすことが出来たか、他の専門性を的確に評価することが出来たか、これらが自分自身の学びにつながったか、チームワークをとることができたかなどの項目が挙げられていた。これらの到達目標に対し学生たちは、中心に患者がいることを前提に演習を行い、「それぞれが異なった専門性を発揮したことによりチームワークが促進された」、「学生が互いに学び合い、自分自身の専門性についても深めることができた」などと回答している。



評価については、IPEに携わる教育スタッフ(Facilitator)が各グループのプロセスや実績をアセスメントするとともに、学生は、学部の異な

ったペアのお互いを評価し合う。学生評価はweb上のアンケートを記名式で答えてもらい、評価された相手もこれを読むことができる。また自己評価はリフレクティブポートフォリオを作成し、評価につなげていく。

2）経　過

1998年から医学と看護学の連携学習が行われてきた。2000年に共同学習のもととなるグループを構成し、2002年からKing's College LONDONの学生約1300人に対するIPEを本格的に始動させた。毎年評価を行いながら、2006年9月に大きな見直しを行った。

3）見学先施設概要



King's College LONDONでIPEの概要と実際について話を伺ったあと、St. Tomas Hospitalの小児集中治療Unitに行き、そこでの専門職連携（IPW：Inter-professional Work）について話を伺った。



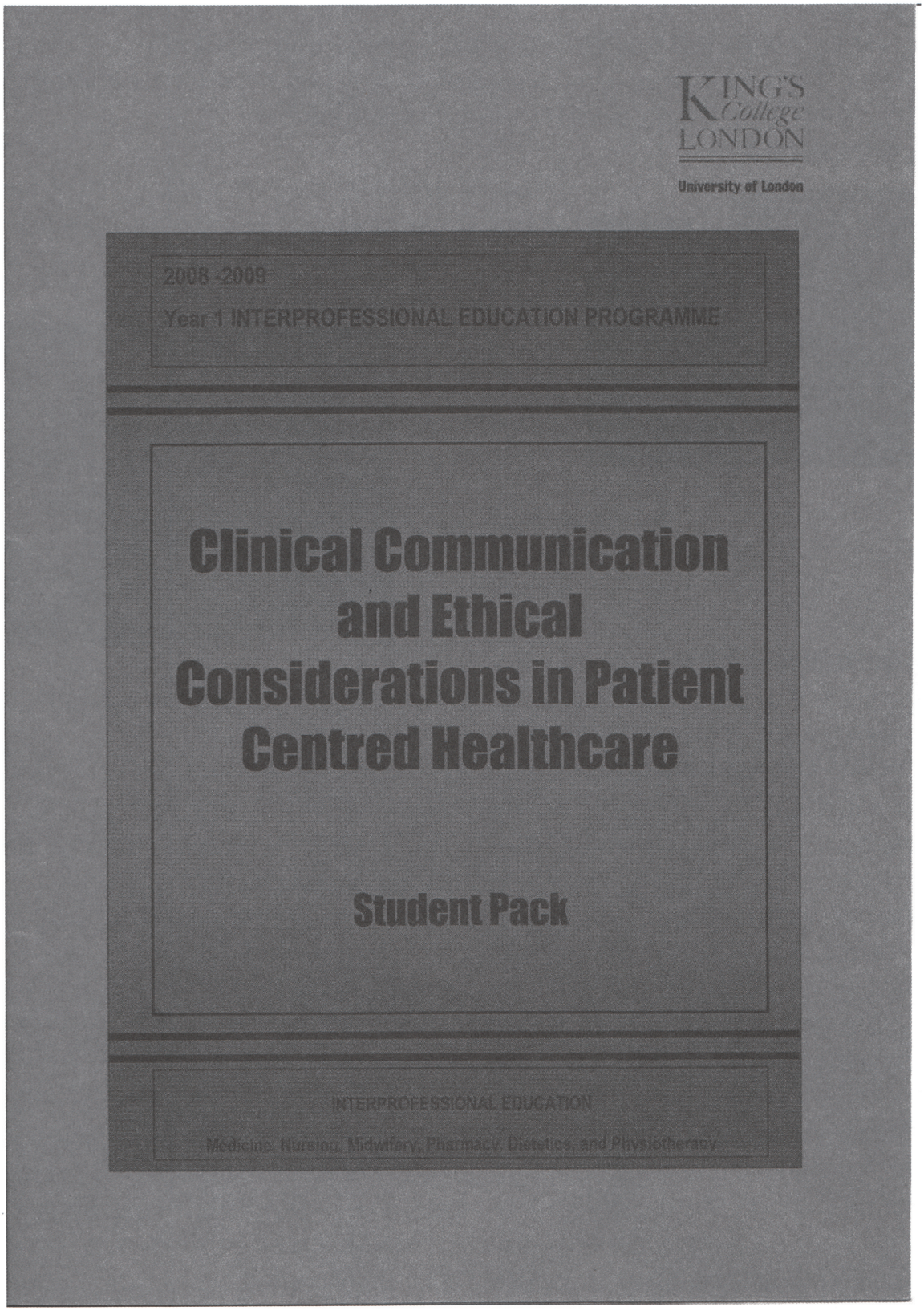
4）専門職連携教育の課題と考察

当該大学では、IPEをコアに位置付けたいと考えているが、まだ完成されてはいない。学部の時間割がバラバラなため、時間を調整することが非常に大変である。

内容については、毎年評価をしっかり行いIPEプログラムを確立していこうとしている。2007年に行われた1年目のIPEプログラムにおける学生の自己評価は、各学部とも非常に高く、個々の意見としては「最初は時間のムダと思っていたが、自分を知る良い機会となった。」「他学部とのコミュニケーションが図れ、楽しかった。」「自分が一人の専門職として、ヘルスケアサービス提供者の一員となって働くことが認識できた。」という前向きな意見が見られた。しかし、学部ごとの評価の度合いが異なっており、医学生については特に低めの結果が出された。個々の意見としては、「目的の意図が伝わらない。」「学部間での意見の相違があり衝突が多かった。」また、全員が固定概念を取り払うことができたかというと、そうでもない。現在のところ、IPE体験者と未体験者における比較研究などはまだ実施していない。

まだコースが定着しているとは言い難く、IPEに携わる教育スタッフが少ないという物理的問題に加え、スタッフ側にもそれぞれ固定概念があり、彼らのための訓練（Facilitator Training）をより充実させていかなければならない。Jayne Slonina氏は、「IPEに関係していない教員の中ではIPEの重要性を未だに認識できていない教員も多い。学校全体を挙げてIPEを推進していく必要があることを再認識しており、レベルアップを図るためには、大学で行われるFD（Faculty Development）などに組み込んでいく必要がある。」と説明して下さった。

＜キングスカレッジ演習要項（１年目）＞（一部抜粋）



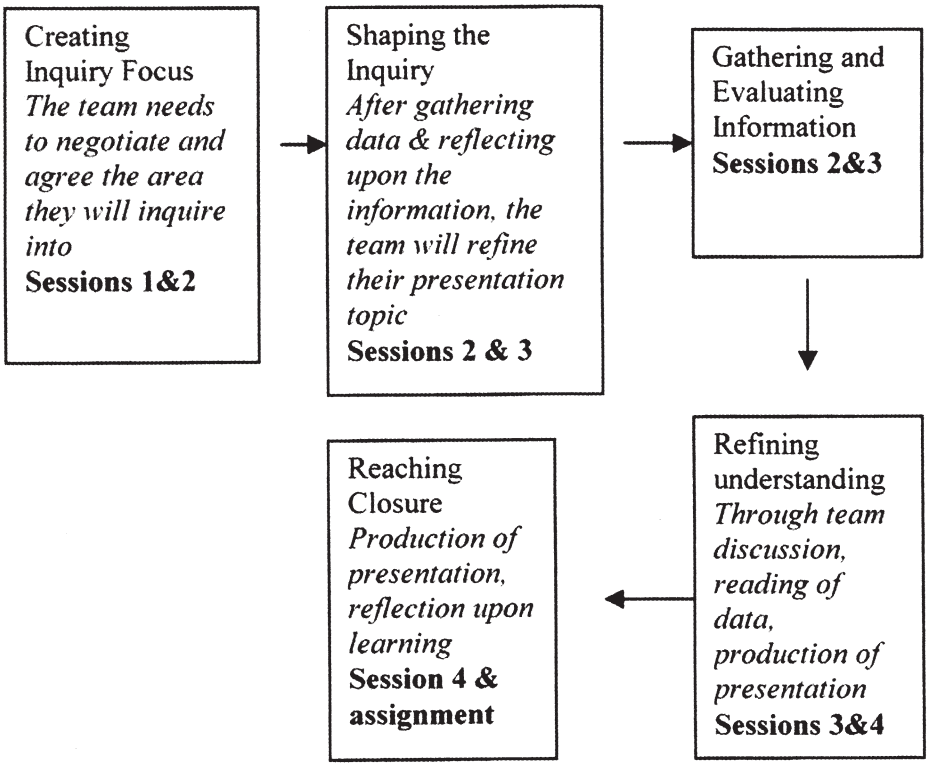
Overview of the Programme

The programme uses an inquiry based learning approach. Inquiry based learning involves students working together to problem solve, think critically and take responsibility for what the team achieves. Feletti (1993) suggests that inquiry based learning encourages student collaboration, fosters student directed learning, encourages independent studies and aids reflection on the learning process. These skills and qualities are required by all health care professionals. By undertaking this programme you will be gaining knowledge that is essential for your professional careers, but also learning skills via the process that are required by all health care professionals.

Students are placed in mixed discipline groups and are required to inquire into the communication skills and ethical considerations associated with patient centred care, culminating in a joint ten minute presentation of your findings. These topic areas are equally relevant to all health care disciplines. By undertaking this process you will be required to work as a team. The skills that you learn by working within a team will be transferable to your future work as a health care professional.

The Inquiry Based Learning (IBL) Process (Price 2001)

The diagram below sets out the process that your team will go through and a suggested time frame.



The Role of the Facilitator

You will have a facilitator who works with you through all four team-based sessions and is contactable between sessions.

The facilitator acts as a guide and can support, advise and encourage your learning and activity throughout the IBL process. They may discuss, question and debate some aspects of your learning and information gathered. This will be with a view to broaden or challenge a team perspective. Your facilitator will allow and encourage you to explore feelings, attitudes and beliefs. This process can be further developed by team and individual reflection. Reflecting ideas and approaches back to the trigger scenario can help to maintain a sense of structure and purpose in this process. Remembering the purpose and goals of your IBL will help keep you on track and not get continually side tracked when time is restricted. Your facilitator can remind you when necessary.

Your facilitator will not be overly directive or prescriptive and will not provide all the answers for you. Facilitators will be assessors of team presentations and contribute to the marking of your submitted assessment.

All students will be assessed on the work that is undertaken during the IPE programme. As part of this assessment all students are required to develop a portfolio outlining the work undertaken and reflecting upon their development during the IPE programme. Information regarding the portfolio can be found under the assessment heading.

Outline of Sessions

Plenary Introduction to Year 1 IPE Programme

The plenary will take the form of a main hall lecture

Learning Outcomes
By the end of the session the student will be able to:

- Understand the significance of interprofessional working in the provision of patient centred care
- Demonstrate awareness of the factors that contribute to an effective team
- Recognise aspects of Tuckman's model of group development
- Identify the core communication skills and ethical considerations associated with patient centred care
- Understand the significance of the KCL Code of Ethics and Professional conduct for Healthcare Professional Students (see Appendix A)

Sessions 1 – 4
Students will work within their identified IPE groups for these sessions.

Session 1 (2 hours)
Students will be split into 4 mixed discipline teams, this team will be the students that you will work with over the following four sessions.
The group facilitator will undertake a simulated patient interview, demonstrating the core communication skills of: establishing a rapport, listening, demonstrating empathy and using a variety of question styles. The interview will be based upon a scenario that will be relevant to all the disciplines in your student group. The simulated patient interview will act as a 'trigger' for your inquiry based learning process.

Each team will need to spend some time getting to know each other and set some ground rules regarding how they plan to work together. The team need to discuss the aims of the programme and how they plan to go about achieving them. The team will then start to discuss the elements of communications skills and ethical principles they wish to inquire into. You may find it helpful to assign roles within the team eg chairperson, scribe. By the end of the session each student needs to have a task associated with the team goals that they will undertake to complete by the following session. Please remember that you will be expected to acknowledge your sources of data in your group presentation. The team should review the learning outcomes for session 1 and check if you have achieved these by the end of the session. As a team you may wish to set your own learning objectives as well.

Session 1 Learning Outcomes
By the end of the session students will be able to:

- Identify their fellow team members and know how to contact each other
- Discuss the team ideas for a 10 minute presentation related to the communication skills and / or the ethical considerations associated with patient centred care
- Begun to establish how the team will work together and identify common goals and task allocation

- Identify their own task to be completed by session 2

Session 2 (2 hours)
Students will meet with their team and group facilitator. The session will be student led and it will be up to the student team how best to use the time allocated.
It is expected that you will share with each other and your group facilitator the information that you have discovered. Further discussion will take place as to how this will be used (or not) for the group presentation. By the end of the session the team should have a clearer idea about the form their presentation will take and students should leave with tasks that need to be completed before the following session.

Session 2 Learning Outcomes
By the end of the session students will be able to:

- Discuss data collected to date and agree a way forward through individual responsibility, team support and task allocation
- Further identify the role of effective communication in patient centred care
- Further explore the ethical considerations associated with patient centred care.
- Identify and reflect upon your own team working skills for example collaboration, respect, negotiation, facilitation and leadership.
- Reflect upon how the team is working together

Session 3 (2 hours)
Students will meet with their team and group facilitator. The session will be student led and it will be up to the student team how best to use the time allocated.
It is expected that you will share with each other and your group facilitator the information that you have all discovered. The group facilitator will discuss with you how your team is performing.
By the end of the session you will need to have decided the form your presentation will take and allocate tasks ready for your presentation in session 4. **Please inform your facilitator of any audio visual aids that you require for the presentation.**

Session 3 Learning Outcomes

By the end of the session students will be able to:

- Agree upon the form that your presentation will take, remembering the need to acknowledge your sources and ensure that the data you present is evidence based
- Discuss with the facilitator how the team is functioning
- Reflect upon your own contribution to way that the team is performing
- Identify further tasks that need to be undertaken in preparation for the presentation

Session 4 (3 hours) ***Please note that this session will start at 10am***

Teams will be given 30 minutes at the beginning of this session to finalize their presentation, sort out audio visual aids etc.
Each team will present for 10 minutes and there will be 5 minutes allocated for questions and answers following each presentation. **Time is limited so presentations**

will be stopped at 10 minutes. Presentations will be assessed by your group facilitators using the criteria identified in appendix B.
When all presentations are completed students are required to complete a peer review form for all members of their team (see appendix C). The peer review form will enable you to give feedback to your fellow team members on how they have performed during the project. **Feedback must be given in a constructive manner** keeping in mind the KCL Code of Ethics and Conduct for Healthcare Professional Students. Students will be given the feedback forms at the end of the session. They must be included and reflected upon in your portfolio. If you are concerned about any comments received from your fellow group members please do not hesitate to contact your group facilitator, IPE discipline lead or the IPE lecturer in order to discuss further.

Session 4 Learning Outcomes

By the end of the session students will be able to:

- Actively contribute to the team presentation
- Answer questions and discuss the content of your presentation, drawing upon the evidence used.
- Offer your colleagues constructive feedback via the peer review form
- Identify what you have learnt from the process of undertaking the project
- Identify how your learning will impact upon your work as a health care professional

Assessment

All students are assessed on the work that they undertake within the IPE programme. Different disciplines will have slight variations in the requirements for the assessment in order to correlate with the overall assessment scheme for their individual programmes.

The generic part of the assessment for ALL disciplines is the team presentation and the peer review.
Please see the links/ handbooks below for the assessment requirements and submission dates for each discipline.

Medicine - http://virtualcampus.kcl.ac.uk/vc/medical/ipe/

Nursing: See 'Nursing and the Healthcare Team' handbook via WebCT

Midwifery: See 'Foundations of Midwifery' handbook

Pharmacy: See 'Professional Orientation Course handbook'

Physiotherapy:
BSc:http://virtualcampus.kcl.ac.uk/vc/bsc/Physiotherapy/BR0106/index.html
MSc: http://virtualcampus.kcl.ac.uk/vc/bsc/Physiotherapy/BRM022/index.html

Dietetics:
Postgraduate: http://www.kcl.ac.uk/content/1/c6/02/49/18/BND1051tt.pdf
Undergraduate: http://www.kcl.ac.uk/content/1/c6/02/49/40/BNDIPP1tt.pdf

4．Oxford Brooks University における Inter-professional Education（IPE）の概要

神山・清水・大澤・河野・伊藤・堀内

1）オックスフォードブルックス大学の概要

（1）大学の歴史



1865年にオックスフォード・スクール・オブ・アートとして創設された古い歴史を持つ学校で、以降、サイエンスなど幅広い専門分野との合併を繰り返し、大学レベルの総合高等教育と職業訓練を目的とした高等専門学校としての実績をあげてきた。1991年、サッチャー政権の教育改革の一環として学位授与できるポリテクニック学校となり、翌92年に正規の大学としてスタートし、今日に至っている。

（2）大学の規模など

オックスフォード市内に3つのキャンパスを持ち、13の学部がある総合大学で19,000人の学生がいる。その一つに「Health and Social Care 学科」（保健社会福祉学科）がある。

（3）保健社会福祉学科の概要

今から4年前に看護師等養成専門学校からブルックス大学に合併され、学科としてスタートした。学士課程は3年制大学であり1学年の定員は350人、学科には次のコースがある。

4つの看護師コース（成人看護、小児看護、学習障害者看護、精神衛生看護）、助産師コース及び作業療法コース、理学療法コース、手術助士コース（手術時に医師の補助を行う専門職、麻酔も行う）、整骨療法コース、救急医療コース、社会福祉コースの全部で11コースがある。学生は18歳から60歳まで誰でもが入学できるので、医療福祉現場からスキルアップを目指して入学する社会人学生も少なくない。なお、社会人学生はいわゆるパートタイム修業であり、コースによって修業年限は4年間から6年間となっている。

この他に、学士修了後の研究・資格コースや大学院がある。

（4）保健社会福祉学科での教育の特色

＊ 学期構成：前期が9月末から1月末、後期が2月から5月末の2期構成となっているが、休業期間中も医療・福祉現場での実習ができるようになっている。

＊ 現場実習を重視：より実践的な知識・技術を習得させるため入学6週間後から「ＮＨＳ」が運営する提携病院（最先端医療を行う小児・救急・がん・整形医療などを含む）において実習を始め、3年間で2,300時間を消化する。実習先は病院の他、障害者施設や福祉事務所などの公的機関などもある。

なお、実習中は振り返りによる疑問解決及び新たな学習目標の設定のために、週1回学校に戻り再教育を受けるシステムを採っている。

＊ 連携教育の内容：実習時の病棟などにおける他職種との連携教育のほか、2年次にはケーススタディによる各職種間の意見・情報交換などと共に連携強化のための具体的方法も学ぶなど徹底した実践教育を行っている。

＊ 教育体制・方法：学内の講義は大学専任教員のほか、多くの現場従事者を招聘してより実践的な教育を行っている。

また、現場実習はそれぞれの現場の教育担当者が大学との連携のもとに行っている。教育目標は「知識・技術・（専門職としての）態度や、いかなる環境にも適応できる能力を獲得すること」としている。このために特に力を入れているのは、現場実習の他、学内での視聴覚

教育やコンピュータ制御による精巧な人体模型による実地模擬訓練、演習などの実践教育である。

2）専門職連携教育プログラムの概要

（1）ヘルス&ソーシャルケアスクールでの IPL(Interprofessional Learning)の意義

＊ 1998 年より専門職連携の教育カリキュラムを改善しながら取り組んでいる。当初は強制的に実施したが、今では IPL を楽しんで実施している。学生は「専門職として共有すべきことや学ぶべき本質は何か」について学んでいる。

＊ 学生に学ばせる前に、教員間でお互いがお互いを通して学ぶことの大切さに気づいた。教員がそのような状態になるまでに時間がかかった。学生は教員をよく見ている。

＊ IPL のゴールは「IPL を通して質の高いケアを提供すること」である。

（2）専門職連携教育の実施内容について

全てのコースのカリキュラムも、専門職連携教育や実践に焦点が当てられている。「パートナーシップス」という演習モジュールを、学生は他のコースの学生と 3 回一緒に学ぶもので、学年ごとのプログラムになっている。さらに、実習においてそれを経験することもある。

① 学生が演習で学ぶ「パートナーシップス」の内容～P R A C I C E～

・Person centered	医療や福祉の利用者を中心に考えること
・Reflection	振り返りをすること
・Assurance of quality	質を保証すること
・Communication	コミュニケーションを図ること
・Interpersonal skills	対人関係の技能を身につけること
・Cultures	文化について理解すること
・Ethical behavior	倫理的な態度について理解すること

② 1 年次に学ぶ「パートナーシップス 1」の演習プログラム

＊ 目的は、専門職とはエビデンスを使って仕事をすることを学ぶ。

＊ 受講生約 500 人を 2 つに分け、それぞれ 3 日間ずつ、1 学期に 2 回実施している。

＊ 進め方は、講義とセミナー形式で、プレゼンテーションも実施している。また、自己学習を重視している。

＊ 1 日目:グループワークを通してエビデンスに基づく答えを探す必要性について学ぶ。例えば、「どの薬が咳にはよいか?」という問いに対する答えを探す必要性など。

＊ 2 日目: エビデンスの探し方を学ぶ。例えば、図書館の使い方、文献の検索の仕方など。

＊ 3 日目:批判することを学ぶ。例えば、新聞記事に書かれてあることを「本当か」と疑うなど。

＊ 難しい点:1.学生の能力や背景が異なっている。2.IPL の良さを説明するが、共有することを「よし」としない学生がいる。

＊良い点: エビデンスを使っての学びを共有すること。

③ 2 年次に学ぶ「パートナーシップス 2」の演習プログラム

＊ 目的は、専門職としてのスキルの向上を支援すること、他の専門職が何をしているのかを理解すること。

＊ 受講生約 400 人を 2 つに分け、1 学期に実施している。

＊ 進め方は、1 週目は講義形式、例えば「社会政策について」、2 週目はセミナー形式、例えば「ケースの背景にある人種の区別について」などである。また 1 週目と 2 週目の間に、オンラインで宿題を出している。例えば「チームの中の役割について」などである。それについてディスカッションボードに書いてもらっている。そして、それらを材料にセミナーで討

議を実施している。

＊ 学生は1グループ25人程度で、15グループである。看護の学生が多い。さまざまなコースの学生をどのようにミックスするか難しい。

＊ 課　題:今年から小論文(3,000字程度) 1.自分のチームワークのとり方、2.演習を通して学んだこととしている。昨年までは、ケーススタディのアセスメントをプレゼンテーションさせていたが、学生からは不評であったことから小論文に変更した。

＊ 学生の評価:80%以上が「役に立った」、66%が「他の専門職との学習は楽しかった」、60%が「他の専門職が何をしているのか分かった」と好意的であった。しかし、一部には、他の専門職とは働きたくないという考えから、グループワークに協力的でない学生もいた。学生には、良かった点、悪かった点、モジュールに対する提案も書いてもらっている。

＊ 教材づくりで工夫していること:よいケーススタディを作成すること。地域で実際に起っている難民の問題や精神的な問題を抱えている市民の状況を参考にケーススタディを作成し、今日的な問題に対処できるようにしている。

④ 3年次に学ぶ「パートナーシップス3」の演習プログラム

＊ 目的は、質の高いケアを実施するためにリーダーシップをとれるよう「マネジメント力」を養成する。

＊ 受講生約350名を2つに分け、それぞれ3日(月曜日、火曜日、木曜日)で実施している。

＊ 進め方は、1日目は講義(90分)、例えば「マネジメントとリーダーシップ」、続いてセミナー1(120分)、ランチをはさんでセミナー2(90分)を実施し、セミナーのテーマは例えば「あなたのリーダーシップ像について」など。2日目は講義(90分)、例えば「変化を起すマネジメント」、続いてセミナー1(120分)、ランチをはさんでセミナー2(90分)を実施。3日目は講義(90分)、例えば「質の保証」、続いてセミナー1(120分)、ランチをはさんでセミナー2(90分)を実施。

＊ 学生は1グループ35人程度で、10グループ。セミナー担当の教員は、1グループに1人で、全体では10人である。

＊ 評価のためのガイドライン：8つの側面をカテゴリー化

A 患者ケアのアセスメント、プラン、介入はエビデンスに基づいていたか

B コミュニケーションと関係形成のスキルは効果的だったか

C 専門職連携事業と専門職関係形成の協働性はどうであったか

D 専門職としての態度はどうであったか

E 実践において健康と社会的ケア政策は実際的な介入だったか

F 患者あるいはクライエントと仲間の健康と福祉の向上は図られたか

G リスクのアセスメントと臨床的管理はどうであったか

H 演習に発展性はあったか

⑤ 実習における専門職連携教育の実施体制

例えば、成人看護コースでは、8ヶ所で実習時間は2,300時間である。1日8時間の実習で、6週間では240時間となる。1週間に1日は大学に戻ってくる。

ある3年次生は、外科病棟で6週間実習していた。臨床には大学と実習の調整を実施する指導者と、学生に自分が担当する患者を通して臨床講義を含めて指導する Clinical Nurse がおり、学生は学習する内容に応じて適任の Clinical Nurse から指導を受けていた。大学から教員は実習指導には出向いていなかった。

また、ある2年生は専門職が連携する病棟ミーティングに参加した状況を語ったが、指導者である Clinical Nurse が担当する患者を通して専門職が連携する場やそこでの情報の共有の

仕方を学んでいることが分かった。この学生は、専門職連携演習(ケーススタディ:15歳で妊娠した女性の地域生活におけるアセスメント)について、「学問的には違う内容を学ぶ専門職であっても、将来一緒に働くことが考えられるので、専門職連携演習は大変重要だと思います」と語った。学生の実習記録はポートフォリオというタイトルのものであった。

ブルックス大学　学部生のインタビュー

＊ ２年生２名の協力があった

学生A：がんクリニカルナースを目指している学生。

学生B：感染看護と、骨折した際の完治しない部分の骨の勉強をしている学生。

＊ １年生の時に IPE のプロジェクトがあり、１回目は婦人科の関係職種と、２回目は福祉分野（高齢者ケア）の関係職種と、３回目は理学療法士、４回目は救命病棟で麻酔学、慢性疼痛、腫瘍学の専門職と学んだ。

＊ 今朝も、腫瘍学、理学療法士、作業療法士と今後の治療と社会生活に向けてどのように取り組んでいくのかというカンファレンスに参加した。

＊ カンファレンスは定期的にあるものではなく、実習指導者が担当しているケースのカンファレンスがあれば、一緒に参加することができる。また、英国では組織のトップが出席する会議にも学生たちが参加できる機会もある。学会があればそれにも一緒に行くことができる。

＊ IPL では、アサイメントがあり、学んできたことに関連したケーススタディをグループで行った。グループ内には助産師コース、小児科看護師コース、成人看護師コースの学生がいた。ケーススタディの例としては、祖父母と生活している15歳の女の子が妊娠した際にそれぞれがどういう視点を持って彼女を援助していくかという事例があった。

＊ 「連携プログラムは大きな影響があった。違う見方ができるようになり人から与えられ、自分も与え、とても大切なことであったと感じている。」

＊ 「この病院は小さいこともあり、みんなが知りあい。専門領域は違っても、同じ対象者にチームで関わることを通じて、関係を作り連携を学ぶことが出来る。実践場面では一緒に働いていくことになるのだから、学生の段階から IPE で学ぶことはとてもポジティブなものであると感じている。」

＊ 3年間に８ヶ所の実習施設に行く。2,300 時間クリニカルプラクティスがある。1週間に1回大学に戻る。

３）専門職連携現場での現状と課題

前述したように、ブルックス大学のヘルスソーシャルケア学部看護学領域の実習時間は、日本よりもかなり多い。また、実習期間中は、月曜日のみ大学に戻り、残りは病院での実習を行っている。学生の希望によっては、夜勤実習をすることもできる。

今回の研修では看護学生の実習先である２つの病院の見学することができたので、その概要について報告する。

（１）John Radcliff Hospital

病院概要・説明者：John Campbell（病院側の看護師教育担当者）

＊ ブルックス大学とは、共同して研究などに取り組んでいる病院である。

＊ NHS トラストとして英国で5番目に大きい運営予算をもち、かつ広範囲を管轄しているという特徴をもつ病院である。NHS ではあるが、各団体・個人からの寄付も受けて運営されている。



NHS＝National Health Service…患者の医療ニーズに対して公平なサービスを提供することを目的に 1948 年に設立された。利用者の健康リスクや経済的な支払い能力に関わらず利用が可能であり、医療費は基本的に無料である。収入の内訳は国の一般財源約 80%、国民保険 12%、受益者負担 2-3%、その他となっている。その人が住んでいる住所から徒歩圏内にある General Practitioner(GP：家庭医・一般医)をかかりつけ医として選択し、登録する。NHS による医療サービスを希望する場合には、まず GP に受診するために予約をし、診察を受けることになる。GP はプライマリケアを担当し、必要に応じて専門医を紹介する。NHS は DSS（社会福祉事務所）が管理している。

＊ 1770 年 280 床からスタートした歴史ある病院で、2 年前に現在の場所に移転してきた。今は3つの病院に分かれており、John Radcliff Hospital の他に Radcliff Infirmacy Hospital、Churchil Hospital がある。

＊ 抗生物質を初めて使用した病院であること、英国で初めて救急病棟が設置された病院であること、最近では、消化管の同時移植手術も行われるなど、常に先進的な医療に取り組んでいる医療機関である。熱傷治療、骨移植以外の全ての疾患をカバーしており、地域の中核病院として多くの人が利用している。

＊ 質の高いケアを目指しており、患者個々を大切にしている。職員教育をしっかり行うことで、患者に良いケアを提供することができると考えている。

＊ 大学と連携した病院運営を行っており、オックスフォード大学からは医師研修を受け入れ、ブルックス大学からは看護師、理学療法士の研修を受け入れている。強いコネクションを持っている。

＊ 敷地内にリサーチセンターを保有しており、新しいテクノロジーサイエンスの情報をいち早く収集し、病棟で活用していくようにしている。

＊ 現在がんセンター、心臓センターを新たに設置中である。

病棟見学・説明者：Naomi Clements（病院側の学生実習の指導責任者）

＊ 実習指導者の立場から IPE に関して

「学生時代から相手の役割を理解することは良いことだと思う。しかし、IPE を進めていくためには病院と大学とが連携してサポートし、教育にあたらねばならない。まだ十分ではないが、病棟での多職種が参加するカンファレンスを通して IPE を実践している。」

整形外科病棟

＊ 病室は 2 人又は 4 人部屋。

＊ 配置基準は 7：1（患者：看護師）、看護助手は不在の場合が多い（職員配置体制上の問題、欠勤など個人的問題）。

＊ 整形外科での実習中の学生からは「大学での IPL はとても良かった。いろんな人と働きました」という発言が聞かれた。

ＨＣＵ

＊ recovery room は看護師が中心となり運営している。プロトコールは決まっているが、看護師判断で抜管することも可能である。

＊ ユニット内での teaching session は行われているが、看護師はあまり出席していない。

（2）Nuffield Orthopaedic Centre

病院概要と IPE・IPW



＊ 説明者…Kate Walkey:Nuffield Orthopaedic Centre で実習する学生のカリキュラムの質と量を調整する実習指導者。以前は NHS トラストが教育実習を担当し、直接学生の養成をしていたが、それらの役割は基本的に大学に移行された。しかし、実習は現場で実施され、病院側の調整者として重要な立場にいる。

＊ 理学療法士、看護師、医師がともに働く（連携する）病院として国際的にも有名な病院であり、そこで学ぶ貴重な機会であるため、学生が連携に参加しやすい場づくりを考えている。具体的には様々な人とコンタクトをとり、学生が実習しやすいような環境をつくるよう意識している。

＊ 整形外科を専門に扱っている病院であり、急患の受け入れは行っていない。

＊ 義肢装具の作成で国際的な評価があり、海外から来院される方もいる。

＊ 対象となる疾患は、骨腫瘍、重症の関節炎など多岐にわたり、四肢短縮メタル挿入術、膝部・臀部の骨支持治療もする。脳疾患発症後や多発性硬化症のリハビリも行っている。

＊ 骨の感染症への対応は難しいが、様々な診療科の Dr、Ns がひとつの場所で連携するようにしている。

＊ 敷地内に研究所があり、専門職同士の交流を持ちやすい場所となっている。

＊ 普通の NHS とは異なり、対象者の幅も、連携する職種の幅も広い。チームとして密接に連携していくことを、もっと助長していかなければならないと考えている。

＊ 学生実習は 1 度に 50-80 人が受け入れるが、6 病棟にそれぞれ配置される。学生は 1 年目から IPE のカリキュラムがあり、6 週間のトレーニングの後、病棟で実習を行っている。「IPE はとにかく最初からあるもの。実践的に毎日行っていることなので、切ってもきれない」

＊ 学生はシニアナースについて IPE を学んでいる。

＊ 大学卒業後も学びたい人（研究生など）や学部生もいることで、幅広い経験や年齢層の参加者が相互学習できる環境を有している。

＊ 看護師以外の学部生の内訳は、理学療法士、レントゲン技師、心理療法士などが主となっている。

＊ Radcliffe 病院に比べ、専門分野にアクセスしやすい環境にある。学び合い、情報を分け合っていくことが大切である。トレーニングもたくさんしている。



＊ 実習の中で適宜 IPE を意図して指導している教育担当 Ns がいる。また、教員自身も大学で教育に携わるだけでなく日常的に自分が教育する分野での実践を継続しており、教育と実践が分離せず一体感がある。

＊ 付属施設として、デイケア施設、入院施設もあり、そこにも多職種がいる。

＊ 患者にとって何が一番大切なのか、

チームで考えている。例えば、脳梗塞患者が何を取り戻したいのか、患者と共に考えている。

今回の病院及び施設見学を経て、実習期間が長く、実地教育に重点を置いていることが分かった。学生は現場実務者と共に働く形で教育を受け、カンファレンスなども実習指導職員の参加するものに出席している。実践を通じての教育であるから、実習機関での連携のあり方が学生に大きな影響を与える可能性がある。また、教育機関と実習機関との間で実習の意図や目的が明確化され、共有されていないと、単に連携の場面を見学するだけにとどまってしまう可能性も感じた。

4）ブルックス大学におけるＩＰＥに関しての学生への評価、及び教育効果



（1）主要な評価点として、①各専門職間の境界除去、②チームワーク力・コミュニケーション力・問題解決能力などの向上、③連携による新たな対応ができるなどが挙げられていた。

（2）実践現場から見た教育効果としては、大学の教育･研究と現場との交流が盛んになった、学生が幅広い分野の知識・技術を習得することによって就業後即戦力となるなどが挙げられた。

（3）大学側の説明では、専門職の教育方法の改革がスタートしたのは、連携不足による医療現場のトラブルが続発し、医療の効率化と質の向上を図るには専門領域を超えて情報を共有し、共通のアセスメントを確立すること、専門性を統合したチーム対応が必要とされたことからであるという。現在、多くの養成教育機関で IPE が実施され、受講学生の反応という形でその効果は検証されつつあるが、IPE が医療の質的向上にもたらした教育効果については、未だ検証の途上にあるとのことである。

5）ブルックス大学における専門職連携教育の課題

（1）学生間の経験差・能力差への対応が必要



＊ 英国において大学進学年齢は、18 歳から 60 歳までと大きな幅を持つ。それは実務経験のある有資格者、社会人経験を経て入学する者など、学生の年齢や経験などのバックグランドが大きく異なるからである。

このような多様な学生の相互交流を支援するために、講義や演習以外でもチャットやインターネット掲示板などを活用している。ゆえに教員には、グループ単位での活動やディスカッションを活発化させるファシリテーターとしての力量が求められている。

また、実務経験のある学生が多いため、一定の専門性を持った実務者教育としての位置づけも必要となる。

（2）IPL の必要性や有効性を受け入れない学生への対応が必要

＊ 資格を持つ学生が、異なる専門性を持つ学生たちと学習することに利点を見い出せない場合には、同じ職種の学生だけで接点を作ろうとすることがある。そのため、連携演習や実習に行く前に、連携する目的と意義、必然性を学生が理解できるような働きかけが必要となる。

（3）各専門職が連携して取り組むことを学ぶための事例作成の難しさ

＊ ケーススタディにおいて各専門職が自己及び他職員の専門性を意識し、臨床現場で必要とされる連携がイメージできる事例を多数そろえていく必要がある

そのためには、準備段階での十分な検討を行える体制作りが必須となる。

（4）職種の人数バランス、性別、経験などの配分を考えたグループ編成が困難

＊ ブルックス大学における IPE プログラムに参加しているのは、看護師、理学療法士、作業療法士、ソーシャルワーカー、フィジオセラピストの課程に在籍する 200 人の学生だが、その内、看護課程先行の学生が 100～120 人であることから、演習のためのグループ分けのバランスが悪くなってしまう傾向にある。

（5）成績評価が困難

＊ グループを全体で評価すると、グループへの個人の貢献度が反映されないなどの不満が学生からあがってきている。

また、グループ演習では、学生個々の達成度をはかり、成績評価を行うのが非常に困難である。

6）今後、本学にも予想される課題

（1）各教育課程間の相互理解の促進

移民国家であるイギリスにおいては、多種多様な人種が学び、様々な背景をもった人材が働いているため、差別に敏感な側面がある。そういった背景から、近年は職種間の上下意識は日本ほど強くないという意見もあった。ex：医師に対して看護師が、ファーストネームで呼びかけても不自然ではない環境がある（ベテラン看護師からは若干抵抗感がある、との意見もあった。）

日本においては、医師を頂点とした古い体制や、発言力も強いという傾向などがあるため、対等とは言いにくい現実がある。連携教育においても、職種間の力関係の影響を排除していくことが重要である。

→教育にあたる教員自身がそれぞれのバックボーンの資格を超えて意見を出し、お互いの職種の専門性、教育内容、強み弱みを理解していないと IPE の効果的な実施はできにくい。

（2）教員同士が学び合うことのが重要性

＊ 英国においても、教員間の相互理解に非常に時間がかかっている。

→お互いの専門性を理解するための講義演習やコンテンツを作り上げる必要がある。

＊ 学生は教員のことを非常によく見ているので、まずは教員間での連携が大前提である。

（3）ファシリテーターの養成

学生への効果的な教育を行うには、直接教育にあたるファシリテーターの力量が大きく影響する。従って、ファシリテーターが教育目的を共有し、均質な教育を提供する体制を整えることのトレーニングが不可欠となる。

（4）連携教育の目指すもの、卒業時の具体的到達点を明確に定める必要性

＊ 卒業時に、学生が、どんな力を具体的に持っていればいいのか、という目的設定が必要。

→目的達成のためにはどんな演習を行うべきか、具体的な演習の設定、仕組み、教材の開発が必要。

（5）連携演習という従来にない演習形式の成績評価基準を作る必要性

＊ 個別の評価とするのか、グループとして評価するのか、評価指標は何を基準に作成するのか、評価責任者は誰かなどの視点から作成する必要がある。

（6）連携を促進する仕組みや支援の提供

＊ ブルックス大学においては、直接顔を合わせて行う演習だけでなく、PC のオンライン環境を活用して自主学習、ディスカッションなどが行われ、演習そのもの以外にも十分に時間を

かけて学習を展開している。

→演習時以外にも学生がキャンパスにて接点を持つことができる環境を提供することが相互理解にもつながるので、学生が一堂に会する講義室や、ミーティング・ディスカッションをグループ単位で行える設備面での整備が必要である。

→ハード面（学生が使用する教室やPCやオンラインなどの環境）とソフト面（オンライン用教材・コンテンツの作成、サーバーやPC環境のメンテナンス）双方の整備と、学習プログラムとしての十分な準備と教員間の合意形成が必要である。

５．調査研修の成果と課題

今回の調査研修では、英国のIPEプログラムや評価項目の情報を得、また、課題なども共有することができたことは大きな成果であった。

１）IPEの広がり

専門職連携教育の英国の先駆性については、埼玉県立大学や千葉大学の関係者からも情報を得ていたが、予想以上の広がりがあった。IPEは実践現場や利用者からの要請とともに、英国保健省の実施規則などにより政策的なバックアップを受けて推進できるシステムが構築されており、それはIPEの全英的な広がりの基盤となっている。さらに、ヨーロッパの専門職連携教育組織は、北米やオセアニアにも広がり、IPEは世界的に専門職教育の重要課題になりつつある。その流れを受けて、教育GPの採択を契機に日本の大学の医療保健福祉系学部教育にも普及しつつあり、今後もIPE教育は、専門教育の一つとして拡大する可能性があることが予測される。そのため、日本や英国の先駆的事例を参考に、本学の学生や地域性をふまえたプログラムの開発や試行が必要であることがわかった。

２）IPEへの共通課題

IPEの課題としては、本学の取り組みでも生じていた同様の課題が英国でも生じていた。それらは例えば以下の項目である。「① 多職種連携を進めるにあたって、実践現場と教育現場の目的の相違」、「② その前提となるための他学部の教員間の相互理解と連携の必要性」、「③ 専門職教育に加えて専門職連携教育を合同で行うための時間調整の難しさ」、「④ 連携教育を行うための教員の不足」、「⑤ 教員のファシリテート力の必要性」、「⑥ 多様な評価視点による評価の難しさ」、「⑦ IPEに取り組むための学内体制の組織化」、「⑧ 連携教育のレベルアップを目指したFDの必要性」などである。

これらの課題への取り組みは、国を超えて誰もが苦労しているところであり、容易に解決できることばかりではない。その取り組みの詳細は、以下の４）で述べるが、国を超えて同じテーマで同じ課題に取り組むことを共有できたことは一つの成果であった。

３）IPE（専門職連携教育）とIPW（専門職連携実践）の日本とイギリスの相違点

専門職連携教育は、政策的規程を受けて英国保健省が推進する仕組みが形成され、全英の大学にそのプログラムが及んでいる。そこに、日本との大きな差があった。そしてその教育的蓄積が、大学組織の中で過去10年間積算されており、プログラムも教員の指導内容も評価項目も体系化され整理されている。さらに、実施と評価の過程を経て現在も各大学で検討され、改良され続けている。

また、英国の大学では長年の蓄積があるため、IPEプログラムも具体的である。キングスカレッジもブルックス大学も、大学教育の修学年限は3年間であり、1年次から3年次までIPEプログラムが計画的に位置づけられている。そして、キングスカレッジでは延べ約1,300人、ブルックス大学では、延べ約1,050人の学生が履修している大規模な教育プログラムである。但し、キングスカレッジにおいては、医師・看護師・助産師・薬剤師・栄養士・理学療法士などの医療職

対象のプログラムであり、社会福祉職は加わっていない。ブルックス大学においては、ヘルス＆ソーシャルケア学部の看護師・作業療法士・理学療法士・手術助士・整骨療法・救急医療・社会福祉の全学生が参加している。

両校ともIPEプログラムは、講義と演習を交えた探究型学習であり、１年次は連携に必要なコミュニケーションや基礎的な知識の習得から始め、２年次は、他職種理解を深め、事例によるケース検討やチーム・ビルディングを学び、３年次は、リーダーシップ養成、及びマネジメント力を身につけるプログラムが実施されている。さらにブルックス大学の場合、e-ラーニングを用いたインターネットによる課題学習も行われており、講義と演習をつなぐプログラムが行われていた。

IPW の実際については、限られた時間の中では十分な調査ができたとは言い難く、今回の視察は病院中心のIPWであり、社会福祉職が加わったIPWを学ぶことはできなかった。英国では、1990年のコミュニティ・ケア法以降、多職種連携を推進する多くの政府文書が出され、それが可能となるような予算配分や補助金の給付も積極的に行われてきたが、実践現場で多職種連携が円滑に行われているかどうか、今回の調査だけで把握することは難しかった。

本学が行う地域包括支援センターを基盤にした看護と福祉による専門職連携演習は、英国の医療や病院中心のIPWの中では特殊なケースである。それだけに本学の教育GPプログラムが取り組む意義は大きく、その独自性が明らかになった。

４）本学の専門職連携への示唆

今回の調査研修から、以下のような課題への検討がより明確になった。

（１）プログラムについて

今回の調査校では、１年次から３年次まで計画的・段階的な教育プログラムが組まれており、各段階終了時の学生の達成目標と、最終的に学生に何を学ばせ、どのような能力を身につけさせるかという達成目標が言語化されていた。また、内容は、利用者を中心に連携や協働を進めるためのコミュニケーションや対人関係の技能・マネジメント力・文化的差異の理解が中心である。本学のプログラムは、専門教育がある程度進んだ段階での開始となるため調査校のプログラムとは異なる面もあるが、限られた時間で何を学ばせるか、平成20年度の実績をふまえ検討することが求められる。

（２）教育方法や教材の工夫

探究型学習を行うためには、学生への動機づけからはじまり、グループ活動や協働学習を行うための準備、そしてその素材となる事例作成や、フィールドとなる実践現場との連携、学生への講義や小グループ演習を通じたファシリテート力の向上、学習成果の評価方法と多くのステップが必要である。これらのことを、今後の本学の演習プログラムに活かしていきたい。

（３）評価方法と評価項目

英国の大学の評価方法や項目については、まだ試行錯誤の段階であるが、いくつかの取り組みで参考になる面があった。

評価方法は、学生の相互評価や、小グループをファシリテートした教員による評価、web上でのアンケート評価の閲覧など、様々な方法により行われていた。反面、小グループ単位の演習の場合、個々の学生の貢献度が評価されにくく、グループ演習の評価も難しさが指摘されていた。

評価項目は、各大学の考え方により様々な項目が設定されていたが、連携のメリットを実感し、連携を促進するスキルを学ばせることが中心であるように思われた。

キングスカレッジでは、「① 個人レベル」、「② 協力体制」、「③ サービス改善」というレベルで焦点化し、コミュニケーションやプレゼンテーション、及びディスカッションによる相互理解の促進、小グループ内の共通の課題やゴールの設定、利用者を中心としたケアの共有、チー

ムへの貢献、葛藤解決への対応、連携活動への振り返りなど、多職種連携を学ぶ過程に合わせた評価項目を設定していた。また、ブルックス大学においても、評価項目を８つにカテゴリー化し、「ａ エビデンスに基づくアセスメントと介入」、「ｂ コミュニケーション」、「ｃ 専門職としての協働」、「ｄ 専門職としての態度」、「ｅ 政策面の評価」、「ｆ 利用者などの健康と福祉の向上」、「ｇ リスクマネジメント」、「ｈ 演習の発展性」という項目を設定していた。これらは、本校の評価項目の枠組みを検討するうえでも参考になった。

（４）まとめ

学生教育の前提として、教員自身の多分野に対する充分な理解の必要性が、キングスカレッジの担当者からもブルックス大学の担当者からも指摘されていた。専門職教育は同じ専門職により教育されてきたので、教員自身の他職種理解の不足や連携の不得手さがある。演習場面での職種間の相互理解不足、異なる視点への無理解、公平なメンバーシップの欠如などは、その場での指導力が求められ、教員のファシリテート力の向上が必要とされるところである。

専門職連携で仕事をするとき、単一の専門分野で仕事をするときと、その役割は異なる場合もある。専門職連携を進めることで、自らの専門性が希薄になったり、専門性が侵されたように思うことも少なくない。

しかし、ヘレナ・ロウ氏によれば、互いの相互理解のために、差異の意識化は大切であるが、その際、相手の貢献や優れている点をポジティブに捉えていくことが、連携の促進において重要であるという。互いの良い点を見つけ、異なる専門分野の優れている点を共有し合うことが、相互理解を進めるためのポイントとなる。

謝　辞:今回の調査の相談窓口となり調整して下さった英国専門職連携教育推進センター(CAIPE: The UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education) の Helene Low 氏 (CAIPE 開発部長) には心よりお礼申し上げます。

また、キングスカレッジ・ロンドンの医療教育部門の Jayne Slonina 氏(MA, RN, HV cert. Lecturer in Interprofessional Education) 、ブルックス大学保健福祉学部の Elizabeth Westcott 氏 (Pre Qualifying Director and IPL lead) には、詳細な調査研修スケジュールを作成して頂き、さらにブルックス大学の多くの学部教員の方々にもご指導を賜り、心より感謝申し上げます。



Ⅵ　成果と課題

平成20年度 文部科学省の教育ＧＰの選定を受けた教育プログラムへの取り組みの成果と課題を、以下の4つの視点から述べる。

1．専門職連携に関する教育の充実

本取り組みのねらいは、大きく2点ある。1点目は、学生が住民の生活する環境の中で演習を展開することで、より具体的な生活・健康のニーズを体感し、そこから住民を巻き込んだ生活の質を高める活動への展開方法を学ぶことである。

平成20年度の活動は、初年度ということもあり住民の生活・健康ニーズがどこにあるかについて、まず学生たちが体感することに焦点を当てた演習の展開だった。学生は、グループで住民の生活の場に入り、インタビューや地区踏査を行い、「住みやすさ」といった視点から情報収集を行った。今回の演習は、インタビューを行った対象者数に限界があったものの、収集した情報からの分析を行うことができた。学生の学びをみると、地域で生活する高齢者はそれぞれ固有のニーズはあるものの、その多くが「住み慣れた地域で生活し続けたい」と思い、「その人なりに生活を工夫している」ことを体感することができた。さらに、「人との交流を持ちたい」と思っている人が必ずしも交流があるとは言い難く、「何らかの心配事や不安」を持っている人もいることが明らかになった。

しかし、初年度は、それを地域のニーズというところまで掘り下げていくまでには至らなかった。今後、これらのデータを積み上げて地域のニーズとして捉え、そのニーズに対し看護・福祉の専門職として、住民主体の動きを創る援助のあり方を検討し実践できる力をどのようにつけていくかが、課題である。

2点目のねらいは、看護と福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできることである。目的を持ってひとつのものに取り組んだことで、互いの共通点と相違点に気づき、広い視野から人や地域を観ることの必要性を学んだ。それは学生たちにとって新鮮な発見であり、「他学部の学生と交流できて良かった」という言葉も多く聞かれた。また、協働で行うことの困難さも一部体験し、「時間を合わせるのが大変だった」、「コミュニケーションをうまく取るのが大変だった」と言った言葉も聞かれ、異なる専門職が協働することの利点と困難さを体験できたことは成果であった。

しかし、多くの学生から「もっとじっくり意見交換をしたかった」、「情報交換する時間が十分なかった」という意見があったことから、意見交換をする時間の確保が今後の課題である。

2．教育プログラムの開発

本プログラムは、平成23年度からは「専門職連携演習」として必須科目となるが、それまでは移行措置として、いくつかの科目から時間を頂いて実践しているといった状況である。したがって、両学部の時間調整に大変な困難があり、土曜日をその時間に当てているという無理も生じている。学生の出席状況は非常によいものの、「十分な時間がとれない」、「どの科目の時間に入るのか」などの指摘を受けている。新カリキュラムの実施までは、学生への説明と理解を十分に得ることで動機づけをしっかり行うことが、大きな課題である。

教育プログラムとしては、方法論としてある程度の成果を得たことから、今後はさらに学生の学びが深まるような導入・展開方法を検討していく必要がある。また、評価指標がまだ十分とは言えないので、平成20年度の実績を分析し、より確かな評価指標を作成していきたい。

３．フィールドとなる地域包括支援センターの活性化

地域包括支援センターの研修会を継続的に実施している。その中で、各センターが抱えている課題がある程度明確になりつつあり、それを異なった専門職同士が、その課題を共有できたことは大きな成果だと考える。また、研修会への出席状況も良く、これからのセンターの活動が活性化することにも貢献できたと評価する。

今後は、センターの課題に対する活動方法を明確にでき、そしてそれらを実践するまで、どのように支援するかが課題である。

また、フィールドとなった３ヶ所の地域包括支援センターについては、実習するための準備や学びをまとめる段階において、意見や助言をいただいているものの、本演習そのものが直接センターの活性化には結びついている状況にあるとは言えない。今後、学生や教員のパワーを活用し活性化につなげてもらえるような取り組みが必須である。

４．教育プログラム開発に関する体制づくり

学長を中心とした学内体制を構築することはできた。教育ＧＰ執行部会・ワーキングチームは会議を頻回に持ち、教育プログラムを作るための検討は活発にされている。特に、ワーキングチームは、フィールドとなる３ヶ所の地域包括支援センターに分かれ、そこの職員との話し合いも適宜行っている。その成果が、平成20年度の演習を円滑に実施することにつながった。また、代表者が、英国への先進地調査にも行き、そこで学んだことを今回の活動に取り入れることができている。

しかし、健康長寿プロジェクト実行委員会や教育開発プロジェクト委員会は、メンバーが確定したにとどまり、まだ十分に機能していない状況にある。今後は、各組織を円滑に運営し、さらに充実した教育プログラムの検討をかさねていきたい。

Ⅶ　巻 末 資 料

１．演習に使用した資料

１）リフレクションペーパー　～演習前オリエンテーションを終えて～

リフレクションペーパー＜A4 版縦＞

教育 GP「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」：リフレクションペーパー
――2009 年１月６日（火）：演習前オリエンテーションを終えて――

学 部 名　　学 籍 番 号　　氏 名

演 習 日　平成 21 年　　月　　日　　演習場所　　地域包括支援センター

Ⅰ．他学部の学生と協働で取り組んで、互いの特徴について気づいたこと、考えたこと

Ⅱ．今後協働で取り組む上で、大切にしたいと思ったこと

Ⅲ．今回の体験を、今後どのように活かしたいと考えるか

Ⅳ．その他、どのようなことでも考えたこと、疑問、感じたこと

２）地域の皆様への協力依頼文書

地域の皆様へ

「地域にお住まいの皆様からお話をお聞きする」ことへの
ご協力のお願い

日頃、本学の教育推進のためにご配慮頂き、厚く御礼申し上げます。
本学では、確かな知識技術を持ち、豊かな人間性を持った社会に貢献できる質の高い専門職能人を育成し、県民生活に貢献できることを大学の使命としております。
今回、文部科学省より「平成 20 年度　質の高い大学教育推進プログラム（教育ＧＰ）」として本学の取り組みが全国の大学の中から選定を受けました。この取り組みは、平成 20 年度～22 年度の３ヶ年計画で実施し、「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」という名前です。
これは、本学の看護学部及び人間福祉学部の学生が協働して「地域包括支援センター」を中心とした地域の中で、地域の皆様に様々なご協力とご指導を頂き、地域の皆様がより豊かな生活を送るために専門職としての活動を学ばさせて頂くことで、学生への教育効果をあげることを主たる目的としております。今回の「地域にお住まいの皆様からお話をお聞きする」ことも、この取り組みのひとつです。
この取り組みは、甲府市地域包括支援センター、並びに甲府市地域包括支援センターを統括しておられる甲府市のご理解とご協力を頂いております。
つきましては、大学教育推進プログラムの趣旨をご理解頂くとともに、学生への教育に対しまして、何卒ご協力、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成２１年　月　　日

山梨県立大学
教育ＧＰ推進本部長　学長　鶴見尚弘

３）戸別訪問調査のご案内

＜案内ハガキ＞

おおくに

学生の戸別訪問調査のご案内

まもなく立春ですね。いかがお過ごしでしょうか?
先日、訪問調査のご了解をいただきました、山梨県立大学３年生
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。
下記に日にちをご案内いたしました。
後日、お電話にて、お時間をお約束させていただきます。よろしくお願いいたします。

訪問日:平成 21 年 1月 31 日(土)
ご都合が悪くなった場合やご不明な点がありましたら、下記まで、ご一報下さい。



甲府市福祉部介護保険課
甲府市地域包括支援センターおおくに
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

＜ご連絡先＞
甲府市地域包括支援センターおおくに
電話番号:055－220－2315

きょうりつ

高齢者戸別訪問調査のご案内

まもなく立春ですね。いかがお過ごしでしょうか? 先日お電話にて、訪問調査のご了解をいただきありがとうございました。当日は山梨県立大学３年生
＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿が伺います。
下記に日時をご案内いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。
訪問日：平成 21 年 1月 31 日(土)
時間帯：午前 11 時～12 時
ご都合が悪くなられた場合やご不明な点がございましたら、下記までご一報下さい。



甲府市福祉部介護保険課
甲府市地域包括支援センターきょうりつ
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

＜ご連絡先＞
甲府市地域包括支援センターきょうりつ
電話番号：055－225－2345

甲府西

高齢者戸別訪問調査のご案内

まもなく立春ですね。いかがお過ごしでしょうか? 先日お電話にて、訪問調査のご了解をいただきました、山梨県立大学３年生
です。
下記に日時を、ご案内いたしました。
どうぞよろしくお願いいたします。

訪問日時:平成 21 年 2月 7日(土)
午前 時頃 ～
ご都合が悪くなった場合やご不明な点がありましたら、下記まで、ご一報下さい。



甲府市福祉部介護保険課
甲府市地域包括支援センター甲府西
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

＜ご連絡先＞
甲府市地域包括支援センター甲府西
電話番号:055－220－7677

4）戸別訪問調査の同意書

＜A4 版縦＞

おおくに

同　意　書

私は、「地域にお住まいの皆様からお話をお聞きする」ことのお願いについて協力することに同意します。詳細は、以下のとおりです。

1．山梨県立大学看護学部および人間福祉学部の学生が、私の普段の生活や健康に関することなどについて話を聞くこと。
2．話した内容について、私のプライバシーが十分配慮された上で地域包括支援センターの活動にいかすこと。

平成　　年　　月　　日

ご署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〈本調査の関係機関〉
甲府市福祉部介護保険課
甲府市地域包括支援センターおおくに
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

〈お問い合わせ先〉
甲府市地域包括支援センターおおくに　　電話番号 055-220-2315

この取り組みは、山梨県立大学が文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」として選定を受けた「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」事業として実施させて頂いています。

きょうりつ

同　意　書

私は、「地域にお住まいの皆様からお話をお聞きする」ことのお願いについて協力することに同意します。詳細は、以下のとおりです。

1．山梨県立大学看護学部および人間福祉学部の学生が、私の普段の生活や健康に関することなどについて話を聞くこと。
2．話した内容について、私のプライバシーが十分配慮された上で地域包括支援センターの活動にいかすこと。

平成　　年　　月　　日

ご署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〈本調査の関係機関〉
甲府市福祉部介護保険課
甲府市地域包括支援センターきょうりつ
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

〈お問い合わせ先〉
甲府市地域包括支援センターきょうりつ　　電話番号 055-225-2345

この取り組みは、山梨県立大学が文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」として選定を受けた「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」事業として実施させて頂いています。

甲府西

同　意　書

私は、「地域にお住まいの皆様からお話をお聞きする」ことのお願いについて協力することに同意します。詳細は、以下のとおりです。

1．山梨県立大学看護学部および人間福祉学部の学生が、私の普段の生活や健康に関することなどについて話を聞くこと。
2．話した内容について、私のプライバシーが十分配慮された上で地域包括支援センターの活動にいかすこと。

平成　　年　　月　　日

ご署名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〈本調査の関係機関〉
甲府市福祉部介護保険課
甲府市地域包括支援センター甲府西
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部
〈お問い合わせ先〉
甲府市地域包括支援センター甲府西
電話番号 055-220-7677

この取り組みは、山梨県立大学が文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」として選定を受けた「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」事業として実施させて頂いています。

５）リフレクションペーパー　～2008 年度：演習を終えて～

リフレクションペーパー＜A4 版縦＞

教育 GP「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」：リフレクションペーパー
――2008 年度 ： 演習を終えて――

学 部 名　　学 籍 番 号　　氏 名

演 習 日　平成 21 年　　月　　日　　演習場所　　地域包括支援センター

Ⅰ．地域住民の「生活の場」を体感して、感じたこと、考えたこと

Ⅱ．他学部の学生との協働の取組を通して、互いの特徴に関して気づいたこと、考えたこと

Ⅲ．今後、協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと

Ⅳ．今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか

Ⅴ．その他、考えたこと、疑問に感じたことなど

６）リフレクションペーパーの提出について

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
2008 年度リフレクションペーパーの提出について

１．提出用紙
・用紙は県立大学ホームページの「教育 GP、学生の皆さんへ」のページまたは「資料（ダウンロード)」のページより様式をダウンロードして使用して下さい。

２．留意事項
・ファイルはワード、Ａ４用紙２枚以内です。
・用紙の**学部名、学籍番号、氏名、演習場所**は必ず記入して下さい。
・保存ファイル名は　**学籍番号　氏名**として下さい。
例：2006NN303 山梨太郎　2006HS505 山梨花子
学籍番号は半角英数（**日本語入力オフ**の状態でお願いします。）
・個人情報保護：ファイルはメールでのやり取りになりますので、個人が特定できるような文章（対象者の個人名、住所等）の入力はしないよう注意して下さい。

３．提出方法：メールに添付して送信して下さい。
宛先メールアドレス kyouiku-gp@yamanashi-ken.ac.jp
・メールの件名は、**演習場所　学部**として下さい。
例：おおくに看護　きょうりつ福祉

４．提出期限：

包括名	提出期限
きょうりつ	2009 年 2 月 6 日（金）　17:00 まで
おおくに	2009 年 2 月 6 日（金）　17:00 まで
甲府西	2009 年 2 月 13 日（金）　17:00 まで

※期限締め切り後の提出は受理しません。
※受理したものについては、確認メッセージを送信いたします。

以上

7）専門職連携演習合同発表会次第

教育 GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」
学生による専門職連携演習合同発表会

日　時：2009 年 4 月 18 日（土）14 時 15 分～16 時 30 分
場　所：山梨県立大学池田キャンパス講堂

司会：神山裕美（教育 GP 執行部）

＊はじめのあいさつ(司　会)
＊学長あいさつ（伊藤　洋）
＊専門職連携演習の取組と経過（教育 GP 担当主査　佐藤悦子）
＊地区別発表　（学生司会）
1)甲府市地域包括支援センター「おおくに」グループ
（発表 20 分 / 質疑応答 5 分 / コメント:「おおくに」所長 5 分）
2)甲府市地域包括支援センター「きょうりつ」グループ
（発表 20 分 / 質疑応答 5 分 / コメント:「きょうりつ」所長 5 分）

休　　憩　　-10 分-

3)甲府市地域包括支援センター「甲府西」グループ
（発表 20 分 / 質疑応答 5 分 / コメント:「甲府西」所長 5 分）
＊総　　評
甲府市役所福祉部
大学教員　藤谷　秀　人間福祉学部長
学　　長　伊藤　洋
＊おわりのあいさつ～今後の取組に向けて～（教育 GP 担当主査　佐藤悦子）

８）学生評価表

2008年度 教育GP「学際統合型専門職連携演習」評価表(学生用)

学部: 看護学部 ・ 人間福祉学部　　学籍番号:　　氏名:

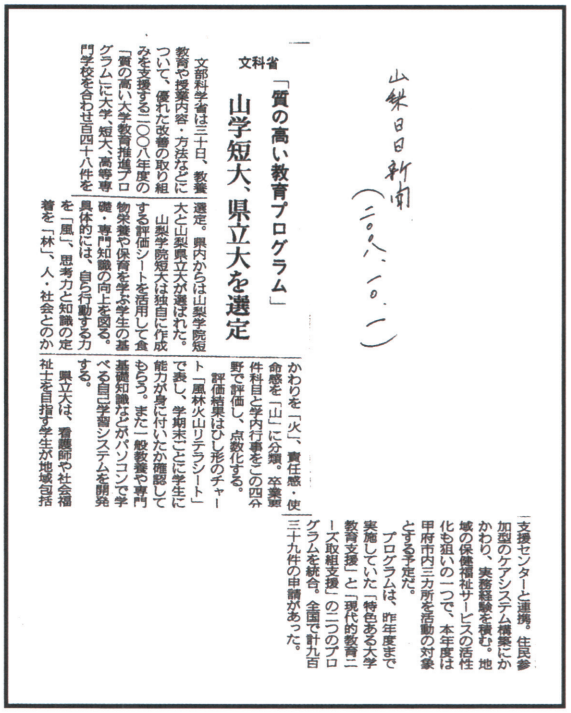
演習場所:　　地域包括支援センター

評価項目	評価
1 看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。	
1) 自分の専門性(知識・技術)を認識し、説明することができる。	
2) 自分と相手の専門性(知識・技術)について、その共通点と相違点について考えることができる。	
3) 互いの意見を尊重することができる。	
4) 専門職が互いに連携する意義を考えることができる。	
5) チームアプローチを進める方法について考えることができる。	
2 地域特性と生活および健康ニーズについて考えることができる。	
1) 担当した地域の特性について考えることができる。	
2) 暮らしを支える現状の社会資源について考えることができる。	
3) 暮らしにくさについて考えることができる。	
4) 地域の人々のつながりをイメージすることができる。	
5) 生活および健康ニーズについて考えることができる。	
3 実態調査や数的データ分析をし、わかりやすい報告書を作成することができる。	
1) 情報やデータを収集することができる。	
2) 情報やデータを共有することができる。	
3) 情報やデータを多角的に議論することができる。	
4) 情報やデータを客観的に分析することができる。	
5) 報告書を作成することができる。	
4 学習の成果を地域に伝え、その反応から振り返ることができる。	
1) 専門職が互いに協働して学習成果を伝えることができる。	
2) 発表に対する地域の反応を受け止めることができる。	
3) 地域の反応から学習成果について振り返ることができる。	
4) 発表内容や発表方法について評価することができる。	
5) 報告をもとに、地域への予防活動につなげることができる。	
5 主体的・積極的に演習に参加し、相手の意思を尊重する態度を身に付け、グループ内での役割を担うことができる。	
1) 相手の話を傾聴し、自分の意見を述べることができる。	
2) 調査協力者に感謝の意を伝えることができる。	
3) 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないように接することができる。	
4) 得られた情報の保護に努めることができる。	
5) グループワークに積極的に参加し、グループ内での役割を担うことができる。	

評価基準 A:目標を達成できた　B:目標をある程度達成できた C:目標を達成するにはやや努力を要する　D:目標をほとんど達成できなかった	**総合評価**
出席状況 遅刻(　　)　早退(　　)　欠席(　　)	
評価日 平成 21 年 4 月 18 日(土) : 学生による合同発表会終了後	
教員コメント 担当教員名　　印	

２．広報活動に使用した資料

１）山梨日日新聞



山梨日日新聞（二〇〇八・一〇・一）

文科省

「質の高い教育プログラム」

山学短大、県立大を選定

文部科学省は三十日、教養教育や授業内容・方法などについて、優れた改善の取り組みを支援する二〇〇八年度の「質の高い大学教育推進プログラム」に大学、短大、高等専門学校を合わせ百四十八件を選定。県内からは山梨学院短大と山梨県立大が選ばれた。

山梨学院短大は独自に作成する評価シートを活用して食物栄養や保育を学ぶ学生の基礎・専門知識の向上を図る。具体的には、自ら行動する力を「風」、思考力と知識の定着を「林」、人・社会とのかかわりを「火」、責任感・使命感を「山」に分類。卒業要件科目と学内行事をこの四分野で評価し、点数化する。評価結果はひし形のチャートで表し、学期末ごとに学生に「風林火山リテラシート」で表し、学期末ごとに学生に能力が身に付いたか確認してもらう。また、一般教養や専門基礎知識などがパソコンで学べる自己学習システムを開発する。

県立大は、看護師や社会福祉士を目指す学生が地域包括支援センターと連携。住民参加型のケアシステム構築にかかわり、実務経験を積む。地域の保健福祉サービスの活性化も狙いの一つで、本年度は甲府市内三カ所を活動の対象とする予定だ。

プログラムは、昨年度まで実施していた「特色ある大学教育支援」と「現代的教育ニーズ取組支援」の二つのプログラムを統合、全国で計九百三十九件の申請があった。

２）ＦＭ甲府「生涯学習の時間」



３）ホームページ



ＵＲＬ：http://www.yamanashi-ken.ac.jp/

4）ニューズレター

vol.6


地域研究交流センターニューズレター　2008年2月4日

交流が始まりました。学生たちには事前に「どこで、どうやっておもてなしするか？」という課題が出され、勤労院の皆さんにはご自身の「思い出の品」を一つ、持参して頂くようにお願いがしてありました。「おもてなしって、どうすればいいの？」「お年寄りと話したことがないから話題がおもいつかない」など、準備の段階ではあれこれ悩んでいた学生たちですが、はつらつとした好奇心旺盛なシニアの皆様のリードによって、学内のあちこちで世代交流の輪が広がり、1時間という最初の設定時間は双方ともにあっという間に過ぎ去り、「そろそろ集合場所にお戻りください」とアナウンスをする必要があるほど盛り上がりました。サテライト教室に戻る際も、6階まで階段で上がった方もいたほどお元気な勤労院の皆様。普段は要介護者を想定した講義を受けている学生たちですが、一日に「高齢者」とはいっても、幅の広い豊かな人生の時間があることを交流を通じて実感させて頂きました。

再集合後は、自分たちのグループメンバーを、他のグループメンバーに紹介する形で進行しました。出会ってわずか1時間、始まる前はぎこちなく固まっていた学生たちですが特参して頂いた昔の写真に会話の糸口を見出したり、真剣に「聞く」ことから得たりした老の方の人となりを、しっかりと発表することが出来ました。「人と接すること」を学んでいても普段の生活において中々なかなか初対面の方と出会う機会はありません。学生たちにとって貴重な時間を頂きました。勤労院の皆様からも「今時の若者」と直接ふれあい、しっかりとした考えを持っていることがわかった、などの好意的な御意見を頂戴しました。

（福祉コミュニティ学科　伊藤　健次）

看護学部と人間福祉学部との協働の取り組み

看護学部と人間福祉学部の3年生が、ペアを組んで高齢者の自宅を訪問しインタビューを行う、という取り組みが行われました。このないは3つあり、まず一つ目は、対象の生活の場に踏み込んで、生活をしている人として対象の生活および健康ニーズを知ること、二つ目は、看護と福祉を学んでいる学生が、同時に同じ対象と向かい合った時、そこにどのような特徴があるか、互いの特徴・専門性を知ること、三つ目は、将来協働して働くパートナーとして協働の在り方を考えられること、です。県立大学に両学部がある利点を最大限に生かし、将来協働して対象のニーズに対応していく専門職として、互いの専門性を知り協働することの利点を学生のうちから学び取ってほしいと考えた取り組みです。

平成19年12月22日と平成20年1月12日、いずれも土曜日に実施され、甲府市地域包括支援センターおおくにの大きな協力を得て実現しました。事前に地域包括支援センターから民生委員さんに、また、その民生委員さんから高齢者の方にご了解をいただき、紹介をしていただきました。了解の取れた方に再度学生から依頼文と訪問日程の約束をさせていただき、ようやく訪問が実現できました。

ここまでは福祉学部の学生が授業の中で担当しましたが、この下順を踏む中で、直接学生から電話をしてみますと、話がうまく伝わっていなかったり、突然の知らない人からの電話に驚かされたりと、改めて、生活の場のなかに他人が入り込むことの難しさを実感できました。

訪問までの準備は大変でしたが、実際に学生が訪問してみますと、高齢者の皆さんは非常に暖かく迎え入れてくださり、日頃の生活より今生活のなかで大切にしていること、困っていること、私たちへの要望等、一生懸命伝えてくださいました。

訪問後の振り返りの中には、「自分の力だけでなく家族の力を借りて生活の工夫をしているんだと感じた」等、貴重なお話を伺ったからこそ得られた学びがありました。

ペアを組んだ両学部の学生は当日初めて知り合い、互いにどのような学びを積んできているのか、そこもよくわからない状態で協働の取り組みをスタートしました。短時間で人間関係を作り、二人が力を合わせて課題に取り組まなくてはならないため、オリエンテーションを受けた直後は、自己紹介から始まり、互いに真剣に向き合って訪問の準備を行っていました。また、訪問終了後は、互いの気づきを熱心に意見交換をしていました。

この体験から、「看護は健康面のニーズについての情報を得ることを自然に優先させているが、福祉の学生は、生活とか生きがいとか、生活することの情報を多く得ていた」「同じ人に関わりながら切り口というか視点がちがうので、協働して関わることで、より多角的にその人に関われると実感した」「お互いの目的を共有して、視点がちがうことを利点として、互いの専門性を尊重していきたい」「協働性という概念を肌で実感できた」といった、両学部の学生がペアを組んで取り組んだからこそ得られた学びを共有することができました。また、この取り組みに対し学生からは「他学部の学生と一緒に演習をして、新しい発見がたくさんあった」「不安だったが、やってみたら本当に楽しかった」といった感想が多く寄せられていました。

（看護学科　佐藤　悦子）

vol.8


UCRE

University Center for Research and Exchange

山梨県立大学地域研究交流センター　ニューズレター Vol.8

発行日：2009年2月16日　編集・発行：山梨県立大学 地域研究交流センター　http://www.yamanashi-ken.ac.jp/ucre/　ucre@yamanashi-ken.ac.jp

山梨県立大学教員の　地域貢献

「専門職連携教育（教育GP）の取り組みが始まって」

CONTENTS　目次

「専門職連携教育（教育GP）の取り組み」　1
本学教員の地域貢献　2
事業報告　6
お知らせ　8

平成20年度文部科学省の教育GP（Good Practice）の選定を受けた教育プログラムへの取り組みが、いよいよスタートしました。この取り組みのテーマは「専門職連携教育のプログラム開発」です。看護学部と人間福祉学部の学生が、協同して地域包括支援センターを核としたフィールドで、「高齢になっても安心して住み慣れた地域で過ごせること」をテーマに、住民の方に直接お話を聞かせて頂き、環境について考えたり、介護予防の活動に参加させて頂いたりする演習を行います。そして、これらの過程を通して専門職として協働するためのスキルが習得できる教育プログラムを開発していこうとする取り組みです。

今年1月、地域包括支援センターや甲府市の関係者と企画に話し合いを重ねながら、なんとかスタートすることができました。3カ所のフィールドで、地域の資源マップを作ったり、約80名の住民の方に訪問をさせて頂きじっくりとお話を聞かせて頂くことができました。この中から把握したニーズについて検討し、その結果を関係者にお返しし、意見交換ができる場を作っていけたらと思っております。

学生達は、同じ学びの場ではいますが、今回のように一緒に学ぶ場は初めてで、互いに情報交換をし合い、相互理解に努めておりました。また、同じものを観てもその視点の違いや考えに特徴があることを学び取っておりました。例えば、訪問先で「病院受診」という話が出たときに看護学生は、「定期に通えているか、薬はきちんと飲めているか」などに視点が向き、福祉学生は、「交通手段は何か、費用はどのくらいか」などに視点がいくといった気づきです。改めてそれは、非常に新鮮な学びでした。

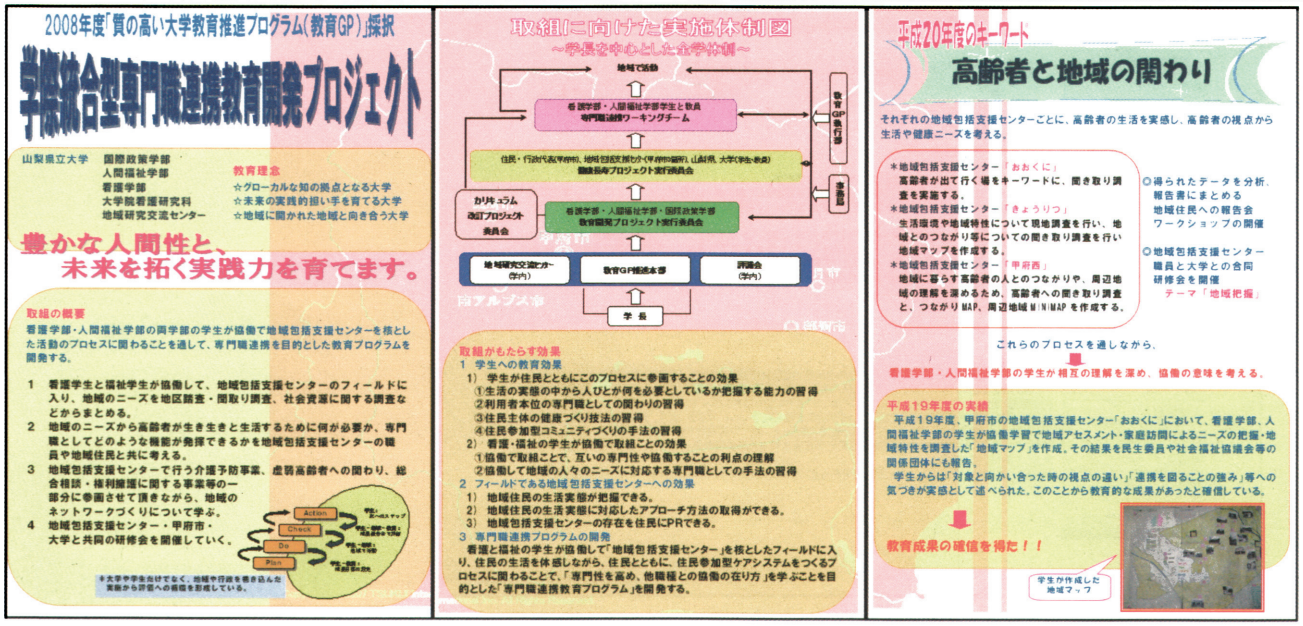
この取り組みの特徴は、関わる関係者とともに、活動しながら互いに意見を出し合い、反省をもとに次の計画を立てていくといった、循環型のサイクルをとおして積み上げていくところにあります。今後は、この取り組みの成果と評価をこれをみえる形にして、さらに効果的な取り組みのプログラムにしていこうと考えております。改めて、この取り組みは、地域の皆様、地域包括支援センターや甲府市の関係者の皆様の深いご理解とご協力の下に実施されていることに、深く心より感謝しております。

（看護学科　佐藤 悦子）

地域を歩いて得た情報から話し合って資源マップをつくる

＊ 山梨県立大学ホームページよりダウンロードができます。

5）ポスター（ポスターセッションに使用）


2008年度「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択

学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト

山梨県立大学　国際政策学部 / 人間福祉学部 / 看護学部 / 大学院看護研究科 / 地域研究交流センター

教育理念
☆グローカルな知の拠点となる大学
☆未来の実践的担い手を育てる大学
☆地域に開かれた地域と向き合う大学

豊かな人間性と、未来を拓く実践力を育てます。

取組の概要
看護学部・人間福祉学部の両学部の学生が協働で地域包括支援センターを核とした活動のプロセスに関わることを通して、専門職連携を目的とした教育プログラムを開発する。

1 看護学生と福祉学生が協働して、地域包括支援センターのフィールドに入り、地域のニーズを地区踏査・聞取り調査、社会資源に関する調査などからまとめる。
2 地域のニーズから高齢者が生き生きと生活するために何が必要か、専門職としてどのような機能が発揮できるかを地域包括支援センターの職員や地域住民と共に考える。
3 地域包括支援センターで行う介護予防事業、虐待高齢者への関わり、総合相談・権利擁護に関する事業等の一部分に参画させて頂きながら、地域のネットワークづくりについて学ぶ。
4 地域包括支援センター・甲府市・大学と共同の研修会を開催していく。

Action / Check / Do / Plan

＊大学や学生だけでなく、地域や行政を巻き込んだ実践から評価への循環を形成している。

取組に向けた実施体制図
～学長をかしらとした全学体制～

地域で活動
看護学部・人間福祉学部学生と教員 専門職連携ワーキングチーム
住民・行政代表(甲府市、地域包括支援センター(甲府市内)、山梨県、大学(学生・教員) 健康長寿プロジェクト実行委員会
カリキュラム改訂プロジェクト委員会
看護学部・人間福祉学部・国際政策学部 教育開発プロジェクト実行委員会
地域研究交流センター(学内) / 教育GP推進本部 / 評価会(学内)
学長
教育GP実行部
連絡調整

取組がもたらす効果
1 学生への教育効果
1）学生が住民とともにこのプロセスに参画することの効果
①生活の実態の中から人ひとが何を必要としているか把握する能力の習得
②利用者本位の専門職としての関わりの習得
③住民主体の健康づくり技法の習得
④住民参加型コミュニティづくりの手法の習得
2）看護・福祉の学生が協働で取組ことの効果
①協働で取組ことで、互いの専門性や協働することの利点の理解
②協働して地域の人々のニーズに対応する専門職としての手法の習得
2 フィールドである地域包括支援センターへの効果
1）地域住民の生活実態が把握できる。
2）地域住民の生活実態に対応したアプローチ方法の取得ができる。
3）地域包括支援センターの存在を住民にPRできる。
3 専門職連携プログラムの開発
看護と福祉の学生が協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体感しながら、住民とともに、住民参加型ケアシステムをつくるプロセスに関わることで、「専門性を高め、他職種との協働の在り方」を学ぶことを目的とした「専門職連携教育プログラム」を開発する。

平成20年度のキーワード
高齢者と地域の関わり

それぞれの地域包括支援センターごとに、高齢者の生活を実感し、高齢者の視点から生活や健康ニーズを考える。

＊地域包括支援センター「おおくに」
高齢者が出て行く場をキーワードに、聞き取り調査を実施する。
＊地域包括支援センター「きょうりつ」
生活環境や地域特性について現地調査を行い、地域とのつながり等についての聞き取り調査を行い地域マップを作成する。
＊地域包括支援センター「甲府西」
地域に暮らす高齢者の人とのつながりや、周辺地域の理解を深めるため、高齢者への聞き取り調査と、つながりMAP、周辺地域MINIMAPを作成する。

○得られたデータを分析、報告書にまとめる
地域住民への報告会
ワークショップの開催
○地域包括支援センター職員と大学との合同研修会を開催
テーマ「地域把握」

これらのプロセスを通しながら、
看護学部・人間福祉学部の学生が相互の理解を深め、協働の意味を考える。

平成19年度の実績
平成19年度、甲府市の地域包括支援センター「おおくに」において、看護学部、人間福祉学部の学生が協働学習で地域アセスメント・家庭訪問によるニーズの把握・地域特性を調査した「地域マップ」を作成、その結果を民生委員や社会福祉協議会等の関係団体にも報告。
学生からは「対象と向かい合った時の視点の違い」「連携を図ることの強み」等への気づきが実感として述べられた、このことから教育的な成果があったと確信している。

教育成果の確信を掲だ！！

学生が作成した地域マップ

６）パンフレット



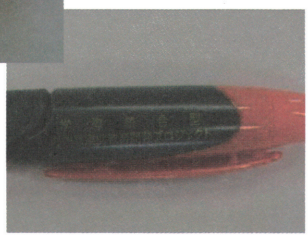


＊ 山梨県立大学ホームページよりダウンロードができます。

7）教育GPボールペン、大学名入りブルゾン











8）ポスター（学生による合同発表会）



3．メンバー表

平成20年度　教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」実施体制

教育GP推進本部

本部長	鶴見尚弘	学長
担当主査	佐藤悦子	看護学部（教授）
構成員	阿部真美子	人間福祉学部長
	松下由美子	看護学部長
	池田政子	センター長
	関谷秀昭	主査
	佐原淳仁	副主査

教育GP執行部

責任者	佐藤悦子	看護学部
サブ責任者	神山裕美	人間福祉学部
構成員	小野興子	人間福祉学部
	河野由乃	看護学部
	吉澤千登勢	看護学部

専門職ワーキングチーム

リーダー	神山裕美	人間福祉学部
サブリーダー	吉澤千登勢	看護学部
構成員	佐藤悦子	看護学部
	河野由乃	看護学部
	清水惠子	看護学部
	須田由紀	看護学部
	望月宗一郎	看護学部
	小野興子	人間福祉学部
	大澤準一	人間福祉学部
	横山貴美子	人間福祉学部
	伊藤健次	人間福祉学部

教育開発プロジェクト実行委員会

委員長	佐藤悦子	看護学部
副委員長	神山裕美	人間福祉学部
構成員	波木井昇	国際政策学部
	熊谷隆一	国際政策学部
	河野由乃	看護学部
	吉澤千登勢	看護学部
	清水惠子	看護学部
	須田由紀	看護学部
	望月宗一郎	看護学部
	小野興子	人間福祉学部
	大澤準一	人間福祉学部
	横山貴美子	人間福祉学部
	伊藤健次	人間福祉学部

教育GP事務

事務	三井知波留	堀内理恵

平成21年度　教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」実施体制

教育GP推進本部

本部長	伊　藤　　洋	学長
担当主査	佐　藤　悦　子	看護学部長
構成員	藤　谷　　秀	人間福祉学部長
	小　沢　典　夫	国際政策学部長
	波　木　井　昇	センター長
	関　谷　秀　昭	主査
	相　川　喜　代　弘	副主査

教育GP執行部

責任者	佐　藤　悦　子	看護学部
サブ責任者	神　山　裕　美	人間福祉学部
構成員	柳　田　正　明	人間福祉学部
	河　野　由　乃	看護学部
	吉　澤　千　登　勢	看護学部
	小　野　興　子	非常勤

専門職ワーキングチーム

リーダー	神　山　裕　美	人間福祉学部
サブリーダー	吉　澤　千　登　勢	看護学部
構成員	佐　藤　悦　子	看護学部
	河　野　由　乃	看護学部
	清　水　恵　子	看護学部
	泉　宗　美　恵	看護学部
	須　田　由　紀	看護学部
	望　月　宗　一　郎	看護学部
	中　橋　淳　子	看護学部
	山　本　奈　央	看護学部
	山　田　千　明	人間福祉学部
	横　山　貴　美　子	人間福祉学部
	柳　田　正　明	人間福祉学部
	伊　藤　健　次	人間福祉学部
	小　野　興　子	非常勤
	大　澤　準　一	非常勤

教育GP非常勤講師及び事務

教育GP非常勤講師	小　野　興　子　　大　澤　準　一
事　務	三　井　知　波　留　　堀　内　理　恵　　松　橋　昌　代

健康長寿プロジェクト実行委員会

大学	委員長	神　山　裕　美　人間福祉学部
	副委員長	河　野　由　乃　看護学部
	構成員	佐　藤　悦　子　看護学部
		柳　田　正　明　人間福祉学部
		吉　澤　千　登　勢　看護学部
		小　野　興　子　非常勤
甲府市地域包括支援センター		おおくに所長
		きょうりつ所長
		甲府西所長
甲府市		福祉総室総務課長
		福祉総室健康衛生課長
		高齢者支援室高齢者福祉課長
		高齢者支援室介護保険課長
山梨県		医務課長
		長寿社会課長

教育開発プロジェクト実行委員会

委員長	佐　藤　悦　子	看護学部
副委員長	柳　田　正　明	人間福祉学部
構成員	神　山　裕　美	人間福祉学部
	波　木　井　昇	国際政策学部（センター長）
	熊　谷　隆　一	国際政策学部
	澁　谷　彰　久	国際政策学部
	河　野　由　乃	看護学部
	吉　澤　千　登　勢	看護学部

～あとがき～

平成20年10月に教育GPの採択を受けて以降、専門職連携教育への取り組みを急速に組織化し拡大してまいりました。その過程には、教育GP推進本部主査の佐藤悦子先生のリーダーシップと、看護学部・人間福祉学部から選出された教員によって構成された教育GP担当の先生方、事務局職員、教育GP室職員の協力とチームワークはもとより、学長で教育GP推進本部長の伊藤洋先生、人間福祉学部長の藤谷秀先生、国際政策学部長の小沢典夫先生の力強いバックアップがあったゆえに実施できたことです。

また、平成20年度までの学長 鶴見尚弘先生、看護学部長の松下由美子先生、人間福祉学部長の阿部真美子先生、地域研究交流センター長の池田政子先生にも、教育GPの申請から採択後の支援体制まで、多大なご支援とご協力を頂いたことに感謝申し上げます。

このように、この教育GPは、山梨県立大学という組織全体で取り組み、組織全体で支え、協働し、展開してきました。

そして、その取り組みを通して、専門職連携を進める上での課題も見えて参りました。それは、本取り組みの目的である地域包括支援センターを核とした専門職連携教育をプログラム化することや、地域のケアシステム形成に寄与するということです。さらに、学生教育を充実させ、地域に寄与し、その成果が大学と地域全体の共有財産となるよう邁進して参りたいと思います。

最後になりましたが、この教育GPのフィールドとなる甲府市並びに甲府市地域包括支援センターの職員の皆さま、甲府市民の皆さまの並々ならぬご理解とご協力、ご指導の上に実施できたことに、心からお礼申し上げます。

これからも大学全体で取り組み、地域の皆さまとともに進めていきたいと思いますので、今後ともご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

平成21年7月吉日

教育GP専門職ワーキングチームリーダー

神山裕美

・・・＊・平成 20 年度　教育ＧＰ執行部・＊・・・

佐　藤　悦　子（統括責任者）　　神　山　裕　美（統括責任者補佐）
小　野　興　子　　河　野　由　乃
吉　澤　千　登　勢

・・・＊・編集担当・＊・・・

吉　澤　千　登　勢（編集責任者）　　須　田　由　紀（編集責任者補佐）
三　井　知　波　留　　堀　内　理　恵
松　橋　昌　代

平成 20～22 年度
文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」採択

学際統合型専門職連携開発プロジェクト

― 中　間　報　告　書 ―

平成２１年７月３１日発行

発行者：山梨県立大学　教育ＧＰ執行部

池田キャンパス内（教育 GP 室）
〒400-0062
山梨県甲府市池田 1-6-1

飯田キャンパス内（教育 GP 室）
〒400-0035
山梨県甲府市飯田 5-11-1

TEL：055-253-9452
E-mail：kyouiku-gp@yamanashi-ken.ac.jp
（代表：池田キャンパス GP 室）

※無断複写不可



山梨県立大学
Yamanashi Prefectural University